前橋市史

第一巻

前橋市街　　背景の山は赤城山

後閑天神山古墳出土　二禽二獣鏡

山王廃寺跡出土　水瓶ならびに碗と皿

総社神社本殿（県指定重要文化財）

□輪寺の十一面観世音像(県指定重要文化財)

序

わが前橋市は、これまで史と申し上げられるような市史がありませんでした。しかし、その編さん、刊行を要望する声は多年にわたり強く叫ばれておったのであります。

今ここに第一巻が上梓され刊行を見るに至りましたことは、何よりと思う次第であります。

顧りみまするに、本市は明治二十二年東群馬郡前橋町として、町制を施行してから本年をもって八十二年、同二十五年市制を施行してから七十九年を迎えたのであります。

市制施行八十年を迎えんとするに当たり、第一巻が世に出ることは前橋市にとりまして、まことに意義深く感ずる次第であります。

この地に人間の生活が始まったのは何時か、その後の変遷はどうだったのか、これは誰もが、もっとも知りたいことであります。またその歴史のあとをたどりながら、将来の前橋を構想することは大切であり、楽しいことです。

市史編さんは遅れましたが、本市が市史を世に出したいと言う計画は、前々からあったのであります。具体的には昭和十三年当時計画が立てられたのであります。しかし当時戦局は次第に苛烈となり、なかなか市史に力をかたむけると言うわけにいかず今日に及んだ次第です。

昭和二十九年町村合併を機とし「前橋小史」あるいは「前橋の姿と歩み」等の発刊を行ないましたが、史と称するにはあまりに貧弱なものでした。当市は、終戦の直前昭和二十年八月五日大空襲を受け、市街地の八割が灰燼と帰したのであります。しかし、歳月の経過とともに、次第に世人の記憶より消えさる戦災の記録をとどめておく必要を痛感したのであります。依って本市の戦災状況と復興の経過を纏め「戦災と復興」を昭和三十九年刊行しましたところ、大変好評を得たのであります。これに力を得まして引続き市史編さんを決意し、同年十一月市誌編さん委員会規則を公布し、後「市誌編さん委員会」を「市史編さん委員会」と改め、翌年四月委員、参与等を委嘱し、本事業に本格的に取組んだのであります。

爾来、関係の諸先生には豊富な学識に、なお格段の精進研究を重ねられ、市民各位には門外不出の資料を提供せられる等の協力に預り厚く感謝する次第であります。また当前橋市に関係の深い酒井、松平藩に関する資料等の必要あり、さらに生糸の町前橋として幕末維新の資料を吟味する必要がありましたので、姫路市、川越市、横浜市等より多大の御協力に預ったことを感謝する次第であります。

特に執筆者幹事の庭山先生をはじめ、第一巻の執筆者尾崎先生その他諸先生のご努力に対しましては、厚く敬意を表するものであり、また現在執筆を進められつつある山田先生をはじめ執筆者各位の御努力に対しましても、同様敬意を表する次第であります。

この市史は、本市の自然と古代、中世の各編を収めましたこの一冊を第一巻として、以下近世、近代及び現代に至る各編を順次発行する計画であります。本巻は古代、中世を取扱っておりますが、幸にして当市には古墳が多く、その分野の権威者である尾崎先生に執筆して頂けましたことは前橋市史としてだけでなく、歴史の分野に貢献するところが大きいのではないかと自負する次第であります。殊に、この編執筆中前橋市後閑町坊山の天神山古墳の発掘が行なわれ、極めて貴重な資料が発見されましたことは、なによりの幸せと思っております。

第一巻に引続き、第二巻、第三巻と刊行を進めてまいる所存でありますが、資料の点その他各界、各方面の方々にいままでお寄せ下さいました御協力を今後ともお願い申し上げる次第であります。

編さん関係者の努力と各界の御協力により、この事業が一日も早く完成し、市民の御要望にこたえ、さらに過去の貴重なる記録であるとともに今後の指針としても大いに活用せられますよう念願する次第であります。

昭和四十六年一月

前橋市長　石井孝丸

凡例

一、前橋市史は、第一巻を自然・古代・中世編とし、第二巻・第三巻を近世編、第四巻近代及び現代（市制施行まで）第五巻現代（市制施行以後）の順に刊行の計画である。

一、各巻とも、それぞれ編・章を立て節に分けて記述し、さらに必要に応じて細分した。

一、本文は、特殊な学術用語以外は、原則として当用漢字、現代かなづかいとしたが、やむを得ないものについては、ふりがなをつけて、読み易いようにした。

一、引用資料は、興味深いものについては、原文のままとし、その他は読み下し、または摘録し、その出典を明らかにした。

一、地名は、便宜上、新・旧地名を記し、年号には、西暦をカッコ内に注記した。

一、古代編中の「後閑天神山古墳」は、従来の例としては「前橋」の名を冠すべきであろうが、本書では、市中の同名古墳との混同を避けるため、特に「後閑」の文字を用いた。

題簽は、「厩橋城址紀念碑」（日下部鳴鶴書）の碑文から採拓

前橋市史　第一巻　目次

序……前橋市長　石井繁丸

凡例

第一編　自然

第一章　前橋市の自然地理的環境……一

第一節　関東における総体的位置……一

第二節　標高……五

第二章　地形・地質……八

序節……八

第一節　地形・地質の概説……一〇

1 基盤岩層（先第四系）10　2 赤城火山斜面12　3 前橋台地12　4 広瀬川低地帯13
5 現利根川氾濫原14

第二節　各地域の地質……一五
1赤城火山斜面15　(1)関東ローム層16　(2)成層火砕岩層20　(3)田口付近の孤立丘群21
(4)白川扇状地砂礫層22
2前橋台地23　(1)褐色火山灰質シルト層24　(2)前橋泥流堆積物26　(3)前橋砂礫層29
3広瀬川低地帯30　(1)広瀬川発電水路沿いの地質30　(2)広瀬川砂礫層33　(3)岩神の飛石・お艶ヶ岩33
4現利根川氾濫原36
5黒土層(腐植土)の層序38　浅間A軽石39　浅間B軽石40　二ッ岳軽石40　浅間C軽石40
6地下水41　(1)広瀬川低地帯の地下水42　(2)前橋台地の地下水43
第三節　自然の推移……四四
1赤城・榛名火山の成立44　2古期扇状地の形成と前橋砂礫層の推移46　3前橋泥流の流出と前橋台地原面の形成47　4湿地帯の出現と前橋泥炭層48　5旧利根川の流路と広瀬川低地帯の形成49　6現在の利根川49
第四節　地下水(深井資料)……五〇
第三章　土壌と土地利用……六六
第一節　土壌……六六
第二節　土地利用と水利……七一

第三節　水系……七九
1利根川79　2広瀬川81　3桃ノ木川81　4天狗岩用水82　5風呂川82　6馬場川83　7佐久間川83　8吉野川83　9端気川83　10白川83　11藤沢川84　12蟹沢川84　13山沢川84　14牛池川84　15午王頭川84　16染谷川85　17藤川85　18宮川85　19棚島用水85　20松葉川85　21寺沢川85　22清水川86　23大正用水86　24荒砥川86　25神沢川86　26東神沢川87　27桂川87　28八坂用水87　29貴船川87　30群馬用水87
第四章　気象……八七
気温89　湿度91　降水量91　風94　雪97　雷99　霧100　結氷100　霜101　ひょう・あられ101　日照103　地震103

第二編　古代上

序章……一〇五
一、前橋の地105　二、旧石器期の前橋107　三、縄文期の前橋108　四、弥生期の前橋111　五、石田川式石器と前橋113　六、古墳と前橋116　七、地方豪族と前橋120
第一章　古代人の生活—石器と土器との使用—……一二四

序　節……一三四
第一節　縄文土器……一三九
1筑井遺跡138　2小神明遺跡139　3産業道路東遺跡141　4産業道路西遺跡142
第二節　弥生土器……一四四
1荒口前原遺跡145　2桜が丘遺跡146　3樽式土器の甕棺148
第三節　土師器の初現……一四九
1大室小学校々庭第二遺跡151　2新屋遺跡152　3稲荷塚北遺跡一号住居跡152
第四節　土師器と生活……一五三
1土師器の使用153　2土師器の遺跡の分布158
(1)東部地区163　①荒砥東小学校々庭遺跡163　②荒砥東小学校農場遺跡166　③寺畑遺跡167　④諏訪西遺跡168　⑤前田遺跡169　⑥荒子小学校々庭遺跡169　⑦荒砥保育所遺跡173
(2)北部地区175　①青柳遺跡175　②上細井町西田ノ口遺跡176　③青柳町宿上遺跡176　④上細井町丑子塚遺跡177　⑤関根町寄居遺跡177
(3)西部地区178　①稲荷塚北遺跡178　②国府跡調査に伴い発見の住居跡181　昭和三六・七年次発掘182　同四〇年次発掘183　同四一年次発掘183　同四二年次発掘184　同四三年次発掘184　③その他184
第二章　豪族の支配と古墳の築造……一八六

序　節……一八六
第一節　古墳の分布……一九一
旧市域192　上川淵193　下川淵200　上陽200　総社202　元総社204　清里204　南橘205
芳賀208　桂萱212　木瀬217　荒砥219
第二節　古墳の調査……二三三
1上沖上ノ山古墳253　2今井B号古墳254　3今井A号古墳255　4檜峰古墳255
5小旦那古墳257　6阿久山古墳261　7オブ塚古墳262　8荒口大道古墳268　9竜海院古墳269　10愛宕山古墳270　11蛇穴山古墳273　12前二子古墳279　13後二子古墳285
14前橋二子山古墳288　15不二山古墳290　16塩原塚古墳293　17山王大塚古墳296
18上陽⑩号古墳298　19瓦使用棺299　20荒口小塚古墳300　21正円寺古墳301　22オブ塚西古墳305　23朝倉Ⅰ号古墳305　24朝倉Ⅱ号古墳307　25今井神社古墳312　26朝倉Ⅲ号古墳315　27弥勒山古墳317　28植野薬師塚古墳318　29八幡山古墳318　30総社二子山古墳320　31宝塔山古墳328　32後閑天神山古墳332　33五代大日塚古墳346
第三節　古墳の編年……三五三
1火山現象を利用した古墳編年の基準357　2天神山古墳墳丘下の浅間浮石層（A層）360　3榛名二ッ岳噴出の浮石層（B層）364　4弘安四年の浅間山噴出の浮石層372　5竪穴式古墳の編年374　6横穴式古墳の編年385　(1)石室内部構造からみた編年基準385

(2)外部構造と出土遺物による編年基準393　(3)古寺院跡の関係からみた編年基準395
第四節　古墳と生活……三九七
1壺の神秘力399　2形象埴輪から見た送葬405　3死者に対する意識とその変化411
4死穢に触れた罪の意識427　5「もがり」の意味と「みたまふり」431　6棺の有無と「もがり」434
第五節　技術……四四〇
1土の技術と石の技術440　2墳丘の築造444　3石室・石槨の構造464
第六節　古墳群……四七三
1広瀬古墳群475　(1)旧市域の古墳476　(2)朝倉古墳群477　(3)後閑古墳群483　(4)山王古墳群484
2総社・清里古墳群492　(1)総社古墳群492　(2)清里古墳群494
3南橘古墳群496　(1)田口古墳群496　(2)上細井付近古墳群498
4上泉古墳群500
5芳賀地区に分散する古墳503
6旧木瀬地区に分布の古墳506
7荒砥古墳群507　(1)荒砥川流域地区508　(2)二之宮・飯土井地区514　(3)荒子・下大屋地区516　(4)西大室・東大室地区517
第七節　支配者である豪族……五二六
1古墳群と前方後円墳526　2朝倉君534　3有馬君（阿利真公）541　4上毛野君548

第三編　古代　下

序　章……五六九
一、国造から国司へ569　二、国府と国分寺572　三、条里制と住民575
第一章　国司政治……五七八
第一節　国司の任命……五七九
1改新政治の実施579　2国司政治の確立581　3上毛野氏の一族582　4上毛野国車評585
第二節　国府の設置……五八六
1国府の位置選定586　2国府跡推定地の発掘調査591　(1)昭和三六年次調査592　(2)昭和三七年次調査593　(3)昭和三八年次調査593　(4)昭和三九年次調査594　(5)昭和四〇年次調査594　(6)昭和四一年次調査595　(7)昭和四二年次調査596　(8)昭和四三年次調査597
第三節　国府を定めた群馬の地……五九九
1「群馬」の地名599　2「車持」の起源600　3群馬の在地勢力と国府604
第四節　在地豪族の権威を示す山王廃寺跡……六〇七

1山王廃寺塔心礎609　2石製鴟尾613　3根巻石615　4心礎以外の礎石616　5出土瓦及び出土位置618　6陶製銅釉水瓶及び埦、皿等配置一括遺物621　7佐波理埦622　8その他の出土品623
第五節　郡郷の成立……六三六
1郡の設定626　2郷と里630　3河川の変流と郷633　4朝倉郷・田後郷636　5旧荒砥の郷名636
第六節　国司と神社……六三八
1神社行政638　2国司の班幣644　3学校院若御子明神650
第二章　赤城神……六五三
第一節　国司政治下の赤城神……六五五
第二節　二之宮赤城神社を中心とした赤城山南麓地帯……六五八
第三節　赤城神社と近戸神社……六六四
第四節　上毛野朝臣足人と赤城神……六七〇
第三章　仏教並びに寺院文化……六七七
第一節　私寺の建立……六七八
第二節　火葬墓と瓦塔……六八三

第三節　瓦使用箱式棺……六八四
第四節　国分寺の建立……六八五
第五節　上野国分寺……六九一
第六節　定額寺……七〇三
第七節　神仏習合……七〇四
第八節　日輪寺十一面観世音像……七〇七
第九節　善勝寺の鉄造阿弥陀如来像……七一〇
第四章　班田収授の法と条里制……七一一
第一節　班田収授……七一一
第二節　条里制……七一三
第四編　中世
序章……七一六
一守護の任命と仏教の浸透716　二戦国の争乱と厩橋―地名の起こり―722
第一章　国府の存続と上野国目代……七二四

第二章　国府を中心とした武士の行動……七二九
第一節　源頼朝挙兵のころの情勢……七二九
第二節　上野国奉行人藤九郎盛長……七三一
第三章　赤城山南麓地帯の荘園と公領……七三六
第一節　荘園と公領……七三六
第二節　女堀の開穿……七四二
第三節　大胡郷と大胡氏……七四六
第四章　建武政権と上野……七五六
第一節　楠合戦と上野国御家人……七五六
第二節　義貞の挙兵と上野の武士……七五九
第五章　二之宮の赤城神社と三所明神……七六三
第一節　二大明神と三所明神……七六三
第二節　地蔵信仰……七六六
第三節　三夜沢赤城神社……七六六
第四節　二宮赤城神社……七六八

第六章　総社と山王……七七二
第一節　総社の発展と総社本「上野国神名帳」……七七二
第二節　山王と日枝神社……七八〇
第七章　守護の支配……七八四
第一節　上杉氏の入国……七八四
第二節　観応の擾乱と宇都宮氏の上野支配……七八六
第三節　上杉氏の関東復帰……七九〇
1宇都宮氏の上杉氏復帰阻止行動791　2宇都宮氏と平一揆の反乱792　3上野国在地領主の動向793
第四節　上杉氏の守護領国体制……七九五
第五節　関東の分裂と守護領国体制の崩壊……八一三
第八章　民衆と信仰……八二三
第一節　氏神・産土神・鎮守神……八二七
1熊野神社829　2春日神社830　3神明宮832　4八坂神社833　5鏡神社・鏡宮神社834
6赤烏神社・巣烏神社836　7御霊神社837　8八幡宮839　9諏訪神社840　10その他843
第二節　遺物からみた信仰表現……八四四

1金属製遺物844　2石製遺物849　(1)板碑853　(2)宝塔・五輪塔・笠塔婆・層塔869　(3)多宝石塔878　(4)その他の笠塔婆・層塔883　(5)宝篋印塔887　(6)輪廻塔894　(7)石殿901　(8)石仏904

第九章　戦国の世の厩橋……九一五
第一節　関東幕注文と長野氏の厩橋領……九一五
第二節　上杉謙信の上野支配と厩橋北条氏……九三〇
第三節　武田氏の西上野支配……九五一
第四節　蒼海城・勝山城等の盛衰と石倉の攻防……九六五
第五節　滝川一益の厩橋進出……九七一
第六節　大胡領と上泉伊勢守秀綱……九七五
第七節　那波氏と力丸城……九八二
第八節　戦国末期の農民と武士……九八九
第九節　環濠屋敷……九九二
1環濠屋敷の分布993　2現況例1000　3構造上の特色1006　4環濠の成立1007

第一〇章　城砦……1010
1厩橋城……1014
2蒼海城……1017
3石倉の砦……1030
4勝山城……1031
5檜田城……1033
6大友館……1033
7村山城……1033
8中尾城……1034
9関根の寄居……1035
10嶺城……1036
11勝沢城……1038
12小坂子城……1039
13兎替戸の砦……1040
14上泉城……1040
15荻窪城……1041
16新土塚城……1041
17今井城……1041
18赤石城……1043
19大室城……1045

20大室元城……一〇三六
21荒子の砦……一〇三六
22小神明の砦……一〇三七
23宿阿内城……一〇三七
24宿阿内古城……一〇三九
25力丸城……一〇三九
26新堀城……一〇四〇

古代・中世主要年表……一〇四一

あとがき……一〇四九

図版

一　空から見た市役所付近……二
二　関東における前橋市の位置……三
三　群馬県における前橋市の位置……四
四　市内の等高線図……六
五　市内の地形的区分図……一二
六　利根川流路の変遷……一四
七　赤城斜面の関東ローム層……一六
八　関東地方の主な軽石層……一八
九　嶺町における大胡火砕流堆積物と関東ローム層との関係……一九
一〇　前橋台地（利根橋左岸）の火山灰質シルト層及び前橋泥流堆積物の重鉱物組成……二三
一一　前橋台地の表層地層柱状図……二四
一二　前橋台地の試錐柱状図……二七
一三　広瀬川発電水路沿いの試錐柱状図……三一
一四　前橋市の黒土層の模式的柱状図と重鉱物組成……三五
一五　深井戸のストレーナー位置……四三
一六　前橋市の模式的地質断面図……四四
一七　不良土壌内訳……七二
一八　水系図……八〇
一九　一〇年間平均風向……九五
二〇　日最高最低気温月別平均値比較表……九一
二一　月間降水量比較表……九三
二二　積雪比較表……九九
二三　前橋市縄文土器分布図……一三〇
二四　小神明遺跡敷石……一三五
二五　産業道路西遺石炉跡……一四三
二六　産業道路西遺跡出土縄文土器……一四四
二七　前原遺跡土器出土状態……一四六
二八　前原遺跡出土の土器……一四七
二九　後閑町出土弥生甕蓋、同弥生甕……一四八
三〇　大室小学校庭第二遺跡土器出土状態……一五一
三一　新屋遺跡土器出土状態……一五三
三二　荒砥東小学校々庭遺跡ＡＢ号住居跡……一六四
三三　荒砥東小学校々庭遺跡ＡＢ号住居跡竈……一六四
三四　寺畑遺跡住居内土器出土状況……一六七
三五　寺畑遺跡住居内竈跡……一六七
三六　前田遺跡竈俯瞰……一六八
三七　前田遺跡住居跡竈……一六八
三八　荒子小学校庭遺跡第一号住居跡……一七〇
三九　第四号住居跡竈、土器を煙道に利用……一七一
四〇　須恵器窯跡正面、分焔柱及びその奥部……一七二
四一　稲荷塚北遺跡第一号住居跡出土土器……一八〇
四二　前橋市内古墳分布図……一九一
四三　旧市域古墳分布図……二〇一
四四　上川淵（朝倉町）古墳分布図……二〇三
四五　同（後閑町）同……二〇三
四六　上陽（西善町東善町山王町）古墳分布図……二〇四
四七　総社古墳分布図……二〇五
四八　滑里古墳分布図……二〇六
四九　南橘古墳分布図……二〇七
五〇　桂萱東北部古墳分布図……二〇八
五一　同西部同……二〇九
五二　芳賀古墳分布図……二一〇

五三　荒砥古墳分布図……二五一
五四　小旦那古墳……二五九
五五　オブ塚古墳石室実測図……二六一
五六　愛宕山古墳南方より望む……二七一
五七　同石室内部及び石棺……二七一
五八　同石室実測図……二七二
五九　蛇穴山古墳石室入口……二七四
六〇　同　石室正面図……二七五
六一　同　側面図……二七五
六二　同　平面図……二七五
六三　前二子古墳墳丘実測図……二七六
六四　同　石室実測図……二七六
六五　前二子古墳石室……二七六
六六　前二子古墳出土品……二八〇
六七　後二子古墳石室……二八六
六八　同　実測図……二八六
六九　前橋二子山古墳実測図……二八九
七〇　前橋二子山古墳……二八九
七一　不二山古墳……二九一
七二　不二山古墳実測図……二九二
七三　塩原塚古墳玄室入口、奥壁……二九五
七四　山王大塚古墳墳丘実測図……二九六
七五　山王大塚古墳……二九七
七六　瓦使用棺……二九九
七七　正円寺古墳……三〇一
七八　正円寺古墳竪穴式石槨……三〇一
七九　同　古墳実測図……三〇三
八〇　同　石室実測図……三〇三
八一　オブ塚西古墳石槨……三〇五
八二　朝倉1号古墳石室発掘調査……三〇六
八三　朝倉Ⅱ号古墳……三〇七
八四　同　粘土槨……三〇七
八五　同　葺石……三〇八
八六　同　墳頂面配列の石田川式土器……三〇八
八七　同　古墳実測図……三〇九
八八　同　第五トレンチピット実測図……三一一
八九　同　出土品……三一〇
九〇　同　出土土師器……三一一
九一　今井神社古墳（西南から）……三一二
九二　同　（東南から）……三一二
九三　同　後円部出土石棺の蓋……三一三
九四　同　古墳実測図……三一三
九五　朝倉Ⅲ号古墳墳丘断面平面実測図……三一六
九六　八幡山古墳……三一九
九七　同　実測図……三二〇
九八　総社二子山古墳……三二一
九九　同　実測図……三二二
一〇〇　同　墳丘実測図……三二三
一〇一　同　前方部石室実測図……三二三
一〇二　同　後円部石室実測図……三二三
一〇三　宝塔山古墳（西南面）……三二九
一〇四　同　古墳現形図……三二九
一〇五　同　石室玄門……三三〇
一〇六　同　石棺……三三一
一〇七　同　石棺、格狭間の一部……三三一
一〇八　天神山古墳墳丘実測図……三三三
一〇九　同（発掘前）南から望む……三三三
一一〇　同　出土土器……三三五
一一一　同　粘土槨……三三六
一一二　同　粘土槨内鏡類副葬状態……三三七
一一三　同　出土半円方格帯画像鏡……三三九
一一四　同　変形獣形鏡……三四〇
一一五　同　三角縁四神四獣鏡……三四一
一一六　同　鉄製太刀……三四二
一一七　同　鉄製斧、やりかんな……三四三
一一八　同　銅鏃、碧玉製紡錘車……三四四
一一九　同　鉄製鏃、釣針状金具外……三四五
一二〇　桜が丘遺跡実測図……三六二
一二一　天神山古墳粘土槨周辺の構造……四四六
一二二　塩原塚古墳玄室内より入口を見る……四四五
一二三　宝塔山古墳石室……四四九
一二四　カロウト山古墳の家型石棺……四五六
一二五　上川淵朝倉及び後閑古墳群……四五九
一二六　山王古墳群……四六六
一二七　西大室町東大室町二子山付近古墳図……五二九
一二八　西大室町付近古墳分布図……五三〇
一二九　西大室町荒子町の一部古墳分布図……五三一
一三〇　中二子古墳……五三四
一三一　同　古墳実測図……五三四
一三二　赤烏神社跡古図……五八八
一三三　同　本地仏……五八八
一三四　元総社小学校遺跡（国府跡）発掘調査……五九一
一三五　同……五九二
一三六　丁間稲荷……五九五
一三七　山王廃寺跡遺物出土地図……六〇八
一三八　日枝神社境内山王廃寺跡基壇……六〇九
一三九　山王廃寺跡塔心礎……六一〇
一四〇　同実測図……六一〇
一四一　石製鴟尾実測図……六一三
一四二　石製鴟尾（都丸方、日枝神社境内）……六一三
一四三　根巻石……六一五
一四四　同　実測図……六一五

一四五　単弁七葉軒丸瓦拓本……六一八
一四六　複弁蓮花文軒丸瓦拓本……六一九
一四七　単弁四葉軒丸瓦拓本……六一九
一四八　変形複弁珠文帯付軒丸瓦拓本……六二〇
一四九　重弧文軒平瓦拓本……六二〇
一五〇　文字瓦拓本……六二〇
一五一　山王廃寺跡出土陶製銅釉水瓶及び埦皿……六二一
一五二　佐波理埦……六二三
一五三　山王廃寺跡出土釘……六二四
一五四　同　塑像頭部……六二四
一五五　学校院若御子明神位置図……六二五
一五六　二之宮町付近から見た赤城山……六二三
一五七　六供京安寺付近図……六八一
一五八　荒口町出土の石櫃……六八三
一五九　石製蔵骨器……六八三
一六〇　上野国分僧寺跡実測図……六九三
一六一　同　伽藍配置推定図……六九四
一六二　同　金堂跡実測並びに復原図……六九四
一六三　同　塔婆跡実測並びに復原図……六九五
一六四　同　金堂内安置諸像の推定図……六九六
一六五　日輪寺十一面観世音像……七〇八
一六六　日輪寺旧境内図（明治初期）……七〇九
一六七　善勝寺鉄造阿弥陀仏像……七一〇
一六八　同　仏像背銘……七一〇
一六九　赤城山南麓地帯の荘園と公領……七二一
一七〇　女堀用水路断面図……七四一
一七一　明和五年の二宮赤城神社境内地図……七五九
一七二　二宮赤城神社の墓塁……七六〇
一七三　同　塔跡心礎……七六〇
一七四　同　塔心礎実測図……七七一
一七五　同　赤城塔……七七一
一七六　上野国神名帳（総社本）の一部……七七三
一七七　総社神社の懸仏弥勒像、普賢像、同雲版……七七九
一七八　引間妙見寺の梵鐘……七九九
一七九　上野における上杉氏所領と守護被官……八〇七
一八〇　東覚寺梵鐘……八四四
一八一　同現寸図……八四五
一八二　橘林寺鰐口……八四五
一八三　前橋市域内中世金石文化財分布図……八五〇
一八四　上細井紺川氏蔵梵字板碑……八六五
一八五　乗明院画像板碑……八六五
一八六　同　実測図……八六六
一八七　小島田町の弥陀像供養碑……八六六
一八八　同碑銘文……八六六
一八九　五代町木福様境内板碑……八六七
一九〇　上泉町宝禅寺の板碑……八六七

一九一　大福寺の多宝塔（赤城塔）……八七九
一九二　二宮赤城神社の多宝塔……八八〇
一九三　山王町関根氏宅地内の多宝塔……八八〇
一九四　西大室町観昌寺の多宝塔……八八〇
一九五　富田町稲荷山古墳の多宝塔……八八〇
一九六　江木町南江木墓地の多宝塔……八八一
一九七　竜蔵寺町竜蔵寺前の多宝塔……八八一
一九八　古市町和尚塚の多宝塔……八八一
一九九　公田町覚勤寺の宝塔……八八二
二〇〇　同　実測図……八八三
二〇一　亀里町極楽寺境内五輪塔……八八四
二〇二　総社町総社の笠薬師……八八四
二〇三　光巌寺境内の層塔……八八五
二〇四　同（台座）……八八六
二〇五　同（左面）……八八六
二〇六　同（右面）……八八六
二〇七　西善町祝昌寺の宝篋印塔……八九二
二〇八　総社町光巌寺墓地の輪廻塔……八九三
二〇九　元総社町徳蔵寺境内輪廻塔……八九三
二一〇　同　基台部……八九三
二一一　荒口町観音寺跡墓地輪廻塔……八九四
二一二　亀里町庚申塚輪廻塔……八九四
二一三　青梨子町正法寺輪廻塔……八九四
二一四　鶴光路町善光寺輪廻塔……八九四
二一五　西大室町木村氏屋敷の石殿……九〇一
二一六　二之宮町磯部氏屋敷の石殿……九〇一
二一七　亀泉町三面薬師の薬師三尊……九〇五
二一八　総社町植野元景寺の地蔵像……九〇五
二一九　関東幕注文による在地領分布図……九一六
二二〇　環濠屋敷現存図……九九九
二二一　上佐鳥町中沢真一氏屋敷図……一〇〇〇
二二二　同濠断面図……一〇〇〇
二二三　上佐鳥町福島経三郎氏屋敷付近図……一〇〇一
二二四　同　濠断面図……一〇〇一
二二五　亀里町矢島百石やしき……一〇〇一
二二六　鶴光路町持田孫平治氏やしき……一〇〇三
二二七　力丸町羽鳥升平氏やしき……一〇〇三
二二八　徳丸町新井孝雄氏やしき……一〇〇三
二二九　同　井野氏やしき……一〇〇四
二三〇　同新井直樹氏等の一廓……一〇〇四
二三一　後閑町北堀慶弥氏やしき……一〇〇五
二三二　同　濠の断面図……一〇〇五
二三三　鳥羽町大福寺付近環濠地……一〇〇六
二三四　前橋市内の古城跡分布図……一〇一三
二三五　旧厩橋城跡、石倉砦跡……一〇一五
二三六　蒼海城図……一〇一九

二三七　石倉砦図……一〇一〇
二三八　勝山城跡……一〇一三
二三九　檜田城跡……一〇一三
二四〇　大友館跡……一〇一三
二四一　村山城跡……一〇一四
二四二　中尾城跡……一〇一五
二四三　関根の寄居……一〇一六
二四四　嶺城跡……一〇一七
二四五　勝沢城跡……一〇一八
二四六　小坂子城跡……一〇一九
二四七　兎替戸の砦……一〇二〇
二四八　上泉城跡……一〇二一
二四九　荻窪城跡……一〇二三
二五〇　新土塚城跡……一〇二三
二五一　今井城跡……一〇二四
二五二　赤石城跡……一〇二四
二五三　大室城跡……一〇二五
二五四　大室元城跡……一〇二五
二五五　荒子の砦……一〇二六
二五六　宿阿内城跡……一〇二九
二五七　宿阿内古城跡……一〇二九
二五八　力丸城跡……一〇四〇
二五九　新堀城跡……一〇四〇

口絵図版

一　前橋市街……一
二　後閑天神山古墳出土二禽二獣鏡……三
三　山王廃寺跡出土水瓶並びに埦と皿……三
四　総社神社本殿……五
五　日輪寺の十一面観世音像……七

表

一　地点別標高……七
二　地質年代区分と群馬の地質……九
三　前橋泥炭層の花粉分析表……二五
四　砂礫の粒度と組成……三一
五　利根川原の礫（前橋付近）……三七
六　前橋市の第四紀編年表……四五
七　不良土分布一覧表……六八
八　大正用水関係地区及び面積……七二
九　天狗岩用水灌漑面積……七二
一〇　広瀬桃木両用水灌漑面積……七二
一一　中群馬用水関係地区及び面積……七三
一二　赤城山南麓地帯地目別利用状況……七三
一三　利根川流域地帯地目別利用状況……七三
一四　総面積対照表……七五
一五　中央部の地目別面積推移表……七六
一六　地区別地目別土地利用状況……七六
一七　日最高気温月平均値……九〇
一八　日最低気温月平均値……九〇
一九　平均湿度……九二
二〇　降水量……九三
二一　一〇メートル以上の風の吹いた日数……九五
二二　月平均風速……九六
二三　最多風向……九七
二四　年間降雪日数……九八
二五　電雷日数……九九
二六　結　氷……一〇〇
二七　最近一一年間のひょう・あられ日数……一〇一
二八　日照時間……一〇二
二九　六〇年間の有感地震平均回数……一〇四
三〇　昭和三九～四三年月別有感地震回数……一〇四
三一　石器時代の遺跡とローム層の編年……一三三
三二　土師器遺跡分布一覧表……一五六
三三　古墳綜覧（関係分）……一九二
三四　檜峰古墳石室規模……二五六
三五　檜峰古墳の主な出土品……二五七
三六　石室の幅、長比較表……二六一
三七　オブ塚古墳石室規模……二六四
三八　オブ塚古墳の長、幅尺度比較……二六五
三九　オブ塚古墳出土品……二六六
四〇　オブ塚古墳出土直刀一覧……二六六
四一　オブ塚古墳出土小刀一覧……二六六
四二　横穴式古墳、竪穴式古墳比較表……二八一
四三　前二子古墳内部構造の規模……二八三
四四　前二子出土品……二八五
四五　後二子古墳内部構造の規模……二八七
四六　後二子古墳出土品……二八七
四七　不二山古墳玄室規模……二九三
四八　塩原塚古墳内部構造の規模……二九四
四九　塩原塚古墳出土品……二九四
五〇　山王大塚古墳内部構造規模……二九七
五一　朝倉Ⅱ号古墳出土石田川式系土器……三一一
五二　古墳実測値比較表……三一四
五三　総社二子山古墳出土品……三一四
五四　総社二子山出土の太刀比較表……三一四

五五　宝塔山古墳石室規模……三三一
五六　天神山古墳出土品……三三八
五七　古墳諸要素比較表……三六八
五八　玄室の長さと幅の比較表……三六九
五九　角閃石安山岩使用の有無比較表……三七〇
六〇　天神山、朝子塚比較表……三七八
六一　箱式棺状内部構造の比較表……三八一
六二　浮石質紡錘状角閃石安山岩使用の古墳一覧……三八六
六三　横穴式古墳長幅の比及び石室比較表……三九九
六四　二ッ岳爆裂により截断される横穴式石室……四二三
六五　箱式棺状内部構造……四二九
六六　横穴式古墳の石室……四三九
六七　塩原塚古墳出土の歯……四四二
六八　塩原塚古墳出土の耳環……四四二
六九　朝倉の古墳(一)……四四七
七〇　朝倉の古墳(二)……四五〇
七一　後閑の古墳……四五四
七二　山王の古墳(一)……四五五
七三　山王の古墳(二)……四六七
七四　総社町の古墳……四七三
七五　田口町の古墳……四九六
七六　上細井付近の古墳……四九八
七七　竪穴式古墳の比較表(一)……五〇九
七八　竪穴式古墳の比較表(二)……五一〇
七九　西大室町の古墳……五一八
八〇　前中後二子比較表(一)……五二五
八一　古墳の規模別比較表……五三九
八二　前二子、中二子、後二子比較表(二)……五四九
八三　心礎寸法比較表……六一三
八四　知行国主表……六一六
八五　上野目代藤原氏略系……六一八
八六　大胡郷内村名表……七〇七
八七　大胡氏一族についての年表……七二一
八八　大胡郷内の長楽寺大通庵への沽却（売却）の田畠在家……七二四
八九　楠合戦注文に見られる上野国御家人……七二七
九〇　郡別神名比較表……七三八
九一　上野国における上杉氏所領……七四七
九二　白井長尾世系略……八〇一
九三　惣社長尾世系略……八〇一
九四　惣社長尾系図……八〇三
九五　高津長尾……八〇五
九六　「上杉清方着到注文」中の上野国の在地領主の系譜……八一〇
九七　上杉方の軍事力構成……八一七
九八　鉄仏、梵鐘、鰐口、懸仏、雲版一覧表……八四六
九九　前橋市域内中世金石遺物一覧……八五二
一〇〇　板碑一覧表……八五四
一〇一　宝塔、五輪塔、笠塔婆、層塔……八七〇
一〇二　宝篋印塔……八八七
一〇三　輪廻塔……八九五
一〇四　輪廻塔分布一覧表……九〇〇
一〇五　石殿一覧表……九〇一
一〇六　石仏一覧表……九〇六
一〇七　関東幕注文の諸士の国別集計……九一〇
一〇八　幕注文の上野（含下野足利）諸士一覧表……九一八
一〇九　毛利北条系譜……九二九
一一〇　関東における上杉謙信の活動……九四六
一一一　厩橋北条氏の寄進、安堵、宛行状……九四九
一一二　武田氏の所領安堵および宛行……九六一
一一三　那波氏系図(一)……九八三
一一四　那波氏系図(二)……九八五
一一五　上川淵地区環濠屋敷一覧……九九三
一一六　下川淵地区環濠屋敷一覧……九九五
一一七　上北地区環濠屋敷一覧……九九八
一一八　市内城砦の築城期別……一〇一一
一一九　市内城砦の規模……一〇一三

前橋市史

第一巻

第一編　自　然

第一章　前橋市の自然地理的環境

第一節　関東における総体的位置

前橋市は、本州のほぼ中央、関東の北西を占める群馬県域の中央部よりもやや南にあり、首都東京をへだたる約一〇〇キロメートルのところに位する。これを関東総体からみれば、市域は関東平野の北部を占め、奥利根に源を発した利根川が、上流の利根、北群馬両郡を経て漸く中流に入ろうとするところに発展した市である。従って、往古から関東と上信越を結ぶ要地、表日本と裏日本をつなぐ要衝とされて来た。現在市中には、群馬・栃木を結ぶ国鉄両毛線及び東京・新潟を結ぶ上越線、前橋・桐生を結ぶ私鉄上毛電鉄が通じている。市域は東西一八・〇キロメートル南北一九・三キロメートル、面積一四七・三九平方キロメートルで、県下十一市中最大である。

市域の東・西・南・北四極の経度・緯度は次のとおりで、市役所所在地は、東経一三九度〇四分、北緯三六度一三分となっている。

極東　東経約一三九度一二分四四秒（東大室町字上多田山の東端）
北緯約　三六度二三分〇秒

第１図　空から見た市役所付近

極西　東経約一三九度〇分二七秒（清野町字屋敷の西端）
　　北緯約　三六度二五分〇秒
極南　東経約一三九度六分五〇秒（下阿内町字道下の南端）
　　北緯約三六度一八分〇八秒
極北　東経約一三九度〇八分一〇秒（金丸町字金丸の北端）
　　北緯約三六度二九分〇秒

また、市域は、東は勢多・佐波両郡及び伊勢崎市に、西は北群馬・群馬の両郡及び高崎市に、北は勢多・北群馬両郡、南は佐波郡に接し、上毛三山の赤城山は北に、榛名山は西にそびえ、妙義山は遙か西南に眺めることができる。このほか、北から西にかけて小野子・子持の山々や、浅間その他上信越の山々、南には秩父の山なみなどを遠望することができる。市域の中央には坂東太郎と呼ばれる利根川が、北から南東へ流れている。

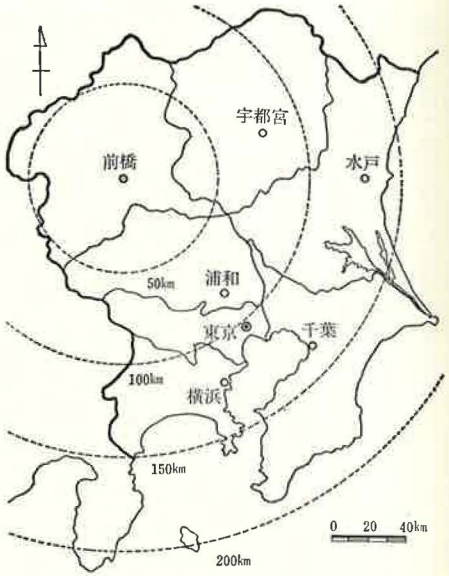
利根川から取り入れる広瀬・桃ノ木及び天狗岩の各用水は、それぞれ分水して市内を縦横に流れ、なかでも広瀬川は、満々たる水をたたえて市の繁華街を貫き、桃ノ木川は市の北東部、天狗岩用水は西部の各農業地帯をうるおして「水の都前橋」を形成している。

地勢は利根川の東が赤城山麓、西が榛名山麓にかかり、東は南方へ、西は南東方へなだらかに傾斜して関東平野に合している。

市はまた、「水の都」であるとともに「糸の町」としても知られて来たとおり、古くから農蚕・製糸が盛んであり、市域内に養蚕用の桑園が多い。最近は工場誘致等により、養蚕も次第に変貌はしているが、現在でも依然として市の周辺地帯で盛んに行なわれ、随所に桑園を見ることができる。市域は工場や住宅団地造成等のため、耕作地の漸減を見てはいるが、それでも米作も麦作も依然として熱心に行なわれており、耕作地の四九・三％は田、二二・八％は畑、二七・九％は樹園地（昭和四十二年市勢要覧）となっている。

山林は主として北部に残り、平坦地では、利根川東岸及び東部の独立丘陵地帯その他に、若干散在する程度である。

このように、本市は市街の周辺に耕地や山林をもつが、市の繁華街は、その中央にあって、広瀬川の分流である馬場川を境として、その南が台地、北が低地になっている。この低地は往古利根川の流路であったところで、台地はその南岸にあたり、古利根川の北岸は南橋・芳賀・桂萱及び永明地区をつらねる赤城山麓の一連の段丘となっている。



第２図　関東における前橋市の位置

この低地のうち南の台地寄りとその台地が、旧市域であり、市の中心地として発展し、官公庁、各種団体、会社及び商工業の中心地帯となっている。そして旧市域をとりかこむ周辺が新市域である。

道路は、国道第一七号線と第五〇号線が二大幹線をなし、第一七号線は、東京都中央区を起点として新潟市に達するもので、高崎市を経て前橋市の西南部から中央部に入り、それより北進して渋川市に向かう。また、第五〇号線は、前橋市を起点として茨城県水戸市に達するものであるが、この線は、市の中央部を東進して桐生市及び栃木県小山市を経過する。このほか、前橋古河線、前橋大間々桐生線、前橋秩父線、前橋赤城線、前橋停車場線、高崎渋川線等の主要県道が、市を中心に放射状線をなして、四方に通じている。

第3図　群馬県における前橋市の位置

前橋市から関東各県の主要都市への距離をあげると、東京都(東京駅)へ鉄路一一四・八、神奈川県横浜市へ同一四三・六、千葉県千葉市へ同一五〇・六、埼玉県浦和市へ同九〇・六、栃木県宇都宮市へ同一一〇・八、茨城県水戸市へ同一四八・六キロメートルである。

第二節　標　高

前橋市の地勢は北西に高く、南東に傾斜して、中央が繁華街、周辺が耕地あるいは山林でいわゆる農業地帯になっている。

この農業地帯について、昭和三十一年経済企画庁が群馬県に依託して行なった土地分類基本調査書に「前橋地方は関東平野の北辺にあって、赤城・榛名の両火山体と利根川沖積面とにより構成されており、わが国における自然地域の一典型をなす所であり、群馬県内の農業地域としても重要な所である」と記されているが、まさにそのとおりである。

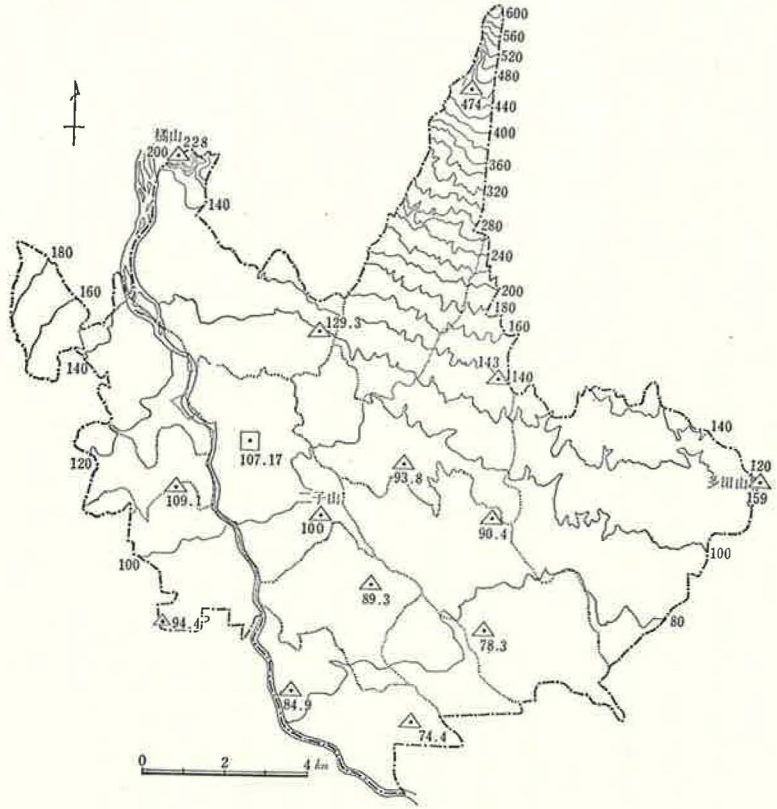
市域の中央を北から南東に流れる利根川が、水源の山間部を離れて関東平野部に移る中間地点に本市があって前橋の北では河床の幅が広く、最大一キロメートルに及ぶところがあるが、その南では次第に河床が狭まっている。河床の両岸はその殆んどが高さ一〇メートルにも及ぶ側蝕崖を有し、山間を流れて来た余勢を保って、やや急流性を示している。

利根川東岸の緩斜地帯はその大部分が赤城南麓の裾野にあたり、市街地の標高は大体一〇〇メートル内外であるが、それが北に向かって次第に高度を増して、市域の最北端にあたる金丸町の北部鶏山が海抜六三〇メートルに及んでいる。

また利根川の西岸は榛名山東麓の裾野にあたり、西に向かって高度を加えるが市域内では大きな高低はなく、最西端の清野町でも海抜二〇〇メートルに過ぎない。

市の中央繁華街は、現在の利根東岸にある。この地域は、利根川が直接、間接に働いたために生じた旧河床の低地と、台地から成っている。広瀬・桃ノ木の両川は、市の西北部から流下してこの繁華街の中央と北部を流れている。

その他市域内の水系は別記のとおりであるが、市域全般から見て土地は高燥のところが多く、湿地性のところはほとんど無い。ただ赤城裾野の斜面下部に灌漑用流下水の溜池が若干分布している。（経済企画庁群馬県発行「土地分類基本調査」）



第4図　前橋市内の等高線図

市域内の標高を更に具体的にあげると、中央街の本町一丁目前橋郵便局付近の一〇七㍍であるのに対し、利根川東岸の北端、金丸町の中心部はそれより三〇〇～四〇〇㍍以上も高く、標高四〇〇～五〇〇㍍を示し、それより小坂子町二〇二、上細井町一二九、端気町一一〇、上泉町一〇〇、小島田町九〇、後閑町八八、下阿内町七二㍍というように市域の北から南へと傾斜している。また利根川の西岸の市域では清里地区の二〇〇㍍を最高として、総社町が一五〇㍍となり、次いで元総社町一〇九、古市町一〇六、下新田町九〇㍍というように、南東へゆるやかな傾斜を示している。これを地点別に標高を示すと次のとおりである。

第一表　地点別標高

	m		m		m
清里地区		下新田町の南端	九〇	下川淵地区	
西北部	二〇〇	芳賀地区		公田町付近	▲八四
東南部	一五〇	金丸町鶉山	▲六三〇	力丸町付近	▲七四
総社地区		小坂子町	▲二〇二	下阿内町付近	七二
総社町植野字新井の北端	一五〇	端気の段丘上	一一〇	桂萱地区	
北部から西北にかけて	一四五	南橘地区		江木町厩橋病院北方	▲一四三
大渡橋付近	一二〇	橘山	▲二二八	三俣町付近	▣一〇一
元総社地区		片石山	一六七	上泉町付近	▣一〇〇
元総社町稲葉付近	▲一〇九	田口町付近	一四〇～一七〇	東片貝町付近	▲九三
東地区		上細井段丘上	▲一二九	永明地区	
古市町付近	▣一〇六	上細井町付近	一二〇～一五〇	小島田町付近	▲九〇
江田町付近	一〇五	上小出町付近	▲一一六	駒形町付近	▲七八
出張所付近	九八	上川淵地区		上陽地区	
川曲町付近	▲九四	後閑町付近	▲八八	西善町矢田付近	八〇

城南地区
西大室町（七ッ石山）　▲一七四m
東大室町字多田　▲一五九
泉沢町　▲一二〇

上増田町宮原　▲八〇m
中央部
群馬大学医学部付近　▲一一六
前橋郵便局付近
（本町一丁目）　▣一〇七

二子山　▲一〇八m
朝日町（旧新町）角十字路　九七
（▲印は三角点、▣印は水準点）

また市域内には、各所に独立丘陵があるが、南橘地区では、田口町の北端、勢多郡北橘村との境界に橘山（標高二二八㍍）がそびえ、その付近に片石山（一六七㍍）八幡山（一七〇㍍）があり、城南地区では勢多郡粕川村との境界に七ッ石山（一七四㍍）佐波郡赤堀村との境界に多田山（一五九㍍）がある。

市域内の等高線は別図のとおりで、利根川東側一〇〇㍍の線が、赤城山麓末端の段丘崖を示している。

第二章　地形・地質

序　節

前橋市は利根川が赤城・榛名の裾合谷をへて関東平野にのぞむところに位置し、北に赤城、西に榛名の両火山をおいて南は関東平野を一望するところにある。市街地の標高は一〇〇㍍前後であるが、市内の最高所は金丸町北端にあってその標高は約六三〇㍍に達し、市全体としての地形や地質はかなり変化に富んでいる。しかし、大きくみれば平坦地域と第四紀火山斜面とからなっているため、具体的に調べることのできる範囲ではその地質はすべて第四紀に形成された各種の地層からなっている。したがって本稿に述べることがらは前橋市の第四紀地質

地質年代			絶対年代（単位百万年）	生物界		日本列島の地史	群馬の地史	群馬県にある主な地層と岩石	
新生代	第四紀	沖積世	0.01	人類時代	被子植物時代	完成の時代	低形成地の時代	沖積低地，下位段丘堆積物（広瀬川 低地帯）	浅間火山
		洪積世	1				台地・段丘火山形成の時代	関東ローム層，台地，中・高位段丘堆積物，湖成層（沼田・中之条）（前橋砂礫層・前橋泥流）	赤城・榛名などの火山岩（輝石安山岩）
	第三紀	新第三紀 鮮新世	13	ほにゅう動物時代		タフ時代 グリーン	諸丘陵・盆地形成の時代 谷川連峰や	秋間・妙義・本宿・中之条の火砕岩層	三峰・大峰 石英安山岩
		中新世	25					富岡丘陵，水上・猿ケ京，八王子丘陵の中新統（グリンタフ）．高崎層群 富岡層群 猿ケ京層群 水上層群	谷川岳石英 関緑岩
		古第三紀 漸新世				日高造山の起こった時代 本州の大部分が隆起して	関東山地・足尾山地形成の時代		
		始新世							
		暁新世	70					下仁田中生層	
中生代	白亜紀		135	アンモナイト時代	裸子植物時代			山中地溝帯中生層 戸倉中生層 岩室中生層	沢入・片品 奥利根・平滑などの花崗岩
	ジュラ紀		180					奥利根中生層	
	三畳紀		225			本州に造山運動の起こった時代 本州地向斜時代	本州造山の時代		
古生代	二畳紀		270	両時生類代	しだ植物時代			関東山地，足尾山地の古生層．三波川結晶片岩，上越変成岩	蛇紋岩 はんれい岩
	石炭紀		350						
	デボン紀		400	魚類時代				これより古い時代の地層は未発見	
	シルル紀		440		菌そう植物時代	古い大陸の一部であった時代			
	オルドビス紀		500	無動物時代 からせきつ のあるい					
	カンブリア紀		600						
先カンブリア代	原生代		1000	無動物時代 からせきつ のなるい					
	始生代		2000						

第2表　地質年代区分と群馬の地質

の記述ということになる。

第四紀は今から約一〇〇万年前にはじまり現在をも含む最も新しい地質時代で、現在みられる自然景観の完成された時代であり、人類の発展した時代でもある。また、世界的にみて、この時代には地球史上にもまれな寒冷気候（氷期）がくりかえし訪れているので大氷河時代とよばれることもある。前橋市の自然はこのような大氷河時代の中で育てられてきたともいえるのであって、川岸の露頭一つをみてもその時代のありさまを如実に物語っている。なお、参考までに地質年代の区分と群馬県の地質系統のあらましを第二表に示した。

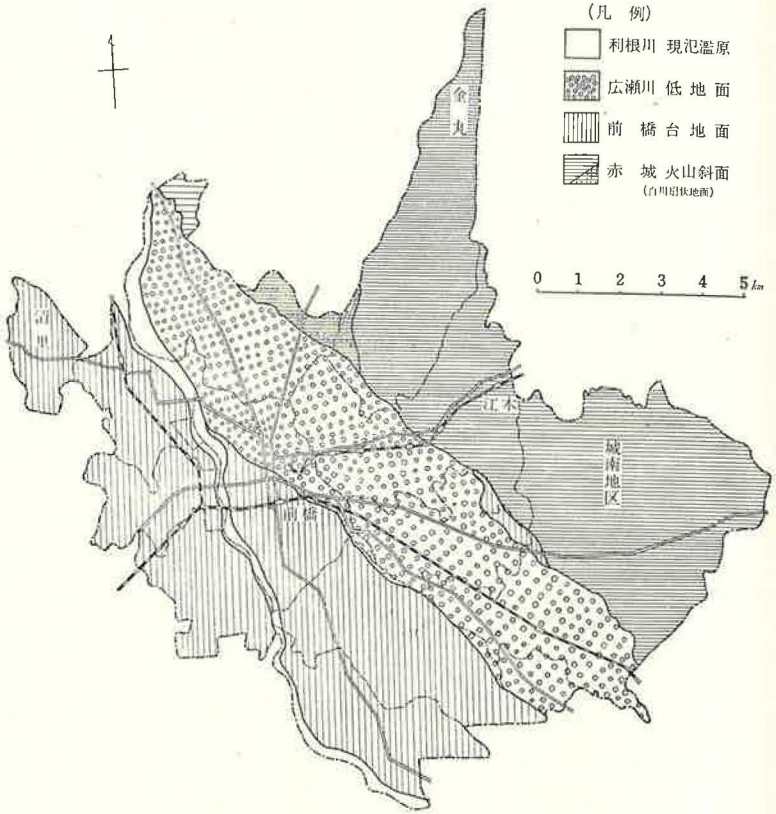
以下記述にあたっては、前橋市の地質の解説と同時に今後の研究や開発に役だつ資料としての役割も果せるよう留意したつもりである。そのため本文中にも既存の深井資料や試錐調査資料などをできるだけ活用し、代表的な深井資料は末尾に一括して表示した。それらの資料収集に当たっては、群馬県企業局、前橋市水道局および田中鑿泉重工株式会社の各位から多大な御協力をいただいた。

第一節　地形・地質の概説

地形および地質の特徴から前橋市の地域を区分すると、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、前記両者の間に夾（はさ）まれて地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、および現利根川氾濫原の四地域に区分することができる（第五図）。

1　基盤岩層（先第四系）

市内の各地域とも第四紀の各種堆積物が厚く累積しているので、先第四紀の基盤岩層は地表部の露頭ではまったく見られず、最も深い深井戸の資料を見てもそのような基盤に達している例はみいだされない。しかし、群馬県全般の地質構造から判断すると、前橋市付近で第四系の基盤をなすものは、高崎・富岡地域に広く露出している新第三系の最上部層（秋間層または板鼻層）



第5図　市内の地形的区分図

にあたるものと推定できる。これら基盤岩層の伏在する深さは不明であるが、おそらく二〇〇㍍以上の深度にあるものと予想される。

2　赤城火山斜面

赤城火山斜面は平均勾配二度内外の緩斜面で、一般の火山裾野におけると同様に各種の火山砕屑岩層（以下、火砕岩層とよぶ）からなっている。放射谷はかなり密に発達しているが、それぞれの放射谷は比較的浅いものが多く、その谷低部はかなり高いところまで水田化されており、尾根に当たる部分には古くから集落が発達している。斜面の末端は、比高一〇㍍前後の直線的な山麓崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地帯に接している。

3　前橋台地

市の南西部で広瀬川低地帯の面より一段高く高台をなす地域は洪積層からなり、この地域を前橋台地とよぶ。現利根川流路より西部の総社、箱田、川曲などの地域もすべてこれに含まれる。また、市の北西端にあたる清里地域は、前橋台地面と榛名火山東麓斜面との移行部にあたっていて、東に緩く傾斜する地形面をなしているが、この付近では前橋台地の原面をおおって、より新期の榛名火山起源の火砕岩類が堆積しているためと考えられるので、便宜上、前橋台地に含めることにする。

台地面は詳しく見れば多少の起伏をもっているが、ほとんど平坦である。後に述べるように、その原因は火山泥流堆積物（前橋泥流堆積物）の堆積面と見なされ、その上を数㍍以内の火山灰質シルト―粘土（水成上部ローム層）がおおっている。ただし、清里地域の池端町・清野町などで、前に述べたように台地原面を被覆して榛名火山起源の火砕岩層が見られ、薄い上部ローム（気成）におおわれている。

台地の北東縁は北西―南東にのびる直線的な崖をなし、北側の広瀬川低地帯と接している。前橋中央児童公園、前三百貨店、市商工会議所付近などに見られる坂道は前橋台地から広瀬川低地に移行するところにあるもので、両地形面の高度差は一般に数㍍程度である。台地を貫流する利根川の現河床から台地面への比高は約一五㍍に達する。

4　広瀬川低地帯

本低地帯は赤城火山の山麓崖と前橋台地の北東縁をなす崖の間に挟まれ、約二・五―三㌔㍍の幅をもって前橋市の北西部から南東部に帯状にのびている。一見地溝状をなすこの低地の表層は過去の利根川の氾濫原堆積物である沖積砂礫からなっている。現在は広瀬川、桃ノ木川、および白川その他の小河流や用水がそれぞれ合流あるいは分流しつつ流下しているが、いずれも地形に制約されて南東流している。

低地帯の面も詳しく見ると必ずしも平坦ではなく、各所に自然堤防（砂礫堆）、または小扇状地とみなせる高まりが見られる。低地帯内で集落や桑園が発達しているようなところは、そのような高まりの部分に当たっていることが多い。

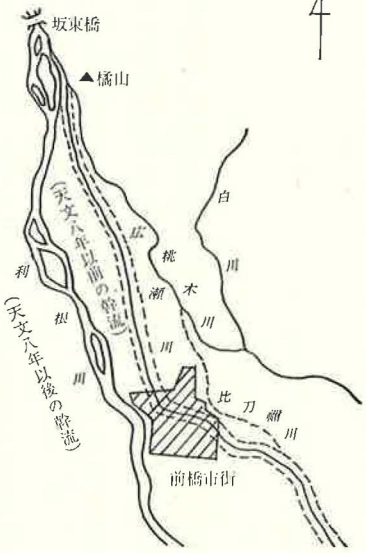
これらの微小地形からみると、過去の利根川が広瀬川低地帯の中を南東流していた当時は、その河道は赤城の山麓寄りのところからだんだんと南方の前橋台地の崖下にむかって移動したことが推察される。現在の広瀬川の

河道に近いところは利根川がいまの河道に大移動する直前の河床に当たっていたと考えられる。

昭和二十二年のカスリーン台風の際には天川大島その他一部の高所を残して、この低地帯のほとんど全面が洪水の被害をこうむっている。この洪水は赤城山水系の雨水がこの低地帯に集中したためにおこったものである。通常の降雨では氾濫することはほとんどないがカスリーン台風程度の大雨量になると、当時の排水系（広瀬川、桃ノ木川）では、それをさばききれなかったためである。そのような点で近年、桃ノ木川の改修工事が施工されたことは意義深い。

5　現利根川氾濫原

前橋市における現在の利根川は、大渡橋付近にいたるまで沖積低地の西縁部に幅広い氾濫原をもって南下しているが、大渡橋のやや下流からは突然に広瀬川低地帯から離れて前橋台地内に入り込み、これを刻んで両岸に高さ一〇㍍以上の断崖をもつ峡谷をつくって南流している。地学的には自然の流路とみなせる広瀬川低地帯から急に台地内に流入している姿はいかにも不自然である。



第6図　利根川流路の変遷

史実によれば、過去の利根川は比刀祢（ひとね）川と称されたこともあり、いまの田口町付近から現在の広瀬川の流路をとって南東流し、前橋―伊勢崎をほぼ連ねる線に沿って尾島町世良田にいたっていたという（第六図）。利根川が流路を現在に変えたのは応永年間から一五三九年（天文八年）および一五四三年（天文一二年）の大洪水によるものとされ、そのうち田口から元総社までは一四二九年（永享元年）長尾氏の開鑿による用水路に沿ったものといわれている。前橋台地内への流入に関しても自然とは解し難く、ここに古い小河川を利用した用水路のようなものが先在していたことが推察されるのであるが、これについての正確な史実はないようである。

現在の前橋市街地は、利根川が突然台地内に流入する部分にひらけ、南西の半分は前橋台地上に、北東の半分は広瀬川低地面の上にあって、両者はいわば「山の手」と「下町」の関係にある。

第二節　各地域の地質

概説に述べた地域区分にしたがい、ここではそれぞれの地域の地質をやや詳しく記載する。

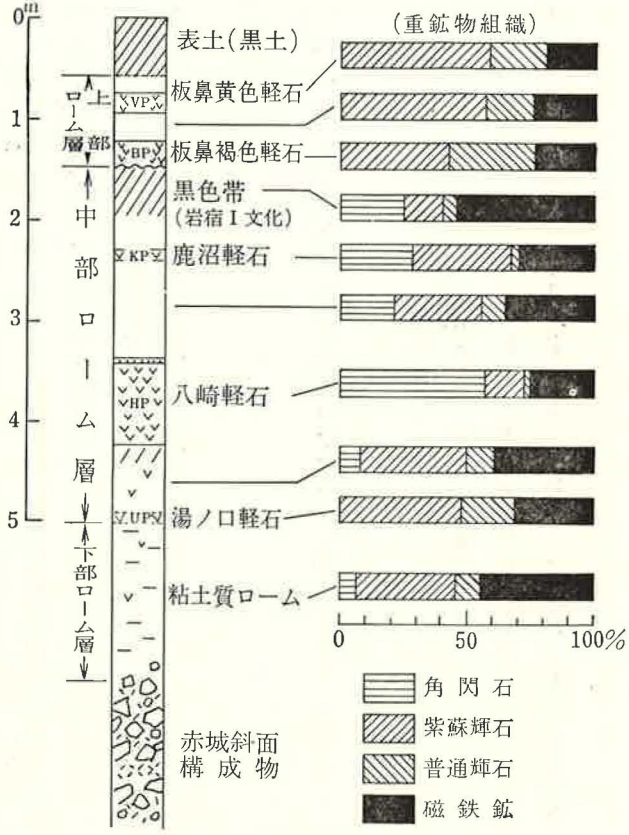
1　赤城火山斜面

赤城南麓斜面のうちで前橋市に含まれる地域は、金丸町北端（標高六三〇㍍）を頂点とし、ほぼ上細井―小島田を連ねる山麓崖線を低辺とする南北に長い三角地域である。西隣りの富士見村の斜面（白川扇状地）に比較すると地形はやや複雑で起伏に富む。この地域の地質は主として成層火砕岩類からなり、それらは関東ローム層によっておおわれている。

(1)　関東ローム層

前橋市の赤城斜面における関東ローム層の代表的柱状図と重鉱物組成を第七図に示した。

群馬県に分布する関東ローム層は洪積世にさかんに活動した赤城・榛名・浅間などの諸火山の火山灰層が風化したもので、挟まれる軽石層や暗色帯を鍵にして上部ローム層・中部ローム層および下部ローム層に三区分されている。



第7図　赤城斜面の関東ローム層

①上部ローム層　上部ローム層は浅間火山給源の火山灰や軽石からなり、現地形に沿って前橋市赤城斜面の全域に分布している。層厚は約一・五㍍。一般に黒土との移行部付近に細粒（〇・四㌢㍉）の板鼻黄色軽石が薄層をなすか、または断続的にみとめられ、下半部は全般に細粒軽石質で、その中に板鼻褐色軽石が明瞭な層（層厚約一五㌢㍉、粒径〇・五㌢㍉）をなしている。中部ローム層以下のローム層に比べて粘土化の程度が低く、色調も淡色で乾燥断面では淡黄褐色を呈し、往々にして上部ローム層の部分だけがやや凸出する傾向が見られる。重鉱物組成は紫蘇輝石・普通輝石・磁鉄鉱などからなり、角閃石は含まれないことが特徴である。上部ローム層の上部に夾まれる板鼻黄色軽石の降下年代は放射性炭素（14C）による年代測定によって約一一、〇〇〇年前と推定されている。したがって上部ローム層の最上部は洪積世と沖積世の境界を示す指標となる。

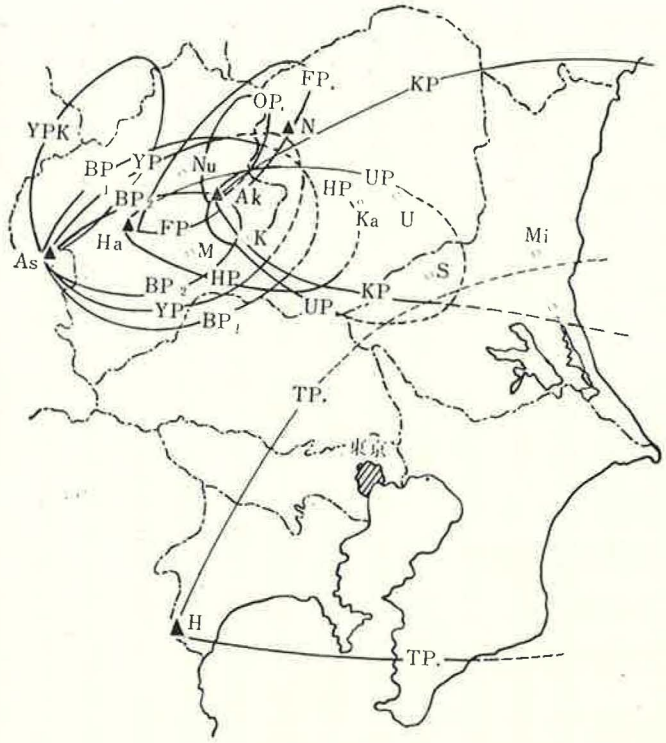
②中部ローム層　前橋地域の中部ローム層は主として榛名火山起源の火山灰や軽石からなり、赤城火山起源の火山灰はむしろ少ない。これは現在における浅間火山爆発時の降灰状況からもうかがえるように、火山の大爆発によって噴出した火山灰や軽石は瞬間的に高空に吹き上げられるので、一般に上層気流にのって火山の東方の地域に運ばれるためである。参考までに関東地方における主要軽石層の分布状態を第八図に示した。

中部ローム層は上細井・小神明・端気・上泉など赤城斜面末端部の地域を除いて、それより高いところにはほとんど全域に分布している。層厚は約三・五㍍。上部ローム層よりやや粘土質で、重鉱物組成は紫蘇輝石・角閃石・普通輝石・磁鉄鉱などからなる。上部ローム層との境界部には一般に三〇―四〇㌢㍉の厚さをもつ暗色帯が認められる。この暗色帯は中部ローム層堆積後、上部ローム層堆積前の火山灰降下休止期に形成された過去の土壌（古土壌または埋没土）と見なされるもので、岩宿Ⅰ文化包含層に当たっている。

暗色帯の下位約五〇㌢㍉には八崎軽石層が夾まれる。八崎軽石層はこの地域で中部ローム層を指示する最も重要な鍵層で、一般に灰白色を呈する風化軽石（粒径一～二㌢㍉・角閃石安山岩質）からなり、金丸・小坂子付近で層厚は五〇㌢㍉前後である。この軽石層は赤城南麓の西部にゆくほど厚く、粒径も増す傾向があるので榛名火

山から供給された降下軽石であることがわかっている。

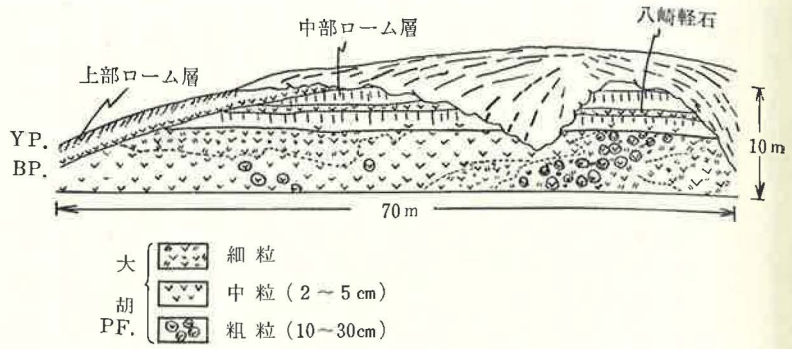
次に八崎軽石層の下位約一㍍の中部ローム層最下部にあたる層準には厚い火砕流堆積物（大胡火砕流堆積物と



第8図　関東地方の主な軽石層

FP.	二ッ岳軽石層	KP.	鹿沼軽石層
YP.	板鼻黄色軽石層	HP.	八崎軽石層
YP.	k 草津黄色軽石層	UP.	湯ノ口軽石層
BP.	1 板鼻褐色軽石層（上層部）	OP.	追貝軽石層
BP.	2 〃 （下層部）	TP.	東京軽石層

▲As	浅間山	○U	宇都宮		
▲Ha	榛名山	○Nu	沼　田	○S	下　館
▲Ak	赤城山	○M	前　橋	○Mi	水　戸
▲N	男体山	○K	桐　生		
▲H	箱根山	○Ka	鹿　沼		



第9図　嶺町における大胡火砕流堆積物と関東ローム層との関係

よばれる）が存在していることが多い。金丸・嶺・小坂子などの地域の沢岸の崖や、大きな切りとり崖などでは露頭で実際に観察できる。嶺付近における一例を第九図に示した。この火砕流堆積物には白色を呈する大小の軽石円礫と軽石の粉砕物質（火山灰）からなる「軽石質」のものと、大小の安山岩片に富み比較的固結度の高い「石質」のものの二種類のタイプがある。軽石質の火砕流堆積物の中には、ときおり完全に炭化した樹幹（天然木炭）が見出され、火砕流が高温であったことを物語っている。層位的に厳密にいえば軽石質火砕流の方がやや古いが、共に複輝石安山岩質で、中部ローム期初期の赤城火山噴出物と見なされる。層厚は薄いところ（金丸池）では数㍍以内のこともあるが一般に一〇㍍以上の厚層をなし、露頭では下低部まで観察できないことが多い。中部ローム層を地層として扱う場合には、この火砕流堆積物も当然その中に含まれるので、前述したように火砕流堆積物が厚層をなす場合には、中部ローム層の層厚は数一〇㍍に達することがある。

赤城火山の山頂カルデラは、きわめて大量におよぶ大胡火砕流堆積物を噴出した直後に形成されたと考えられる。

③下部ローム層　大胡火砕流堆積物によっておおわれなかった地域、たと

えば鳥取・五代・荻窪などの地域の一部では、中部ローム層の下位につづいて厚さ数㍍以内の下部ローム層が堆積している。この地域では中部ローム層の下限を示す湯ノ口軽石（赤城火山給源）が明瞭な層をなすほどに堆積していないため、野外で中部ローム層と下部ローム層との境界をきめることが難しいが、一般には八崎軽石層の下位約一㍍付近に求められる。詳しく観察するとこの付近に薄いレンズ状をなして断続する赤褐色の湯ノ口軽石が認められることが多い。

下部ローム層は中部ローム層よりもさらに粘土化がすすみ、所によって土石流堆積物とみなせる大小の安山岩礫を混え、やがて下位の成層火砕岩層に移行するようになる。下部ローム層の重鉱物組成は中部ローム層に類似し、一般に紫蘇輝石・角閃石・普通輝石・磁鉄鉱などからなるが、風化変質されたものを含み、磁鉄鉱の量比が増すことが特徴である。（第七図）

(2)　成層火砕岩層

表層をなす関東ローム層や大山火砕流堆積物などの下位には、前にも述べたように成層した火砕岩層が厚く堆積して深層にまで達し、裾野斜面の主体を構成している。ローム層が削剝されている谷沿いや、大正用水路などでローム層の下にそれらの一部が露出していることもあるが、現在地表に露われているのは最上部のごく一部分にすぎない。江木や芳賀における簡易水道水源その他の深井資料からみると、約一五〇㍍の深度までさまざまな火砕岩類の成層からなっていて、すくなくとも熔岩流らしいものは全く認められない。それぞれの火砕岩層は分級の悪い火山礫岩からなるものが主で、火砕流堆積物と考えられるものも若干夾む。ところによって埋木を含むことなども知られ、洪水時における土石流堆積物と思われるものも多い。

したがって、これらの火砕岩層は赤城火山の活動によって直接にもたらされた一次的堆積物というよりは、むしろ赤城火山の成長とともに、山頂部で激しく行なわれた削剝作用による崩壊物質が、火山山麓に運ばれて堆積したいわば二次的堆積物が主となっているものと考えられる。

(3)　田口付近の孤立丘群

本市の北西部にあたる田口町の一部も、赤城斜面の一部に含まれる。この付近では橘山（二二八㍍）や城山（二一〇㍍）で代表されるような孤立丘に富む地形が目立つ。これらの小丘は複輝石安山岩質の集塊岩・凝灰角礫岩、熔岩などの成層からなっている。その成層面の示す構造は変化に富んでいるが、一般に急傾斜していて時には直立していることもあり、構造上から見て赤城斜面の一般的傾向とは著しく異なっている。一方構成岩石をみると、その一部には後に改めて述べる「岩神飛石」と岩質的に類似した熔結降下火砕岩や、大小の火山弾のみからなる集塊岩も見られるので、もともとは火山の噴出口からさほど遠くない所で形成されたものにちがいない。

したがって、この孤立丘群の成因については次の二つの考えかたができる。その一つは、かつてこの近くに噴出口をもつ古い火山体が存在し、それが開析されて一部が残っているという考えかたである。第二は、元来は初期の赤城火山山頂部付近で形成された堆積物が、大規模な火砕流にのって山麓におしだされたいわゆる「流れ山」とみなす考えかたである。

現段階では、孤立丘群が赤城山麓末端部に位置していることや、この近くにかって独立火山が存在したことを考えるに足る充分な資料が得られていないことなどから、最近筆者は大規模な「流れ山」である可能性の方が大きいのではないかと見ている。そのいずれにしても、きわめて興味深い問題であり、今後の研究が期待される。

各孤立丘の間はその後の堆積物である安山岩質の火山円礫層や、湖成層を思わせるようなラミナの発達した砂層などによって埋積されており、一般に中部ローム層以上の関東ローム層によっておおわれている。

(4)　白川扇状地砂礫層

竜蔵寺・上細井・勝沢西部・小神明・端気などの地域は白川扇状地の末端部に当たり、表層に土石流的な砂礫・粘土層が分布し、それらは上部ローム層だけにおおわれている。

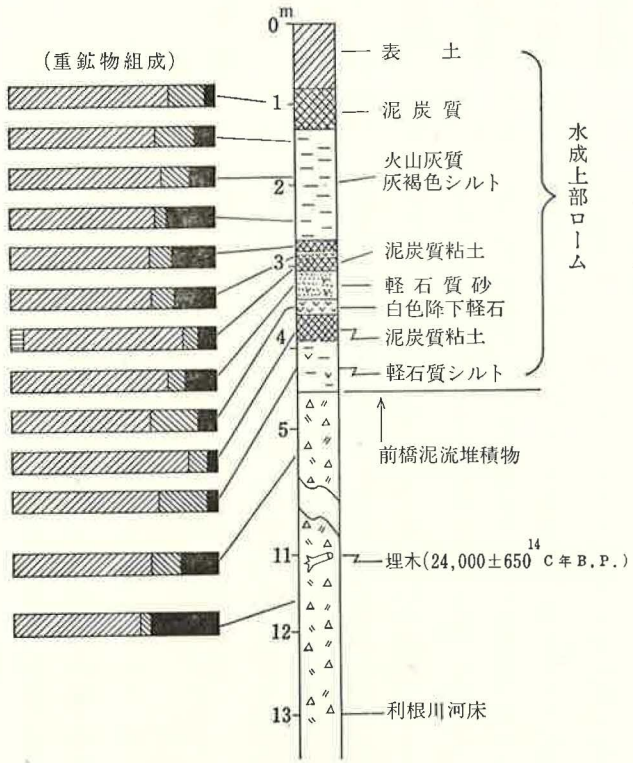
白川扇状地は富士見村大河原付近を扇頂として白川両岸の広い緩斜面をふくむ火山山麓扇状地である。一般に前記したと同様な土石流的堆積物や、火山砂礫層からなり、上部ローム層によって整合におおわれている。したがって、扇状地の形成時代は上部ローム層堆積期のやや前（約二五、〇〇〇年前）と考えられる。

このように白川扇状地は比較的新期の堆積物からなるため、その堆積原面はまだほとんど開析されずに残っており、起伏の少ない平坦緩斜面をなしている。前に述べたように、嶺・小坂子・金丸などの地域が白川扇状地とは対照的にかなり起伏に富むことは、これらの地域では、新期の堆積物による古い谷の埋積が行なわれず、逆に削剝だけがすすんだためである。

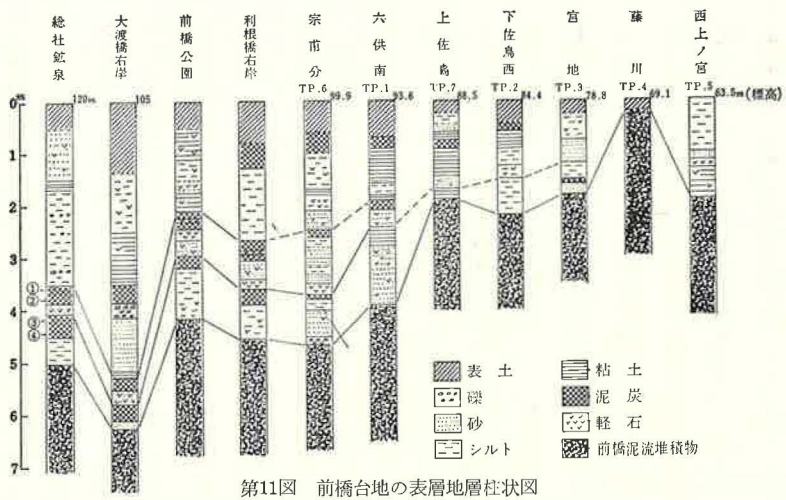
東上野から小島田にいたる山麓崖上面にはきわめて平坦な地形面がみられる。平坦面は山麓崖線に沿って約五〇〇～七〇〇㍍の幅をもつ地域にひろがり、北は赤城山の緩斜面と漸移しているようにみえるので、従来は赤城火山斜面の末端部と考えられてきた。しかし、この平坦面の部分は後に述べる前橋泥流堆積物と、それをおおう上部ローム層からなることが明らかとなった。したがってこの面は赤城斜面に接した前橋台地面の一部が削剝をのがれて残存しているものと考えた方がよい。南の広瀬川低地面との比高は五㍍前後で、前橋台地面のそれとほぼ等しい。

2　前橋台地

前橋台地を構成する地層は利根川両岸の崖によく露われている。露頭で観察できる範囲では、上部から表土(黒土)、褐色火山灰質シルト層（水成上部ローム層)、火山泥流堆積物などからなっている。火山泥流堆積物（前橋泥流堆積物）の下位層についてはボーリング資料によるほかないが、泥流堆積物はさ



第10図　前橋台地(利根橋左岸)の火山灰質シルト層および前橋泥流堆積物の重鉱物組成



第11図　前橋台地の表層地層柱状図

TP.1～6 は県企業局試掘ピット断面，①～④ は花粉分析試料の層準

ほど厚いものではなく、その下位には少なくとも一〇〇㍍以上の深さまで砂礫層（前橋砂礫層）が続いている。次にそれぞれの地層について概要を述べておく。

(1)　褐色火山灰質シルト層（水成上部ローム層）

前橋市街地付近では一般に湿潤地の堆積とみられる特徴を示し、粘土、シルト、軽石質砂などからなっていて、ラミナの発達するところもある。その代表的な柱状図を第一〇図に示した。全体的に火山灰質で、有色鉱物の組成をみると各部分とも角閃石をほとんど含まない点で上部ローム層に類似し、下半部に多い軽石質砂層は板鼻褐色軽石の一部に対比できる。したがってこれらの地層は一括して水成の上部ローム層とみなすことができる。層厚は一般に三㍍前後であるが、六供町付近では四～四・五㍍に達することがある(第一一図)。

本層の中部には層厚一〇～三〇㌢をもつ一～二枚の泥炭質粘土シルト層を夾むことがあり、前橋泥炭層と呼ばれている。

前橋泥炭層

本層については放射性炭素（14C）年代が測定され、花粉分析も行なわれているので、北関東の上部ローム層堆積当時の環境を知る上で重要な資料となっている。

総社鉱泉付近の本層中に含まれる埋木を試料として測定された14C年代は、一三、一四〇年前という結果が出されている。花粉分析結果は第三表に示した。

花粉構成は試料採取地点や層準によって多少の差異があるが、Picea（トウヒ）、Abies（モミ）、などの頻度が高くQuercus（ミズナラ）や Fagus（ブナ）の頻度ともあわせて考えると、前橋泥炭層を残した過去の前橋付近における森林構成は、現在一、〇〇〇～一、五〇〇㍍の高度にある落葉広葉樹林帯のそれに類似している。ところで前橋（一一〇㍍）における過去六〇年間の年平均気温は摂氏一三・九度で、それに対して現在、落葉広葉樹林帯が発達している草津（一、二一〇㍍）における過去五三年間の平均気温は摂氏七・三度、赤城大洞（一、三四〇㍍）における過去六

植物名＼試料地点	小柏木	総社鉱泉 1	総社鉱泉 2	総社鉱泉 3	総社鉱泉 4	大渡
Pinus（マツ）	14.2	21.0	21.3	47.5	43.3	10.5
Picea（トウヒ）	1.9	13.7	19.1	17.0	14.4	—
Abies（モミ，シラビソ）	5.9	29.3	41.5	16.0	17.9	6.5
Tsuga（ツガ）	1.0	3.2	1.0	1.5	4.1	0.8
Fagus（ブナ）	18.1	2.2	4.3	2.8	3.0	6.5
Quercus（ナラ，ミズナラ）	38.0	5.0	6.4	—	0.5	66.9
Cryptomeria（スギ）	1.0	0.7	—	1.5	—	—
Ulmus（ニレ）	2.8	0.7	—	—	—	—
Alnus（ハンノキ）	9.5	9.4	6.4	6.8	13.8	2.4
Juglans（クルミ）	2.8	—	—	—	—	—
Carpinus（シデ）	3.8	0.7	—	—	2.0	1.6
Betula（シラカバ）	—	1.4	—	1.5	—	—
Corylus（ハシバミ）	—	10.1	—	2.9	1.0	3.2
Acer（カエデ）	1.0	—	—	—	—	—
Salix（ヤナギ）	—	3.6	—	0.5	—	1.6
Spore（胞子）	+	+++	+++	++	++	+
Diatom（珪藻）	*Cymbella* *Eunotia* *Epithemia* *Pinnularia* *Cocconeis*	—	*Nitzschia*	*Cocconeis*	—	*Pinnularia* *Eunotia* *Stauroneis* *Cymbella* *Neidium*

第3表　前橋泥炭層の花粉分析表

年間の平均気温は摂氏六・二度である。

したがって、上記の花粉分析の結果から古気候を推定するならば、前橋泥炭層の堆積したころは現在にくらべて年平均気温で六～七度は低温な寒冷気候であったことが想像される。前に述べた年代などともあわせて考えると、この寒冷気候は洪積世末の最終氷期（ウルム氷期）の一時期にあたることは疑いなく、おそらくその最盛期にあたるであろう。

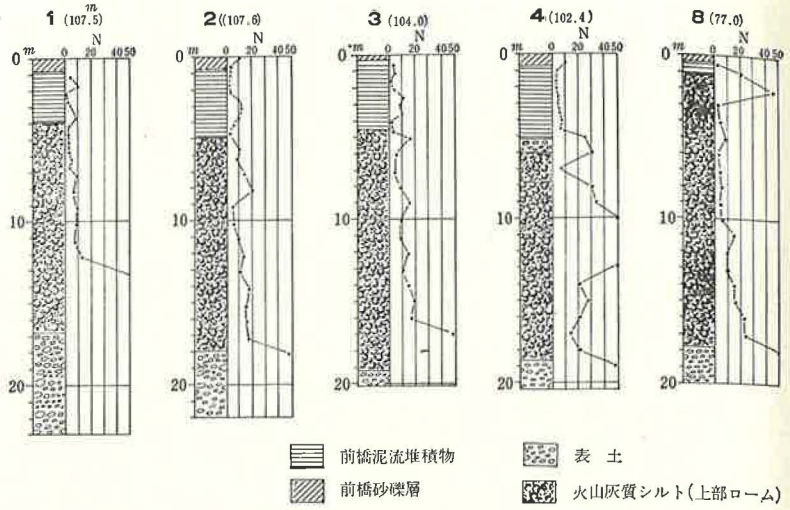
このころ群馬県では既に旧石器文化がかなり発展をとげており、前橋泥炭層は層位的な対比からすると、赤城山麓でいわゆるポイント（尖頭器）文化の発展した時代に当たる。しかし、当時の前橋付近は低湿地性の環境にあったので、人類の生活には適さなかったことであろう。

(2)　前橋泥流堆積物

総社町植野から大渡町にかけての利根川右岸、前橋公園付近より下流部では利根川の両岸に垂直な崖をつくって露出している。その堆積面はかなり平坦で前橋台地の原面をなし、前に述べた上部ローム期の水成堆積層によっておおわれている。岩質は火山泥流堆積物に一般に見られるような極めて分級の悪い無層理の凝灰角礫岩である。

〔層厚〕　利根川河岸の崖では本堆積物の下底まで観察できるところはないが、試錐調査資料によると本堆積物の下低面は一般に地表下一三～二〇㍍の深さにあることが知られ、それより下位は利根川系の円礫層からなっている(第八図)。本堆積物の上面をおおう火山灰質シルト層の層厚は一般に約三㍍程度であるから、前橋泥流堆積物の厚さは一〇～一〇数㍍ということになる。ただし、大規模な火山泥流堆積物は、その堆積前にあった地形の凹凸を一度に埋積して平坦化するのが常であるから、泥流の流出直前に河川流路となっていたような凹所では局部的にさらに厚層をなしていることが想像される。

〔構成物質〕　次に構成物質をやや詳しく見ると、角礫質の岩片はほとんど安山岩質で粒径は一般に三～五〇㌢㍍であるが、時に数㍍以上に達する岩塊を含むこともある。後に詳しく述べるように「岩神飛石」や敷島公園内にある「お艶ヶ岩」などの巨岩も、かって本泥流によって現位置にもたらされたものと考えられる。含まれる岩片のうち本質岩片と見なせるものは、黒色～赤褐色を呈するガラス質複輝石安山岩で量的にも最も多い。異質岩片には円礫をなすものがかなり認められるが、それらは現在の利根川河床に見られるものと同様に利根川上流系の礫



第12図　前橋台地の試錐柱状図

1：県庁構内北　　2：南曲輪町　　3：第1中学北　　4：宗甫分（1中南）
8：西善町下両家　　N：標準貫入試験N値　　（　）内は標高

（石英閃緑岩・流紋岩）に富み、粒径は五～一〇㌢程度のものが多い。このような円礫は前橋泥流の流下時に当時の河床礫の一部が泥流中にまき込まれた結果と考えられる。

角礫や円礫の間を充塡している基質は細粒火山灰質で白色軽石の小片を含み、自然露頭における乾燥断面では淡灰褐色を呈しているが、新鮮な掘削断面などでは暗灰色を呈する。

岩片と基質との量比はほぼ四対六である。基質の重鉱物組成を見ると、平均して紫蘇輝石五〇%、普通輝石二五%、磁鉄鉱二五%程度で複輝石安山岩質的な組成を示し、角閃石はほとんど含まれていない。重鉱物組成におけるこのような特徴は上部ローム層のそれと極めてよく類似している（第一〇図）。

〔埋木と泥流の時代〕　前橋泥流堆積物中には所どころに埋木を含んでいる。それらは泥流の流出時にその流路にあたった地域に生育していた樹木がなぎ倒され泥流中にまき込まれて運ばれてきたものと考えられ、径一〇～三〇㌢の針葉樹幹であることが多い。熱による炭化はまったく認められないので前橋泥流が低温な流れであったことを物語っている。

利根橋付近の左岸の崖から採取した埋木の14C年代は二四、〇〇〇プラスマイナス六五〇年前と測定された。したがって前橋泥流堆積物もいまから約二四、〇〇〇年前に形成されたものと考えてよい。

〔給源火山〕　前橋泥流をもたらした給源の火山については、これまで地理的条件から莫然と榛名火山であろうと考えられてきた。しかし、近年の研究によると、基質の重鉱物組成が浅間火山起源の上部ローム層の組成と極めて似ていることや、本質岩片と思われるものが浅間火山の熔岩に似ていることなどから、給源はむしろ浅間火山である可能性の大きいことが指摘されている。この場合、浅間火山における応桑泥流が前橋泥流に対比される可能性がある。この問題については現在も研究がすすめられているので、近い将来に明らかになることであろう。

〔工学的性質〕　前橋泥流堆積物の工学的性質について一言すると、第一二図に一例が示されているように、標準貫入試験におけるN値は一般に低い値を示している。それにもかかわらず建造物などに対する支持力は、むしろかなり大である。このことは火山泥流堆積物について一般的にいえる特徴であるが、大小の岩片を多量に含むことや、やや固結した細粒の基質が岩片の間を密に充塡していることなどによって、全体としての支持力を増しているためと考えられる。

(3)　前橋砂礫層

前橋泥流堆積物の下位に重なる地層は、地表の露頭では観察できない。しかし、深井資料によると、少なくとも、一〇〇㍍以上の深さまで主に洪積砂礫層からなっていることはほぼ確実である。これら古期の砂礫層を一括して前橋砂礫層とよぶ。

市内の深井戸はほとんどロープピング掘鑿によるものであるため、地質の詳細は不明であるが、ボーリングの記録から判断すると、前橋砂礫層は層準によって礫径がさまざまに変化し、所によってはほとんど礫を含まない砂層や粘土層を夾み、古い火砕岩層とおもわれる地層をも夾むことがあるようである。また、砂礫層を構成する円礫は利根川現河床のそれと類似していると見られる。

したがって、前橋砂礫層はおそらく前橋泥流の流出以前に形成されていた過去（洪積世）の利根川の扇状地堆

積物と考えられる。

本砂礫層中には豊富な地下水が存在し、前橋市における工業用水、水道用水の大部分を供給しており、今後の開発も期待できる。地下水位などについては深井資料を参照されたい。

3　広瀬川低地帯

すでに述べたように広瀬川低地帯は沖積世における旧利根川の氾濫原であるから、一般に関東ローム層の初生的堆積は見られず、表土の下位は直ちに沖積砂礫（広瀬川砂礫層）に移行していることが多い。

しかし、この沖積低地の上でも、過去の自然堤防（砂礫堆）と見なせる比較的高まった地域では、一見初生的な関東ロームに似た褐色火山灰質砂・シルト層などが、約三㍍以内の厚さで、礫層上位に堆積していることがある。これらは洪水時の冠水によって形成されたものであろう。

また、赤城山麓崖に接する付近では、赤城斜面をきる放射谷の末端に形成された新期扇状地ともいえる高まりが見られ、そのようなところでは主として放射谷から供給された火山性の砕屑物からなっていて、利根川系の要素に乏しい。竜蔵寺町や青柳町付近の高まりは白川による新期扇状地で、その代表的な例である。

(1)　広瀬川発電水路沿いの地質

田口町から前橋公園にいたる広瀬川発電水路沿いの地質については、群馬県企業局の倉沢辰巳氏らによって試錐や試掘による調査が行なわれている。発電用水路は広瀬川低地帯を斜めに横断しているので、この調査資料は広瀬川沖積低地全般の地質を知る上での手がかりとなる。次にその概要をまとめておく。第一三図に代表的な試

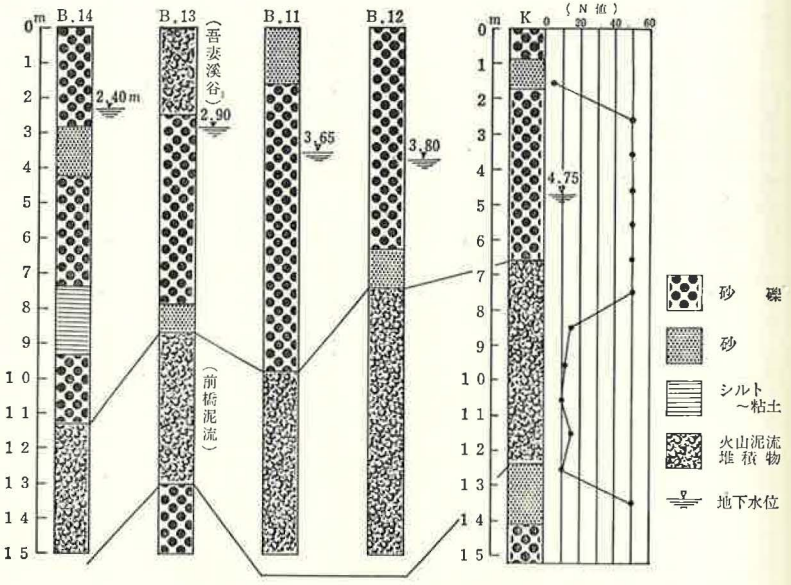
錐柱状図を示した。

(a)　田口町から岩神町までの間の四カ所でおこなわれた竪坑断面（深さ約五㍍）の観察によると、一般に地表から三㍍内外の深さまでは最大径三〇㌢以下の玉石を含む砂礫層からなり、未固結ではあるが地下水位より上にあるので、全般的に圧密の程度はかなり高い。

(b)　地下水位は地表下三～七㍍の深さにあり、発電水路完成前の広瀬川の水位よりかなり低い。

(c)　前橋市浄水場の北方約三〇〇㍍（第二竪坑）の深さ四～五㍍間の砂礫の粒度組成は第四表のとおりである。全般的にもこれとほぼ同様の傾向にあると見てよい。

(d)　礫種は利根川現河床礫の組成と類似する。すなわち、安山岩類が過半を占め、他は



第13図　広瀬川発電水路沿いの試錐柱状図

B.11：小出発電所　　B.12：市水道水源地北方　　B.13：荒牧発電所
B.14：田口発電所　　K：前橋気象台構内

利根川上流系の各種火成岩を主とし、少量の堆積岩・変成岩の礫を混える（三七頁参照）。

(e)　田口町・荒牧町付近では砂礫層の上位に、天明三年（一七八三）の浅間火山大爆発に際して流出した「吾妻泥流」の堆積物が二～五㍍の厚さをもって残存し、かなり硬い層をなしている。ただし、本泥流堆積物は利根川が現流路をとるに至ってから後のものであるから、現在の利根川氾濫原に近い地域にのみ分布し広瀬川低地帯沿いには分布していない。

第4表　砂礫の粒度と組成

粒径 (mm)	重量比 (%)
350 以上	15
350～250	8
250～100	17
100～ 40	15
40～ 5	27
5 以下	18

(f)　試錐調査によると深さ六㍍ないし一一㍍のところに砂礫層の下位に重なって、火山泥流堆積物が伏在していることが確かめられる。その厚さは充分明らかにはされていないが、荒牧発電所付近（第一三図、B・13）では約四㍍で、その下位は再び砂礫層となる。岩質や基低の深度などから見て、この泥流堆積物はおそらく前橋泥流堆積物の下部が削剝されきれずに残っているものと考えられ、今後広瀬川低地帯の各所で見いだされる可能性がある。

すでに明らかなように、前橋泥流堆積物の時代（約二四、〇〇〇年前）は洪積世後期にあたっているから、広瀬川低地帯の地下に本泥流堆積物が削剝されきれずに伏在していることは、低地帯地下の砂礫層を洪積砂礫と沖積砂礫に区分する場合の重要な鍵となる。すなわち、本泥流層より下位にある砂礫層は、礫質はたとえ上位の沖積砂礫のそれと類似していても、前橋台地における下部の砂礫層（前橋砂礫層）に対比すべきもので、時代的には泥流層より上にある沖積砂礫と明らかに区別できる。泥流層が完全に削剝されつくしている場合には、低地帯の地下で洪積砂礫層と沖積砂礫層との境界を求めることは困難である。

(2)　広瀬川砂礫層

広瀬川低地帯の表層を構成し、前橋泥流堆積物より上位にある沖積砂礫層を広瀬川砂礫層とよぶことにする。砂礫層を構成する礫の種類や粒度については、前記した広瀬川発電水路沿いの資料から全般を推察することができる。

層厚については同じく発電水路沿いの試錐資料からみると、試錐孔内に前橋泥流堆積物らしきもののあらわれる深さは、田口付近（第一三図、B・14）で地表から約一一㍍、荒牧発電所付近（B・13）で約九㍍、小出発電所付近（B・11）で約一〇㍍、市水道浄水場北方（B・12）で約六㍍、前橋気象台構内で約七㍍である。これらの地点を結ぶ線は広瀬川低地帯を横断しているので、上記の深さが低地帯全般における広瀬川砂礫層の厚さを代表していると考えることができる。資料はなお不充分であるが総じて見ると、広瀬川砂礫層の厚さは一般に一〇㍍前後と見られ、前橋台地の北東縁に近いところほど厚さがやや減少する傾向がうかがえる。

一方、広瀬川低地帯における多くの深井資料をみると、少なくとも一〇〇㍍以上の深度まで砂礫層が続き、従来はその大部分を沖積砂礫とする考えかたもあったが、さきに述べたような事実から、むしろ大部分は前橋砂礫層に相当する洪積砂礫層と見なければならない。

(3)　岩神の飛石・お艶（えん）ヶ岩

昭和町三丁目飛石稲荷神社境内の巨大な安山岩塊は「岩神飛石」とよばれ、昭和十三年に天然記念物に指定さ

れている。「お艶ヶ岩」は敷島公園の池の中に頂部をのぞかせている同一岩質の巨岩である。あだかも氷河の「捨子石」のように、火山から遠く離れた平地に、このような巨大な岩塊が孤立して存在することは珍らしいので、昔からいろいろな伝説が語りつがれている。それらロマンに富んだ伝説はしばらくおき、ここでは巨岩のもつ自然科学的な意義について述べる。

①岩塊の大きさ　岩神飛石は広瀬川砂礫層に埋れており、まず地表露出部分だけについて見ると、高さ約九・六五㍍、最大周囲約六〇㍍である。

岩塊の下底部は後に述べるように広瀬川砂礫層下位の前橋泥流堆積物中にまで達しているものと予想されるので、埋没している部分をも含めた岩塊の体積は、地表露出部分の少なくとも二倍以上に達するであろう。

②岩質　「岩神飛石」と「お艶ヶ岩」はまったく同一岩質で、かつては何れかの場所で同一岩体をなしていたものにちがいない。赤褐色を呈し、一見ガラス質的な安山岩熔岩のように見えるが、詳しく観察すると、扁平なレンズを密着させておしつぶしたような縞状の熔結構造が見られ、一つ一つのレンズに相当する部分は熔岩餅(driblet)が変形されたものと考えられる。したがって熔岩流の一部というよりは、高温の降下火砕物質からなる特種な熔結凝灰岩と考えた方がよい。このような熔結凝灰岩は、火口から一たん空中に抛出された熔岩片が高温のまま、すなわち粘性を保ったまま地上に落下、堆積し、自重のために圧縮され、破片同志が熔結しあってできるものである。したがって火山の火口付近においてのみ形成され、火口から遠く離れた所ではできないのが特徴である。

顕微鏡下では一般の熔岩と区別することは困難である。複輝石安山岩質で、斑状組織をもち、斑晶は斜長石、普通輝石、紫蘇輝石などの自形～半自形結晶からなり、斜長石が最も多く、普通輝石と紫蘇輝石はほぼ等量に含まれる。石基は著しくガラス質で流理構造が発達し、赤鉄鉱その他で赤褐色に汚染されている。

③成因　次にこの巨大な火山岩塊が、いつどのようにして現在の場所にきたかという問題と、現在のところに運ばれる以前にはどこにあって、何の火山の噴出物であるか、という二つの問題について考えてみよう。

〔運搬機構〕　まず運搬機構については、前橋泥流が最大の役割を果している可能性が大きい。前橋付近の平坦な地形的条件から見て、単なる洪水時の水流では、このような巨岩を長距離にわたって運搬することはほとんど不可能である。そこへゆくと火山泥流の場合は、山津波を大規模にしたような高密度の乱流であるから、一般の洪水の水流などとは比較にならない運搬力をもち、「岩神飛石」程度の巨岩をまき込んで流下することも特に珍しくはない。現に総社鉱泉付近の利根川右岸などは、前橋泥流堆積物中に、径数㍍に達する類似岩塊を含む例も見られる。

ところで、「岩神飛石」のある付近は現在は広瀬川砂礫層によって広くおおわれているが、沖積砂礫の厚さは数㍍程度で、その下には削剝をのがれた前橋泥流堆積物が伏在していることはさきに述べた。至近距離にある前橋気象台構内の試錐調査資料（第一三図、K）によると、広瀬川砂礫層の厚さは約六、七㍍で、それ以下は泥流堆積物からなっている。「岩神飛石」はおそらくこの泥流堆積物中に根をおろしているものと予想される。一見、「岩神飛石」をのせているかに見える広瀬川砂礫層は、過去の利根川による削剝によって前橋泥流堆積物中からこの巨岩が削りだされた後、それを再び埋積しているものであろう。

前橋泥流の14C年代は約二四、〇〇〇年前であるから、「岩神飛石」が現位置にいたった年代もそれと同じと

いうことになる。

「お艶ケ岩」についても同様に考えられる。

〔起源〕岩塊の起源については次のような推察ができる。まえに赤城斜面の項で述べたように、坂東橋付近の赤城斜面末端部には「流れ山」とも考えられる孤立丘が散在し、それらの構成物の一部に「岩神飛石」などとよく似た岩相をもつところがある。坂東橋の上流約二〇〇㍍付近の左岸の断崖に見られるものはその例で、熔結した熔岩餅集塊岩と見なせるものである。色調も赤褐色を呈する。まだ多少検討を要する問題が残ってはいるが、おそらく「岩神飛石」や「お艶ケ岩」は上記の岩体の一部が崩壊して、前橋泥流によっておし流されたものと予想される。なお、坂東橋付近の岩体も本来は赤城火山山頂部をつくっていたものが、「流れ山」となって現位置にきた可能性の大きいこともまえに述べた。そのような意味では、「岩神飛石」や「お艶ケ岩」のそもそもの起源は、カルデラ形成前の赤城火山山頂部付近にあると考えることもできる。

4　現利根川の氾濫原

現在の利根川の氾濫原は、大渡橋付近より上流では幅が広く、田口付近では七〇〇㍍以上にも達するが、前橋台地に入り込んでからはその幅を急減し、一〇〇～二〇〇㍍となる。したがって両地域は河相上に著しい変化が見られ、上流部では比較的浅い網状流路が発達しているのに対して、下流部では水深は大きく、単一の急流となって激しく台地の側壁を攻撃し、現在も川幅を拡げつつある。

氾濫原は現在の利根川の運んだ砂礫によっておおわれているが、その表面にはかなりの凹凸が見られる。氾濫原の幅の広いところでは凸部は自然堤防（砂礫堆）の形をとり、随所に紡錘状の堆積地形を示している。幅せまい南部では小規模な河岸砂礫段丘の形をとるが、この段丘は利根川の水量の変化に応じて生成してはまた破壊され、完全な形を残すものはほとんどない。

〔現河床礫〕前橋市内における利根川現河床礫の構成について見ると、礫は円礫に富み、一般に中礫（一〇～五〇㍉）および大礫（五〇～二〇〇㍉）からなり、巨礫（二〇〇㍉以上）も多数まじえている。礫の岩種別の平均組成を第五表に示した。

第5表　利根川原の礫（前橋付近）

分類			量(%)	形	大きさ	計
火成岩類	深成岩類	花崗岩	2	円礫	小～中	94%
		閃緑岩	11	〃	〃	
		はんれい岩	1	〃	小	
	脈岩類	石英斑岩	6	〃	小～中	
		玢岩	3	〃	小	
		輝緑岩	9	〃	〃	
	火山岩類	流紋岩	14	〃	小～中	
		安山岩	48	円礫亜角礫	大	
		玄武岩	0	—	—	
堆積岩類	古生層、中生層起源		4	円礫	小	4%
変成岩類	熱変成岩（ホルンフェルス）		2	〃	小	2%

このように安山岩類が過半をしめ、一般に粒径も大きい。これは最も近いところに赤城・榛名・子持などの第四紀火山が存在しているためである。ついで流紋岩、石英斑岩、閃緑岩などの酸性火成岩類が目立つが、これらは主として利根郡地域に広く分布している第三紀火成岩類を起源としている。古生層ないし中生層起源の堆積岩や変成岩の礫も少量みとめられるが、これらは利根川・片品川の上流部に起源をもつもので、粒径の小さい円礫をなすことが多い。

利根川現河床の礫は上流部の地質を克明に物語

っているが、上流の地質の概要については二〇万分の一の群馬県地質図を参照されたい。

5　黒土層（腐植土）の層序

利根川の現氾濫原のような地域は別として、そのほかの地域では、地表部は数一〇㌢～一㍍の厚さをもつ黒色土壌におおわれている。このような黒土は、従来の土壌学の立場からすると、一般に地表部で営まれた生物の諸作用により、上から下へだんだんと腐植化が進んだ結果、形成されたものと言われている。この場合、公式的な考えかたをすれば、現在見られる黒土の母材は黒土化される以前にすでに現在の場所に堆積を完了しており、そのような母材が次第にその上部から腐植化されて現在に至ったということになる。

しかし、前橋付近の黒土には腐植化の進行と同時に、それと併行して母材の累積がおこなわれている事実が認められる。例えば前橋市における黒土断面（深耕されていないもの）を詳しく観察すると、年代を決定できる比較的近年の降下軽石や火山灰の薄層が、新旧の順序正しく挟まれており、黒土層の中での細かい火山灰対比も可能である。また、考古学的遺物（土器文化）の出土状況を見ると、一般に古い時代の遺物ほど層位的に下部の黒土層に含まれるといった経験的な事実も、黒土が上へ上へと厚さを増したものであることをよく示している。

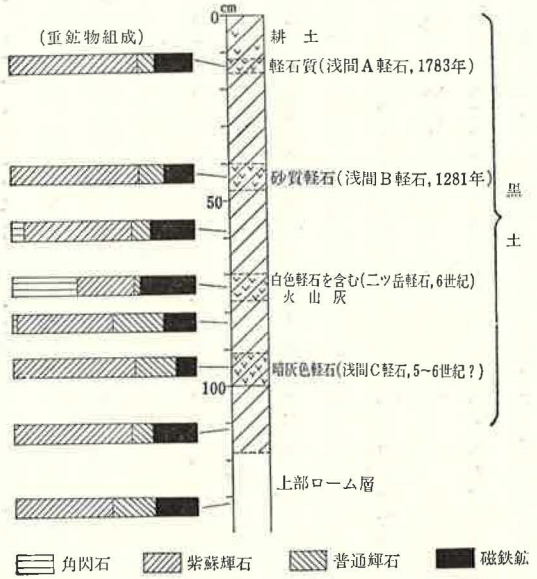
一方、赤城南斜面の地域などでみると、黒土と赤土（関東ローム）との境界部（移行部）付近には、板鼻黄色軽石（約一一、〇〇〇年前）が介在していることが一般的に認められる。したがって、大局的にみれば、黒土と赤土（関東ローム）との境は沖積世と洪積世の境界をあらわしていると見ることができる。

このように前橋市で見られる黒土は、いわば「沖積世の地層」という概念でとり扱うことのできる性格をもっているのであって、黒土一般の成因を考える上でも貴重な資料となりうる。また、黒土の中での火山灰対比や層序細分が可能であることは、考古学その他の応用面で今後大いに活用できるとおもわれるので、次に代表的な層序と鍵層の特徴をあげてみよう。

総社町における黒土層の模式的柱状断面図を第一四図に示した。黒土全体の厚さは地域によってかなり差異があるが、第一四図に示されているような層序は前橋市のほぼ全域で共通して認められる。

黒土層中での層位の対比に当たって有力な鍵層となりうる降下軽石～火山灰層は全部で四枚あるが、いずれも薄い層で明瞭な層をなさないことが多いので、それらの識別にはかなり注意深い観察が必要である。

〔浅間A軽石〕　最上部にある浅間A軽石は天明三年（一七八三年）の浅間火山大爆発による降下軽石で、灰褐色を呈し、粒径は〇・二～〇・五㌢、平坦地では多くの場合、耕土中に散在し、層をなすことは少ない。重鉱物組成は紫蘇輝石約七〇%、普通輝石約一〇%、磁鉄鉱約二〇%で角閃石は含まれない。



第14図　前橋市の黒土層の模式的柱状図と重鉱物組成

〔浅間B軽石〕　浅間B軽石は軽井沢方面への追跡によって、一二八一年に噴出した浅間火山の軽石に対比できる。一見火山砂のように見える灰色細粒軽石（粒径〇・一～〇・三㍉）で、層をなす場合には厚さ数㌢に達することがある。重鉱物組成の特徴はA軽石と類似し、紫蘇輝石約七〇%、普通輝石約一五%、磁鉄鉱約一五%で角閃石は含まれない。

〔二ツ岳軽石〕　浅間B軽石の下位約一〇～二〇㌢のところに、比較的粒径の大きな（最大三㌢）白色軽石がまばらに散点する細粒火山灰質ゾーンがある。この含軽石火山灰は渋川―伊香保付近で軽量ブロックの骨材として採掘されている軽石層に対比されるもので二ツ岳軽石とよばれ、榛名火山二ツ岳の成立直前に現在の二ツ岳の位置におこった爆発によってもたらされたものである。その年代は古墳を被覆する関係から六世紀末ごろと考えられている。重鉱物組成は、角閃石三〇%、紫蘇輝石三二%、普通輝石三%、磁鉄鉱三〇%等からなり、角閃石を多量に含む点で浅間火山源の他の軽石と著しく異なっている。

〔浅間C軽石〕　二ツ岳軽石の下には、同じく黒土中に夾まれて、暗灰色細粒軽石（粒径〇・三～〇・八㌢）が、厚さ一〇㌢以内のかなり明瞭な層をなしていることが多い。軽井沢方面への追跡によって浅間火山のC軽石に対比される。その年代は明らかでないが、おそらく五～六世紀ごろのものと推定される。重鉱物組成は、紫蘇輝石約六五%、普通輝石約二五%、磁鉄鉱約一〇%で、角閃石は含まない。

以上あげたように、浅間火山給源の軽石はA・B・Cの三軽石層とも、重鉱物組成においてはともに複輝石安山岩質で類似しており、重鉱物組成だけで三者を区別することは困難である。したがって、浅間B軽石とC軽石の間に夾まれてきわめて特色のある二ツ岳軽石が存在していることは、黒土層の中で火山灰層位学的な検討をする場合に最も重要な鍵となる。

また、上記したような軽石質の部分以外の腐植土の重鉱物組成も比較的均一で、浅間火山給源の軽石の組成とほぼ同様である。このことは、前橋付近の黒土層が、主として浅間火山の沖積世火山灰からなることを示している。

6　地　下　水

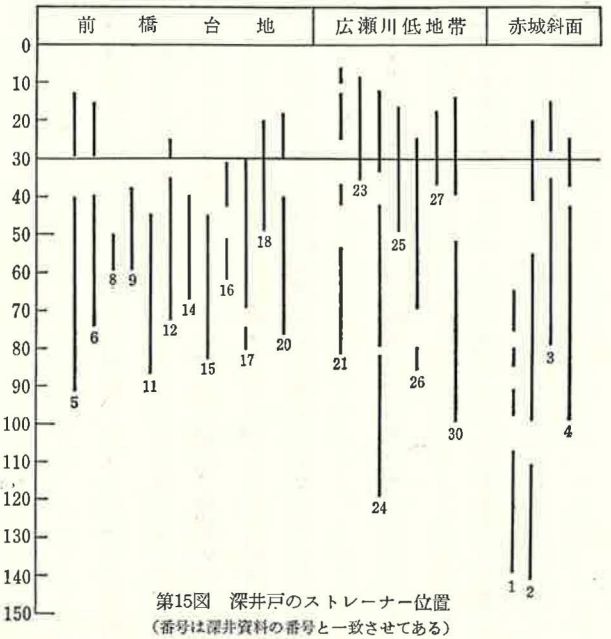
前橋市は比較的良質な地下水に恵まれているといえる。特に広瀬川低地帯や前橋台地では、深層まで古期扇状地砂礫層（前橋砂礫層）が存在し、その中の所どころに不透水性の細粒堆積層を夾んでいるので、地下の浅所から深所にいたる多くの層準に滞水層が発達し、全体としては極めて豊富な地下水を保有している。赤城火山斜面に属する地域では、前記の地域にくらべると地下水量はずっと少なくなるが、それでも地下地質が粗粒および細粒物質の交互する未固結成層火砕岩層からなっているため、通常の火山裾野にくらべればかなり豊富な地下水をもっている。

第一五図に前橋市内の主な深井戸におけるストレーナーの位置を比較できるようにまとめて示した。これから各地域における滞水層の状態をほぼうかがうことができる。たとえば前橋台地では広瀬川低地帯の深井戸にくらべて三〇㍍以浅にストレーナーをおいている例が少ない。このことは前橋台地では広瀬川低地帯にくらべて浅層地下水に乏しいことを示している。地下水の量などについては、深井資料にある揚水量、揚水水位などが推定の手がかりとなるので参照されたい。

(1)　広瀬川低地帯の地下水

広瀬川低地帯は前橋市のうちでも最も地下水の豊富な地域である。市水道の主要水源地もこの地域内にある。

この地域内では最も表層にある広瀬川砂礫層（沖積砂礫層）の中にも利根川の伏流水とみなせる豊富な地下水が存在し、小規模工業用水や家庭用水などは、この浅層地下水によっても充分まかなうことができる。しかし、この地域内でも深井戸で採水している地下水は、大部分が前橋砂礫層（洪積砂礫層）中のものである（第一五図）。川原・野中・田口などにある市水道の水源や、その他工業用水の大部分はこれらの深層地下水に依存しており、その量はきわめて豊富である。一例を野中町にある市水道水源地の一号井にとれば、深さ一〇〇㍍の深井戸（井径五一〇㍉、ストレーナー長さ七三㍍）で、毎分約五〇〇〇リットル以上に達する大量の採水が可能である。



第15図　深井戸のストレーナー位置
（番号は深井資料の番号と一致させてある）

ボーリング孔内における自然水位は他地域にくらべて一般に浅く、地表から数㍍以内の深さにあるが、天川大島や野中付近などではさらに浅くて地下一～二㍍のところにある。

(2)　前橋台地の地下水

すでに明らかなように前橋台地では、前橋泥流堆積物が一〇数㍍の厚さをなして台地表層部を構成している。この泥流層は粘土質の緻密な基質をもって半固結の状態にあるので、不透水性の性質をもっている。そのため泥流堆積物をおおっている最表層の火山灰質シルト層の中には部分的に少量の地下水を保有し、ときにはその地下水面が地表にまであらわれていわゆる湿田地帯を形成していることもあるが、泥流堆積物中にはほとんど地下水は存在していないものであり、この中には広瀬川低地帯の深層にあるものと連続しているものであり、この中には広瀬川低地帯の深層におけると同様に豊富な地下水がある。前橋台地の地域内にある深井戸は、すべてこの深層地下水を採っており、それらは深さ数一〇㍍のボーリングで毎分数一〇〇リットル～二、〇〇〇リットルの揚水が可能なものが多い。

前橋泥流堆積物の上にある浅層地下水は量も少なく、水質も一般に良くない。

前橋公園「さちの池」の北東端にある湧泉は、前橋泥流堆積物が不透水性であるため、前橋砂礫層上部の地下水が弱被圧水となって湧出しているものと考えられる。

前橋台地における深井戸の孔内における自然水位は一般に地下一〇数㍍のところにあり、広瀬川低地帯のそれとくらべてかなり低い。

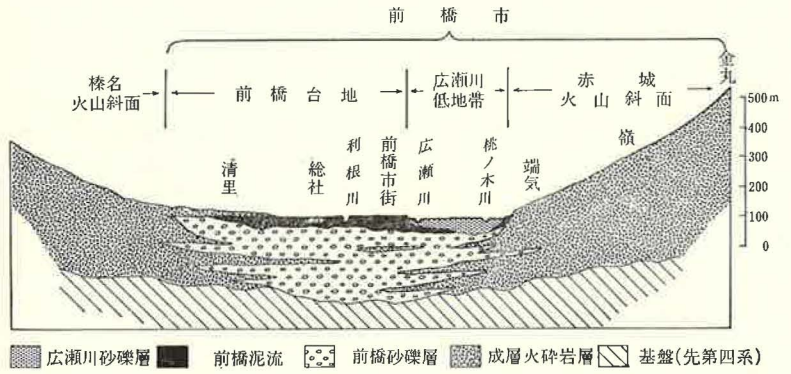
第三節　自然の推移

これまで述べてきたことがらを、前橋市の自然の発達史にてらしながらまとめてみよう。（第一六図、第六表参照）

1　赤城・榛名火山の成立

第四紀洪積世のはじめには群馬県の海成新第三系（高崎層群・富岡層群）を堆積させた海は遠く退き、前橋市のあたりもすでに内陸の一部と化して次第に削剝が進行していた。このころから北関東では激しい火山活動がはじまり、前橋付近では赤城・榛名の両火山が現在ある場所で中心性の火山活動をくりかえしながら円錐形の美しい山体を成長させていった。

両火山とも主として複輝石安山岩質の熔岩や火砕岩類を噴出したがそれらの噴出物によって火山の中心部が高まるにつれ、一方では山頂部の侵食・崩壊などもはげしく行なわれるようになった。そのようにして生産された二次的火砕物質は、洪水や火山活動のたびごとに下方に運ばれて堆積し、美しいスロープをもつ火山裾野を拡げていった。



第16図　前橋市の模式的地質断面

時代区分		絶対年代 (10⁴年前)	前橋付近の主なできごと		群馬県・日本の主なできごと	ヨーロッパ(アルプス)氷河時代
沖積世		0.2	黒土層	利根川現氾濫原形成		後氷期
		0.5		吾妻泥流(浅間大爆発, 1783年)		
				利根川現流路に大移動		
				広瀬川低地面形成		
		1.5		二ツ岳軽石(榛名)	弥生文化 ↑	
		6			縄文文化 ↓	
		10	上部ローム層	榛名新期火砕流（清里地域）	縄文海進(温暖) ↕ 土器出現	↑最盛期
洪積世	後期				↑ 旧石器	
		15		前橋泥炭層形成（寒冷気候）	マンモス象(北海道) ↓ 大陸棚外縁海底段丘形成（最底海水準期, 寒冷）	ウルム氷期
				広瀬川低地帯に沿う古利根川誕生	元宿文化(ポイント)	
				前橋台地原面形成		
				前橋泥流（浅間？）		
		25		古期扇状地面形成	岩宿Ⅰ文化(握　斧) 立川段丘形成	
			中部ローム層	鹿沼軽石降下（赤城中央火口丘成立）		
		50		八崎軽石降下 火砕流（榛名カルデラ形成）	権現山Ⅰ文化(梨形握斧)	
					ナウマン象(各地)	
				大胡火砕流		
				湯ノ口軽石降下（赤城カルデラ形成）	不二山文化（握　斧） 武蔵野段丘形成	
		150				
	中期		下部ローム層	赤城・榛名の外輪山成長	沼田湖成層形成, 下末吉段丘形成（温暖気候）	リス・ウルム間氷期
		600 ~1000			多摩段丘形成	リス氷期
	前期			赤城・榛名活動開始	中之条湖成層形成	ミンデル・リス間氷期
						ミンデル氷期
		1000 ~2000			上総層群(房総) } 堆積	ギュンツ氷期
					大阪層群(大阪) }	ドナウ氷期
鮮新世				秋間層堆積		

第6表　前橋市の第四紀編年表

後期洪積世には、両火山ともすでにその山体の大部分を完成したが、赤城火山ではそのころ大規模な火砕流の噴出があいつぎ、それらの噴出とともに山頂部に大陥没がおこって、現在見られる山頂カルデラを形成した。金丸・嶺地域で見られる大胡火砕流堆積物はこの時期のもので、山頂カルデラの形成に直接関与したと考えられる意義深い噴出物である。その後はかなり長期にわたる活動休止期をへて、やがて地蔵岳で代表されるような中央火口丘群の活動（角閃石安山岩質）が行なわれたが、上部ローム層堆積初期（約二五、〇〇〇年前）にはすべての活動を終了している。

榛名火山の山頂カルデラは赤城よりもややおくれて形成され、前橋市の赤城斜面で普通にみとめられる八崎軽石の降下期がそのカルデラ期に当たっている可能性が大きい。また榛名火山では有史時代にはいってからも二ツ岳軽石の噴出や二ツ岳の噴起などが行なわれている。

2　古期扇状地の形成と前橋砂礫層の堆積

赤城・榛名両火山の成立の過程においても、両火山の間に挟まれた前橋市の付近には、過去の利根川とも言える大きな河川が存在していたことが予想される。この過去の利根川は、やがて渋川付近を扇頂とし、両火山の山麓末端をそれぞれ北東限および南西限として南に開く大規模な扇状地を形成していった。前橋市はこうして形成された過去の扇状地のほぼ扇央部に当たっており、現在、前橋台地や広瀬川低地帯の地下深所に伏在している前橋砂礫層は、この当時の扇状地堆積物の一部とみなせる。前橋市街地付近で、それらは少なくとも一〇〇㍍以上の厚さをもっていることが深井戸の資料などでたしかめられており、砂礫層の中には良質で、しかもきわめて豊富な地下水を含んでいる。

3　前橋泥流の流出と前橋台地原面の形成

洪積世後期のある時期に至り、前橋付近は突然大規模な火山泥流のおしだしにおそわれ、前橋砂礫層からなっていた古期扇状地面の一帯は瞬時にして厚さ一〇数㍍もある火山泥流堆積物の下に埋没してしまった。このできごとによって前橋付近の自然環境は急激に変化し、古期扇状地の時代は終わった。

前橋泥流堆積物とよばれるものがこのときの堆積物で、それに含まれる埋木は14C年代から約二四、〇〇〇年前のできごとと考えられる。この時代に赤城山麓の一部では、すでに岩宿Ⅰ文化を残した旧石器人類の生活がはじまっていたことも明らかにされている。

前橋泥流の流出する直前の古期扇状地面には、おそらく大小の網状流路が発達してかなり凹凸に富んでいたことが予想されるが、それらは泥流堆積物によってすべて埋積され、平坦化されてしまった。現在みる前橋台地の原面はこうして形成されたものである。

前橋泥流の起源については、なお検討を要するが、浅間火山に発し、吾妻川の谷沿いに流下して前橋付近の古期扇状地の一帯にひろがったという可能性が大きく、地学上大いに興味がある。「岩神飛石」や「お艶ヶ岩」など伝説の巨岩は、もとは坂東橋のやや上流付近にあったものが前橋泥流にまき込まれて現位置にいたり、その後侵食によって泥流堆積物中からあらいだされたうえ、再び新期の砂礫（広瀬川砂礫層）中に埋められたものと考えることができる。

浅間山は現在もさかんな活動を続けている活火山であり、二四、〇〇〇年前の過去に、一瞬のうちに前橋を埋めつくしたような火山泥流が今後再び流出しないという保証は一つもないことを忘れてはならない。

4　湿地帯の出現と前橋泥炭層

前に述べたように古期扇状地面にあった凹凸が、前橋泥流堆積によって埋めならされ、かなり平坦な地形面（前橋台地原面）が出現したため、この地域では一時的にそれまであった排水系が消失し、いたるところ沼沢のある湿潤地があらわれた。現在、利根川両岸の崖で前橋泥流堆積物の上位に重なる火山灰質シルト層（水成上部ローム層）は、このようにして形成された湿地帯の堆積物とみなせる。ただし前橋市の北西部にあたる清里地域では、このころ榛名火山から供給された新期の火砕流や土石流などの堆積がひきつづいて行なわれ、現在見られるような緩斜面地形をつくり上げたので、湿地性の環境からは比較的早く解放され、気成の上部ロームの堆積も行なわれている。

湿地性の環境におかれた地域ではかなり普辺的に前橋泥炭層の堆積が行なわれた。前橋泥炭層の一部は14C年代測定によって今から約一三、〇〇〇年前のものと考えられ、花粉化石からみると当時は現在より摂氏六～七度も低温な寒冷気候の下にあったと推定できる。この時代はウルム氷期の最盛期にあたり、世界的に大規模な海水準低下がおこったため、日本ではシベリヤのマンモス象が千あがったタタール海峡を越えて北海道まで渡来した時期にも当たっている。そのころの前橋市街地付近は現在の尾瀬ヶ原をしのばせるような寒ざむとした湿地帯をなし、人々の生活には不向きな自然環境であったと考えられる。

5　旧利根川の流路と広瀬川低地帯の形成

やがて時がたつにつれて、前橋泥流堆積面（前橋台地面）と赤城斜面の交叉する付近、すなわち現在の赤城山麓崖に沿うところに、南東流する旧利根川の流路が形成された。その下刻と同時に南西側の前橋泥流堆積物をも削って川幅を拡大し、つぎつぎに流路を移動しながらついに現在みられる広瀬川低地帯をつくりあげた。この過程で旧利根川の幹流は北東からだんだんと南西寄りに移動し、そのあとに新期の砂礫層（広瀬川砂礫層）を残した。現在の広瀬川水路はその最終河道に当たっている。なお、広瀬川低地帯のうちで比較的早期に氾濫原と化した赤城山麓寄りの地域には、白川をはじめとする赤城斜面の放射谷から供給された砂礫が小規模な新期扇状地を形成した。

このようにして旧利根川の水路が確立されたことにより、前橋泥流堆積面における排水系も自然に整い、かっての湿地性の環境からやがて乾陸化して現在の前橋台地面をつくるにいたった。

6　現在の利根川

現在の利根川の氾濫原と近年における流路の変遷については、はじめに詳しく述べたので省略するが、前橋市街地付近で利根川が急に前橋台地内に峡谷をつくって流入していることは明らかに不自然である。史実には残っていないようであるが、地形や地質からみると、比較的近年における半ば人為的な流路と考えるほかない。今後これを自然のなすがままにまかせて放置したと仮定すれば、広瀬川低地帯形成の経緯からもうかがえるように、

利根川は激しい側方侵食によって川幅をますます拡げてゆくにちがいない。

しかし、現在の利根川はダム建設や近代的な護岸工事など人為的な方法によってほぼ完全に制御されており、自然の状態にはおかれていない。そのような人間社会の努力が今後も誤りなく続けられる限り、利根川を現在の姿にとどめておくことも可能であり、あるいは社会の要請に応じてその流路を変えてゆくこともあろう。

第四節　地下水（深井資料）

市内の各所で行なわれた各種工事のためのボーリングによる地下水の状態を、赤城斜面、前橋台地、広瀬川低地帯等にわけてみると、次のとおりであって、これにより、自然水位、水温、地質の状態を知ることができよう。

赤城斜面

	No. 1	No. 2
ボーリング位置	金丸町水源	嶺町第2水源
管理者	市水道局	市水道局
施工業者	東海鑿泉KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和38年6月25日	昭和41年12月19日
ボーリング完了	昭和38年8月31日	昭和42年2月23日
井径	200㎜	350㎜
自然水位	−53.6m	−8.3m
揚水水位	−61.77m	−31.7m
揚水量	210ℓ/分	1672ℓ/分
水温	14.3°C	18°C

深度	地質名称	深度	地質名称
9.0m	ローム	2.0m	表土
38.0	石混り砂（大胡PF）	41.0	大玉石、砂利
41.0	砂質粘土	51.0	火山系砂、土混り
62.0	石混り砂	55.0	黒粘土
68.0	粘土混り石	75.0	火山系砂利、砂
70.0	石	102.0	火山系砂利
75.0	粘土混り砂	110.0	黒土、小砂利
146.0	荒砂	120.0	赤砂利
150.0	砂	142.0	赤砂利、砂
		150.0	硬質砂、土混り
ストレーナー位置	65～76m　91～98m 80～85m　107～140m	20～42m	55～100m　111～142m

No. 3

ボーリング位置	小 坂 子 町
管 理 者	ニユー赤城パノラマ
施 工 業 者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和39年2月28日
ボーリング完了	昭和39年3月25日
井 径	200㎜
自 然 水 位	－2m
揚 水 水 位	－17m
揚 水 量	250ℓ/分
水 温	16°C

深度	地質名称
1.0m	表 土
9.0	灰土混り砂利（PF）
19.0	玉 石、砂 利
23.0	砂
27.0	玉 石、砂 利
38.0	荒 砂
52.0	砂、 玉石混り
61.0	砂 利
80.0	砂利混り荒砂
ストレーナー位置	15～27m　35～80m

No. 4

江 木 水 源	
市 水 道 局	
田中鑿泉重工KK	
昭和 年 月 日	
昭和 年 月 日	
350㎜	

深度	地質名称	深度	地質名称
m		m	
1.5	表 土	66.5	小玉石混り砂利
5.0	赤 土	68.7	玉石混り小砂
8.0	砂 利	78.0	玉石混り荒砂利
11.0	玉 石	84.0	玉 石
15.5	砂 利	86.0	焼 灰 混 玉 石
18.0	荒 砂 利	88.5	玉 石 混 り 砂
20.0	玉 石	90.0	玉 石
21.5	赤土混り小砂利	92.5	玉 石 混 り 砂
28.0	玉石混り砂利	93.5	玉 石
31.0	小 砂	94.5	粘土混り玉石
40.0	玉石混り小砂	95.3	玉 石
41.5	粘土混り玉石	96.6	小玉石混り荒石
44.5	砂利混り玉	100.0	砂
53.5	砂 利	101.0	玉 石
63.0	玉石混り砂利	103.5	砂利混り粘土
65.0	小 玉 石	110.0	玉 石
ストレーナー位置	25～38m　42.5～99.5m		

前 橋 台 地

No. 5

ボーリング位置	池端町　清里簡易水道水源No.2
管 理 者	市 水 道 局
施 工 業 者	日本地下開発KK
ボーリング開始	昭和36年11月17日
ボーリング完了	昭和 年 月 日
井 径	400㎜
自 然 水 位	－3.0m
揚 水 水 位	－25.0m
揚 水 量	700ℓ/分
水 温	°C

深度	地質名称
2.0m	表 土
3.0	黄色砂質粘土
7.0	砂利、粘土混り大玉石
25.0	玉石、粘土混り
28.0	荒砂混り砂利
40.0	玉石混り粘土
44.5	青色砂利粘土
60.5	灰色玉砂利混り粘土
65.0	青色玉石混り荒砂
68.0	転石混り砂利砂
100.0	玉石混り砂利
ストレーナー位置	13～30m　40～93m

No. 6

総社町高井　総社No.2	
市 水 道 局	
田中鑿泉重工KK	
昭和37年5月16日	
昭和 年 月 日	
400㎜	
－15.6m	
－18.85m	
1050ℓ/分	
°C	

深度	地質名称
1.0m	表 土
2.0	赤 土
8.0	玉 石、砂 利
12.0	砂
20.0	玉 石、砂 利
36.0	荒砂利（青色系）
40.0	砂 利、玉 石
65.0	砂利、砂、玉石（赤色系）
72.0	安山岩系玉石
73.0	黒 色 土
75.0	安 山 岩 玉 石
ストレーナー位置	15～30m　40～75m

No. 7

ボーリング位置	元総社町12
管理者	梅田商店
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和41年11月15日
ボーリング完了	昭和41年12月10日
井径	245mm
自然水位	
揚水水位	
揚水量	800ℓ/分
水温	16°C

深度	地質名称
m	
8.0	表土
18.0	玉石、火山系砂利
20.0	茶色土
23.0	玉石、火山系砂利
28.0	赤砂利（小）
40.0	〃
54.0	小玉石、赤砂利
59.0	玉石、砂利
61.0	黒土、玉石
68.5	砂利
69.5	青土混り火山系砂利
80.0	茶色土、玉石

ストレーナー位置

No. 8

ボーリング位置	総社町総社
管理者	三洋音響KK
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和40年12月1日
ボーリング完了	昭和　年　月　日
井径	196mm
自然水位	−15.0m
揚水水位	−28.0m
揚水量	500ℓ/分
水温	°C

深度	地質名称
m	
1.0	表土
7.0	黒土系砂利
16.0	火山系砂利
19.0	火山系玉石
36.0	玉石、砂利
57.0	中玉石、砂利
60.0	玉石、砂利

ストレーナー位置　50〜60m

No. 9

ボーリング位置	総社町総社
管理者	中与通信機KK
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和38年7月20日
ボーリング完了	昭和38年8月16日
井径	196mm
自然水位	−14m
揚水水位	−16.75m
揚水量	500ℓ/分
水温	17°C

深度	地質名称
m	
1.0	表土
6.0	赤土
16.0	火山系玉石、砂利
19.0	大玉石、砂利
28.0	玉石、砂利
60.0	砂利（赤）砂混り

ストレーナー位置　38〜60m

No. 10

ボーリング位置	鳥羽町
管理者	北日本精工KK
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和　年　月　日
ボーリング完了	昭和　年　月　日
井径	392mm

深度	地質名称
m	
1.5	表土
4.0	白土化
9.0	青砂利
19.0	火山系砂利
25.0	大玉石
53.0	赤砂利、砂
59.0	大玉石
69.0	火山系砂
73.0	火山系大玉石
85.0	火山系砂
100.0	火山系砂利、砂

	No. 11	No. 12
ボーリング位置	古市町新前橋駅	元総社町水源地　4井号
管理者	新前橋駅	市水道局
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和40年2月8日	昭和38年4月18日
ボーリング完了	昭和40年3月18日	昭和38年7月5日
井径	300mm	350mm
自然水位	−10.8m	−11m
揚水水位	−27.5m	−25m
揚水量	1400ℓ/分	1500ℓ/分
水温	16.5°C	

深度	地質名称	深度	地質名称
10.0m	表土	6.0m	表土
16.0	砂利（青）	9.0	砂利、砂
20.0	火山系砂利	12.0	玉石
25.0	赤砂利、玉石	17.0	火山系玉石、砂利
71.0	砂利、玉石	20.0	玉石
88.0	火山系砂利、玉石	38.0	砂利
100.0	火山系砂利、土含む	43.0	赤小砂利
		48.0	玉石、砂利
		57.0	砂、小砂利
		73.0	火山系砂利、青土
ストレーナー位置	45〜88m	25〜30m	35〜73m

	No. 13	No. 14
ボーリング位置	総社町総社	千代田町一丁目7
管理者	日新電機KK	群馬メディカルセンター
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和37年3月12日	昭和42年5月24日
ボーリング完了	昭和37年4月12日	昭和42年6月24日
井径	254mm	300mm
自然水位	−12.4m	−11.9m
揚水水位	−16.15m	−14.2m
揚水量	1600ℓ/分	1500ℓ/分
水温	17°C	16.5°C

深度	地質名称	深度	地質名称
8.0m	表土	0.5m	表土
13.0	砂利、粘土混り	9.5	玉石、砂混り
28.0	砂利	14.0	火山系砂利
31.0	大玉石、砂利	37.0	玉石、砂利
35.0	砂利、玉石	39.0	砂、砂利
63.0	砂利、玉石含む	57.0	玉石、砂利
68.0	玉石、砂利	62.0	砂利
72.0	砂利、粗砂	68.0	砂利、玉石
81.0	砂	70.0	玉石、砂利混り粘土
89.0	砂利		
100.0	砂、（硬質）		
ストレーナー位置		40〜68m	

No. 15

ボーリング位置	紅雲町二丁目19
管理者	県立前橋女子高校
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和41年4月9日
ボーリング完了	昭和41年5月10日
井径	
自然水位	−5.0m
揚水水位	−18.0m
揚水量	1000ℓ/分
水温	

深度	地質名称
m	
2.0	表土
5.0	赤土
13.0	黒土、砂混り
22.0	火山系砂利、玉石
31.0	砂利、玉石
35.0	玉石
46.0	火山系砂利
50.5	赤砂利系大玉石
66.0	砂利
90.0	砂混り砂利
100.0	砂

ストレーナー位置	45〜83.5m

No. 16

大手町三丁目2　自治会館	
自治会館	
日本鑿泉KK	
昭和36年6月26日	
昭和36年7月31日	
300㎜	
−11.2m	
−22.5m	
2000ℓ/分	
17°C	

深度	地質名称
m	
1.0	表土
5.1	黒色土
16.6	焼石褐色土混り砂利
18.8	転石
30.8	玉石褐色土混り砂利
42.1	玉石、砂利、粘土混り
50.3	玉石、粘土混り赤砂利
53.3	転石
65.6	砂利、玉石、粘土混り
73.4	褐色土、砂利混り
78.0	褐色土、玉石、砂利混り
80.0	転石

ストレーナー位置	31〜43.2m	52〜62.8m

No. 17

ボーリング位置	紅雲町一丁目7
管理者	群馬中央総合病院
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和37年7月26日
ボーリング完了	昭和37年11月24日
井径	
自然水位	−14m
揚水水位	−16m
揚水量	600ℓ/分
水温	16.5°C

深度	地質名称
m	
2.5	表土
5.0	砂、赤土
18.0	火山系砂利、玉石
30.5	砂利、大玉石
47.5	砂利、玉石
66.0	赤土混り砂利
69.5	灰土混り砂利、玉石
71.5	砂利混り青土
81.5	砂利混り土
87.5	砂盤
89.0	火山系砂利
100.0	砂利、砂混り

ストレーナー位置	30〜70m	75〜81m

No. 18

表町二丁目18	
群馬中央バスKK	
田中鑿泉重工KK	
昭和38年5月2日	
昭和38年6月5日	
196㎜	
−9.3m	
−15.0m	
300ℓ/分	
15°C	

深度	地質名称
m	
2.5	黒土
16.0	焼石（混流）
20.0	玉石
37.0	小砂利、混り砂
40.0	荒砂混り砂
42.0	玉石混り砂利
44.0	粘土混り砂
49.0	玉石混り砂利
50.5	玉石混り赤土

ストレーナー位置	20〜50m

	No. 19	No. 20
ボーリング位置	表町2丁目30	六供町 1331
管理者	曾我製粉KK	前橋市下水処理場
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和43年1月5日	昭和 年 月 日
ボーリング完了	昭和43年2月3日	昭和 年 月 日
井径	200㎜	350㎜
自然水位		
揚水水位		
揚水量		
水温		

深度 (m)	地質名称	深度 (m)	地質名称
4.0	表土	1.0	表土
8.0	火山系砂利、玉石	1.3	砂
14.5	火山系砂利、玉石 混流	2.7	赤土
20.0	火山系砂利、玉石	17.7	玉石混り砂利
25.0	砂利	21.2	転石混り砂利
32.0	青砂利	26.0	玉石混り砂利
50.0	砂利	60 5	砂礫層
		80.0	粘土混り砂礫層
ストレーナー位置		18～30m 40～77m	

広瀬川低地帯

	No. 21	No. 22
ボーリング位置	田口町水源	荒牧町
管理者	市水道局	群馬大学教育学部
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和35年9月1日	昭和42年3月19日
ボーリング完了	昭和35年11月21日	昭和42年5月7日
井径		250㎜
自然水位	−7.0m	−8.75m
揚水水位	−30.0m	−14.64m
揚水量		1500ℓ/分
水温		13.5°C

深度 (m)	地質名称	深度 (m)	地質名称
0.3	表土	1.5	表土
3.5	浅間系砂利	13.0	大玉石
9.4	砂利、玉石、砂	23.0	玉石、砂利
11.6	土、砂	26.0	火山系砂利
12.6	粘土	33.0	玉石、砂利
15.0	玉石、青色土	38.0	火山系砂利
24.0	灰色土、砂利、玉石	40.0	火山灰土、赤砂利
25.0	砂利、玉石		
29.0	灰色土、粗砂		
37.0	土、粗砂、玉石		
42.0	砂利、大玉石		
53.5	灰色土、粗砂、小玉石		
67.0	砂利、玉石		
68.0	砂礫系		
82.0	砂利、玉石		
83.8	火山系大玉石		
ストレーナー位置	6.5～9.5m 37.0～42.0m 12.5～25.5m 54.0～82.0m		

	No. 23	No. 24
ボーリング位置	関根町 363	川原町 10号井
管理者	高橋絹工業KK	市水道局
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和41年5月 日	昭和39年4月20日
ボーリング完了	昭和41年6月 日	昭和39年8月18日
井径	250mm	450mm
自然水位	−6.5m	−5.5m
揚水水位	−9.0m	−19.0m
揚水量		3000ℓ/分
水温	16.5°C	16.2°分

深度	地質名称	深度	地質名称
m		m	
2.0	表土	4.0	表土
9.0	玉石、砂利	9.0	砂利、砂
11.0	大玉石	20.0	砂利、玉石
17.0	玉石、砂利	40.0	大玉石
23.0	火山系玉石、砂利	42.0	砂
32.0	玉石、砂利	55.0	玉石、砂利
47.0	火山系玉石、砂利、粘土混る	61.0	火山系砂利
50.0	粘土	65.0	青粘土
		121.0	火山系土丹層、礫含む
ストレーナー位置	8.5〜36m	12〜34m　42〜80m　82〜120m	

	No. 25	No. 26
ボーリング位置	岩神町三丁目1	千代田町二丁目5
管理者	新進食料工業KK	前三デパート
施工業者	田中鑿泉重工KK	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和42年2月15日	昭和38年4月10日
ボーリング完了	昭和42年3月22日	昭和38年5月16日
井径	350mm	355mm
自然水位	−11.2m	−6.5m
揚水水位	−18.8m	−9.86m
揚水量	2500ℓ/分	2500ℓ/分
水温		

深度	地質名称	深度	地質名称
m		m	
1.0	表土	2.0	表土
9.0	大玉石、砂利	8.0	砂利、玉石、砂
11.0	灰色土、砂	11.0	中玉石、砂利
13.5	玉石	14.0	黒粘土、砂
50.0	砂利	30.0	大玉石、砂利
		36.0	砂利
		46.0	砂利、玉石
		55.0	砂利
		64.0	小砂利
		72.0	火山系砂利、土混り
		80.5	赤土混り砂利
		86.0	砂利、玉石
		100.0	火山系砂利、砂（硬質）
ストレーナー位置	16.5〜50m	25〜70m　80〜86m	

No. 27

ボーリング位置	千代田町二丁目
管理者	スズラン
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和41年4月13日
ボーリング完了	昭和41年5月14日
井径	300㎜
自然水位	−6.2m
揚水水位	−12.0m
揚水量	1200ℓ/分
水温	17°C

深度	地質名称
m	
1.0	表土
11.0	玉石、砂利
13.0	黒土、砂利
16.0	大玉石
47.0	玉石、砂利
55.0	中玉石、砂利
ストレーナー位置	

No. 28

	朝日町三丁目21
	日赤病院
	田中鑿泉重工KK
	昭和42年9月30日
	昭和42年10月25日
	300㎜
	−4.35m
	−12.06m
	1500ℓ/分
	17°C

深度	地質名称
m	
2.5	表土
8.0	玉石、砂利
14.0	火山系玉石、砂利
47.0	玉石、砂利
50.0	大玉石

No. 29

ボーリング位置	天川大島町
管理者	赤城乳業KK
施工業者	田中鑿泉重工KK
ボーリング開始	昭和41年10月28日
ボーリング完了	昭和41年11月20日
井径	200㎜
自然水位	−2m
揚水水位	−3m
揚水量	500ℓ/分
水温	15.5°C

深度	地質名称
m	
1.0	表土
7.0	砂利、玉石
17.0	火山系砂利（泥流？）
32.5	砂利
40.0	砂利、青土含む
ストレーナー位置	18〜37.5m

No. 30

	野中町 野中1号井
	市水道局
	田中鑿泉重工KK
	昭和 年 月 日
	昭和 年 月 日
	510㎜
	−1.65m
	−14.6m
	5046ℓ/分

深度	地質名称
m	
1.0	表土
14.0	大玉石
39.0	砂利
47.5	土混り砂利
75.0	中玉石、砂利
97.0	小砂利
100.0	灰土
ストレーナー位置	14〜39m　52〜100m

〈参考文献〉
新井房夫・赤城火山西南部の関東ローム（地球科学、二八号、一九五六年）
新井房夫・関東盆地北西部地域の第四紀編年（群馬大学紀要、一〇巻、四号、一九六二年）
新井房夫・群馬県の地質と地下資源、（二十万分の一群馬県地質図説明書、内外地図、一九六四年）
新井房夫・前橋泥炭層の14C年代（地球科学、七〇号、一九六四年）
関東ローム研究グループ・関東ローム、その起源と性状（築地書館、東京、一九六五年）
経済企画庁、群馬県・土地分類基本調査、「前橋」（一九五六年）
新井房夫・前橋泥流の噴出年代と岩宿I文化期（地球科学、二一巻、三号、一九六七年）
小出　博、野口陽一・赤城火山の崩壊および土石流（カスリン颱風の研究、一九五〇年）
太田良平・赤城火山熔岩の研究（地質調査所報告、一五一号、一九五二年）
藤本治義・日本地方地質誌「関東地方」（朝倉書店）

第三章　土壌と土地利用

第一節　土　壌

本市の土壌の分布と、土地の利用状況を見ると、前橋地方の土壌は、赤城火山灰質土壌と同火山灰質水積土壌、榛名火山灰質土壌と同火山灰質水積土壌及び前橋高崎両沖積土壌等にわけることができる。

市域のうち最北端の金丸町は赤城山南麓斜面上部に位置し、ここは勢多郡大胡町の金丸と同郡宮城村及び富士見村と接するところであるが、この付近は暗褐色の赤城火山灰質土壌が多い。これに続く赤城山南麓斜面の中下部の土壌は、赤城火山灰質土壌に同火山灰質積水土壌が分布している。一方市の最西端にあたる清里地区の榛名山東麓斜面の土壌は、榛名火山灰質土壌と同水積土壌が大部分を占める。この赤城・榛名両山麓の中間にはさまる前橋沖積面では、旧市域の北西部では沖積土壌、南部が前橋・高崎両沖積土壌が入りまじり、これに榛名火山灰質土壌が検出されている。特に榛名火山灰質土壌は、西から旧市域を越えて、旧市域の北部桂萱地方及び旧市の東北部にも見受けられる。

これらの土壌をさらに分類すると、赤城火山灰質土壌（黒色）が四種類、同火山灰質土壌（暗褐色）が五種類、榛名火山灰質土壌（暗褐色）が五種類、赤城火山灰質水積土壌が五種類、榛名火山灰質水積土壌が五種類、高崎沖積土壌が三種類、前橋沖積土壌が八種類となる。そして赤城南麓斜面の上部金丸地方は厚い火山抛出物でおおわれ、最上層には壌土質の火山灰が堆積し、これを母材とする土壌が多い。従ってこの地帯には造林が早くから行なわれ、草生地もあるが、その一部は入植による開墾も行なわれ、畑作が営まれている。

また赤城南麓の中・下部には、芳賀地区と桂萱・城南両地区の各一部を含むが、土壌の大部分が厚い火山灰性堆積物でおおわれているので、これを母材とした腐植層が上部に発達している土壌が多く、谷間及び河川の氾濫地には、これらが再堆積した土壌が分布する。これらの地域では水田、畑作と桑の栽植が主に行なわれている。

榛名東麓斜面にあたる本市の清里、総社、元総社等の地区は土壌はおおむね火山灰質堆積物から成り、その大部分は水の作用を受けて火山灰に砂礫を混じて堆積したと考えられるところで、普通畑作と桑の栽植や水田が営まれている。

前橋沖積面は南橘、桂萱、旧木瀬地区の各大部分と旧荒砥地区の一部を含むが、ここに分布する土壌は灰褐色

（第7表）　不良土分布一覧表　（耕土培養事業10年—群馬県耕土培養事業10周年記念会発行による）

区分 町村名	酸性土壌		不良火山成土	泥炭土	重粘土		砂質及び礫質土		特殊成分過不足する土壌（マンガン等微量要素欠乏土壌）	計		合計
	田	畑	（畑）	（田）	田	畑	田	畑		田	畑	
												ヘクタール
前橋市（旧市）	42.25	28.86						14.88		42.25	43.74	85.99
上川淵												
下川淵		25.88						39.67			65.55	65.55
芳賀		124.56	69.42					44.62	39.67		278.27	278.27
桂萱	24.40	85.68						59.50	14.88	24.40	160.06	184.46
南橘	42.45						14.88	39.67	14.88	57.33	54.55	111.88
荒砥	105.72	58.51					39.67	39.67	9.92	145.39	108.10	253.49
木瀬		153.52					59.50	74.38	6.94	59.50	234.84	294.34
東	25.39	26.38								25.39	26.38	51.77
元総社	16.56	36.20							14.88	16.56	51.08	67.64
総社	34.91	40.76						14.88	19.83	34.91	75.47	110.38
清里			44.63						39.67		84.30	84.30
旧新高尾	51.17	48.79								51.17	48.79	99.96
旧上陽							99.17	19.83		99.17	19.83	119.00
計	342.85	629.14	114.05				213.22	347.10	160.67	556.07	1,250.96	1,807.03
	54.2%		6.0%				30.2%		9.6%			
県	30.6		26.6	2.6	5.5		20.3		14.3	99.9%		
対全地	8.2		7.1	0.7	1.5		5.4		3.8	26.7		

注　旧新高尾、旧上陽については一応旧村のままの数字をあげた。単位ヘクタール

或いは灰色を呈し、主として水田に利用され、ほかに果樹、桑園、普通畑作などが行なわれ、土壌の種類も複雑になっている。その表層土は旧利根川による河流堆積物を母材とする土壌が多いいが、一部には下層土が緻密な埴土層ともなっている。これが特に旧市及び旧市の東、桂萱地区の南東北に分布していて、しかもこれが次のように三つの地帯に分かれている。すなわち田口から竜蔵寺を経て上泉に至る地帯（褐色乃至黄褐色を呈する砂の堆積物を母材とし、腐植含量が少なく地下水位のやや低い土壌及び河流堆積物を母材とし灰褐色を呈し主として二毛作田として利用される土壌）と、利根川に沿い、田口から下小出、西片貝、長磯、小屋原を経て両毛線に沿った粗粒な砂礫質の土壌の分布する複雑な帯状地帯と、これらをのぞき下部に緻密な層があって、粗粒堆積物は上部だけに存在する中央地帯とである。この地帯では水田、畑作、果樹、桑園等その利用面も複雑である。

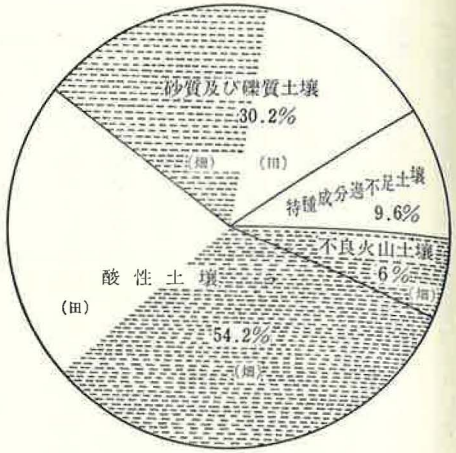
このほか、市内には高崎台地面の土壌が分布するところがある。それは利根川の東岸の旧市と市の南部にあたる上川淵、下川淵及び旧上陽地区で、これらの地域には深さ一尺以内に緻密な埴質の下層土があり、その下層土は明黄褐色を呈する場合と、灰褐色を呈する場合と、ほとんど黒色を呈し、或いは黒泥に近い外観を呈する場合とがあるが、このうち黒色を呈しているものは有機物の含量が多いことによるのであろうと見られている。これらの地域では市街地以外では水田が多く、そのほか桑園も相当多く占めている。

以上は経済企画庁の依託により群馬県が行なった土地分類基本調査によるものである。

この調査によっても知られるように本市は赤城・榛名両火山灰質の土壌が多いため、農作には不良の土壌が各地区に相当多く見られるので、これを改良するために、昭和三十一年以降不良土壌の調査が行なわれ、その結果に基づいて各地においてその事業が進められ、農作物の増産が図られているのであるが、事業開始直前の昭和三十一年における本市の土壌の調査結果は第七表のとおりである。

（注・この表中上川淵地区の欠けているのは、当時調査が行なわれなかったためである）

またこの前橋地方に桑園が多いのは、火山灰土壌が多く、赤城おろしの北風や浅間おろしの西風が強いため、土砂が吹き飛ばされるので、その風防的役割として桑の植栽が行なわれ、それで養蚕が盛んになったという説があるが、必ずしもそうしたことによるのではないという説もあって、これは将来の研究課題として残された興味ある問題となっている。



第17図　不良土壌内訳

第二節　土地利用と水利

土地は、土壌の項でも述べたように、本市では主に水田、普通畑、桑園及び山林等、その土地の土壌に相応して利用されている。これを地域別に見ると、赤城山南麓地帯、榛名山東麓地帯、利根川流域地帯等に分けられるが、土地の利用は先ず水利との関係であろう。

本市には、利根川の分流である広瀬・桃ノ木の両川、天狗岩用水、大正・中群馬の両用水等が灌漑用水として利用され、その流域の耕地をうるおしているが、近く赤城中腹を群馬用水が流れることになっている。昭和三十

一年の経済企画庁及び群馬県の土地分類基本調査によると市内の各用水の灌漑面積は第八表から第一一表のとおりである。

右の表のうち赤城山南麓地帯は、荒砥川、神沢川、白川その他の小河川があるが、土壌が保水力に乏しいので、豪雨などの場合は忽ち氾濫して農作物に被害を及ぼすのと、旱魃の場合には水源が涸渇して、旱害を受けることが多い。そうした被害をなくすために各地に用水がつくられて、市民はそれを利用しているのであるが、このほか地区によっては小規模の溜池の水を灌漑に用いているところもある。この地帯では主として水田、普通畑、樹園等が営まれている。

第8表　大正用水関係地区及び面積

地区	地目	受益面積
		ヘクタール
芳賀	田	53.55
桂萱	〃	110.07
旧木瀬	〃	7.93
旧荒砥	〃	428.41

第9表　天狗岩用水灌漑面積

地区	地目	受益面積
		ヘクタール
総社	田	117.02
元総社	〃	75.37
東	〃	280.65
旧新高尾	〃	195.36

（旧新高尾分は旧村全域の数字である）

第10表　桃木広瀬両用水灌漑面積

地区	地目	受益面積
		ヘクタール
南橘	田	159.61
桂萱	〃	358.00
上川淵	〃	325.28
下川淵	〃	355.03
旧前橋市	〃	215.20
旧木瀬	〃	562.29
旧荒砥	〃	8.93
旧上陽	〃	411.56

（旧上陽分は旧村全域の数字である）

第11表　中群馬用水関係地区及び面積

地区	開田	畑地灌漑	補給田	計
				ヘクタール
清里	565.27	4.96	123.96	694.19
総社	103.14		14.88	118.02
元総社	72.39	1.98	2.98	77.35
鳥羽	(22.81) 32.73		15.87	(22.81) 48.60
計	(22.81) 773.53	6.94	157.69	(22.81) 938.16

カッコ内準開田

（この表は中群馬用水土地改良区調査）

利根川流域地帯である広瀬・桃ノ木両川及び天狗岩用水等の流れる地域は、生産力の高い二毛田が多く、群馬県内でも、水稲生産力の最も高い地帯である。果樹園も相当の面積を占めている。

榛名山東麓地帯は、午王頭川、染谷川等の河川があるが、これも豪雨時には氾濫などがあるため、最近新たに中群馬用水が作られ、それによって水田の造成が行なわれているが、昔からの普通畑、桑園等も営まれている。これら地区の土地利用状況を、同じく土地分類基本調査によって見ると、表のとおりである。

第12表　赤城山南麓地帯地目別利用状況

地区	水田率	普通畑率	樹園率	計	林地	土地利用度
	%	%	%	%	ヘクタール	
芳賀	25.8	32.1	42.1	100	168.59	141
旧荒砥	29.0	42.0	29.0	100	31.73	142

第13表　利根川流域地帯地目別利用状況

地区	水田率	普通畑率	樹園率	計	林地	土地利用度
	%	%	%	%	ヘクタール	
南橘	31.8	35.7	32.5	100	63.47	135
旧前橋	61.6	18.2	18.6	100	7.93	164
桂萱	45.8	27.7	25.1	100	18.84	133
旧木瀬	50.0	20.0	30.0	100	26.78	124
上川淵	61.9	7.3	30.8	100	3.97	152
下川淵	61.2	9.7	28.9	100	1.98	163
旧上陽	59.7	11.5	28.8	100	10.91	167
東	64.9	13.5	21.6	100	1.98	131
元総社	37.2	28.9	33.9	100	0.99	157
旧新高尾	56.5	16.4	27.1	100	2.98	173

（旧上陽、旧新高尾は旧村全体の率である）

上の二表は昭和三十一年の調査であるから、その後の工場誘致等により、現在は当時の状況とは事情を異にするところもあるが、ここでは原表のままとした。

以上によってもよくわかるように、前橋市の土地の利用は、比較的水利に恵まれて効果的に行なわれているが、ここで過去の状態を少しふりかえって見ると、右のうち赤城南面の裾野にかかる部分は、明治の中葉までは、林が至るところに見られ、裾野を刻む細長い放射状谷の谷底のみは、相当奥深くまで水田化し、これにそって集落も営まれた。また前

橋東南端の後閑・山王付近の台地でも明治中葉の前期には山林が相当あり、それが次第に桑園化して来た。天川大島付近の山林が開発されたのは、昭和十九年から二十年にかけての戦時中であり、現在の利根川沿岸にあたる岩神町県立前橋工業高校付近の山林が開発されたのは、大正後期から昭和の初期にかけてである。現在なお中央部の周辺で林地の残存を見るのは南橘地区の川原町付近、六供地内の若干があげられ、その南部では新堀地内があげられる。そのほかの市域はすべて耕地に開発され、更にこれが急速に宅地化している。それは戦後の町村合併と住宅団地の造成及び工場誘致に原因するところが多い。そのため地目の変換が頻繁に行なわれ、その実体の把握が非常に困難であるが、昭和四十三年一月現在の本市の総面積である一四七・三九平方キロメートルの土地が、現在どのように利用されているかを地目別に見ると

田	四〇・六四平方キロ
畑	五五・三四
宅地	二七・〇四
山林その他	二一・三二
（内山林	四・五五）
計	一四四・三四

となっている。しかしこの数字は前掲の総面積一四七平方キロメートルと若干の相違があるが、これは河川、道路等の関係によるものである。これを明治十年調製の町村誌その他に記載された数字に比べて見ると次のようになる。

九　第一四表　総面積対照表

	明治一〇年	昭和四三年	増減（△印減）
	平方キロ	平方キロ	平方キロ
田	三八・四五	四〇・六四	二・一九
畑	三六・四七	五五・三四	一八・八七
宅地	九・四五	二七・〇四	一七・五九
山林	二一・七六	四・五五	△一七・二一

（注・明治一〇年の分は、現在の市域全体の分を調査したが、資料不足のため、上川淵の下佐鳥と下川淵の三公田及び鳥羽地区は推定により計算し、旧荒砥は同村誌稿本の明治一七年の分を、また旧市の岩神町については、明治三三年の岩神村の反別を補充使用し加算した。）

最近の本市は、明治十年に比して、畑と宅地が増加したのに対し、山林は約五分の一に激減した。これはいうまでもなく明治から大正期にかけて、順次開墾が行なわれたためと、太平洋戦争中に開墾が強力に推進され、また終戦後の住宅建築、工場誘致等によるものと言ってよかろう。田も明治十年より各地区で次第に増加したが、その後はまた下降の線をたどった。しかし差引きすると、結局明治十年よりも増加しているということになる。

次に宅地だけについて見ると昭和四十三年の総計二七・〇四平方キロメートルのうちには、もちろん一般住宅・商店・工場・官有地等が含まれるが、これを細別すると次のとおり利用されている。

一般住宅地	七・一一平方キロ
併用住宅地	二・七一
農家の住宅地	六・八一
その他の宅地	一〇・四一
計	二七・〇四

以上のうち、市の中央部（旧市）だけの推移を、市制施行以来の主なる年度について見ると、昭和二十九年において畑はすでに少なくなり、山林原野の如きは皆無にひとしくなってきたことがわかる。

第一五表　中央部の地目別面積推移表

	田	畑	宅地	山林	原野	池沼
	平方キロ	平方キロ	平方キロ	平方キロ	平方キロ	平方キロ
明治25	一・四六	一・九一	一・九八	〇・三七	〇・〇七	〇・〇一
〃40	三・一八	二・七四	二・〇三	〇・四一	〇・〇三	〇・〇二
大正元	三・一五	二・七三	一・九六	〇・三八	〇・〇三	〇・〇三
昭和元	二・九二	二・五〇	二・七〇	〇・一三	〇・〇六	〇・〇四
〃14	二・六九	二・〇三	三・三九	〇・〇八	〇・〇九	〇・〇三
〃29	二・一一	一・四一	三・六九	〇・〇五		〇・〇八

（注・この表は市の資料によるが、この資料には開墾年期地を含んだものがあり各年計算の基礎に多少の相違がある。）

こうして昭和二十九年の町村合併を迎えたわけであるが、二十九年以降に行なわれた合併時における各地区の土地の利用状況を主なる地目別によって見ると次のとおりである。

第一六表　地区別、地目別土地利用状況

区分	田	畑	山林	宅地	備考
	平方キロ	平方キロ	平方キロ	平方キロ	
前橋	二・一一	一・四一	〇・〇五	三・六九	昭和二九年現在
上川淵	三・四四	二・五四	〇・〇八	〇・四六	昭和二九年合併当時
下川淵	三・八九	二・三六	〇・〇八	〇・五七	〃
芳賀	二・一九	七・五八	二・三〇	〇・六六	〃
桂萱	四・九七	六・八二	〇・七九	〇・九八	〃
東総社	二・八一	一・七九	〇・三八	〇・三四	〃
総社	〇・八六	一・八四	〇・〇四	〇・六四	〃
南橋	一・一六	三・〇六	〇・〇二	〇・三九	〃
清里	三・五六	五・八一	〇・五四	〇・八八	〃
鳥羽	〇・二一	二・四七	〇・一一	〇・三二	昭和三〇年合併当時
旧木瀬	〇・〇一	〇・〇八	―	〇・〇二	〃
旧上陽	六・一九	六・一〇	―	一・二四	昭和三〇・同三一・同三五・同四二合併当時
旧荒砥	二・〇四	一・一〇	〇・〇四	〇・二七	昭和三五年合併当時
	五・四七	一二・〇八	〇・七五	一・三〇	昭和四二合併当時
計	三八・九一	五五・〇四	四・八〇	一一・八〇	

これを現在にくらべると、合併後宅地において一五平方キロ多くなり、山林は若干減少したことになる。田畑は数字上では合併後増加したことになるが、畑の中には、普通畑のほか、桑園・果樹園・樹園地等も含まれている。これを昭和四十三年前橋市発行の「前橋の農業」の百分率によってみると、普通畑が四五・四六%、桑園が五二・一九%、果樹園が二・〇二%、その他の樹園地が〇・三三%という割合で、桑園が依然として首位を占めている。

次に昭和四十三年一月現在の市域全体の住宅の土地面積（免税点をこえるもの）を地区別にあげると、次のとおりである。

商業地区	五三五アール
繁華街	一、三七九
高度商業地区	

普通商業地区	一、六三八	
計	三、五五二	
工業地区		
大工場地区		
中小工場地区	一五、〇三八	
家内工業地区		
計	一五、〇三八	
住宅地区		
併用住宅地区	一〇、七五〇	
高級住宅地区	一、三一六	
普通住宅地区	五八、九三三	
計	七〇、九九九	
村落地区		
集団地区	一〇、七五六	
村落地区	六八、一三三	
計	七八、八八九	
合計	一六八、四七八	

道路・河川・橋梁　道路・河川・橋梁について見ると、道路は昭和四十二年現在国道二四・三粁、県道九六・九粁、市道一七九九・二粁、総延長一九一九・四粁であり、河川は大小合わせて二二の河川に、河川法の一級河川一五、この延長九七粁、市管理河川七、この延長三八・六粁に対し、橋梁は市の管理にかかるもの一一七五橋、この延長三・三粁である。本市にはこのほかの橋梁として県、国の管理にかかる群馬大橋の二八〇米、大渡橋の五二五米及び利根橋の二〇〇米等がある。

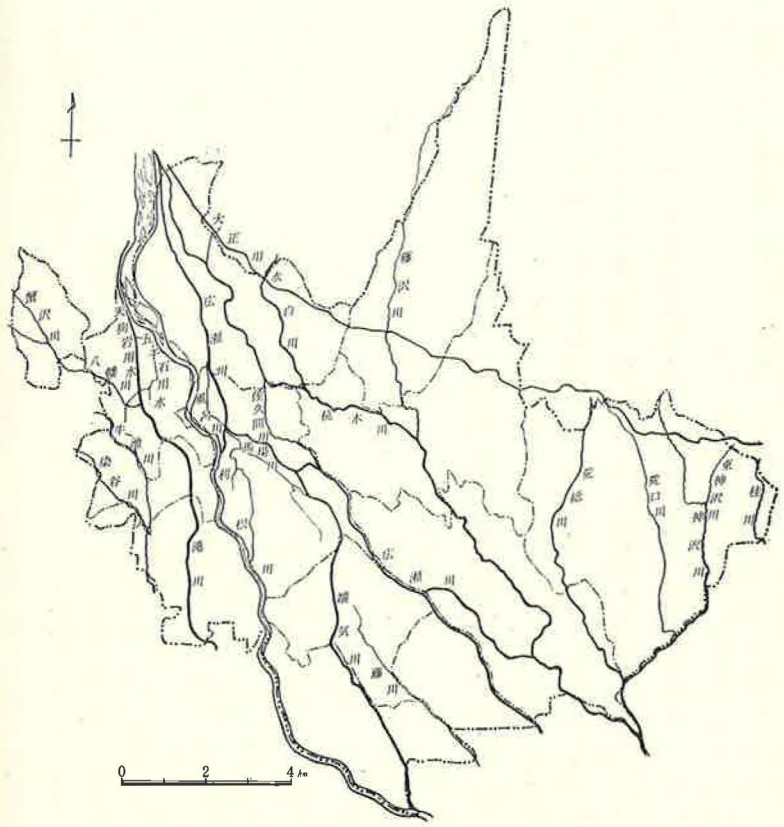
以上のように、総面積一四七平方粁という広大な市域をもつ前橋は、土地利用の面から見ても、耕地も宅地も、未だかつて見ないような速さで、著しく変転を続けているのである。

第三節　水　系

市域内の主なる水流をあげると、先ず利根川は、往時は現在の繁華街の中央を北西から東南へ流れ、その後現在のように市街地の西に変流した。市内にはこのほか広瀬・桃ノ木両川をはじめ、大小多数の用水が通じているが、これらは赤城・榛名から流下する水流のほかは、大部分利根川の水を分けたものである。そしてこの水は、主として市街地の防火用水となり、農業地帯では水田の灌漑（かんがい）用水となり、広瀬川では発電用に利用されている。往時はこの水が、器械製糸場や撚糸工場・米穀搗精・製粉或は木工用の水車の動力原となっていたものである。

1 利根川　利根郡水上町刀嶺が嶽に源を発するこの川は、関東平野を流下して千葉県銚子で太平洋に注ぐま

での全長三二二キロメートル、このうち群馬県内の流程一五二キロメートルであるが、前橋市内では南橋地区の田口町から下川淵地区の下阿内町に至る流程およそ一八キロメートルである。この川は、昔は田口町の橋山の山裾から東に流路を向けて、南橋地内を流れ、それより東南に向かっていた。このため現在の前橋市の中央繁華街もその河道であったと言われ、川が現在のように県庁裏を南へ流れるようになったのは、いつであるか、明らかではない。近世の諸書は天文年



第18図　水　系　図

間（一五四〇頃）とされている。昔は大洪水が度々あり、そのため年々被害があった。江戸初・中期の前橋城主であった酒井氏にかわって前橋城主となった松平氏が、在城わずか十九年で川越へ移城したのも利根川の洪水によって城の本丸付近が欠け落ちたためといわれる。河川改修は酒井時代から明治・大正・昭和にかけてしばしば行なわれた。最近は上流に幾つものダムが建設されるようになったため、そうした洪水も少なくなって来た。現在の前橋市内での川幅は県庁裏から利根橋に至る中間の最も広い個所で五三〇㍍で、川の勾配は県庁裏で三三〇分の一である。

2広瀬川　もとは勢多郡北橘村の利根川坂東橋の下流で同川の水を取り入れたが、現在では同橋上流の佐久発電所の放水を取り入れ、田口町の制水門で広瀬桃ノ木両川に分かれ、広瀬川はそれより田口、関根、荒牧、上小出の各町を経て旧市域に入り、繁華街を貫いて東部の三河町と朝日町の境にある十六本堰で端気川を分水し、更に東部に流れて永明地区に入り下大島地内で韮川と分かれ、小屋原地内で桃ノ木川を合わせて駒形町の北を流れ、伊勢崎市に入って荒砥川と粕川及び大川（韮川）を合わせ、佐波郡境町で利根川に注ぐ。全長二六・五キロメートル、前橋市内の流程一七・五キロメートルである。この川は、桃ノ木川とともに旧利根川の河道を流下しているが、昭和の初期この流水を利用して発電事業が上小出に起こされ、最近また田口、関根、小出、柳原の四ヵ所に県営発電所、このほか田口に自家発電一ヵ所が建設されるに至った。川幅は中央繁華街の中心比刀根橋で一三・八㍍である。

3桃ノ木川　広瀬川と同じく、利根川の佐久発電所の放水を取り入れて、田口町で広瀬川と分かれ、それより南橋地区の田口、関根、川端、日輪寺、青柳及び北代田を流れて旧市の北部に出で、下細井町を経て桂萱地区に入り、さらに永明地区から城南地区に流れ、小屋原で広瀬川に合流するまで全長一四・七キロメートル、この大部分が市内

を流れており、川幅は北代田地内で一六㍍である。この川は南橋地内で赤城山から流出する諸川を合せている関係から雷雨などの際洪水となることがしばしばあるので、最近全川にわたって改修が行なわれている。なお分流に延命寺川（役館川）、四ヶ村堰用水、五衛門用水、荒牧用水、天神用水などがある。

4 天狗岩用水　広瀬、桃ノ木両川と同じく、佐久発電所の放水を利根川坂東橋の東側で取り入れ、これをサイフォンで利根川の河底を潜らせて西側の北群馬郡吉岡村へ送り、それから南下して総社地区に入り、総社町総社字大屋敷南の八幡川（山沢川）を合してその名も滝川となる。滝川は総社、元総社、東地区を流下し、高崎市の一部を流れて佐波郡玉村町川井地先で烏川に合流する。この用水は、その昔総社城主秋元長朝が住民のために開鑿したのがはじまりで、その分流に総社地内では五千石用水がある。五千石は総社町植野の元景寺西北で天狗岩用水から分かれて同町を南流し、幾つかの分流を出したのち元総社地区に入り、それより高崎市に合併した旧新高尾、旧中川等を経て井野川に合流する。この河川のうち天狗岩用水として市内を流れる延長は九三五㍍、同じく滝川は七・一㌔㍍、川幅は元総社の上石倉地内で五㍍、総社、東地内で九㍍である。なおこの川は、総社町立石地内で、前橋の有志によって明治二十七年発電事業の起こされたことがある。利根川の洪水はこの川の取入口および流路にも毎回損害を与へ、そのために取入口や一部の水路の変更を行なったこともある。中群馬用水もこの天狗岩の水を揚水して清里、総社、元総社、鳥羽地内（七二頁参照）を流下している。

5 風呂川　上小出町地内で広瀬川から分流し、柳原の土手上、児童公園の北を流れ、大手町三丁目（旧北曲輪町）地内で馬場川を分水し、それより裁判所付近を流れ、桃井小学校の西で矢田川と分れて市の南部に向かい、六供町地内で利根川に合流する。この川は、その昔厩橋城築城の時、城の防備及び城内の防火、その他生活用水を兼ねて開鑿されたものといわれ、入浴に利用した伝説から風呂川の名称がついたと言われる。

6 馬場川　大手町三丁目（旧北曲輪町）地内で風呂川から分かれ、本町一、二丁目の下を流れて本町三丁目（旧天川原町松竹院東）で南部への農耕用水を分かち、文京町一丁目（旧高田町）で端気川と合流する。馬場川の名は、千代田町四、五丁目（旧紺屋町）地内に旧幕時代馬の調練場があったので古くから馬場通りの名があり、未だにその名は残っており、そこを流れるので馬場川になったと言われる。

7 佐久間川　下小出町地内で桃ノ木川から分かれ、下小出町から若宮町（旧才川町）と国領町地先を南流し、住吉町一丁目（旧琴平町）地先から城東町一丁目（旧栄町）裏を流れて、西片貝町で広瀬川に合流する。

8 吉野川　荒牧町と上小出の境で桃ノ木川から分かれ、下小出町、群馬大学付属病院付近を流れ、昭和町（旧萩町）と国領町の境を南下し、電報電話局国領分局の東で佐久間川に合流する。上流は舟戸川とも言う。

9 端気川　朝日町一丁目（旧百軒町）十六本堰で広瀬川と分かれ、朝日町二丁目（旧新町裏）から文京町一丁目（旧高田町）北を流れ、同町四丁目（旧天川町）から上川淵地区に入り、市の最南端下阿内町地先で利根川に合流する。この川は、分水から合流点まで約九㌔㍍にわたり、南部農耕地帯の重要な用水で、利根川に合流するまでに多数の堰があり、棚島用水その他の用水を分流している。

10 白川　赤城山から放射状に流出する水系のうち、最も代表的な川で、川底が水田面より高い天井川のため平素は水量も極めて少ないが、豪雨等の場合、たちまち出水するので有名である。この川は赤城山地蔵岳の西南付近から赤城街道に沿って南下し、勢多郡富士見村の中央部を縦断して市内南橋地区に入り、上細井町と青柳町の境界を流れて、北代田町で桃ノ木川に合流する。このほか赤城山からこの地区に流下する川に十王堂川、法華

沢、細ケ沢、庚申川、滝ノ口川（大川、赤入道川）、鎌倉川などがあり、これらはいずれも同地区内で桃ノ木川に合流する。

11藤沢川　この川は赤城山鍋割山の西南に源を発し、市域内芳賀地区の嶺町に至って東南に流れ、同地区の中央部を貫流し、鳥取町で金丸川幅射谷を横断して五代町に入り、ここで北方から流出の金丸川、小坂子川などの谷川をすべて合流して桂萱地区に至り、そこで桃ノ木川に合流する。金丸川は赤城山荒山の麓から発し、南流して本市最北端の金丸町を経て小坂子町に入り、鳥取町地先で藤沢川に合流する。小坂子川は同町の新沼を水源として南下し本流と支流に分かれるが、五代町で藤沢川に合流する。

12蟹沢川　榛名山から流下する水流で、本市最西端の清里地区に流れ込んでいる。このほか榛名山から同地区に流入するものに神戸川、山沢川がある。水源はいずれも北群馬郡榛東村で、蟹沢川は同地区内で八幡川（山沢川）に合流し、それより総社地区に入り天狗岩用水に合流する。

13山沢川　水源は北群馬郡榛東村（旧桃井村）で、榛名水系の小流を合わせて東南に流れ、清里地区青梨子町付近を東へ向かって総社町に入り、同町大屋敷の東南で天狗岩用水に合流する。全長は約一二粁で、この川は、八幡川とも言われ、分流に東西堀がある。

14牛池川　群馬郡群馬町（旧金古町）東牛池沼に発し、群馬町の西国分、東国分を過ぎ、総社と元総社の境を南流し元総社南部字落合で染谷川に合流する。

15午王頭川　北群馬郡榛東村（旧桃井村）から東南に流れ、同郡吉岡村（旧明治村）から清里地区に入り、再び吉岡村大久保を経て総社町に至り、同町元景寺北方で利根川に合流する。

16染谷川　北群馬郡榛東村に源を発する榛名山水系の一つで、豪雨などの際たちまち出水し、このため沿線に害を及ぼすことがしばしばであった。この川は群馬郡群馬町と元総社地区を経て東地区に入り、高崎市域で井野川に合流する。

17藤川　上川淵地区朝倉町の東北で小水路の水を合して同地区を南下し、下川淵地区の房丸、徳丸、力丸三町の東隅に接してさらに南流したのち、佐波郡玉村町に入りここで利根川に合流する。なおこの川も合流点に至るまでの間に、松の堰その他幾つもの堰で分水する。

18宮川　文京町四丁目（旧天川町）で、端気川から分かれ、それより上川淵地区朝倉、後閑を経て上陽地区に入り、山王町日枝神社付近で二本に分かれ、一本は西善町を南流してから東藤川となり藤川に合流し、一本は山王、東善、中内等をうるおし、伊勢崎市上の宮町で利根川に合流するが、この川の上流は俗に後閑用水と言われ上川淵と上陽地区の重要な水路となっている。

19棚島用水　文京町三丁目（旧天川町）二子山の東で端気川から分水し、天川原、六供、上佐鳥の各町を経て棚島町に流入し、同町飯玉神社付近で二分して一本は上佐鳥から公田町に至り、新堀町から利根川に合流し、他の一本は公田町で利根川に合流する。

20松葉川　勢多郡富士見村地内から流下するこの川は、南橘地区の上細井町の急崖下を東へ流れて桂萱地区に入り、上沖町を経て下沖町で桃ノ木川に合流する。この川も過去水害を生じた川で、南橘地区では松葉川と言い、途中で大川となり、桂萱地区に入って赤入道川となる。

21寺沢川　勢多郡大胡町の北に発し、市内の西荻窪町、亀泉町を南流して石関、東上野の両町を経、女屋町の

南で桃ノ木川に合流する。この川の流域は昔は一毛作田であったが、約三十年前耕地整理を行ない、川を改修したので二毛作田となった。

22清水川　市内野中町の湧水を源にしたこの川は、俗に「野中の清水ッ川」と言われ、明治初年までは野中、上大島等で利用していたが、野中町の清水及衛等の耕地整理施行により、野中をはじめ上大島、下大島、小屋原等旧木瀬地域をうるおし、途中三ヵ所の堰もあって、下増田町で広瀬川に合流する。現在では、その水源は広瀬川の分水によっている。

23大正用水　大正七年県会で議決されたが、その実現を見ず、昭和十八年四月、太平洋戦争の真ッ只中に施工を企てられ、翌十九年農地開発営団の事業として着工され、同二十二年営団の閉鎖により国営事業に移され、更に同二十五年県営となり、二十六年土地改良区となって現在に至っている。水は坂東橋上流で広瀬桃ノ木両川といっしょに取り入れ、田口で広桃両川と分かれてから赤城の南麓を東へ流れ、佐波郡赤堀村香林で早川に合流する。全長二四㌔㍍で、このうち前橋市域では南橘地区の田口、竜蔵寺、上細井各町、芳賀地区の小神明、鳥取、五代各町及び桂萱地区の荻窪町、江木町等がその流路にあたっている。

24荒砥川　勢多郡宮城村湯之沢地先を水源とし、同村、同郡大胡町を南下して市内の城南地区に入り、泉沢町と富田町の境を流れ、荒口、今井、上増田の各町を経て下増田町で広瀬川に合流する。この川は全長一三㌔㍍のうち、城南地区を七・五㌔㍍流れ、途中神沢川、宮川などを合流する。

25神沢川　勢多郡宮城村三夜沢橋で荒砥川から分水し、城南地区に入っては下大屋、西大室、東大室、飯土井、新井各町を経て、下増田町で荒砥川に合流する。全長一四㌔㍍のうち、五・三㌔㍍は、城南地区を流下する。このほか、この地区に荒口川がある。

26東神沢川　勢多郡宮城村苗ヶ島地先を水源として城南地区に入り、西大室町で、神沢川に合流する。

27桂川　勢多郡粕川村新屋から城南地区に入り、東大室町を経て佐波郡赤堀村に流下し、粕川に合流する。

28八坂用水　笂井町から上増田、二之宮、新井の各町を経て、伊勢崎市八坂、新宿方面へ流下する。

29貴船川　勢多郡大胡町から城南地区に入り、桃ノ木川に合流する。

30群馬用水　未だ完成の域に達しないが、芳賀地区の中央部を東へ流下している。

第四章　気　象

本市は関東平野の北西部に位し、北西に連らなる赤城・榛名・上信越の山々に囲まれて、気候はやや内陸性を帯びている。そのため寒暑の差が大きく、四季の変化に富んでいるが、降水量は少ないほうである。風は秋冬は北西または北の風が強く、春から夏にかけては東または南寄りの風が吹く。冬の風は、いわゆる「上州のからっ風」である。このからっ風の吹きすさぶころは、晴天の日が続き、空気が著しく乾燥するのが常で、降水量が蒸発量よりも遙かに少ないという現象を示すことになる。

本市は、雷も多いので知られていて、栃木県地方と大体同じか、年によっては多いことさえある。

このようにあげて来ると、一見本市は災害の多い市のようであるが、事実は住みよい地とされている。雨が降

っても再々大洪水に襲われる危険は少ない。地震はあっても大被害の経験はなく、雪はさほど降らず、風や雷や霜の害も毎年たくさんあるというほどではない。

夏は暑く、冬は寒く、春秋は大体適温適風と言ったのが前橋である。

月をおってあげて見ると、一月が最も寒気きびしく、一月から四月にかけて名物のからっ風が吹きまくるが、三月も末になると漸く気温も上昇して、早くも木蓮や彼岸桜が咲き出し、四月上旬にはつばめが飛来し、蝶が舞い、染井吉野桜のつぼみがほころびる。しかしこの時分、西または北の季節風が突然吹き荒れたりすることもある。

四月もなかばを過ぎると、あたりは花の世界から一斉に若葉の世界に変わり、農業地帯では春蚕の準備が始まる。五月幟が空を彩るころになると、移動性高気圧によって、五月晴れの好天に恵まれるが、そんな時、農作物が晩霜に不意を衝かれることもあるし、時には春雷や降雹の害にあったりもする。このためこの地方の農家では、農作物の蒔付けや春蚕の掃立て時期を加減する。

六月から七月にかけては、麦刈り田植の季節で、麦刈りは梅雨の晴れ間に行なわれ、それが済むと田植となるが、田植は六月末から七月にかけて行なわれる。

七月、八月の盛夏の暑さは格別だが、八月も朝の涼風が立つと俄に秋らしくなり、九月の二百十日前後から下旬にかけて、台風の襲来を受けることがある。そして台風期が過ぎると間もなく北西の秋風が吹き出し、郊外では秋晴れの空にとんぼが群れ飛ぶのが見られる。その反面天気の変化が多く、陰うつな日も続いたりする。

こうして十月に入ると、空気は澄んで天いよいよ高く、さわやかな日が続く。秋の菊が咲き出し、街路樹をはじめ草木も次第に秋の装いを濃くし、田には黄金の穂波がゆれ、間もなく稲の収穫がはじまる。

そして十一月ともなると早い年には月なかば以前にすでに霜が降り、時には上旬に結氷を見ることもある。

こうして十二月に入ると、寒さも次第に加わって、あわただしいうちに年を送るのである。

前橋地方の気候について、明治二十四年以文会発行、保岡申之編の「前橋繁昌記」に

> 此地夏秋の二季は和穏の良日多し、冬春にいたりては、時々北風発しにはかに気候を変ずることあり、南軒に背を曝す老翁も遽て、炉辺へ逃込の奇驚なきにあらず、併し極寒も華氏四十度内外にして、極暑も同じく九十度前後なり、霜は十一月十日頃に降りはじめ三月三十日頃にふり止る、積雪は一尺より高からず、降雪の度は一年に大凡三回なり、風は春は西又は北、夏は東より吹き、秋冬は北風最多の方位を占む。

とあるが、これは前橋地方の気候の状態を、よくあらわしている。

以下前橋市の気温・降水量・風速・その他の気象状態について述べてみよう。

気　温

前橋の一年中の平均気温は、過去三十年間（一九三〇年以降）の記録では一三度四で、これは熊谷より〇度三、東京より一度三も低い。しかし、宇都宮よりは〇度九、水戸より〇度六高いことになる。年間では一月が一番低く八月が一番高い。そして一月の平均気温は二度四、八月の平均気温は二五度三である。

本市における過去の最高気温は明治三十年（一八九七）以降昭和四十三年に至る間の調査によると昭和三十七

第17表　日最高気温月平均値

月＼年	明治30年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	7.8	8.6	7.8	6.2	8.7	8.7	8.1	9.3
2	8.4	11.0	7.4	5.3	11.0	9.1	8.1	7.6
3	10.2	12.4	10.7	11.3	12.4	10.4	14.0	13.0
4	15.6	18.2	18.0	19.3	17.8	15.9	17.4	18.5
5	22.0	21.7	21.9	20.0	21.7	21.8	24.4	21.6
6	23.4	24.1	26.0	24.3	27.5	25.9	27.3	24.5
7	26.9	28.0	29.9	25.3	31.2	28.5	29.1	28.2
8	28.8	29.9	30.2	30.1	29.6	30.8	31.6	29.4
9	24.6	23.7	24.7	25.4	25.3	25.2	25.2	25.1
10	19.9	20.5	20.9	20.0	20.6	21.5	20.1	19 2
11	15.1	13.8	15.5	16.0	16.0	16.4	15.5	18.1
12	9.5	9.5	10.8	10.4	13.0	10.7	10.5	13.3
年	17.7	18.5	18.6	17.8	19.6	18.7	19.3	18.9

第18表　日最低気温月平均値

月＼年	明治30年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	−1.5	−2.6	−3.2	−5.2	−2.2	−1.4	−2.4	−2.1
2	−1.7	0.2	−3.6	−4.6	−0.3	−1.8	−1.6	−3.8
3	1.1	1.9	0.0	0.4	3.3	−0.1	1.5	2.4
4	5.5	5.7	7.1	5.7	7.5	4.2	7.1	7.4
5	11.4	10.9	10.4	9.9	12.5	11.6	12.4	11.4
6	14.9	15.4	15.3	16.4	17.8	17.4	16.9	13.6
7	19.6	20.3	21.9	18.0	22.7	20.4	21.7	20.6
8	21.2	21.2	21.5	22.4	21.5	21.5	22.6	21.8
9	16.7	16.1	16.8	17.3	17.0	16.8	18.0	17.3
10	9.5	10.5	11.1	11.8	12.9	10.0	10.7	10.6
11	4.8	4.2	5.3	5.2	4.7	5.9	5.4	6.3
12	−2.1	−0.2	−0.6	−0.7	2.5	0.9	−0.3	3.9
年	8.3	8.6	8.5	8.1	10.0	8.8	9.3	9.1

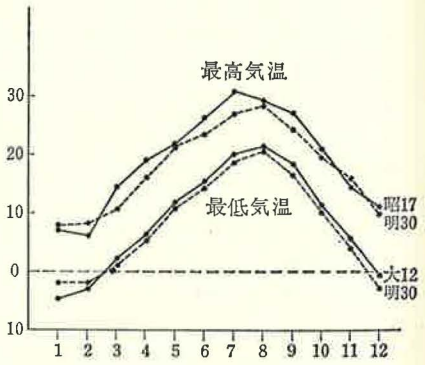
年八月九日の三七度六（昭和十七年三七度四）で、最低は大正十二年一月三日の氷点下一一度八であった。

また過去の主なる年の月別最高気温、最低気温の平均値は前表のとおりである。

湿　度

前橋地方の湿度は、冬季に小さく、春から夏にかけて大きくなるが、過去三十年間の平均湿度は六九%である。これは熊谷よりも四%、東京より二%、宇都宮より八%、水戸より九%、いずれも少なく、それだけ近県都市より前橋が乾燥しているのである。

本市が最も乾燥するのは二月と一月で、二月の湿度は五七%、一月は五八%である。このうち二月だけの湿度を前述の各都市にくらべると、熊谷は六〇%、東京六〇%、宇都宮六九%、水戸は六九%であるから、これらの都市は何れも前橋より高く、それだけ前橋の真冬の乾燥状態のひどさが知られるわけである。



第20図　日最高最低気温月別平均値比較表
昭和17年は最高気温37.4をあらわした年
大正12年は最低気温極値氷点下11.8をあらわした年

降　水　量

前橋の降水量は、過去三十年間の一カ年の平均一二四六ミリで、これを月別に見ると九月が最も多く、次いで

八月、七月という順になり、一月が最も少ない。年間では、降水量〇・一ミリ以上の日数が一四四日、このうち一・〇ミリ以上の日が一〇九日、一〇ミリ以上の日が四一日、三〇ミリ以上の日が八日もあり、三〇ミリ以上の日が七月に一・四日、八月に一・六日、九月に一・五日というように、降水日が夏から初秋の候に多いのは、雷雨台風その他によるものであろう。

前橋気象台開設(明治二十九年)以来現在に至るまでの最大の降水量は、昭和二十二年九月十五日のカスリン台風による三五七・四ミリであった。また一時間の最大降水量は、昭和三十年八月六日の九四ミリ、十分間の最大降水量は、昭和四十二年六月二日の二八ミリであった。

このように本市の最大降水量の記録は昭和に集中しているが、それ以前の明治四十三年八月の大洪水の際は、一カ月間の降水量が実に七三四・五ミリ、大正三年八月の台風の際は、月間の総量三四七・一ミリを示している。これを近県他都市の一年間の平均降水量とくらべて見

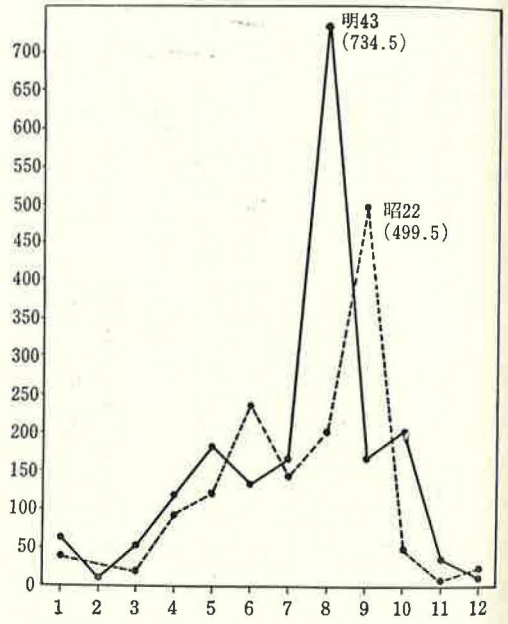
第19表　平　均　湿　度　(カッコ内はその月の最小湿度)

年／月	明治30年	明治45年大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	65	57	58	57	52	53(19)	52(16)	51(19)
2	58	62	57	55	54	47(15)	60(24)	51(16)
3	59	60	61	57	65	48(13)	53(13)	56(20)
4	69	60	70	60	64	51(12)	61(11)	63(18)
5	72	75	69	75	74	69(17)	63(19)	70(23)
6	80	81	71	84	73	77(25)	70(30)	75(26)
7	85	82	82	83	79	78(34)	81(46)	81(37)
8	86	82	81	84	80	73(39)	74(30)	82(37)
9	86	83	83	84	78	75(21)	82(40)	77(33)
10	73	79	75	75	76	64(14)	72(28)	72(34)
11	73	69	69	70	63	61(27)	64(24)	58(14)
12	59	64	63	60	55	57(21)	58(16)	62(24)
年	72	71	70	71	68	63(12)	66(11)	66(16)

第20表　降　水　量

年／月	明治30年	明治43年	明治45年大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和23年	昭和30年	昭和40年
1	48.9	54.9	21.6	0.5	0.5	32.2	28.0	33.1
2	31.1	9.4	92.9	15.0	29.1	11.3	55.6	3.7
3	40.2	45.2	102.2	112.4	23.6	40.7	98.9	18.7
4	105.4	35.9	47.4	158.4	52.2	97.8	52.5	49.1
5	105.8	176.0	122.4	72.1	90.3	62.0	174.1	255.4
6	176.7	124.8	331.2	70.3	232.7	278.4	64.1	186.8
7	204.5	159.7	213.6	151.2	137.3	373.1	221.6	87.0
8	89.8	734.5	87.2	227.0	299.6	221.2	464.2	183.3
9	375.4	159.4	187.6	292.0	102.9	210.1	251.0	152.7
10	106.6	196.5	102.7	73.7	316.9	110.4	303.6	66.3
11	100.2	27.4	46.7	49.9	67.0	68.5	62.1	84.4
12	0.0	9.3	70.1	11.0	4.3	40.1	0.9	27.7
年	1,384.6	1,733.0	1,425.5	1,233.5	1,356.4	1,545.8	1,776.6	1,148.2

年／月	昭和42年	昭和43年
1	26.4	2.5
2	42.2	30.0
3	39.3	58.5
4	100.7	133.5
5	73.9	135.5
6	249.6	182.0
7	144.3	283.5
8	41.1	235.0
9	174.0	72.0
10	126.8	97.5
11	36.2	8.5
12	12.7	106.0
年	1,067.2	1,344.5



第21図　月間降水量比較表

ると熊谷が一二九四ミリ、東京が一五六三ミリ、宇都宮が一五二二ミリ、水戸が一三九三ミリと何れも前橋より多い。また県内では桐生が一二四四ミリ、伊勢崎が一一三四ミリ、館林が一二二七ミリであるから、これらは前橋よりもさらに少ないことになる。

過去の主なる年の前橋の降水量を示すと第二〇表のとおりである。

風

風は上州の名物とされている。いわゆる「上州のからっ風」であるが、この風は冬から春にかけて吹き荒れる。そして晩春から次第に東南東の風にかわり、これが七月八月と続き、秋九月に入ると次第に北寄りとなって冬に入るのであるが、本市における過去十年間（一九五一年以降）の風向の百分率は

北々西二五%、北一五%、北西一二%、東南東一〇%、東六%、南東六%、西北西四%、西三%、南々東三%
北々東二%、東北東二%、南二%、南々西二%、南西二%、西南西二%、北東一%、静穏五%（この数字は四捨五入してある）。

となっている。また本市における年間平均の風速は秒速三・九㍍で、月別に見ると一月が五・一㍍、二月が四・九㍍、五月六月は三㍍台となり、七月から九月にかけては二㍍となる。

本市の年間平均風速を東京、熊谷、その他近県都市と比較すると、東京二・二㍍、熊谷三・七㍍、宇都宮二・五㍍、水戸三・二㍍で何れも前橋以下である。

第19図　10年間の平均風向

第21表　10㍍以上の風の吹いた日数

年＼月	1月	2月	3月	4月	4カ月間計	年間の日数
昭和33	14	16	15	12	57	88
〃 34	15	8	15	12	50	77
〃 35	20	13	14	13	60	95
〃 36	10	13	6	9	38	66
〃 37	7	10	9	9	35	53
〃 38	6	7	9	1	23	42
〃 39	6	5	12	5	28	42
〃 40	10	10	15	10	45	65
〃 41	7	9	10	8	34	59
〃 42	10	6	10	9	35	55
〃 43	8	1	11	4	24	35

本市のからっ風は大体一〇㍍内外の風速でそれ以上のこともあるが、過去における本市の最大風速の記録を見ると、実はからっ風でなく台風時に出ているのである。すなわち明治三十年以降の資料によれば明治三十三年九月二十八日の台風時に出た二九・九㍍（風向北）が最大で、最大瞬間風速は、昭和四十年九月十七日の台風二十四号の際の四二・三㍍（風向東南東）であった。

また本市でからっ風の吹くのは一月から四月で、この四ヵ月間の一〇㍍以上の風の記録を見ると、明治三十年から六十ヵ年の平均は一月が一四・三日、二月が一三・八日、三月が一四日、四月が一〇・七日である。

第22表　月平均風速（カッコ内は最大風速）

月＼年	明治30	明治45 大正元	昭和2	〃 20	〃 30	〃 40	〃 42	〃 43
1	4.5 (13.4)	5.3 (22.5)	4.8 (15.8)	4.4 (13.9)	5.4 (16.1)	4.4 (12.8)	4.5 (12.3)	4.3 (15.2)
2	5.2 (17.6)	4.6 (20.5)	4.4 (14.1)	5.2 (16.6)	5.2 (18.7)	4.9 (16.3)	3.6 (12.7)	4.0 (11.3)
3	5.5 (18.3)	5.4 (24.2)	4.6 (16.7)	4.9 (22.9)	4.2 (20.2)	4.5 (13.0)	4.2 (14.7)	4.0 (13.5)
4	4.2 (18.3)	4.7 (18.7)	3.9 (16.0)	4.2 (18.5)	3.9 (18.0)	4.2 (14.3)	3.6 (14.0)	3.2 (11.5)
5	3.8 (14.0)	3.5 (13.1)	3.5 (15.3)	3.5 (13.8)	3.6 (14.5)	3.0 (11.7)	3.2 (12.2)	2.9 (12.0)
6	2.5 (9.2)	3.0 (13.8)	2.9 (13.8)	2.5 (10.9)	2.9 (13.7)	2.3 (9.0)	2.9 (12.0)	1.6 (6.8)
7	2.1 (7.6)	2.9 (12.6)	2.1 (7.1)	2.5 (11.9)	2.5 (12.9)	2.3 (9.0)	2.1 (7.8)	2.6 (9.2)
8	1.8 (8.5)	2.4 (11.9)	2.1 (10.0)	2.4 (12.6)	2.9 (11.5)	2.6 (9.5)	2.5 (8.5)	2.0 (8.7)
9	2.6 (11.8)	2.0 (23.7)	2.1 (12.0)	2.3 (15.9)	3.2 (13.7)	2.8 (17.5)	2.1 (7.2)	2.1 (7.7)
10	3.8 (16.7)	3.6 (16.8)	3.0 (11.7)	2.3 (12.6)	3.2 (15.5)	3.1 (9.5)	2.8 (10.8)	2.7 (8.8)
11	3.4 (13.5)	4.3 (16.1)	3.8 (13.8)	4.1 (14.5)	4.1 (16.0)	3.9 (14.5)	3.2 (12.8)	5.8 (14.0)
12	4.6 (16.3)	4.8 (17.0)	4.2 (15.4)	4.6 (11.5)	5.3 (16.5)	4.1 (13.7)	3.8 (12.0)	3.8 (11.2)
年	3.6 (18.3)	3.7 (24.2)	3.4 (16.7)	3.6 (22.9)	3.9 (20.2)	3.5 (17.5)	3.2 (14.7)	3.2 (15.2)

単位メートル(秒速)

最近十ヵ年間における前橋地方の風の月別日数・風向などをあげると第二二・第二三表のとおりである。

雪

前橋は、雪は少ない。過去三十年間の一ヵ年の平均日数は一六・二日であるが、このうち一〇㌢㍍以下の積雪日数が七・七日、一〇㌢㍍以上の積雪日数が一・六日、二〇㌢㍍以上となると僅かに〇・三日に過ぎない。平均日数一六・二日は、この地方としては多いようであるが、これは微量な雪、たとえば風花等を含むものである。

月別に見ると近ごろの本市で雪の多いのは二月と一月、これに次いでは十二月であるが、明治三十二年以降の積雪状況を見る

第23表　最多風向

月＼年	明治30	明治45 大正元	昭和2	〃 20	〃 30	〃 40	〃 42	〃 43
1	NW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW
2	〃	〃	N	〃	〃	〃	〃	〃
3	N	〃	NW	〃	〃	NW	〃	〃
4	N NW	〃	NNW	〃	〃	NNW	〃	〃
5	SE	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ESE
6	〃	〃	ESE	ESE	NW	SE	〃	S
7	〃	ESE	ESE NNW	〃	ESE	E	ESE	ESE
8	〃	〃	ESE	〃	E	NNW	NNW	〃
9	〃	NNW	NNW	NNW	NNW	〃	〃	NNW
10	NW	〃	〃	〃	〃	NW	〃	〃
11	〃	〃	NW	〃	〃	〃	NW	〃
12	〃	〃	NNW	〃	〃	NNW	NNW	〃
年	NW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW

第24表　年間降雪日数

年	日数	年	日数	年	日数	年	日数
明治30	14	大正 4	16	昭和 8	19	昭和26	15
〃 31	20	〃 5	21	〃 9	22	〃 27	25
〃 32	18	〃 6	16	〃 10	24	〃 28	13
〃 33	27	〃 7	22	〃 11	21	〃 29	15
〃 34	17	〃 8	20	〃 12	13	〃 30	12
〃 35	16	〃 9	23	〃 13	12	〃 31	20
〃 36	16	〃 10	18	〃 14	11	〃 32	15
〃 37	25	〃 11	28	〃 15	13	〃 33	12
〃 38	15	〃 12	21	〃 16	14	〃 34	13
〃 39	25	〃 13	16	〃 17	12	〃 35	10
〃 40	16	〃 14	20	〃 18	15	〃 36	12
〃 41	21	〃 昭和15元	21	〃 19	26	〃 37	18
〃 42	27	〃 2	21	〃 20	22	〃 38	25
〃 43	25	〃 3	18	〃 21	15	〃 39	23
〃 44	14	〃 4	15	〃 22	16	〃 40	9
〃 45	17	〃 5	22	〃 23	7	〃 41	16
大正元	21	〃 6	25	〃 24	14	〃 42	19
〃 2	19	〃 7	18	〃 25	9	〃 43	12

と、昭和のはじめごろまでは、十二月に毎年何回もの積雪を見ているのに、それ以後は十二月の積雪は、次第にまばらになって来ている。

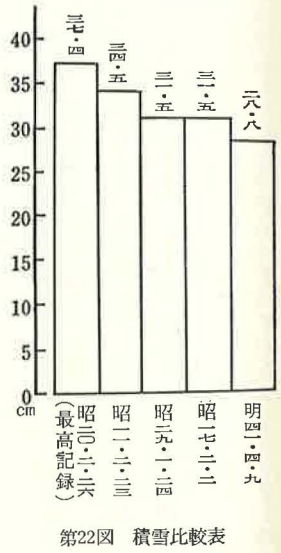
本市において過去雪の最も早いのは明治三十七年十一月七日、最も遅いのは同じく三十七年四月十六日と昭和四十二年、同四十四年の四月十六日夜から四月十七日である。一番多く積もったのは昭和二十年二月二十六日の三七・四㌢、次は昭和十一年二月二十三日の三四・五㌢、昭和二十九年一月二十四日の三一・五㌢、昭和十七年二月二日の三一・五㌢、明治四十一年四月九日の二八・八㌢という順位になる。

これを県外各地と比較して見ると、年間の雪日数は前橋の一六・二日に対し、熊谷は一〇・三日、東京は一二・三日、宇都宮は一八・七日、水戸は一四・四日となっている。

明治三十年以来の前橋の降雪日数は、第二四表のとおりである。

雷

上州の雷は、栃木県とともに有名である。前橋の過去三十年間の一ヵ年の平均電雷日数は二四・四日となっているが、これを東京その他近県各地と比較して見ると、東京は一〇・四日、熊谷は二一・六日、宇都宮二四日、水戸一九・五日であるから、前橋よりは何れも少ないことになる。



第22図　積雪比較表

第25表　電雷日数

年＼月	5月	6月	7月	8月	9月	年間
明治30	2	2	7	9	一	22
〃 45	1	12	7	10	一	34
大正元	3	3	3	14	14	40
昭和 2	4	2	2	4	一	12
〃 20	2	3	14	13	2	35
〃 30	2	1	3	6	4	17
〃 40	0	3	4	5	7	20
〃 41	3	15	9	5	2	34
〃 42	3	10	5	11	1	32

本市で雷の一番多い月は八月で、次は七月、六月である。

前橋の雷は、市の西方榛名山から来るものと、市の南西方御荷鉾山からのものが多く、中でも御荷鉾山のものは「御荷鉾の三束雨」と言って入道雲が湧いたかと思うと麦三束作る間に、もう大粒の雨がやって来ると言われる。また、市の北方赤城山に湧く入道雲は前橋方面に雨を降らさず、本市の東方桐生・大間々方面へ流れることが多い。これは気流の関係からである。

霧

前橋の霧は夏から秋にかけて見られるが、東京その他に比べると遙かに少ない。すなわち前橋の年間平均僅かに八・六日である。これに対し、熊谷は一八・八日、東京は三六・八日、宇都宮は二七・三日、水戸は四五・五日となっている。これを月別にすると、前橋の七月、八月、九月に対し、熊谷も七月、八月、九月、東京は七月から十二月、宇都宮は七月、八月、水戸も七月、八月に多い。

以上は過去六十年間の平均記録によるのであるが、本市の昭和四十二年の霧発生日数は七日、同四十三年は九日となっている。

結　氷

前橋に結氷を見るのは、過去六十年間の平均では十一月二十三日、終日は四月六日となっている。

第26表　結　氷
（昭和43年）

月	結氷日数
1	30
2	27
3	12
4	0
5	0
6	0
7	0
8	0
9	0
10	0
11	2
12	8
計	79

しかし記録によると、最も早かったのは大正六年の十一月六日、最もおそかったのは明治三十七年五月五日である。

年間の結氷日数は、昭和二十六年から三十五年までの十年間の調査によると年七〇・五日、昭和四十二年は八四日、同四十三年は表のとおり七九日となっている。

霜

前橋地方の霜は、例年十一月に入ると薄霜が降り、翌年四月または五月まで遅霜を見ることがある。過去最も早かった結霜は、昭和十一年十月二十三日で、最もおそかったのは、明治三十五年の五月十三日であった。

前橋地方は、農村地帯で養蚕をするので、霜は早いのよりもおそい霜、すなわち春の晩霜の時に被害が大きい。

昭和二十六年以降十年間の調査によると、前橋地方の年間の平均結霜日数は四四・四日、昭和四十二年は五三・〇日、同四十三年は三七日となっている。

ひょう・あられ

前橋では、ひょうは三月から七、八月ごろに降ることが多く時によっては、これが農作物その他に大損害を与えるが、年間を通じて見るとその日数は極めて少ないほうである。

第27表　最近11年間の
ひょう・あられ日数

年	ひょう	あられ
昭和33	—	—
〃 34	2	—
〃 35	—	—
〃 36	—	2
〃 37	1	1
〃 38	1	1
〃 39	—	—
〃 40	—	1
〃 41	3	—
〃 42	1	—
〃 43	2	—

第28表　日照時間

年＼月	明治32	〃 43	昭和2	〃 20	〃 23	〃 40	〃 42	〃 43
1	230.4 (75)	159.2 (52)	226.8 (73)	228.6 (74)	210.2 (68)	220.4 (72)	214.1 (70)	234.9 (76)
2	185.2 (61)	242.3 (80)	197.6 (65)	221.8 (73)	208.9 (66)	230.4 (76)	181.2 (60)	228.1 (73)
3	222.5 (60)	246.3 (67)	233.2 (60)	241.5 (65)	188.6 (51)	250.5 (68)	224.9 (61)	196.5 (53)
4	217.6 (55)	237.4 (60)	222.3 (57)	245.3 (62)	183.1 (47)	196.0 (50)	163.7 (42)	197.2 (50)
5	219.2 (50)	220.6 (51)	258.7 (59)	208.4 (48)	194.0 (45)	181.8 (42)	523.6 (58)	173.6 (40)
6	191.1 (44)	170.6 (39)	252.6 (58)	143.5 (33)	169.4 (39)	142.6 (33)	196.4 (45)	171.0 (39)
7	110.5 (25)	142.8 (32)	190.6 (43)	144.1 (32)	167.3 (38)	143.1 (32)	122.7 (28)	131.5 (30)
8	216.1 (52)	160.7 (38)	216.1 (52)	201.9 (48)	148.5 (36)	244.8 (59)	178.8 (43)	118.9 (28)
9	111.6 (30)	121.3 (33)	141.2 (38)	120.6 (35)	163.3 (44)	148.2 (40)	111.6 (30)	123.9 (33)
10	202.6 (58)	127.0 (37)	186.1 (54)	113.3 (38)	142.7 (41)	218.2 (63)	150.2 (43)	120.0 (34)
11	222.7 (73)	219.0 (72)	194.5 (64)	189.4 (62)	183.9 (60)	185.8 (61)	176.6 (58)	223.4 (73)
12	192.7 (64)	252.4 (84)	212.0 (71)	220.8 (74)	175.5 (59)	178.5 (60)	211.4 (70)	163.2 (54)
年	2,322.2 (52)	2,299.6 (52)	2,531.7 (57)	2,279.4 (51)	2,135.4 (48)	2,340.3 (53)	2,185.2 (49)	2,082.2 (47)

（カッコ内日照率）

日照

前橋地方の、過去三十年間の日照の平均値は、年間の日照時間二、二〇九・八時間、日照率五〇%、不照日数五一・五日となっている。

これを近県各地と比較して見ると、熊谷の日照時間二二〇五時間、日照率五〇%、東京二〇一八時間四五%、宇都宮二〇四九時間四六%、水戸二一一五時間四八%で何れも前橋より少ない。年間の快晴日数も前橋の六九・一日に対し、東京六一・八日、宇都宮六三・一日、水戸六六・六日であるから、これも前橋に晴天が多いことを物語っている。

なお本市における昭和四十二年の記録は、日照時間二一八五・二時間、日照率四九%、不照日数五二日、同四十三年は異状天候と言われ、日照時間二〇八二・二時間、日照率四七%、不照日数五七日であった。

地震

前橋には地震も余りない。地震計に記された地震の総数は、明治三十年以降同四十四年までの十五年間の年平均回数四五回、明治四十五年から昭和七年までの二十一年間の年平均回数二四六回、昭和八年以降二十二年間の一ヵ年平均回数は六三二・二回になっているが、人体に感ずる有感地震は明治三十年以降六十年間の年平均回数

一二・八回で、これは一ヵ月にすると僅か一回位にしか当たらない。

過去における記録を見ると、有感地震の一番多かったのは大正十二年九月一日の関東大地震で、この時は九月中に三七回を記録している。

これに次いで多かったのは、昭和六年九月二十一日の北埼玉を震央とする地震で、この時は有感地震二七回を数えている。昭和三十九年六月十六日の新潟地方の地震の際は、前橋地方でも相当強く感じられたが、この時の記録は一回であった。

過去六十年間の有感地震の年平均回数を月別にすると上の表のとおりである。

また最近の回数を示すとこれも上の表のようになる。

第29表　60年間の有感地震平均回数

月	平均回数
1	0.8
2	0.8
3	0.9
4	0.9
5	1.4
6	1.1
7	1.1
8	0.9
9	1.7
10	1.0
11	1.1
12	1.0
年	12.8

第30表　有感地震回数

年／月	昭和39	40	41	42	43
1	0	2	3	3	3
2	1	2	1	2	0
3	0	0	0	3	2
4	1	2	7	0	0
5	2	1	5	1	3
6	2	0	9	1	1
7	0	1	3	1	3
8	0	0	7	2	2
9	0	8	4	2	1
10	2	1	6	1	1
11	7	2	2	6	1
12	2	0	2	0	0
年	17	19	49	22	17

参考文献
前橋地方気象台編の「群馬県気象累年報」（1897～1956）並びに同気象台の「群馬県気象年報」「群馬県気象月報」及び気象庁発行の「日本気候表の2、地点別月別平年値」（1931～1960）。

第二編　古代上

序　章

一、前橋の地

前橋市は群馬県の南半部の中央にあって、東西一八・〇キロメートル、南北一九・三キロメートルの広い範囲を占め、その中央を北から南にかけて利根川が流れている。昭和二十九年からの町村合併によって、旧前橋市に勢多郡南橋村、芳賀村、桂萱村、木瀬村、荒砥村、上川淵村、下川淵村と、佐波郡上陽村の一部と、群馬郡総社町、清里村、元総社村、東村などのほか、同郡新高尾村の一部を包括したものである。『延喜式』（平安時代の行政細則）記載の郡名によれば、勢多郡、群馬郡、那波郡にまたがっているのであり、これらの郡界も現在までに変遷しているので、上川淵、下川淵両村は旧前橋町とともに、東群馬郡と称した時もある。利根川ももとは勢多郡と群馬、那波両郡との間を東南方に流れていたのである。

これらの広い範囲にあって、勢多郡に属した地域は赤城山南麓の緩傾斜地帯の西半部と、その裾部を削っていた利根川の旧流路の沖積地帯にあたっている。群馬郡と那波郡に属した地域は洪積地帯の平坦な地で、その西方は榛名山の裾部に近い。北に赤城山を、西に榛名山を仰ぎ、その間で利根川が吾妻川を合わせて関東平野に流れ

出したその地帯を占めているのであって、この前橋市の地から関東平野は東南に展開しているのである。

利根川は前橋市からほぼ東南方向に流れて、関東平野を斜めに横切り、太平洋にそそいでいる。赤城山から東方には山が連なり、北部山岳地帯の南際を限って、関東平野の北に屏立（へいりつ）しており、榛名山の南方の諸山も関東平野の西を限っている。関東平野は北と西が山脈、東と南が太平洋でほぼ方形であり、その対角線を利根川が流れているのである。この山脈の裾部には東西、南北に交通路が推定され、利根川の水路とあわせて、前橋市は古くから東上州における交通の要（かなめ）として考えられる地である。

また、前橋市の地は本州の脊梁山脈を北から越えて、関東平野にとりつくところに位置している。新潟県からは清水峠、三国峠を越え、福島県からは尾瀬を抜けて、利根川沿いに沼田市で合し、それが赤城、子持の両山の間を縫って南下したところが前橋市である。この道は渋川市のところで、長野県から鳥居峠を越えて、吾妻川沿いに下る西方との通路を合わせている。前橋市からは南に、関東地方の西部の山脈の麓を伝って埼玉、東京の両都県にいたり、東に関東地方の北部の山脈の根に沿って、栃木県を経て茨城県にいたる。なお、利根川は関東平野を斜めに流れて舟運の便もあった。前橋市はこのように交通路の要地にあたっていて、太平洋と日本海との中央に位置し、しかも日本列島のほぼ中央である。

ところで、日本の国土は、現在東経一二八度から同一四八度まで、北緯二五度から四六度までの間に、東北から西南にかけて、斜めに細長く連なっている島国である。狭い島国ではあるけれども、東北と西南との両端部では、気候に非常なちがいがあり、それにつれて風土に差がある。その中間の地方でも、地形、気候、海流等によって、それぞれ多少の特色をもっている。それゆえ生活の条件がちがっているのである。すなわち先ずこれらの条件にもとずいて古代の生活を考えていかなければならない。

二、旧石器期の前橋

古代と言っても、さかのぼることのできる限度をきめてかからねばならない。そこで、ここでは、人が生活した痕跡が認められるところまでとし、その痕跡にしたがって記述することにした。その痕跡は遺跡や遺物から知ることができるので、それによって生活を推定していくのである。痕跡がないからといって、全く人が住んでいなかったというわけではない。人が住んだか、住まなかったかということについてのよりどころがないだけである。

群馬県では、さきに日本で最初の旧石器が発見され、従来、人類が住んでいなかった、住むことができなかったと言われていた関東ローム層の中から、人類が住んだ痕跡が発見された。本県の相沢忠洋氏が新田郡笠懸村大字岩宿で発見したもので、この石器を含む一連の文化を、相沢氏がその後の研究によって体系化した。このこともまた日本で最初の試みなのである。これを岩宿文化と称している。この時期を無土器文化（土器を伴わない石器のみの文化の意）、先土器文化（土器に先だつ文化の意）、プレ縄文文化（縄文文化より前の文化の意）などとよばれている。

この岩宿文化に属する遺跡は勢多郡宮城村大字苗ヶ島字桝形、同郡大胡町茂木字三ツ屋からも発見された。宮城村も大胡町も本市に隣接した赤城山南麓地帯を占める町村であるので、本市にも旧石器が出土するであろうし、遺跡が存在しないことはなかろうと考えられるが、まだ発見されてはいない。本市でも旧芳賀村や旧桂萱村

などの同じような地理的条件のところでは、発見される可能性はあろう。この旧石器の発見と研究との結果、従来、日本の文化は新石器以降とされていたのが、旧石器までさかのぼることができるようになった。しかし、市内には未発見なのである。

三、縄文期の前橋

石器のみの使用は岩宿文化のころである。石器に土器が加わって、日常生活が営まれるようになると、生活は一大発展をしたことになる。この変化はきわめて大きくとりあげらるべきであろう。

相沢忠洋氏の旧石器の発見も、ローム層中に人工の加わった石器があったことと、その石器が土器を伴っていなかったということにかかっている。土器と伴出する石器には、旧石器に似たものも存在することがあるが、それは、似ているからと言って直ちに旧石器と断定することはできない。伴出した土器と地層とによらねばならない。相沢氏も土器を伴う石器の研究から土器を伴わない石器へと、その探求を進めたのである。したがって、土器のうちの最も古いものを求め、かつ石器の工法に着目して、その発展を知り得た上での研究である。

土器は最初に注目されたものは縄文がつけられていた。そこで縄文土器と名づけられたのである。しかし、調査が進むに従って、縄文を着けないもの、縄文を磨り消したものなどが発見されてきたが、総括して、この時期のものを縄文土器と呼んでいるのである。

縄文文化期になると、岩宿文化と異なって、土器が加わったばかりでなく、住居跡がたしかめられてきた。生活の中心である住居を知ることができてきたことは、生活をかなり具体的に推定するいとぐちが見出されることで、その社会的生活もうかがうことができ、歴史的な考察が加えられるのである。しかし、社会的生活といっても、はじめは少数の集団であって、次第に村落をつくったものであろうが、土器の文様（もんよう）や製作法などに、広い範囲での共通点や変化が見出されるので、集団間の緊密な交渉も考えられてくる。

土器の発生については、まだはっきりしたことは考えられてはいない。自生か継受かの区別もつけられてはいない。縄文文化期の中ごろのものに、中国の殷の時代の銅器の文様に酷似した彫刻文がわが国でも発見されており、銅器の文様の影響を受けたようにも思われる。その他脚台付の土器、コップ型土器など、大陸文化の影響と見られるものもあるので、大陸からの文化の継受が考えられ、あるいは土器の発生も大陸からの継受と見ることができるようである。

土器を使用するに至ったことは画期的なことであり、これにより煮沸や貯蔵という生活上の営みも、一層発展したことであろう。その上、住居跡があることは、家を造っていたことがたしかであり、「冬は穴に宿（ね）、夏は槁（す）に住む」ということが、未開人の生活のように考えられている点からすれば、これは格別の文化の発展を示すもので、縄文文化期には、いわゆる未開人の生活をすでに脱していたものと言わねばならない。また、この時期のものと思われる土器を出土する住居跡が隣接して発見されることもあるが、これは、集団生活をしていたことも考えられるであろう。その早期のころのものとしては、本県ではまだ調査されていないが、前期といわれるころになると、集団的な傾向が認められるようである。この傾向は次第に村落に発展するのであるから、やがてこれらを統率するものの出現も推定される。

石器、土器、住居跡にはおのおの種類が多い。それぞれにそれらの傾向にしたがって分類し、発展の跡をたどることができる。同じ傾向が長く続いたこともあろうし、短日月の間に消滅したものもあろう。同じ傾向が各発展段階で、同じ年数継続していたとは言えない。石器の変化は短い間に急に起こることはあり得なかつたと推定はできても、土器の変化はそれに較べて急速に進歩したことであろう。現在では、土器を早、前、中、後、晩の五期にわけて、その傾向の期間を一、〇〇〇年ぐらいに当てている。この一期間のうちに、早期を除いて、大体三形式の変化を認めている。ただし、この推定ができたのは、縄文文化の研究が進んでいる南関東地帯のことであって、本県ではまだこのような研究にまでいたっていない。前述のように四方からの影響も考えられる上に、特殊な形式のものも発見される。南関東の傾向に準じて考えられているが、早くこの地方のみの変化の系列を造りあげることが必要である。

縄文土器が使用されたのは七、〇〇〇年ぐらいの間と見られている。この長い期間には気候の変化もあったことと考えられる。赤城山の中腹の標高六〇〇㍍（大胡町金丸）のところまでは、縄文土器の早期及び前期といわれるものが発見され、住居跡も発掘調査されている。中期のものはそれよりややさがり、後期になると最も高いところで二五〇㍍である。これがもし気候との関係として見られるならば、早、前期のころは気温が全般的に高く、後期になると、山の高処には住みにくくなったとも見られよう。しかし、晩期のものになると、一五〇㍍以上のところにはほとんど見当たらないし、一般に出土地も稀であり、出土物も少ない。人口の移動・過疎化が考えられる。

本市での縄文文化の遺跡地は、赤城山麓地帯に集中している。その地帯で現在記録されている遺跡数は、早期五個所、前期二二個所、中期五〇個所、後期四三個所、晩期五個所である。中期、後期が著しく多く、前期がこれに次ぎ、早期、晩期は少ない。中期、後期は器型も大きく、器肉も厚いので注目され易いが、早期は薄く、小破片が多いので目立たないことにも関係があろう。しかし、晩期は稀である。人口が中期、後期にくらべてずっと稀薄になったためであろうか。それにしても余りにその差が大であり、他の文化期と併存していたものであろうか。人口が大差なかったとしたならば、後期と併存していたか、あるいは次の弥生文化と併存していたことにもなろう。

四、弥生期の前橋

石器と土器との使用は、土器の形式が変わっても続いたのである。西の方北九州で新形式の土器が起こり、銅器の使用と米作とが同時に発生したと見られているが、この西の弥生文化といわれる新文化がやがて東に伝えられてきた。そして、先ず弥生土器が東国地方に入ってきたが、銅器と米作はこれより遅れたもののようである。

銅器は弥生文化の一条件のように言われているが、本県ではいわゆる銅器がまだ発見されておらず、銅器らしいものすら弥生遺跡からは伴出していない。土器は一般的に作り得るものであるが、銅器は既製品を持ち込まない以上、原料を求めることからはじめなければならない。銅剣に似た石製の剣は発見されているが、銅製品は竪穴式古墳から発見の銅鏃にはじまる。ところが、弥生文化の末期の遺跡と考えられる水沼住居跡（群馬郡倉淵村）からは、その床面に鉄鏃の破片があり、砥石も同時に出土していて、かえって鉄製の刃物が使われていたことが推定

される。この弥生土器は樽式土器と言われるものであるが、同じ樽式土器であっても、その古い形式と見られるものが出土した有笠洞窟遺跡（吾妻郡中之条町）では、大型な半磨製石斧が伴出した。

弥生文化では一般に農耕が行なわれていたとされている。樽式土器には櫛目の波状文と簾状文が着けられているが、この文様をもった土器類は本県では西部や北部の山間部に分布しているのであって、東南の平坦地には極めて稀である。山間地の住居跡発見例も、はたしてこのようなところで、農耕すなわち米作が行なわれたか疑がわしいような地である。米作には適地と水と、その上気候が関係してくる。弥生土器と米作とが同時に北九州に発生しても、その二者がいっしょに東国に移ってきたものときめてしまえないのはこのためである。土器は運搬も自由だし、どこでも製作することができるが、米作はいつ、どこでもと言うわけにはいかない。静岡の登呂遺跡からは櫛目文の土器が出土しており、水田の遺構も発見され、米作が行なわれていたものであるが、東海地方では可能であっても、中部山地――本県地方で可能であるとは言えないであろう。

樽式土器はその系統が長野県のものと関係しているようである。東海地方から中部山地帯に入って、米作を伴っていたものであろうか。本県の西部に入るまでに、米作と離れて移動をしてきたものではなかろうか。有笠洞窟の住居跡からは、おびただしい獣骨が出土しており、とっくり穴遺跡（吾妻郡嬬恋村）でも獣骨が認められた。これらの周囲には到底水田耕作をする余地もないし、気候も寒冷地帯である。水沼遺跡では、籾痕をもった土器の底部が発見されており、甑も伴出した。甑はいわゆる蒸器である。この甑と埦型土器、片口型土器等はその製作の面から見ても、土師器的な要素があり、土師器に直接先行するものと思われる。すなわちこの遺跡は農耕とのある程度の接触があったのではなかろうか。

このように弥生土器使用の遺跡であっても、一般に考えられている条件にあわないものが多い。その社会状態や社会的階層を知ることは非常に困難と言わねばならない。

五、石田川式土器と前橋

樽式土器の使用が終わるころに浅間山が噴火して、浮石を平坦部一円に降らしたようである。その層が本市には数ヵ所発見されて、層下から樽式土器使用の住居跡と土師器の最も古い形式である石田川式土器とが別個の場所から発見され、層上には直接古墳が置かれ、その古墳の墳頂には石田川式土器が配列されているという弥生遺跡と石田川式土器と古墳との関連を証明する好資料が見出された。

この関連からすれば、樽式土器使用の住居が廃棄されて、まだ埋没しきれないころに、浮石層が堆積したのであり、その浮石層が汚染されないうちに古墳が造られたのであり、石田川式土器が使用されている間に浮石層が堆積したことになる。この浮石層によって弥生文化と古墳文化との時代がはっきり区別がつき、土師器は古墳築造よりもやや先に、この地方に伝えられてきたものであることが知られる。

右の浮石は浅間山噴火のもので、地学ではCスコーリアとよばれているものである。このCスコーリアは水沼遺跡でも発見されたものであり、浅間山噴出であることは地学研究の諸氏のすでに認めているところであるが、その噴出年代は一世紀ないし五世紀といわれて、明確でなかった。そこで従来の土師器及び古墳の研究から追いあげて、かつ弥生文化の下限をも勘案して、浮石堆積の時を四世紀始めころと推定されたのである。

そこで、土師器の最も古い形式と考えられている石田川式土器は四世紀始めころより前に発生していることになる。この土器は昭和二十七年に太田市大字米沢の石田川沿岸で発見されたものからはじまる。（今井新次・松島栄「石田川」沿研究）その後、関東の平坦地域で、各所に発見されたが、純粋の形式で多量に出土したのは石田川遺跡のみである。それが四世紀以前にこの地方に入っていたことになるのであって、前橋市内の洪積台地に発見されていることは、すでにこのように発展した土器を使用した人々が住んでいたことになる。

土師器は弥生土器の延長といわれていた。石田川式土器の先駆と見られる土器も、高崎市下佐野町や、伊勢崎市喜多町に出土しているが、これは石田川式土器のように、本県内でも、利根川及び烏川沿岸各所に見られるもので、古墳の最も古い形式と考えられている大応寺古墳（高崎市倉賀野町）、小谷場小古墳（太田市牛沢）などの石槨の縁と同高の層の面からもすでに発見され、横穴式古墳の設置面より下層からも見出されている。玉村町からは竪穴式古墳の墳丘を利用した横穴式古墳のその旧墳丘の下から、石田川式土器使用の住居跡も発見されている。この石田川式土器は、従来の弥生式土器である樽式土器とはもちろん異なり、樽式土器よりも古い形式といわれる高崎市竜見町出土土器、吾妻郡鷹之巣洞窟出土土器、群馬郡倉淵村上ノ久保出土土器、勢多郡大胡町金丸出土土器、本市荒口町前原出土土器などの系統とも言えない。全くこの地方では新しいものである。その石田川式土器発見のころには、この種の土器はあまり知られていなかった。奈良県桜井市の茶臼山古墳の墳頂に同種の土器が配列されていて、その発見で一躍注目されるようになったのである。

本市では後閑町の団地造成工事に際し、浮石層下から発見されており、それ以前に、朝倉町の古墳（仮称朝倉II号古墳）の墳丘上で認められ、昭和四十三年には前橋・後閑天神山古墳で、墳頂面の配列が調査された。この土器の発見は多くが古墳と関係ある地域であり、太田市の石田川のみが古墳からやや離れた低湿地の岸辺で発見されている。また、古墳自体も古いものは平坦地の河川の沿岸や低湿地の周辺に多く、ことに川の合流点付近の游水池の縁辺に分布しているので、このような地帯に、まず石田川式土器使用の人々が住みついて、やがて古墳を築造したように思える。

この川の合流点付近の游水池の周辺は、初期の米作には最も格好の地と考えられる。春先の増水期になると、支流の水は本流に呑み切れないで游水池にたまる。落水期になれば游水池は次第に乾上がるのである。この期間は、米作の灌漑と同じ現象を呈するのであり、自然灌漑と見られる。このような地に石田川式土器が発見されているのである。

樽式土器やそれより古いと考えられる他の弥生土器の大部分が山間地に発見され、米作の不可能を思われる地に多いのに対し、平坦地の低湿地付近に石田川式土器が認められることは、この地帯の米作はこの石田川式土器とともに入り込んできたように考えられる。もし西方から来たものとするならば、櫛目文をもった弥生土器が長野県を通ってきて、群馬県の西部から北部の山間地に分布している間に、この弥生土器を飛び越えて、土師器である石田川式土器が移ってきたものであり、それが平坦地に広まって、弥生土器の分布をはばんだかの感がする。

この土器の分布地帯には、古墳の前身と見られる小石槨が発見されている。これらは墳丘をもたないもので、地下に埋設されている。土器の分布面から掘り込んで構築されており、墳丘をもつ古墳の石槨と同様な構築法によっている。土器と同じ時期のものと見られよう。これらの上にはやがて墳丘をもった竪穴式古墳、次いで横穴式古墳が造られ死屍の埋葬地域が設定されていったようである。

この土器が米作を伴ってきたものと推定されているのであるが、そうなると耕作地が重要視されてくる。米作の可能な地を多く占有することが起こり、財力や権力の基準になる。それらは、その財力、権力によって造った古墳の大小によって知り得られるのであり、ここに支配層の発生が推定される。しかし、本県においては、大古墳の発生が石田川式土器発生後あまり時を経てないように思われるので、すでに先兵としての移住者が石田川式土器、あるいはその先行の土器をもって徐々に入っていたところへ、大古墳の構築能力者が多数の人を引き連れて、大挙して移住してきたように見える。したがって、石田川式土器はその純粋性を保って分布して行った。弥生土器に縄文をつけたものがあり、形も縄文的のものがあるのと比べて、石田川式土器はその形のまま使用されその状態が、かなり長く続いたように考えられる。少なくとも四世紀及び五世紀にはこの土器が使用されたようであり、太田市牛沢の朝子塚古墳墳頂からは、この土器を真似た埴輪壺が出土しており、太田市鶴山古墳の墳丘からは、この種の土器の器台が発見されている。土師器発展上のこの後の形は、須恵器の影響のあるまで、この系統に属しているのである。

六、古墳と前橋

古墳はその墳丘の型から見て、円墳、前方後円墳、方墳、前方後方墳などに分けられる。円墳は古墳築造の期間中始めから終わりまで造られていた型であり、最も一般的なものである。前方後円墳は円墳の前に平面台形の墳丘をつけたものと見られており、円墳に次いで、この地帯では始めから造られ、数が多く、大古墳が多い。方墳は方形の平面をもっている截頭角錐状のもので、小型のものは平面形に比べて低く台状をしているものがあり、この小型のものはかなり古くから造られている。しかし、大型のものは数が少なく、古墳の末期にあらわれている。前方後方墳は前方後円墳のように方墳の前に前方部をつけたもので、本市朝倉町の八幡山古墳のように、日本最大の前方後方墳もある。これは五世紀ごろの築造と見られているが、数は極めて稀である。

また、古墳は、その内部構造からは、竪穴式、横穴式の両古墳に区別される。竪穴式古墳は竪穴を掘って、そのうちに粘土槨、石槨などを造り込んで、土をかぶせたものであり、横穴式古墳は石室に外部に通じる出入路をつけて、これに土を盛り、墳丘の形をととのえたもので、墳丘の裾部に開口しているものである。竪穴式古墳には墳丘のあるものと、これを欠いたものとがあるが、その内部構造の類似によって、墳丘を欠いていても、古墳として取扱われている。なお、横穴式古墳と同じころのものに、崖に横穴を掘り込んだものもあるが、本市内にはまだ発見されておらず、恐らく、存在していないものと思われる。

墳丘をもった古墳で最も古いものは、竪穴式古墳の粘土槨である。後閑天神山古墳は前方後円墳で、朝倉Ⅱ号古墳は円墳で、ともに粘土槨をもっていた。後閑天神山古墳は現在発掘調査されているもののうち最も古いものと推定され、浅間山の浮石層上にあり、石田川式土器を墳頂面に配列してあった。これに反し最も新しいものは横穴式の総社町の蛇穴山古墳である。これは截石で磨きをかけられた石室をもっている。大体、竪穴式古墳は六世紀終わりごろまで、横穴式古墳は六世紀中ごろからで、本県の古墳築造の期間は、全部を通して四世紀中ごろから八世紀中ごろの約四〇〇年間と考えられる。

この四〇〇年間のうち、竪穴式古墳の築造期間は約二五〇年で、一墓穴に一屍体を納めていたが、墳丘をもた

ないものが多かったようである。その上、内部構造を特に造らないで素掘り直葬というものがあったと見られる。このような埋葬法では発見しにくいので、ただ推定するだけである。大化改新のころ（七世紀中ごろ）でさえ、その詔のうちに「庶民亡なむ時には、地に収め埋めよ」、とあり、「封かずして平ならしめよ」ともあって、素掘りで墳丘を盛りあげないものが続いていたものであろう。しかし、横穴式古墳になると、一石室に多数を納入することになってくるのであって、竪穴式古墳の内部構造での一穴一体を、その後は一石室にまとめて埋葬したように思われる例もある。これは大体最初に石室を造って、順次納入したもののようである。

古墳から当時の社会を見る場合には、すでに階層が存在していたことを前提としなければならない。米作を伴った土器の発生とあまり時間差がなく古墳が造られているからである。この意味からすれば、弥生土器使用の間にすでに階層が起こっていたことになろう。しかし、本県ではそのような状態はまだはっきりしない。

古墳は、本県で自生したものではあるまい。古墳の発生していた地域から継受したものであろう。それは近畿地方から伝わったものと考えられる。すでに円墳や前方後円墳が成立していた地域から移されたものであろう。これによって急に大前方後円墳が出現したのであるから、それには有力な豪族が多数の人員を率いて移動してきて、その集団の習慣をこの地帯に植えつけて、繁栄させたものと見られる。先住の人々の風俗習慣に改変されたり、圧倒されることなく、築造されたものであろう。

古墳は言うまでもなく墳墓であるから、保守的なものと考えられる。これを改変することは精神的な面までの改造が必要とされる。もし、その改造がなされないならば、先住者はその習慣を固執するであろうし、外観は新形式を採用するとしても、内部構造は従来のしきたりを踏襲するであろう。それが新形式で、先進地帯のそのままの受容であるならば、この地帯の旧習によったものとは言えない。本市の後閑天神山古墳も朝倉Ⅱ号古墳も本県最古の古墳と考えられるものであり、いずれも粘土槨で、先進地帯のものをそのまま受容したと見られる。やがて白石稲荷山古墳の礫槨（藤岡市）や鶴山古墳の石槨があらわれる。これらは近畿地方のいわゆる竪穴式石室とは異なったものであり、鶴山古墳の石槨の如きは箱式石棺の系統のもので、後閑天神山古墳に比べて、かなり時代のさがったものと考えられ、ともに五世紀終わり乃至六世紀始めごろの築造と見られる。すなわち、白石、鶴山両古墳は、ともにこの地の旧習を加味した築造ではなかろうか。

横穴式古墳でも、継受の型は合葬用のものであったと推定されるが、現在発見されているもので、竪穴式古墳の単独葬の習慣を受けた単独葬用の石室は、合葬用の石室の広さの二分の一となっている。長さは等しいが、幅が二分の一なのである。すなわち、この単独葬用の石室の埋葬部の長さと幅は、竪穴式石槨の寸法とほぼ等しくなっている。保守性のあらわれと見られる。しかし、石室入口の構造は、本県にあっては近畿地方と同じであるが、埼玉県の荒川以南及び行田市から栃木県の栃木市を結ぶ線より東側では、横穴の入口の構造に似ている。横穴の構築の影響のように思われる。このような点に新文化の移植と旧習との接触が、その移植の速度と実施力とにより表現が異なってくることが知られる。これらの点から見れば、本県への古墳の移植は、すでに前住地において階層分化の行なわれていた集団が、大勢力を以て移住してきたものと見られる。もちろんこの大集団の先行者としてすでに多少の移住があったであろう。ただし、古墳文化をもった集団の移動は漸進的に行なわれたものではなく、近畿地方から一挙に群馬の地に移ったものと考えられる。近畿地方の大豪族が隷属者をあげて移住してきたものであろう。

本市には、かつて古墳が至るところに見出された。そのうち特に密集しているものを古墳群とよんでいる。利根川の旧流路の沿岸及び赤城山麓地域は、その密集の度が大である。これらの古墳群は、一期に成立したものではない。古墳の発生期から徐々に造られて、遂に密集したのであって、その内容も竪穴式、横穴式の別のみならず、外形もあわせて大小多種多様である。ことに横穴式古墳になると、その構築上、墳丘を必ずもっているので注目され易く、急激に墳墓が増加したように見えるがその実は、竪穴式系の墳墓の多数を一穴にまとめた形であるので、大古墳構築能力が急増したものと見ることは早計であろう。

これらの古墳群内には大小、各種の内容が含まれているのであって、大は小よりも階層の上位のものの墳墓と一応考えられよう。この大古墳もその周囲の小古墳にあわせてはじめて権力、財力の象徴として見ることができるのであって、この点からその古墳群地帯に権威を張っていた大豪族の墳墓と見ることが可能となる。本県にはこの種の古墳群乃至大古墳が各所に存在しているのであって、これを一系の豪族の墳墓とすることについては疑問が起こる。各古墳群について、その地の豪族を考えて見る必要があろう。

七、地方豪族と前橋

『日本書紀』（わが国最初の歴史書、八世紀始編修）には、崇神天皇の四十八年に、皇子豊城入彦命が東国を治めることを命ぜられたとあって、その注に豊城入彦命は上毛野君、下毛野君の始祖であると記してある。同書の景行天皇の五十五年には、彦狭島王を東山道十五国都督としたが、王は途中で病死し、東国の人々が上野国に葬ったとある。同じ五十六年の条には彦狭島王の子御諸別王が東国を治め、その子孫が繁栄していると書いてある。これらの記事は上毛野君の伝承によったものであろうが、豊城入彦命にしても、彦狭島王、御諸別王にしても、その名はいずれも七世紀ごろの作成とみられるのであって、実在の人物としては扱えないものである。なお、崇神天皇四十八年は西暦前五〇年、景行天皇五十五年は同一二五年にあたる。

この『日本書紀』の皇子の東行の記事は、年代から見てもはるかに差のあることであって、土師器や古墳からの推定年代とは合致しない。特定の人物が天皇の命によって一世紀あるいは二世紀ごろにこの地に来たと考えることはできないが、上毛野君には、その祖先達が近畿地方から多数移住してきたという伝承があったのではなかろうか。それが七世紀始めごろから系図や歴史書が作られるようになって、祖先の名が求められ、作り出されたものと見られる。

日本の歴史も七世紀の始めごろからはかなりはっきりしている。それさえも聖徳太子の事については七世紀の終わりごろにできた仏説化された伝記から採用された部分が多く、事実を記しているとは言えない点が認められる。ましてそれ以前の事については神話化され、伝説化されたものが多いのであって、欽明天皇の紀でさえ、百済の歴史書からとったものが多い。どこまでを実録として見てよいかは、一々について検討しなければならない。

上毛野の地方について記されている部分はきわめて少ない。上野君についても天皇の側近にあったような書きぶりであり、上毛野地方に住んでいたと見えるのは、安閑天皇紀にある上毛野君小熊についてだけである。上毛野地方には大小の古墳が八千五百基も調査されているのであり、大豪族が住んでいたことは推定されるけれど

も、これらの大古墳に上毛野君の歴代の特定人が埋葬されているという記事もないし、それらの記事があったとしても江戸時代の中ごろ以降の人々が想像して書いたもので、それを採用することはできない。

たとえば総社の二子山古墳から豪華な造りの太刀が出土した。その当時の学者は『日本書紀』の豊城入彦命の記事によって、その太刀は豊城入彦命のものであるべきだとして、京都の某家に送って鑑定して貰い、二子山古墳を豊城入彦命の墳墓としたが、実際には二子山古墳は七世紀始めごろのもので、豊城入彦命が『日本書紀』に記載されているとおりの人物であったとしても、六五〇年あまりも差のあるものである。よって総社二子山古墳は、七世紀始めごろの大豪族の墳墓とまず考えられるわけである。

しかし、七世紀になると、その後半には上毛野地方にいた豪族の名も多少はつきりしてくる。それらの豪族から前半のころを推定することも可能であろう。ことに地名とその土地に残っていた古墳のうち七世紀前半のものとを資料にして、その地に豪族をあてはめて見ることも、その地の歴史を考えてみる一方法である。八世紀中ごろに勢多郡の郡司に上毛野朝臣足人（かみつけぬのあそみたるひと）という人物が『続日本紀』に記されている。郡司にはまず国造（くにのみやつこ）が採用されることが『日本書紀』の大化改新の詔や大宝律令の注釈書である『令集解』などに見えているので、勢多郡の地は上毛野国造の直轄地であったと推定され、上毛野国造は『国造本紀』では上毛野君であると見られるので、その系統のものが郡司となっていると考えられるのである。それに旧勢多郡の中央部にあたる現在の本市東大室、西大室両町にかけては、七世紀前半の大小の古墳が群在していて、とりわけ前二子、中二子、後二子の三大前方後円墳は、いづれも大古墳で、しかもそれが相並んでいるということは、上毛野国でも最上層の豪族の墳墓と見られるのである。そこで、この豪族としては、この上毛野地方を支配していた上毛野君が浮かんで来るが、この上

第31表　石器時代の遺跡とローム層の編年　　相沢忠洋氏編

旧石器時代	10万年	下部ローム	第4紀、洪積世 火山活動により泥熔岩流、火山灰河川礫層上に、関東ローム堆積をつづける 上位段丘形成	不二山遺跡＝勢多郡新里村	握槌形石器・礫器	洪積世後期の人骨	明石人骨 兵庫県明石市
	7万年	中部ローム	赤城・榛名火山活動する 中位段丘形成	権現山遺跡＝伊勢崎市豊城町 岩宿遺跡＝新田郡笠懸村	打割器・掻器・握槌 利片石器・握槌		葛生人骨 栃木県佐野市葛生町 牛川人骨
	3万年 2万年 1万年	上部ローム	浅間火山活動する 下位段丘形成 関東ローム堆積終る	赤城山麓に多くの遺跡：清水山遺跡＝勢多郡新里村 三屋遺跡＝大胡町茂木 枡形遺跡＝勢多郡宮城村 元宿遺跡＝勢多郡新里村 石山遺跡＝佐波郡赤堀村	削器・尖頭器・打器・剝片石器・細石刃・石刃・掻器・礫器・		三ヶ日人骨 静岡県引佐郡
新石器	94年 84年	黎明期一縄文文化	沖積層堆積始まる	西鹿田遺跡＝新田郡笠懸村 峯岸山遺跡＝佐波郡赤堀村	土製品・土器出現 石斧・石鏃 竪穴住居遺構	隆起線文土器 爪形文土器 縄線文土器 撚糸文土器 押形文土器	栃原人骨 長野県

毛野君は上毛野の地方が大君の朝廷の組織に入れられ、国を称するようになると、その支配者として国造になったはずである。それ以後上毛野君というのは氏族の誇称となったのであろう。

このようなわけで、七世紀の始めからは、特定の個人にはあてはまらないが、上毛野君というようなすでに氏族の名となっていたものと古墳とをあわせて考えることができるのであり、六世紀の後半にもしいてさかのぼることができよう。それゆえ、七世紀以後はすでにある歴史書によって、多少の批判を加えながら歴史を書くことができようが、それ以前については全く古墳やその地の考古学の研究結果などを資料として、社会状態を推定していかなければならない。

そこで以下考古学の研究結果をまとめながら、社会状態を述べ、文献にあるものはこれを加えながら、社会の発展、やがて政治上の問題に触れて、大宝律令によって確立する国司政治に及ぼすことにする。

第一章　古代人の生活

石器と土器との使用

序　節

古代人の生活というと石器と土器とがすぐ浮かんで来るが、石器と土器とを使用した生活といっても、食物を得るための石器や、これをいれる器があったのであるから、一般に考えられているように、生血を吸っていたのでもなく、年中、裸でいたわけでもない。『日本書紀』の景行天皇四十年の条には、「其の東の夷の中に、蝦夷は是尤だ強し。……冬は穴に宿、夏は槲に住む。毛を衣き血を飲みて、……山に登ること飛ぶ禽の如く、草を行ること走ぐる獣の如し」などと記している。「東夷」と「蝦夷」とに書き分けてあるが、夷も蝦夷も、また別に毛人とも書いてあるが、いずれも「えみし」と訓んで、同じものを指しているのである。

景行天皇四十年というのは、『日本書紀』の年代の立てかたからみると、西暦一一〇年にあたるので、その編修者は、八世紀のはじめごろに、それから六〇〇年前のことを、右のように想像して書いたのであろうが、そのころには、実際はこの地方でもすでに弥生文化が伝播していたと見られるので、もはや、獣や鳥と同じような生活ではあり得なかったのであって、さらにそのころよりもはるかに古い七、〇〇〇年前ごろには、人の智恵の発展に応じて工夫された家に住んでいたと見られ、裸で土器を作っている画が教科書にさえのせられたことがあったが、寒さを防ぐことも知っていただろうし、衣類も考えられてきていた。

石器というのは、生活用具として利用された石なのである。それには未加工のものと、加工されたものとがある。刃物として使われることが生活上は最高の利用であり、石は大部分が刃物に作られているので、石器と言えば多くの場合刃物と見られている。しかし、刃物でなく利用されているものももちろんある。

石器では石斧といわれるものが最も一般的であり、形は色々と変化しているが、石器のはじめころから終わりまで使用されていた。次に石鏃が長い間使用され、その他石鎗、石匙、石剣など刃物に類するものである。石斧はその名のように斧として使われたと言われていたが、最近は鍬として用いられたという説も出てきた。斧とし

ての使用は、そのままで樹木を切断できたでもあろうし、大木は焼き焦がして、炭の部分を削り落としたこともあろう。大型の薄刃のものは鍬のように用いられることも可能である。石鏃は篠竹につけて使用されたが、小さなもので猛獣を射とめることは困難であったろう。これには「とりかぶと」という草の根をすって、毒矢として用いられたといわれている。この毒を「ぶす」というのである。石鏃には大型のものは手鏃に、小型のものは投鏃に用いられたかも知れない。石匙は肉はぎであろうと言われている。石剣は剣を模したものであろうが、はたして刃物として使用されたかどうかは不明であり、むしろ、一種の権威の象徴的なものではなかったろうか。

このほか、石器には石棒、石皿、蜂巣石、凹石、叩石、磨石などがある。石棒は小型のものは穀類や木の実を粉末にするために用いられたと見られるが、大型のものには巨大なものがあり、これも権威の象徴物であろう。石皿は粉末にするための容器、蜂巣石は発火用具、その他それぞれの用途があったものであろう。このうち大型の石棒は石剣と同様に石器使用の終わりごろに出現するもので、そのころには権威を示す必要が起こっていたものとみえる。

土器は土で器を造り、これを焼いて仕上げたものである。はじめは尖り底であったが、縄文文化の前期からは平底となった。平底のはじめごろのものには、胎土に繊維を入れたものがある。その後のものはたいてい紐作りにされ、捲き上げや積み上げの方法で、紐状にした土を積み重ねて形を造ったものである。これらの土器の表面には山型や穀粒状の型を押したり、撚り糸状をつけたり篦の先で引掻いたり、条を入れたり、篠竹を割って筋を引いたり、その先を逆にして爪型を置いたりしたものから、粘土の紐をはりつけたもの、貝殻の縁で傷をつけたものなど各種の方法で模様をつけている。しかし、総体的に縄文がつけてあり、紐を撚り合わしたものを器面にころがして、整形した結果とされている。後期からはその縄文を部分的にすり消して模様を表現したものが出て来た。

土器の形もはじめは深鉢型であったが、甕型が起こり、壺型が加わり、浅鉢型、皿型、椀型などが次第にできて、後期には現在の土瓶のような注口土器と言われるものまでも出来て、器種はますます多様になってきた。同じ基本型でも、口縁部のデザインの変化や模様の置き方などによって、さらに複雑になっている。これらを分類して、その製作の発展に従って新古の順序をつけて、それにおおよその年代をあてたものが考え出された。これを土器の編年というのである。縄文土器の編年は、南関東地帯では早くから調査研究が進んでいて、大成され、東北地方でもほぼ出来上がっている。長野県でも縄文文化の研究は近年著しい発展をした。本県では、滝沢遺跡のように早く学術的に調査されたものがあるが、その後の調査が渋滞していて、まだ、この地方のものの編年をするまでには至っていない。目下は南関東の編年を基準として、発掘調査に努力されている。よって、本章では細分類された編年によらずに、早、前、中、後、晩の五期の区分にしたがって取り扱っていくことにする。

弥生土器については、上ノ久保（群馬郡倉淵村）、上人見（碓氷郡松井田町）、鷹之巣洞窟（吾妻郡吾妻町）などの遺跡から比較的古い形のものが出土しており、次いで、有笠山（吾妻郡中之条町）、飯野（邑楽郡板倉町）、金丸（勢多郡大胡町）、前原（本市荒口町）、竜見町（高崎市竜見町）、幅（高崎市並榎町）などの遺跡からも発見されている。このうち飯野遺跡を除いて、ほとんど平坦地の西北周辺から西部の山地にかけての分布であり、有笠山及び前原の二遺跡以外では住居跡の発掘調査がなされていない。竜見町、幅の両遺跡は平坦で、烏川の左岸の台地上であり、前原遺跡は赤城山南麓の緩傾斜の裾野で、荒砥川の左岸に位置しているので、水田耕作との関係も考えられるが、飯野遺跡は利根川本流の河川敷地帯とも見ら

れる低地である。上人見遺跡は碓氷川の左岸の台地、金丸遺跡は標高六〇〇㍍の赤城山の中腹、上ノ久保遺跡は烏川上流の渓谷上の台地、鷹之巣及び有笠山の両遺跡は吾妻郡の奥の岩山の山頂に近い洞窟である。これらの遺跡の解釈についてはむずかしく、一概に水田耕作を基準にして解決することはできない。竜見町、幅及び飯野等の遺跡については南関東との関係も考えねばならない。

弥生文化に入っても、石器は土器とともに使用されていたようである。有笠山遺跡からは蛤刃状の半磨製の巨大な石斧が二個出土していて、石器の使用が裏付けられる。この有笠山遺跡の土器は甕型土器や埦型、片口型などがあり、この組み合わせは幅遺跡や水沼遺跡などとやや似ているが、甕型土器の形は縄文文化的であり、口縁部に縄文がつけてあり、胴部には櫛目で模様が画かれて、縦線で区画され、そこに横に波状文が置かれている。縄文土器の影響が強い。小形の甕型土器には全面に縄文がつけられていた。樽式土器の先駆として見られよう。

水沼遺跡からは鏃状の鉄器や砥石が出ており、石器は全く見当たらず、すでに鉄器使用になったようである。また、土製の紡錘車が発見されている。土器には二様が認められ長頸の壺型土器、頸部がゆるい曲線状であまりしまりのない甕型土器、脚付の甕型土器等の櫛目文付のものと、埦型（あるいは坏型）、片口型などの無文、赤焼きの土師器に似たものである。これらの土器の組み合わせは剣崎遺跡（高崎市剣崎町）の土器に似ているが、長頸甕型、埦型、片口型などの土器は幅遺跡の組み合わせに通じる。この埦型及び片口型の土器は幅遺跡のは他の土器類と同じ焼きを示しているが、剣崎及び水沼両遺跡の焼き方は櫛目文のあるものとは全く異なっている。むしろ、土師器的と見た方が妥当である。すなわち、これらから綜合して見ると、水沼遺跡は弥生文化の最末期の様相を示すものと言えよう。

この水沼遺跡は樽式と命名された勢多郡赤城村大字樽の遺跡と酷似しているのであって、樽式土器を使用する住居跡のうちで、発掘調査された最も典型的なものである。この土器に付けられた櫛目文には、胴部一杯につけられた波状文と、頸部にめぐらされた簾状文とが特長であり、他の地域で出土したものも、この文様によって判別されている。これに土師器的なものが加わっているのであり、あるいは石田川式土器と併行していたものではなかろうか。

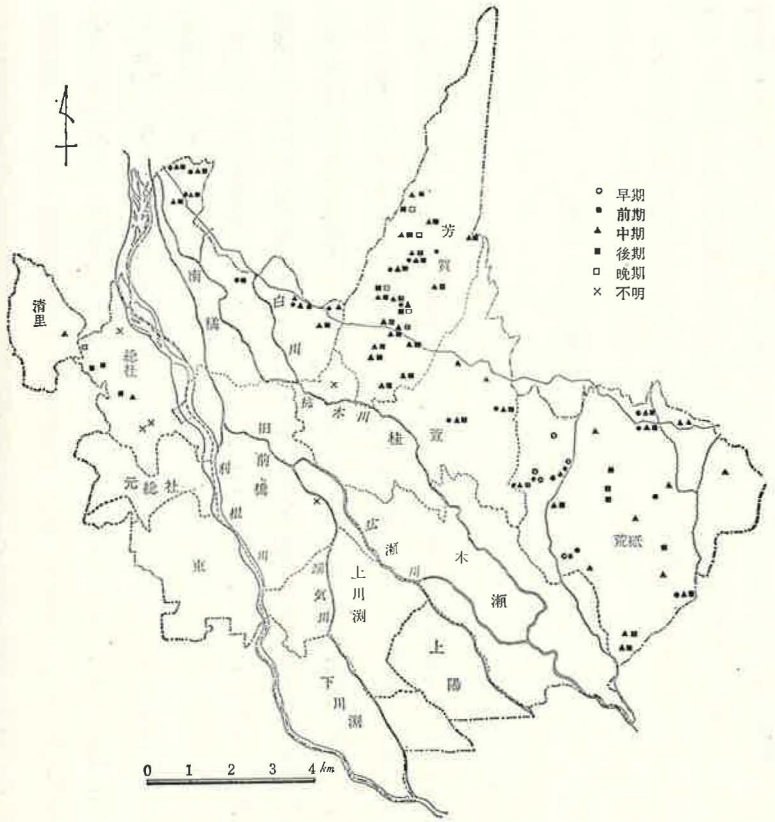
木器の使用も考えられないことはない。ことに弥生文化のころには、静岡市の登呂遺跡や同県の狩野川地帯の遺跡及び千葉県の賀茂遺跡からは、多数のまた多種類の木器が発見されているので、群馬でも発見されていいはずであるが、まだ木器として確実にきめることのできるようなものが、出ていない。本市に近い高崎市の井野から、昭和二十八年に、加工された木片を樽式土器片とともに発掘したが、何に使用されたものか不明である。そのほかにはそれらしいものをまだ見ていない。それゆえ木器が使用されたということは、はっきりしないのである。

第一節　縄文土器

市内の縄文土器を出土する遺跡地としては、現在明らかにされているだけで八〇個所以上にのぼっている。いずれも、赤城山麓にあたる地帯である。このほかにもまだ旧上川淵、旧下川淵両村にもあるであろうし、芳賀の金丸地区にも見出だされるであろう。宮城、大胡、富士見、北橘などの勢多郡の町村で、前橋の周辺に

繋がる地帯をもあわせ考えなければならない。古代人の生活が、現在の行政区画ではっきりと区別されていたわけではないからである。

市内の縄文文化の遺跡地のうちで、発掘調査されたところは、総社町総社の産業道路西遺跡、同東遺跡、小神明町の敷石住居跡、笂井町八日市の笂井遺跡の四個所だけであり、笂井遺跡は完全発掘はなされず、他の三遺跡のみが群馬大学史学研究室によって、辛うじて学術的発掘調査を経ている。



第23図　前橋市縄文土器分布図

る。なお、幸塚町の北部白川右岸の水田地帯で、土地改良工事中、多数の土器片や石器の出土を見た。土器は主として縄文後期のものであるが、精巧な耳飾りもあり、そこは利根川の旧流路の一つである桃ノ木川にも近く、低地であるので、その遺跡の性格は判断しがたい。白川の流れによる漂流物にしては狭い範囲に多数出土しているし、住居跡とも考えられない。

また旧高田町字林(現在の文京町三丁目)には住居跡が発見され、中期の土器を含み、炉跡もあったと伝えられている。この遺跡の発見された場所は、洪積台地の上で、旧利根川の流路にあたる広瀬川の岸の崖上にあたっている。白川沿岸の沖積地とちがって、洪積紀に積もった地層から発見されたのであるから、この台地上からは縄文文化の遺跡がさらに発見されてもよさそうであるが、土師器使用の遺跡が諸方に発見されているのに比べて、右の遺跡以外は目下のところ見聞していない。住居の占地について差異があるためであろうか。

本市における縄文土器出土地は次表のようである。

早期　五個所
富田町上富田
〃　高石
〃　中富田
〃　中前
今井町道上

前期　二二個所

田口町岡市
〃　入田
〃　天神窪
日輪寺町諏訪
上細井町正間久保
〃　丑子塚
嶺町桂正田
〃　東公田
小坂子町四門戸
〃　十二
亀泉町如意寺西
江木町農業試験場付近
富田町吹地
〃　中富田
〃　高石
〃　中前
今井町道上
下大屋町八光
〃　大正用水北

西大室町五料山
荒子町舞台
飯土井町二ノ堰

中期　五九個所

田口町岡市・橘山
〃　入田
〃　天神窪
〃　千手堂
青柳町
上細井町新田
〃　正間久保
〃　荒屋敷
〃　田ノ口
勝沢町高鼻
〃　番城
嶺町八幡前・藤小暮
〃　十二原・入替戸
〃　東公田

〃　桂正田
〃　東公田
鳥取町北原
〃　宮原・藤塚・庚申塚
〃　前原
〃　東原
端気町後原
五代町大日
〃　中原・芝久保山街道
〃　江戸屋敷
小坂子町白鳥
〃　下大平
〃　壱町田・釜の口・鍛治皆戸
〃　四門戸
上泉町
江木町県立保養所北
江木町農業試験場付近
亀泉町如意寺西
富田町吹地

〃　中前
荒口町前田
二之宮町千足
〃　新土塚・前原
〃　萩原
泉沢町中島
下大屋町八光
〃　大正用水北
西大室町小稲荷
〃　大稲荷
〃　二子山
〃　五料山
荒子町阿久山・舞台
〃　新屋
飯土町樋口
〃　二ノ堰

後期　五三個所
総社町高井字膏薬

総社町総社大屋敷
田口町岡市・橘山
〃　入田
〃　天神窪
〃　千手堂
日輪寺町諏訪
上細井町天王・天王浦
〃　荒屋敷
勝沢町高鼻
〃　新次郎
〃　番城
嶺町八幡前・藤小暮
〃　大林下
〃　十二原・入替戸
〃　東公田
〃　桂正田
小神明町
鳥取町北原
〃　宮原・藤塚・庚申塚

〃　前原
〃　東原
五代町大日
〃　中原・芝久保山街道
〃　江戸屋敷
小坂子町白鳥
〃　下大平
〃　壱町田・釜ノ口・鍛治皆戸
〃　四門戸
上泉町
亀泉町如意寺西
江木町農業試験場付近
富田町吹地
筑井町八日市
荒口町前田
下大屋町八光
〃　大正用水北
荒子町中鶴ケ谷
〃　下鶴ケ谷

飯土井町下天神
〃　二ノ堰
二之宮町新土塚・前原
〃　萩原

晩期　六個所
総社町高井字下道
勝沢町新次郎
嶺町大林下
〃　十二原・入替戸
小坂子町四門戸

1　笂井遺跡

笂井町字八日市にある遺跡で、その地は利根川の旧流路と荒砥川の合流点に、両川が削りあげた三角尖り状の低台地の突端近くに位置している。大正十五年二月に発見されたもので、早くからその名が知られていたけれども、学術的に発掘調査をなされたものではなさそうである。現在はそのまま埋堰されて畑となっている。

この遺跡については、柴田常恵、谷川磐雄共著の『石器時代の住居跡』に報告されている。それによると「開墾の結果として現われたものである。石をもって囲める炉の工合などは、滝沢のものと殆んど同様なるが、床には石が敷かれて居って、高ヶ坂に於けると同じであった」とある。高ヶ坂とはこの報告の写真を見ると、石はいずれも河原石、炉は五角形で、石材を平らに使用しているように見られる。住居の規模、柱穴、伴出遺物等は不明である。

これらのことから、笂井遺跡は敷石住居跡とみられるが、時期を判定する材料はほとんどない。しかし、敷石住居跡である点では時期が限定されてくるし、炉の形、その石材の使用法からみて、本県地方では、敷石住居跡の時期の後半に属するものと考えられる。したがって、縄文文化後期の前半とみられよう。

2　小神明遺跡

小神明町にある遺跡で、ここは赤城山南麓の西によった裾野の傾斜地に位置している。付近を藤沢川が流れ、その右岸にあたる。昭和三十七年十二月一日と同十八日の両日に、発掘調査された。開田作業のため露出した石囲い炉と敷石を清掃し、住居跡の規模を確かめて実測されたものである。

炉は直径七〇㌢の円形の石囲い炉である。円形といっても、河原石で六角形に囲って炉を造っている。敷石はその炉縁を延長したように東やや南の方向に、幅約一㍍、長さ二㍍二〇で、先端が少し細くなるように、河原石が敷かれていた。この敷石はその縁石の縁を意識して置いたようである。

第24図　小神明遺跡敷石

この炉及び敷石を基準にしてみると、炉縁から北へ五〇㌢及び一八〇㌢のところに穴があり、後者は直径二五㌢、深さ三六㌢である。また、炉の西と南にも炉縁からそれぞれ一五〇㌢、一六〇㌢離れ、径二五㌢、深さ三一㌢と径四〇㌢、深四九㌢の穴がある。東側は開田作業のため攪乱されており、明確にすることができなかった。これらは炉縁から距離がほぼ等しく、柱穴ではないかと考えられる。柱穴とするならば、住居の形状ははっきりとしないが、敷石とも考えあわせて、その住居跡の規模は直径五㍍前後と推定される。

炉は深さ三五㌢、安山岩の河原石を平らに使用しており、炉の内側は攪乱されていたが、多少焼土も残っており、炉縁の石にも火熱の痕跡が認められた。出土遺物には石器は認められず、土器破片だけで、それも数が少ない。敷石の近くの凹状の穴から出土した破片が四片のみである。一片は口縁部破片で、渦巻状の弱い隆起文が施文してあり、他の破片には地文の縄文を磨り消し、その上に沈線文が加えられていた。

この遺跡は概略右のような状態であるが、敷石は縁石の使用法からみて、炉を中心とした周囲全体にあったとは見られないし、さらに東方に延びているものとも見られない。この敷石に似た敷石遺構は寸嵐遺跡（神奈川県）や小室遺跡（勢多郡北橘村）などにも見られるもので、これは炉を中心とした敷石住居跡にさらに柄鏡の柄のように造り出した部分である。しかし、これらに比較するに、小神明遺跡の敷石部分は炉から直接造り出した感じがする。

また、この遺跡には柱穴と見られる穴が三個あり、東側は調査不能であったが、三個の柱穴からみるならば、上屋がその構造は兎も角構架されていたことは推定され、炉は使用された痕跡が見られ、住居の機能をはたし得た遺構である。この意味から小神明住居跡とよぶことができよう。ただし、他の当時の一般の住居跡と比較した場合、一部にのみ特殊な敷石を有することは異例である。小室遺跡においては、その造り出し部の端の前方に蜂巣石を石組みで囲った遺構があり、特殊な通路と見たが、小神明遺跡においては住居の内に包括される部分であり、通路とはしがたい。しかし、屋内にあっても、宗教的な特殊な場であり、あるいは神事執行のための通路であったかも知れない。

この遺跡は敷石を有する点、炉の形状及びその石材の使用法等が、笊井遺跡、簗瀬遺跡（安中市）等に類似していることと、出土遺物等からみて、縄文文化後期前半と考えられる。

3　産業道路東遺跡

総社町総社丁間稲荷の北にある遺跡である。この地は榛名山東麓から続く緩傾斜地の東縁が浸蝕されて幅広い水田地帯を作り、その上に、緩傾斜地の東縁が東流する八幡川、滝川などの小河流によって、開析されたところの低台地の南端にあたっている。水田地帯から比高二～三㍍である。この中央をほぼ南北に産業道路が新設され、その道路敷に面した遺跡地の東側で土取り作業が始められ、石囲いの炉が発見されたのである。昭和四十一年七月二、三日の二日間調査が実施された。

遺跡付近の地層は、上部ローム層の上にさらに堆積層が存在しているのであるが、遺跡地では、小河流の浸蝕、新堆積などによって、局部的に異なっており、ローム層は認められなかった。この地層の状態は、土取り作業による破壊と相俟って、住居跡の床面の周縁または壁を正確に把握することができない。炉を中心とした径六㍍の範囲が調査されたが、大小の穴が多数存在して、いずれが住居の柱穴であるのか決定されなかった。しかし、炉から二㍍五〇の付近に、土の硬さや色の相違の見られるところがあり、その内方（うちのり）での穴の存在も限られ

るので、床面を推定し、この住居跡は径五㍍程度と考えられる。

炉は石で囲われ、東側西側ともに二石、南側は一石で、間隔をとって設置されている。北側は石を置いた痕跡があった。その規模は南北で八〇㌢㍍、東西で五〇㌢㍍の長方形である。出土遺物は縄文土器破片が十数片にすぎなかったが、いずれも地文の縄文に沈線を施したものと、その沈線の間を磨消したもので、縄文文化中期後半、南関東の編年の加曾利E式に比定されるものである。

以上のように、住居の形、規模、柱穴等明確にはしがたいが、炉を中心とする径五㍍程度の縄文文化中期後半の住居跡と考えられる。

4　産業道路西遺跡

総社町総社二八八四、二八八五番地にまたがる遺跡である。産業道路東遺跡の西北方約一五㍍の低台地のほぼ中央、産業道路の西側にある。この遺跡も土取り作業中に石囲いの炉が発見され、調査に至ったものであるが、すでに炉の面まで掘り進められ、炉内の埋設土器は取り上げられており、床面も確認できない状態になっていた。炉から南の畑は所有者が異なり、急な調査には間に合わず、発掘調査はされていない。

遺跡付近の地層は東遺跡と同様である。土取り作業による地層の断面から見ると、上から第一層は浮石混りの耕作土、第二層はやや黒味をおびた土層、第三層は茶色の土層、第四層は硬い茶褐色土層、第五層はローム層となっている。炉縁の石からみると第四層の上面を床面としていたものであり、また、この断面からすると、住居の掘り込みは認められず、平地式の住居と判断される。その住居の周縁ははっきりしない。しかし、炉を中心に

第25図　産業道路西遺跡炉跡

して、東二㍍六〇、東やや北二㍍七〇、西やや北二㍍六〇のところに穴があり、主柱穴と認められ、これらから推測すると、一辺が六㍍前後の規模と考えられる。

炉は方形の石囲い炉で、外側幅八〇㌢㍍×九〇㌢㍍、内側方五〇㌢㍍、深さは床面から二五㌢㍍で、炉内には土器が埋設されていた。炉は玉石で構成されてあり、石材を縦または横に使用し、二隅には補助石をあてている。炉縁は床面から七乃至一〇㌢㍍高い。炉内は埋設土器を取り上げる際に、攪乱されたと見られる状態であったが、隅に焼土が残存し、炉縁の石も加熱のための割れ目や剝離痕が認められた。

出土遺物としては炉内の埋設土器がある。この土器は口縁が開く深鉢型で、底部は欠損しているが、口縁径一六㌢㍍、現存高一四㌢㍍である。その文様は、頸部に半截竹管状の弱い沈線と、爪型文状の刺突文があり、頸部から上は無文、下部は櫛目文状の弱い沈線を地文にして、その上に、半截竹管による横の大きな四条の波状文を施している。口縁部付近には加熱のための剝離が認められる。この他にも二、三の土器片が発見された。

この炉内の埋設土器は縄文文化の中期以後の住居跡に発見されるもので、「五徳」のように用いられたものと

見られる。この上に、浅鉢型、壺型、鉢型などの土器を置き、煮沸に用いたものであろう。これらの炉の形状、炉内の埋設土器から見て、縄文文化後期前半のものと推定される。

なお、土取り作業が西方に進み、さらに炉が発見されたという総社町の新井哲夫氏の報せにより、昭和四十四年三月二十八日から三十日まで調査が実施されたが、すでに炉は破壊されていた。しかし、土器が設置されていて、周囲に大小の穴が発見され、新井氏撮影の写真と照合して、石材を横に使用した石囲い炉があったことが知られる。したがって、続いて同時期の住居が隣接していたものであろう。

第二節　弥生土器

市内で弥生文化に関する遺跡が発掘調査されたのは、荒口町と総社町の二個所のみであり、土器が発見されているのは鳥羽町、六供町、及び下川淵地区等の数個所にすぎない。荒口町で発掘調査された住居跡から出土の土器は、この地方での弥生土器としては古いものであるが、総社町での住居跡その他の地域で発見の土器は、樽式土器と特によばれているもので、弥生土器の末期にあたるものである。

樽式土器は勢多郡赤城村大字樽からはじめて発見されたので、杉原荘介氏によって樽式と名づけられた。この土器の最初の発見地は赤城山の西麓で、利根川の左岸にあたっている。この土器は利根川右岸の山間地で多く発見されるもので、赤城山南麓以東での発見例は極く稀である。本市でも総社町、鳥羽町など、榛名山の東南麓の伏流の湧出地帯の線を限って、それより平坦地側からはわずかに六供町及び下川淵地区などの本市南部地域に点在するにすぎない。その地域から東方の朝倉、後閑、山王の諸町の地域には土師器の古い型といわれる石田川系統のものが分布している。赤城山南麓の地域にもこの分布が見出されはじめている。つまり、弥生土器と古式の土師器とが、同一地域に併存していたことがありそうにも見えるが、まだ断定するところまでには調査がすすんでいない。

第26図　産業道路西遺跡出土縄文土器

いわゆる樽式土器のうちには縄文が加えられているものがあり、吾妻郡中之条町大字上沢渡の有笠山洞窟出土の甕型土器に至っては、縄文が残存しているばかりでなく、その形もかなり縄文的で、他の地域出土の樽式土器と差異があることが認められている。ところが、この土器と伴出したものに埦型土器があるが、これは群馬郡倉淵村の水沼遺跡や高崎市の幅遺跡から出土したものと類似で、後の土師器につながりを持つもののようにも考えられる。こういう現象はこの地においては、弥生土器使用の年代があまり長くないことを示しているものではなかろうか。

1　荒口前原遺跡

荒口町字前原にある遺跡で、ここは荒砥川左岸の地にあたる。藤生正雄氏宅地内に発見されたために、昭和三十二年一月には完全な発掘ができなかったのであり、住居跡と認定されるものの西北隅の一部が調査されただけであった。このような狭い範囲であったが、土器類は完形なものがあり壺型土器一〇個、甕型土器五個のほか、

高坏など数も比較的多く出土した。昭和四十四年八月に再度発掘調査が実施され、ほぼ住居跡の規模を知ることができた。住居跡は方四㍍六〇の竪穴式住居跡であり、炉跡と見られる個所は明らかではない。

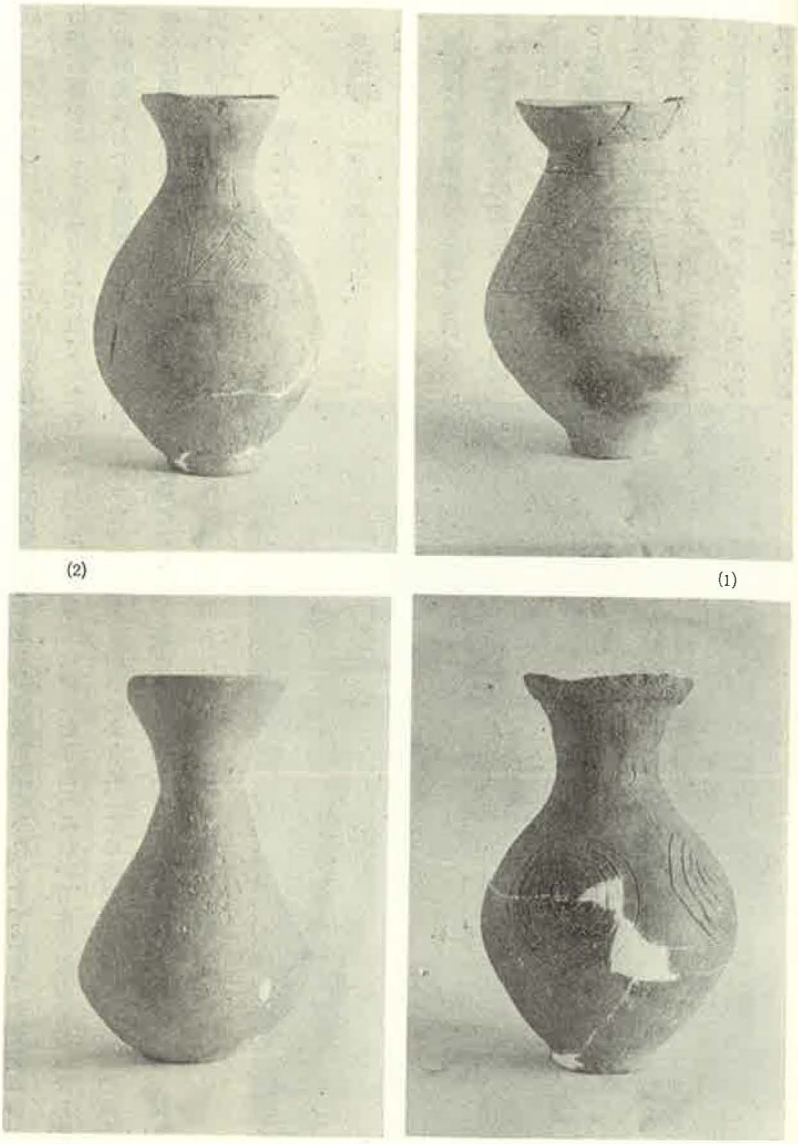
壺型土器には主として篦描きの幾何学的な文様が施されており、それに頸部に櫛目の簾状文が加えられ、あるいは胴部に縄文が残されている。土器の写真(1)、(2)、(3)に見られるようなもので、胴部の最大径の部分は中位にあるが、(4)の如きは無文で赤色の塗彩があり、胴部の最大径は下位にある。甕型土器は大体縄文あるいは櫛目文がつけられており、小型のものにコ字状の篦描き文がある。

これらの土器はそれぞれ特種な様相を示しており、周囲の諸地方の出土土器と各共通点を有しているように見える。本県においては群馬郡倉淵村の上ノ久保、碓氷郡松井田町の上人見、吾妻郡吾妻町の鷹之巣洞窟、勢多郡大胡町の金丸等の遺跡に次ぐものとして、弥生土器の古い部類に入り、二世紀乃至三世紀ころに置き得るものである。

第27図　前原遺跡土器出土状態

2　桜が丘遺跡

総社町植野の桜が丘団地に発見された遺跡である。樽式土器使用の住居跡であるが、団地造成のため破壊され、その一部が調査され得たにすぎない。しかし、この調査によって浅間山噴火による浮石層が、住居跡を埋めた土の層の断面から検出されたことは、群馬郡倉淵村の水沼遺跡の樽式土器使用住居跡の同



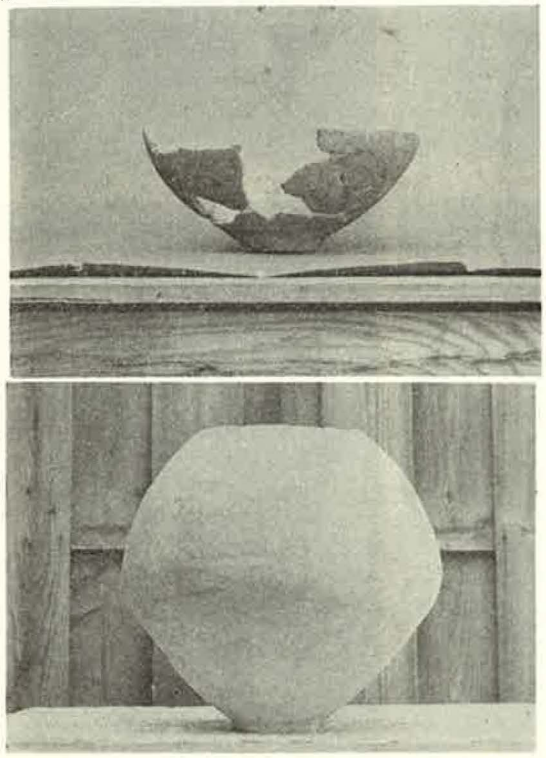
第28図　前原遺跡出土の土器

様の断面から発見されたこととあわせて、住居廃棄後間もなくの堆積と認められ、すでに地学の研究においてこの浮石層をスコーリアとよばれていたのに対し、かなり確実な年代を与えることができ、考古学のみならず、地学の研究の上でも重要な基準を得たことになった。その上、別章のように、この浅間山噴火の浮石層の直上に前橋の後閑天神山古墳が築かれていたことの発見によって、弥生土器使用の時代と古墳築造の時代とが、この浮石層の直下と直上であるという重要な区分の境界線が求め得られたので、非常に重要な調査となった。

3　樽式土器の甕棺

後閑町の広瀬団地付近で、宅地造成中に出土したものである。

甕棺は身と蓋とから成っている。身は頸部に波状の櫛目文をもっている樽式土器の壺であり、その頸部から上を取り去っている。文様は頸部以外にはない。蓋は破損していた。写真でも明らかなように、身の下半部と比較して、かなりふくらみがあり、その形から推定すると、土師器の石田川式土器に近いものである。



第29図　（上）後閑町出土弥生甕蓋
（下）同　弥生甕

この甕棺の出土状態は不明である。身の方の壺も上半部にはかなりのふくらみがあり、櫛目文の置き方も頸部の一部にとどまり、胴部には及んでいない。弥生土器の最末期のものであろう。あるいは石田川式土器との接触によってできたものであろう。

この後閑町付近には、土師器のこの地方での最初の型である石田川式土器が出土し、後述のように、後閑町の天神山古墳や朝倉町の朝倉Ⅱ号古墳の墳丘には、石田川式土器をすでに仮器（儀器）に転用して、後の埴輪円筒列のように配列している。まだ樽式土器のよい発見例がない。朝倉町の西方六供町からは、やはり宅地造成によって、土器類の破片が掘り出され地上に散乱していたが、その中に多少樽式土器がまじっていた。今のところ、榛名山麓の樽式土器分布の東辺と見られるところで、さらに、その東方にこの甕棺が出土したのは、珍しい例である。

第三節　土師器の初現

土師器は一般に、古墳の築造と同時に使用がはじまると、従来説かれていた。しかし本市における調査から厳密に言えば、土師器の使用は古墳の築造よりも少し前になるのであるが、これも比較の問題であって、現在最古の古墳と認定されたものよりも、さらに古いものがあるかも知れないのであって、それは古墳とは言えないというような事情もからんでくると、容易にきめることはできなくなる。大局からみて、従来の考え方に一応従って

置くことが混乱が起こらない。しかし、研究者にとっては重大な問題であるから、今後さらに調査され検討されねばならないことではある。

土師器のうち最も古いものと考えられているのは石田川式土器である。昭和二十七年三月に太田市大字米沢の石田川左岸ではじめて発見されたもので、松島栄治氏の研究によって世に紹介された。この種の土器はその後、烏川沿岸の高崎市倉賀野町、佐波郡玉村町等で発見され、本市でも朝倉町、後閑町、荒子町、総社町等で発見されている。倉賀野町では大応寺古墳とよんでいる墳丘のない小石槨を造り込んだ当時の地表面から発見されており、玉村町では横穴式古墳の石室床面下の住居跡から出土した。朝倉町では朝倉Ⅱ号古墳の墳丘上に配列されていたのであり、後閑町では天神山古墳の墳丘上に配列されており、かつその付近の地表下の浮石層の下から出土している。荒子町及び総社町では井上唯雄氏によって、その土器を使用していた住居跡が発掘、調査されたのである。

この天神山古墳、朝倉Ⅱ号古墳の墳丘上に埴輪円筒列のように配列されていたことは、その墳丘が浅間山の噴火による浮石層の直上に構築されていたこと、この浮石層の下から石田川式土器が出土したこととによって、石田川式土器は当然これらの古墳に先立って存在していたことを証明していると同時に、この浮石層は石田川式土器が使用されている期間のある一時期に堆積したものであることを知ることができる。また、この浮石層は総社町の桜が丘団地においては、弥生土器の樽式土器使用の住居跡を埋めていた土の間に挟まって堆積していた。この状況は群馬郡倉淵村の水沼遺跡からも発見されている。末期の弥生土器を使用していた住居が廃棄されて、あまり年を経ないころに浮石層が堆積したのである。古墳の墳丘の直下にある浮石層と同じであり、古墳は浮石層ができて間もなく築かれたことになる。この浮石層が境となって、弥生土器使用時期と古墳構築時期とがはっきりと区切られるが、その間には時の経過があまり多くはないようである。

これらのことから、樽式土器と石田川式土器とが一時期に併存していたことも考えられる。本市と高崎市を結ぶ線から東には、樽式土器は極く稀で、石田川式土器が諸所に発見されており、すなわちこの地区はいわゆる平坦地である。これに対して、その線から西の山間部には樽式土器が到る所に発見されていると言っても過言ではない。樽式土器よりも古いと考えられている弥生土器もその多くは右の線上及びそれより西の山間部に発見されており、荒口町前原の発見例は平坦地側としては稀な例である。この事からすると、この地方では、水田耕作は石田川式土器使用に伴って起こったもののようにも考えられる。

第30図　大室小学校庭第二遺跡土器出土状態

1　大室小学校々庭第二遺跡

大室小学校はもとの荒砥村東小学校のことで、その校庭で昭和二十七年に土師器使用の住居跡を発掘し、これを荒砥村東小学校々庭遺跡と名づけられた。その同じ校庭で、昭和三十二年七月にやはり土師器使用の住居跡が発掘されたが、この方は前者よりも編年上ずっと古く、石田川式土器に属しているものである。出土品は壺の底

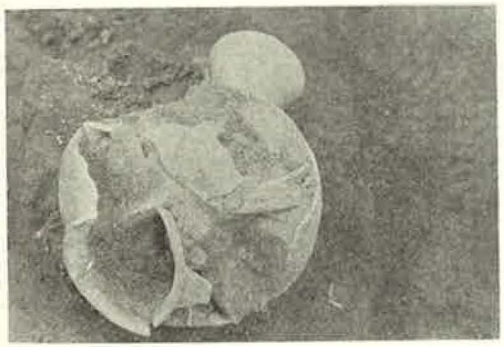
部、高坏の破片などで小規模である。これらの土器は石田川式土器関係のもので、五世紀末ごろのものと推定されている。

2　新屋遺跡

荒子町字新屋甲八一五番地にあった住居跡である。新屋部落の西端に位置して、荒砥川の支流が開析した東西幅一粁ほどの舌状台地上にあたっている。

住居跡の形は長方形で、その中軸線は北四七度東であり、東西幅三㍍九〇、南北幅三㍍一九である。炉の位置は中央西寄りで、西南隅に貯蔵穴があり、柱穴は七個であった。床面は比較的整っており、炉は四本の主柱穴の中央にあり、炉の脇に上面が磨滅した長径三〇糎ほどの平石一個が据えられていた。このすぐそばから煮沸用の脚付甕型土器が出土している。炉の西北部から脚付甕型土器、坩、壺等がかたまって出土し、貯蔵穴の周辺から高坏、壺等が見出だされている。なお、四個の主柱穴は住居跡平面においてやや西に偏していた。生活上の必要から炉を西にかたよらせ、その上部に母屋を設けたものであろうか。

3　稲荷塚北遺跡一号住居跡



第31図　新屋遺跡土器出土状態

総社町総社字稲荷塚北にある土師器使用住居跡の集まっている地で、五個の住居跡の発掘の結果の一号にあたるものである。東方約一粁に利根川が流れ、その右岸の低台地になっているところである。ここには縄文、弥生、土師器片が多く散布している。

一号住居跡は東半部が破壊されていたので、その西半部のみが調査された。形は隅丸の方形で、西壁の辺長三㍍二〇、主軸の方向は北五〇度東である。壁近くの床面が相当広範囲に焼けており、その上部に茅のような炭化物が三糎ほどの厚さで堆積していた。南壁に近く、西角から一㍍東寄りに、粘土を意識的につきかためたところがあり、一辺一㍍五〇の方形の造り出し状である。何に使用されたか不明である。遺物は西の角部を中心に坩三個、高坏脚三個、小甕一個、石製模造品一個が出土した。

第四節　土師器と生活

1　土師器の使用

本県の土師器は古墳の項で記したように石田川式土器からはじまる。この土器が常用のものから儀式的なものになったり、形や器種や使用法などに多少の変化があったり、年代が経つとともに、同じ土師器でも新しい形のものなどが他から入ってきたりして、形式の上からもいろいろに変わってきた。この変化を井上唯雄氏は石田川式土器も加えて次の六種にわけている。

1　四世紀から五世紀初めまで（石田川式）
2　四世紀末から五世紀末まで（第一型式）
3　六世紀初めから六世紀末まで（第二型式）
4　六世紀中ごろから七世紀末まで（第三型式）
5　七世紀中ごろから八世紀中ごろまで（第四型式）
6　八世紀初めから一〇世紀まで（第五型式）

このわけ方がもちろんきまったものではない。これからの研究でかわってゆくかも知れないが、現在の段階では穏当なものである。この区分に従って説明することにする。

土師器は古墳とともにはじまったと言われている。前方後円墳で最も古いものは後閑天神山古墳であるが、この古墳の墳丘上に並べられていた石田川式土器には、壺の底部に孔があけられていて、儀式用に作られたものである。それゆえ、日常生活の器が儀式用にもあてられて、さらに作る時に儀式用に変化したものであるから、すでにそれ以前にその形式の壺があったものである。もっとも、本市の後閑天神山古墳の築造と同じころの墳墓と見られる高崎市倉賀野町の大応寺古墳からも、石田川式土器が出土しているので、墳丘をもたない墳墓でも、榔が墳丘のあるものと同じ傾向のものであったならば、古墳と言って差支えないものと考えられるので、石田川式土器は古墳と同時ごろに起こったものと言えるであろう。

石田川式土器については、序章五にも述べてあるので、ここでは五世紀から七世紀までの間、土師器が日常の器として、階級の上下の区切なく、最も多く用いられた時代について述べる。

この期間内には、新しく須恵器が伝えられて、土師器と一緒に使用されるようになっていった。須恵器は斉部（祝部―いわいべ）土器とも言われ、はじめは、祭礼用にあてられていたようであるが、次第に一般化したようである。この須恵器は形などで土師器に影響を与え、八世紀ごろからはだんだん焼き方などにも変化をさせていくのである。須恵器ははじめ「すえのうつわ」とよんでいた。本来の文字は「陶器」であって、これを「すえのうつわ」と訓みをつけたのは、墳墓（古墳）の前や、その石室の中に「据え」たことから起こっていると言われている。もっとも、土師器も据えたものがあるので、それを「すえもの」ともよんでいるから、そういう言葉から移ったものであろう。酒甕などは、はじめは土師器であったのが、須恵器が伝えられると、もっぱら須恵器が使われたようである。

本県の古墳からは、竪穴式古墳の墳丘について出土するものは、皆、土師器であり、榔の中からはほとんど土器は出ていない。一例だけ、前橋の後閑天神山古墳の大粘土榔の中から出土した、これは染料のようなものが入れられて、納入されていた。横穴式古墳では、墳丘についてはやはりおもに土師器である。しかし例外として須恵器の大甕が墳頂や、基壇面から出ている。壇塚古墳（勢多郡粕川村）の前庭から出土した須恵器の破片は、八世紀ごろに骨壺としたものであろう。これに対して、石室の中から出土する器は須恵器のみで、例外として、西大室町の前二子古墳の石室からは、須恵器にまじって、土師器の高坏が出ている。前二子古墳は六世紀の末に造られたもので、横穴式の前方後円墳ではじめのものと考えられる。古墳に土師器を使う習慣が、竪穴式古墳から受けつがれたのであろう。

古墳のころの住居跡からは、ほとんど土師器が出土している。中には少量の須恵器がまじっているものもあ

る。一般の住居では、おもに土師器を使っていたものであり、須恵器は横穴式石室に納れるが、そのほか特別なことに使用されたものであろう。横穴式石室に納入された須恵器は、その石室内の配列の状態から見ると、献供用とは考えられないので、死者を守る呪術用か、あるいはまた、宝器的なものとして置かれたようである。土師器は墳丘の外面から出土するものには、埴輪列とともに配列されているのもあるが、前庭から出土するものは、墓前祭に使用されたもののようである。それゆえ、土師器は日常使用の器と見られよう。このほかに木器もあったことと思われるが、住居跡からはまだ出土していない。

住居跡から出る土師器は、その使用法にしたがって、配置されている場所が大体区別される。このころの土師器の住居跡には竈跡がついている。竈跡の付近にはやはり炊飯用の器が多い。湯をわかす長めの甕や、その上にのせて穀物を蒸す甑などである。貯蔵穴といわれる穴の中やその近くからは、甕や高坏や坏が出土する。大体この二個所に出土例が多い。

その土師器の器種は弥生土器にくらべて少なくなっている。弥生土器の終わりごろには甕型、壺型、脚台付甕型、手あぶり型などの土器と、椀、片口、甑が加わっていたのが、土師器の石田川式土器では手あぶり型土器や甑、片口が見えず、高坏や器台があらわれ、その後の土師器では大体器台がなくなり、ふたたび甑が出てくる。やがて脚台付甕型土器も消滅する。また、石田川式土器などはじめのころのものには、小さい器でも平底になっているのが多かったが、だんだん丸底のものがふえてきている。石田川式土器に大型な脚台付甕型土器のあるのは、弥生土器の名残りであるが、その後のものに次第にこれが見えなくなり、大形の甑が出てくることは炊飯の方法に変化があったものと考えられる。

脚台付甕型土器は炊飯用器であり、平土間に置いて、周囲から火を焚き、粥、あるいは固い粥（飯）を作ったようである。甑を使用した強飯とはちがっている。鬻の字も「かゆ」の意味があり、本来、「かゆ」はこの文字といわれ、粥は俗に用いられたものの由である。粥の文字は甕に米を入れた形であり、甕の形をしであらわし、左右を弓の文字に置き替えたものである。鬲は音が「レキ」で鼎、復とかいう意味であり、一般に鼎は三本脚、鍑はいわゆる脚台付きのもので、湯を沸かすのに用いられる。脚台付甕型土器は鍑に似たものであろう。しかし、鬻の文字は鼎または鍑の上に米の入った甑をのせた形であり、「かゆ」ではなくて、むしろ「強飯」を作ることを表わしたようである。けれども、日本訳ではこれを「かゆ」としている。その上、「鬻粥」を「かゆ」としている。要するに炊飯には二様あって、一は米と水とを一緒に入れて煮るのであり、二は米と水とを別にして蒸す方法である。脚台付甕型土器は前者に使用され、甑は後者に使用されたものである。文字の翻訳にずれがあったものであろう。

甑ははじめ小形であったが、六世紀ごろから大型のものも出てくる。それにつれて竈があらわれる。その形はいわゆる長甕の形といわれるもので、湯をわかす土器も大形で長く、これを長甕（または長鍋）と言っている。この長甕を使用するには竈が必要であり、恐らく、竈と長甕は一緒に伝えられてきたものであろう。この後の土師器使用の住居跡には、ほとんど竈がついている。

土師器使用の住居跡は正方形のものが多い。住居跡には大小があるが、四㍍乃至六㍍四方のものが一般的である。生活している地面から約五〇㌢掘り下げ、この中に四本の掘立柱を立てて梁でつなぎ桁を掘り型から外へ下ろして、地面へさし込み、その上に萱や葦などの草類でふきおろし、上に小形の破風を作ってあげたものであ

ろう。この形は入野遺跡（多野郡吉井町）で、家がやけて、屋根が床面に落ちており、掘り方の外まで棰がつづいて、その終わりにさし込んだ穴が一列に並んでいたのを見たので推定したものである。

2　土師器の遺跡の分布

土師器の遺跡の分布は密であり、広範である。至るところに土師器の破片が見出せるし、住居跡がある。土師器には珍奇な模様がついていないので、いわゆる「かわらけ」の破片として注意されなかった。近ごろでも一般には完形品が出土すると、珍らしいものとして取扱われるが、破片では一向に顧られない。それゆえ、本県では調査も遅れており、研究も不充分である。その間にも、松島栄治氏や井上唯雄氏などが研究の成果をあげてきている。それらの発掘調査と表面採集による分布調査の結果について市内の状況をみると次表のようである。ただし次表は昭和三十六、七年にかけて調査され、昭和三十八年に刊行された群馬県遺跡台帳作成委員会編集の『群馬県の遺跡』から摘録したものに、多少他の調査を加えて作成したものである。

第三二表　土師器遺跡分布一覧表

町名	所在表示	現状	地形	備考
元総社	染谷川沿岸	畑	台地	須恵器混入
総社町高井	字鍛治、育薬、津組、観音の一帯	畑	平地	甕、脚付甕出土
〃	〃	桑畑	〃	第五型式（国分式）
鳥羽	染谷川左岸			

〃	元総社	北側の畑地一帯	〃	住居跡	
〃	元総社町―総社町、元総社町―群馬町東国分の間の畑及び水田	〃	須恵器、古瓦、混入	
〃	大友	二四〇六番地元総社小学校校庭等	小学校敷	〃	住居跡十数戸分	
〃	後閑	県道前橋―安中線の北側の元総社町大友町にかけての畑	畑	〃	須恵器混入	
〃	青柳	天神山古墳南	道路開穿中	平地	石組竈、甕出土	第四型式
〃	〃	字宿上	畑	傾斜地	住居跡、須恵器伴出	
〃	〃	字宿上八七一	〃	〃	住居跡、昭三七群大調	第三型式
〃	日輪寺	字神明　神明宮の丘の北斜面	〃	台地		
〃	関根	字諏訪、日輪寺東の高台	〃	平地	住居跡	
〃	田口	字寄井、赤城神社東の畑	〃	傾斜地	住居跡	
〃	上細井	字岡市、橘山南斜面の下端	〃	台地		
〃	〃	字灰俵	〃	傾斜地		
〃	〃	字田ノ口	〃	平地		
〃	〃	字西田ノ口	〃	〃	住居跡、石組竈	
〃	〃	字丑子塚細井神社東一帯	〃	〃		
〃	〃	字南田ノ口	〃	〃		
〃	〃	字荒屋敷	〃	傾斜地	古い形式	
〃	〃	字定福、勢多郡富士見村との境界地域	〃	〃		
〃	〃	字正間久保、富士見村から延びる丘陵の先端部	〃	丘陵		
〃	〃	字西堀、鎌倉坂北側一帯	〃	台地		
〃	上沖	上沖神明宮裏畑地一帯、北方は小神明町、東方は谷まで	〃	〃		

端気	字端気前、利根川旧流路に面した台地上	水田	傾斜地	住居跡、比較的古い形式	
小神明	字堤下	〃	〃	壺、甕、坩、高坏盌等出土	第一型式後半
〃	小神明遺跡	畑	平地	比較的新しい形式	
上泉	字西久保、玉泉寺裏の段丘上の畑地	〃	段丘上	住居跡	
江木		水田（耕地整理）	平地	甕、壺、盌出土	第二型式
東片貝	虚空蔵東	桑畑	傾斜地		
堀之下	正円寺南	耕地整理中	平地	須恵器伴出	第二―三型式
女屋	桃ノ木川東岸	畑	平地		
小島田	万福寺前の畑、利根川旧流路に面した段丘上、広範囲	〃	台地		
下大屋	前橋―産泰線の南側	〃	〃	祭祀遺跡？	
〃	字八光、付近に「カハラケ沼」標高一四〇m	〃	〃	祭祀遺跡？	
二之宮	字八王寺、新田用水北側台地上標高八〇m	〃	〃	住居跡	
〃	字谷地	宅地（校庭）	台地	住居跡、集落遺跡	
東大室	字八反田、大室小学校西側農場	〃	〃		
〃	字八反田、大室小校庭	〃	〃		
西大室	字七ッ石	畑林	〃	祭祀遺跡	
〃	字二児山、二子山南畑地	畑	〃		
〃	字稲荷山、西は水田地帯をひかえた台地西斜面	畑	〃	須恵器混在	

荒子	荒子小学校の庭、西水田との比高七mの台地西斜面	宅地（校庭）	〃	住居跡	
〃	字頭無、中学校北の台地	畑	〃	後期	
飯土井	字二之堰、神沢川右岸台地上の桑畑	〃	〃	中期頃	
荒口	字諏訪西、荒砥川左岸低台地上	田	台地	住居跡 後期前半	
〃	赤城神社境内、荒砥川左岸低台地上	宅地	〃	住居跡	
〃	字寺畑、荒砥川左岸低台地上	田	〃	住居跡、末期	
〃	字小塚、荒砥川左岸低台地上	畑	〃	古式土師器	
〃	字前田、荒砥川左岸		低地	土師器中期	

なお、芳賀地区については、『芳賀村誌』において、小暮邦雄氏が土師器及び須恵器の出土地を次のように表示している。

小神明　堤下
端気　後原、端気前
小坂子　四門戸、鍛冶皆戸、下大平、白鳥、おくまん
五代　芝久保、中原、大日、江戸屋敷
鳥取　庚申塚、前原、北原、東原
嶺　東公田、桂正田、西笹原、大林下、十二原

南橘地区については、『南橘村誌』において、松島栄治氏が土師器及び須恵器の出土地を次のように表示している。

上細井　西垌、灰俵、荒屋敷、西田ノ口、田ノ口、定福、正間久保、丑子塚、南田ノ口、薬師
青柳　宿上
川端　日輪寺東
田口　千手堂、天神窪

右のうち住居跡の発見されたものは、西田ノ口、丑子塚、宿上であり、分布範囲が比較的広いものは、正間久保、千手堂である。また、田ノ口には祭祀遺跡があり、石製模造の玉類が発見され、定福からは紡錘車が出土している。

『総社町誌』では土師器について記載はほとんどないが、図版の写真に見えている出土品中には土師器の甕が二個あり、総社町総社の作兵衛塚出土の土師器竈の実測図も載せてある。『元総社村誌』には「赤茶色の土師式土器の破片、鼠色の硬い陶式土器の破片などが多く出土している」と述べられているのみであるが、両町での土師器の出土例はおびただしいものである。

このほか、下川淵にも多く、昭和三十七年以降に発見、発掘された山王町、後閑町、朝倉町等の古墳群地帯内及び六供町出土のもの、総社町、大友町、元総社町にかけてのもの、鳥羽町、江田町のもの、各地の古墳出土のもの等を加えるとおびただしい数にのぼる。これらは道路構築、団地造成、地区改良等による土地開発事業のために消滅したものである。そのほとんどが調査されずに、記録もなく、知られないうちに破壊、放棄されてしまった。ただ、後に話を聞くのみである。そのうちでも多少調査できたものもある。今までに調査されてきたものを、その報告書から摘録してみると次のとおりで、これらは大部分群馬大学史学研究室によって、発掘調査されたものである。

(1)　東部地区

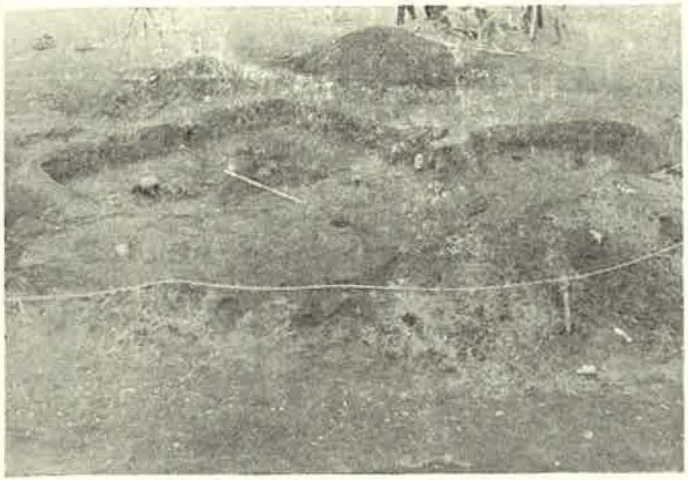
いわゆる城南地区である。これには昭和四十四年に荒砥史談会発行の井上唯雄氏著『前橋市城南地区の土師器使用遺跡』がある。そのほかに『勢多郡誌』に尾崎喜左雄稿「古墳築造頃の住居」の中に「荒砥村東小学校々庭遺跡」として、大室小学校の遺跡の発掘調査があげられてある。なお、同書には荒砥小学校農場遺跡、荒口遺跡、荒口神社遺跡等が列挙されてあり、土師器の出土地としては、荒子、二之宮、今井、女屋等の諸町と前二子古墳とが記されている。

①　荒砥村東小学校々庭遺跡

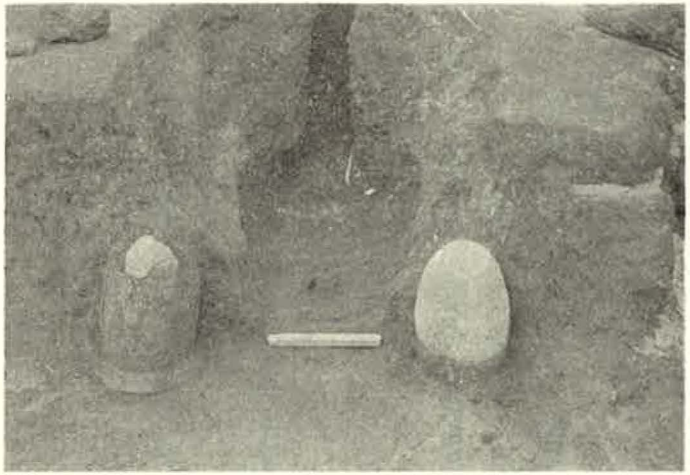
西大室町二八一七番地の現大室小学校の校庭にある。昭和二十七年八月に群大史学研究室によって発掘調査が行なわれた。発見の動機は、運動会の準備に、その場に、杭の穴を掘り下げ、偶然、土器の出土を見たものである。その時たまたま、群大史学研究室で、前二子古墳実測のための宿舎の交渉に行き発見に至ったもので、発掘の結果は三個の住居跡が発見され、このほかにも一〇数個所指摘し得られた。

このような状態が示しているように、校庭の現在面は、住居使用当時の生活面ではない。北方から延びてきている舌状台地面を削りとって、他方を埋めたてたのであり、その削りとった場所から、上部を半削りされた住居跡が発見されたわけである。この三個の住居跡のうち、二個は生活用の土器類や竈が発見されているが、一個からは全く出土品はなく、その上、小形であるので、何に使用されたか不明である。最大のものの東北隅を切っ

て、最小のものが床面を同高に造られており、これをA、Bとし、他の一個は最大のものに半分重なって、東方にはみ出しているので、これをCとした。



第32図　荒砥東小学校庭遺跡ＡＢ号住居跡



第33図　同　上　住居跡竈

A住居跡　規模は相対する辺が各四㍍及び四㍍一五で、ほぼ正方形であり、四㍍一五の辺が西南に面している。中央では四㍍三〇及び四㍍四〇で、現状で深さ四〇㌢㍍であり、一〇㌢㍍ぐらい削りとられたようである。四隅は弧をなして、いわゆる隅丸であり、その弧の半径は二五乃至三〇㌢㍍である。

この住居跡には、東北壁の中央やや東寄りに、壁をくりぬいて造った竈があった。壁から住居の床に張り出しておらず、煮沸用器は壁の上面にかけたことになる。その奥に煙道がついており、屋外にぬけていたものであろう。竈の中心には、煮沸用器の底を受ける柄状の土の焼けたのが立っていた。この竈の燃口の前の左右の壁についた床面に、いわゆる長鍋といわれる甕型土器がうつぶせに立てられていて、向かって右側の完形の方は中が空になっており、他方は破損していて土砂がつまっていた。燃口の設備ではなく、使用しない時にはかように置かれたものであろう。また、南の部分の西南壁寄りに、長径二〇㌢㍍の軽石が五個、放射状にかためて置かれていた。祭祀的な意味をもったものではなかろうか。

出土の土器は前述煮沸用甕型土器が完形であったほかは、全部破片で、甕型土器、壺形土器、坏等がある。完形の甕型土器は高さ二七㌢㍍五、口径一七㌢㍍二、復元できた坏は口径一二㌢㍍三、高さ四㌢㍍五、大壺は高さ二八㌢㍍、頸径一四㌢㍍、胴径二五㌢㍍で、口径は欠けて不明である。

B住居跡　A住居跡の東隅を切って、一辺二㍍の四角で、深さ残存四二㌢㍍、A住居跡と同一レベルの床面をもったもので、柱穴と認められるもの一個のみ。東北寄りの床面に焼けた部分があるのみで、土器の出土はなかった。人が住んだであろうとは推定できるが、何に用いられたかはっきりしない。A住居跡より後にできたものであり、床面が連絡しているので、あるいはA住居に造りつけられたものであろうとも考えられる。

C住居跡　一辺三㍍の正方形で、その対角線がA住居跡の東南辺にあたる。対角線から西北半はA住居跡の上に重なり、東南半は自然堆積土の上に造られている。竈は壁について床面に造られており、粘土のみで構成されていたようである。出土土器は土師器の椀と施釉の椀とである。土師器椀は平底で、口縁部が外方にわずかに反った高さ四㌢㍍、口径一二㌢㍍、底面径七㌢㍍のものであり、施釉椀は大型で高さ七㌢㍍二、口径一八㌢㍍八、高台がついていて、その高さ一㌢㍍二、その径八㌢㍍八である。

この施釉埦は精巧な製品で、磁器のような白色胎土で、堅く焼きしめてあり、須恵質の白色焼成のものに施釉したようなものである。釉は灰釉で、刷毛で幅広くさっとかけ、緑色に焼きあがっている。極めて豪壮な感じのするものである。瀬戸市で滝本知二氏が「弘仁年間に焼きはじめられ、天慶の乱ごろまで東国へ送っていた」と考えているものに当たる。氏は弘仁瓷器と名づけている。

このA、C両住居跡は重なっており、Cが上であり、Aが埋まった後にCが造られている。Aの土器類は井上唯雄氏の群馬県の編年によれば第三型式に属し、六世紀中ごろから七世紀末ごろと考えられている。Cの土師器は同じく第五型式に属し、八世紀初頭から一〇世紀ごろまでと考えられる。したがって、C住居跡はA住居跡についで造られたものであろうが、A住居跡が埋没した後であり、両者の間にはその期間が考えられねばならない。しかし、この地は季節風によって土砂が運ばれ、かなり埋没の速度は急速である。したがって八世紀の初頭までにA住居跡が埋まり一〇世紀にC住居跡が造られたと言うわけにはいかない。A住居跡を七世紀末とすれば、C住居跡は八乃至九世紀ごろと見るのが妥当であろう。そのC住居跡にいわゆる弘仁瓷器が使用されていることも穏当であろう。

②　荒砥東小学校農場遺跡

この農場は大室小学校の西に接しているが、校舎及び旧校庭は西大室町でありながら、農場は東大室に属している。現在は校庭に入れられている。昭和二十七年十月に一個の住居跡が発掘された。農場にされる時か、それ以前か、開墾の際に土地の上面が削りとられたために、深さの残存部分は三〇㌢ぐらいで、竈も上部は削りとられていた。竈は石を用いず、粘土のみで築かれていたようである。出土遺物は坏、長甕、小甕等で、七世紀中ごろのものと考えられている。

③　寺畑遺跡

荒口町字寺畑にあったもので、昭和三十年十一月二十三日に、調査された。荒砥川左岸の低い段丘上にあって、赤城神社境内、諏訪西、小塚などの遺跡が北に連なっている台地の先端部である。ここでは住居跡一個とその西北四半部の下に重なる住居跡の一部とが発掘された。上部の住居跡は方形で、東西五㍍九五、南北五㍍三〇中軸線の方向は北三〇度東である。柱穴六個が数えられ、東壁の中央南寄りに竈があり、竈の開口方向は壁に直角ではない。その焚口は五個の長甕で鳥居状に組まれていた。竈は幅五〇㌢、奥行七〇㌢で、その中央やや北に偏して、粘土で造った長甕の底を受ける装置がある。その位置からして恐らく二個前後に並んでいたものであろう。竈の南に四七㌢に六〇㌢の方形の貯蔵穴があり、深さは五二㌢である。この貯蔵穴の北東隅にかかって、小形甕型土器二個、甑一個が積み重ねられてあり、また、貯蔵穴にすべり込んだ状態で、脚付甕型土器の小形のもの、坏、長甕などが出土した。

南壁中央には、住居内に入り込んで、壁

第34図　寺畑遺跡住居内土器出土状況

第35図　同上　竈跡

第36図　前田遺跡竈俯瞰

第37図　同上　住居跡竈

について幅二尺六〇、先は一尺八〇の造り出し部があり、小さい河原石を敷いたような状態がうかがえる。さらに、その上面から焼土、炭化物が出土している。この辺から、竈前面まで踏みかためられて固くしまっていた。住居の出入部と考えられる。西北四半部に重なっている住居跡は、その重複部分が、前の住居跡から一〇㌢下がっていて、そのところから既出の甕や坏から見て、この下位の住居跡は上のものより先に存在していたものと考えられる。

④　諏訪西遺跡

荒口町字諏訪西に発見され、昭和三十一年六月十五日～十八日に、調査されたものである。この地は荒砥川左岸の台地上にあって、寺畑遺跡から北へ遺跡地が続いているその一つである。住居跡は一個は確認されたが、それに複合したものの一部が発掘調査された。出土遺物は坏、甕型土器などで、荒子神社境内遺跡、荒子町の荒砥保育園遺跡、荒口町の前田遺跡、西大室町の石原遺跡などと共通したものと認められ、井上唯雄氏の群馬県における土師器の編年では第二型式に属するものであり、六世紀初期からその末期まで用いられていたものと推定されている。

⑤　前田遺跡

荒口町字前田一五〇、一五一番地俗称舞台所在のもので、昭和三十二年十二月に調査された。調査の結果は、住居跡を発掘し、竈及びその周辺に壺、甑（こしき）、坏などを発見している。この土器類は第二型式の後半にあたる。竈の内径奥行四一㌢、幅三九㌢五、中央右寄りに支石があり、右竈壁との間隔二三㌢五、深さ二六㌢、燃口は高さ二〇㌢、石組みである。

⑥　荒子小学校々庭遺跡

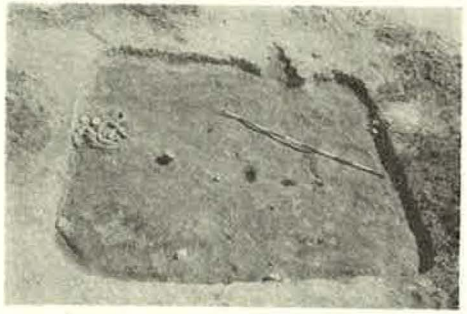
荒子町一二四六番地の一にあたる。昭和三十八年四月二日～五日に調査されたものである。この地はすでに昭和二十七年五月二十一日に、土師器須恵器使用住居跡として、一度調査され「荒砥北小学校遺跡」と称されていた。二十七年の調査では住居跡一個所を確認し、その一部の石敷き構造物を発見されたのであるが、三十八年には住居跡五個所と特殊な穴窯一個所とが調査された。

この遺跡は赤城山南麓の舌状台地が南北に走つているものの一つで、荒口町から中鶴谷へかかる台地の中ほどの西端に位置し、それがちょうど荒子小学校の校庭にあたっている。校庭はその整地の際表面を七〇㌢ほど削平されているので、ローム面以下に及んでおり、その面を切り込んでつくられた竪穴の住居跡は埋没したまま上部が削りとられ、住居跡に堆積している黒色土が、雨後などには、校庭面に方形の模様を現出していた。これが発掘調査されたのであるが、その結果は次のようであった。

第一号住居跡

規模は東西三尺八四、南北三尺六三のほぼ正方形で、主軸の方向は北三二度西、床面は現状で深さ一五㌢ぐらいであった。壁に沿って周濠があり、柱穴は認められない。北壁中央の側の床面に長径一五㌢内外の細長い浮石（軽石）の転石を、上面をそろえてほぼ方形に、石壇状のものが築かれていた。東壁の南寄りのところに竈が造りつけられて、壁の外側まで掘り込んであり、幅は二五㌢、奥行五〇㌢で、焚口には長甕をうつぶせに立ててあった。土器としては長甕の破片と須恵器とが出ている。

この竈の焚口に長甕の土器を使用していることは、荒砥東小学校（大室小）庭遺跡や寺畑遺跡にも見られ、多野郡吉井町の入野遺跡の第二号住居跡もこの類例であり、これは石を鳥居状に組んだものからの変形と見られる。石壇状のものは昭和二十七年の発掘にも注意されていたのであるが、入野遺跡ではこの構造物の近くから手捏の粗製土器が出土しており、新田郡新田町木崎中学校庭遺跡ではその構造物の上から壊れた甕が出て、さらに強く焼けていたこともあって、祭祀的なものであろうと考えられている。



第38図　荒子小学校庭遺跡　第1住居跡

第二号住居跡

規模は東西三尺八二、南北四尺六七で不正の方形であり、主軸の方向は北二六度東、床面の深さは約一二㌢である。第三号住居跡と重複していて、柱穴は認められない。竈は東壁の南寄りに痕跡があり、削平されていて不詳であるが、馬蹄型にロームを切り込み、粘土をはったものである。出土土器は土師器と須恵器の破片のみであった。

第三号住居跡

規模は東西三尺六〇、南北四尺七〇で第二号住居跡に似ており、主軸の方向も北二八度西、床面深さも一二㌢内外である。第二号が第四号住居跡と三重になっており、第二号が上層、第四号が下層で、第三号は中位にある。竈も東壁の南寄りに跡があり、削平されてしまっているが、ロームを切り込んで、粘土をはったいわゆる粘土かまどである。柱穴は認められない。高台付の須恵器の埦が出土している。

第四号住居跡

規模は東西三尺七七、南北五尺五七で、やはり、不正な方形である。主軸の方向は北三三度東、床面の深さ三七㌢で、第三号住居跡の下層位に重複している。柱穴は認められない。竈は東壁の南寄りにあって、幅四七㌢、奥行七〇㌢で、その中央床部に支石が立てられていた。長甕を竈にかける時、その底部を受けるのが支石である。また、長甕を利用した煙道がつけられていた。出土土器としては高台付の須恵器の埦二個と長甕型土器とその他須恵器、土師器の破片であった。

第39図　第四号住居跡竈　土器を煙道に利用

この竈の煙道に長甕を立てる例は、下触遺跡（佐波郡赤堀村）でその完全なものが調査せられ、機能的に見てすぐれたものとされている。支石のある例は県下にすこぶる多く、土師器使用期の中期後半以降において一般的に認められる。

第五号住居跡

規模は東西三尺三〇、南北三尺八五のほぼ正方形で、主軸の方向は北三二度東であり、床面の深さは一五㌢内外である。壁下に周溝をめぐらしている。竈は東壁南寄りに、壁の奥に造り込んでおり、ほぼ馬蹄形にロームを掘り込んで、その内側に粘土をはったもので、いるゆる粘土かまどである。その幅四〇㌢、奥行七〇㌢である。この前面に遺物が多く存在していた。土師器と須恵器の破片である。

右の五個の住居跡は、長甕と高台付埦型土器とをほぼ共通して出土している。長

甕は須部に不明瞭な段を有して、水平に口唇部を開くものと、第一号に見られるずん胴型に、水平に開く口縁部を付したものとの二類型あるが、後者が前者よりやや古い時期のものと考えられている。高台付椀型土器は、糸切底で、付け高台を施し、器体部は丸味を以て内彎し、口縁は小さく外反する。各部の整形は鋭さに欠けており、時代が下がっていることを示している。主軸の方向については、第一号を除いて大体一定しており、形状も南北軸が東西軸に比べて長いことなど共通点が指摘できる。これらのことからして住居の重複などがあって、多少前後しているけれども、大体八世紀の中葉ごろと見られ、第一号だけがそれよりややさかのぼるものであろう。

須恵器窯跡

第四号住居跡の南側に発見されたものであるが、完掘はできなかった。しかし、主体部のみは大体確認されている。形式は小規模な窖窯（あなかまど）であり、焼成室は現状で間口五五㌢、奥行四五㌢、深さ一二㌢、燃焼室は間口七〇㌢、奥行一㍍二〇、分焔柱まで八〇㌢、深さ八〇㌢、灰原は間口一㍍〇五、深さ八四㌢、奥行不詳である。主軸の方向はほぼ東西であり、焚口は西に開き、この地域の卓越した西北季節風を考えて造られている。

第40図　須恵器窯跡正面分焔柱及びその奥部

灰原には、最上層に八㌢ほどの焼け土混りの粘土層、次層が四㌢の暗褐色土層、さらに四㌢の焼土層、六㌢の繊維灰層が認められた。遺物は第四層から須恵器片が出土したが、量はごく少ない。燃焼部は、床面が非常に強く焼け、掘り込みになっており、ゆるい傾斜をもって分焔柱につながっている。分焔柱は二石あり、南壁から一四㌢、北壁から一〇㌢のもので、その石の間は一一㌢と大体等間隔である。壁は赤く焼け、壁の上面にはすす混りの粘土が認められ、天井を構成していたものと思われる。焼成部は現状で二段認められ、燃焼部から二八㌢上がったところで一段、そこからさらに一五㌢上がってもう一段ある。上段の方には須恵器片が多数散積されていた。遺物はほとんど小片であり、完形を知り得るものはなかったが、糸切底、高台などの特徴から、時代的にはかなり下がったものと思われる。

以上の分焔柱、壁面の彎曲から焔返しの様相が推察され、遺物と考え合わせて、恐らく平安中期ごろのものと比定できよう。

なお、この須恵器窯は平地に築造されている窖窯（あなかまど）であることが特徴である。

⑦　荒砥保育所遺跡

荒子町一〇一九番の二に所在している。その庭から発見されたものである。この地は旧荒砥村役場のあったところで、南北に走る舌状低台地の西端に位置している。昭和四十三年十一月に井上唯雄氏が県立伊勢崎東高等学校郷土研究部を中心にして調査された。遺跡地の西側は生垣のため、住居跡はそれにかかり、東半のみの調査であったが、東壁中央から南側の部分にかけて、ほぼ完全な土器セットが見出され、遺構の内部も比較的ととのっていた。

遺構の土層は、上から第一層が厚さ二六㌢の表土、第二層が厚さ一七㌢で、浮石を多少含む黒色土層、第三層が厚さ三五㌢で、比較的細かい砂であり、小さい浮石を多量に含み、かつ粘性を欠いている。この下層はロームである。この第三層の上面から遺構は掘り込んであり、この中を埋めている土は一様であり、水により急激に埋まったものであろう。

住居跡は東西四㍍二二、南北三㍍五〇の長方形で、中軸線の方向は北一六度西である。柱穴は対角線上に三個認められ、東壁の中央より南寄りに竈があり、東南隅に貯蔵穴が造られていた。柱穴は西北のものがはっきりし

ないが、他の三個は径二〇㌢内外、深さ三〇㌢ほどで、直に掘り込んであった。竈は住居内に張り出して敷設されており、燃口の部分はほとんど破壊されていた。粘土で造られていて、石の使用は認められない。焼土の量から見て、かなり大きなものであったと思われる。同時期のこの地域に見られる例からすれば、長大なものであったであろう。貯蔵穴は径九〇㌢、深さ三二㌢で、中に遺物が落ち込んでいた。

床面には浮石が密着して相当量散布しており、埋土の黒色土にも多量に含まれていた。この浮石は七世紀初頭の榛名山二ツ岳の爆裂により噴出、降下堆積したものである。この住居の廃棄と浮石の降下とは、さして年代の開きがないことを示している。

遺物は竈周辺と貯蔵穴に落ち込んでいたものが主である。竈周辺から出土のものはほとんど竈の破片であり、貯蔵穴からは竈の口縁部二、高坏の完形品二、盌、坏等が見出された。おそらく壁近くに置かれていたものが、なだれ込んだものであろう。他には西壁の側から高坏、盌が出ており、貯蔵穴のすぐ西傍に多量の白色粘土のかたまりが認められた。この表面は平らになっていた。これは土器を固定させるための台になっていたものではなかろうか。これらの土器類からすれば、比較的古式の要素を残存させながら、土師器盛行期への過渡的な様相がうかがえる。

住居跡の時期については、住居跡の形状、粘土のみを素材とした竈、その竈の位置が東壁中央であることが推定の基準となろう。土師器使用期の当初には、住居の形は隅丸方形が多いが、やがて隅が直角になる例が一般的になり、また終末期には隅丸になる傾向がある。竈の素材が粘土のみ使用しているのは、機能的な面から竈の祖形と考えられる。次第に石を焚口や支石に使用したりして、長甕を利用するものが出現する。この遺跡はそうした素材が一般に利用される以前のものであろう。また、この竈が壁から離れて住居内に全体の部分をはり出して設置されていることは、住居の利用の面からも進んだものとは考えられない。

次に住居の床面に見出された二ツ岳の浮石は、自然的な条件で時期を比定する上に一つの手がかりを与えてくれる。すなわち床面に相当密に、しかも間層をほとんど含まないで住居を埋めている事実は、この住居の廃棄の時期を、この浮石の降下期直前におかざるを得ないことを示している。

これらの諸点から、この住居跡の時期は六世紀後半のものに比定できる。

(2)　北部地区

①　青柳遺跡

青柳町宿上八七一番地に発見された住居跡で、昭和三十七年三月十四日から同月二十日までの七日間に、発掘調査が実施されたものである。

その規模は東西三㍍七〇、南北四㍍七五の長方形の竪穴住居跡で、主軸の方向は南中線と一致する。深さは三〇㌢内外である。東壁の中央にいわゆる粘土かまどが付設されてあり、その焚口の幅四〇㌢、竈の奥行一〇〇㌢の長大なものである。竈は二次的な補修の痕跡が認められるので、長期使用されたものと思われる。竈に向かって右側に貯蔵穴が設置されていた。遺物には完形品はなく、甕、坏等の破片のみ出土している。土師器の第三型式にあたる。

なお、『南橘村誌』には右のほか、次のような遺跡が記されている。

②　上細井町西田ノ口遺跡

昭和二十九年二月、上細井の畑で発見された住居跡である。地下約一㍍のところから、多数の土師器が出土し、住居の床面が認められたが、耕作地の関係上、完掘されず、従って住居跡の規模は不明である。出土土器は甕、壺、坩、器台、高坏、埦などで、多様な器形の組合わせである。

これらの諸器形中、特に目立つことは、壺が多数であることと、坩の口縁部の発達したものであることと、器台が含まれていることである。甕は飯炊用であるが、口がやや開き、底部は不完全で、器体全体を完全に支えることができないので、竈にかけて使用されたものと見られる。このうち、甕を飯炊用と見れば、壺は貯蔵用、坩は液体の容器、器台は丸底またはそれに近い坩をのせるに用い、高坏や埦は盛り器とされたものであろう。これらの組合わせは土師器の初期のものと見られるが、竈の使用以後のものであることは言うまでもない。土師器の第一型式と考えられる。

③　青柳町宿上遺跡

昭和二十七年春、発見されたものである。地上約八〇㌢の住居跡の床面から一括出土した。土師器の甕五個分（うち完形二個）、土師器の坏四個分（うち完形三個）、須恵器の大形の壺一個分、須恵器の提瓶一個、ほかに石製模造品の小玉二個などである。

土師器の甕はいわゆる長甕であり、竈にかけて飯炊用（煮沸用）に用いられたもので、その外面にはすすが付着している。第四型式に属するものである。須恵器の提瓶は肩部に相対してある環状の把手を欠いているので退化的なものと見られる。七世紀ごろと推定される。

④　上細井町丑子塚遺跡

昭和二十九年春、発見され、当時竈の調査のみが行なわれた。竈は現地表面から約九〇㌢下の床面とほぼ同じ位置に底部が見出された。住居跡の東側の壁を掘り込んで造られたもので、その掘り込みに沿って礫を縦に並べ、その石の間には粘土をめじとし、その石の列の上に粘土をはりめぐらして、形を造ったものである。その規模は焚口の幅六〇㌢、奥行約一㍍で、高さは現存で四〇乃至五〇㌢である。

伴出の土器はいわゆるはがま状の破片と糸切底の皿状のものである。はがま状の破片は平底がついており、八乃至九世紀ごろの飯炊用具であり、糸切底の皿も同時期と考えられる。

⑤　関根町寄居遺跡

昭和二十四年に関根町字寄居の赤城神社東の畑地で発見された。土師器の坏と甕とである。発見者の話ではこのほかにいわゆるはがま状の土器の破片も出土し、これら土器の埋没していたところには床面状の部分がみとめられ、その一部には焼土の堆積と焼けた石とがあった由で、竈跡と推定され、住居跡と確認されたのである。丑子塚遺跡と同時期のものと考えられる。

以上のほかに土師器破片の分布地として特に広範囲に及んでいるものは田口の千手堂地域である。この地域出土の土器は比較的古いものが多く、西田ノ口遺跡に近似である。ここに大集落が存在していたであろうことは想像できるであろう。この地は利根川の旧流路が赤城山麓の端を削り取って崖とした上面にあたっている。これに対し関根町地域は地形及び地質の上から言っても、もと利根川の河原であつたと考えられる。土師器の分布により、土地の開発も推定されるのであって、五世紀乃至八世紀の間における利根川の流路の変化も考えられるわけ

である。

さらに、若宮町の群馬大学付属小学校校舎改築の際、その數地出土の土師器及びその出土状態、三俣町の上毛電鉄三俣駅付近の畑地出土の土師器、東片貝町の片貝神社東北地帯の土地改良工事の際、地下二㍍の粘土の厚層の下部出土の土師器等の出土状態をあわせみるならば、利根川の流路の複雑さも考えることができる。この点についてはなお多くの出土例を必要とする。しかし、当時の住民は利根河原を開発して次第にその地域へ高台から移ってきたものであろう。また、南部の土地改良等で掘返えされている地域にも、全面にわたって土師器の出土がみられ、上佐鳥町の一本杉付近からは、土器表面に朱を塗って焼いた破片も発見されている。

(3)　西部地区

利根川左岸の総社、元総社を中心とした地帯を意味する。この地区では、近年地区改良の工事によって発見され、発掘調査にいたったものが多い。土師器片の散布はいたるところに注目されてはいるが、学術的発掘を経たものはわずかである。

①　稲荷塚北遺跡

総社町総社字稲荷塚北の地内で調査された五個所の住居跡である。そのうち第一号住居跡は五世紀前半と考えられるもので、石田川式土器を出土しているので、古代上第一章第三節で既述した。第三乃至五号住居跡は八世紀ごろのものであり、第二号住居跡は九世紀前半と考えられる。なお、第二、第三、第四号住居跡は第四号を最下層として第三号、第一号と順次上に重なって、三重に重複しており、土師器の編年及び竈の変化を知る重要な資料となっている。

第二号住居跡

規模は東西二㍍五〇、南北三㍍六〇の長方形で、主軸の方向は北八度西である。床面は東北部が荒れており、そこは他よりも四乃至五㌢低く設けられている。その付近から高台付の埦や河原石が出土した。東壁南寄りに焼土の堆積や焼け石が認められ、竈の存在が推定される。遺物は前記埦のほかに皿が出土している。九世紀前半のものと考えられる。

第三号住居跡

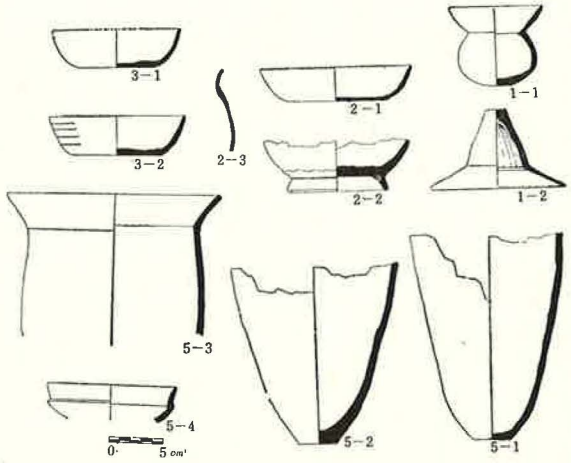
第二号住居跡の下層にあって、床面のレベル差は一〇㌢である。東西三㍍、南北四㍍二〇の長方形で、主軸方向は北四二度東である。南壁の中央に竈が設置されており、壁をわずかに切り込んでいて、焚口には輝石安山岩と、凝灰岩とを組み立て、粘土を積んでいた。その内部の中央には支石が置いてあり、焚口幅五四㌢、竈奥行五〇㌢で馬蹄形になっていた。そこからは薄手の長甕がおしつぶされて出土し、竈にかけられていたことが知られる。竈の周辺からは、灰及び木炭の堆積が認められたけれども、竈底の焼け方はあまり強くなく、住居の使用期間の長くないことを推察させる。柱穴は東壁から一㍍二〇、南壁から八〇㌢の位置に径二六㌢、深さ三八㌢のもの一個所が認められているのみで、他は不明である。

第四号住居跡

第三号住居跡の下層にあって、各主軸の長さ五㍍八〇ではあるが、対角線の差が一㍍もあるややゆがんだ方形であり、主軸の方向は北一六度東である。三個の住居跡のうち、規模も最も大で、しかも、全貌を明らかにし得たものである。

竈は東壁やや南寄りに認められ、壁に寄せかけた急勾配な上りで、その規模は前幅六〇㌢、奥行一㍍四〇であり、砲弾の形のような長大なものである。素材は粘土のみで石の使用は認められない。竈の底、壁ともに強く焼けており、長期間使用されたか、特種な使用に宛てられたかであろう。焚口前には炭化物や土器片が堆積していた。また、住居の中央には径一㍍ほどの円形のくぼみがあり、中に灰が堆積しており、この中からは土器片とともに桃核一個が発見されている。

柱穴は住居跡平面の各対角線上に四個認められ、その各々は径二八乃至三五㌢、深さ三六乃至五八㌢である。遺物は



第41図　稲荷塚北遺跡　第1号住居跡出土土器

り、竈の底面は全体的に五度傾斜している。熱効率をよくするためであろうか。焚口前には炭化物が堆積していた。

なお、東西軸の方向は西二〇度南であり、住居の形状は不明である。

出土土器

第一号住居跡

一―一　坩（胎土焼成、整形良、黄褐色）

一―二　高坏脚（黄褐色）

第二号住居跡

二―一　皿（糸切底、赤褐色、土師器）

二―二　埦底部（はりつけ高台、暗灰色、須恵器）

二―三　小形甕型土器（赤褐色、薄手土師器）

第三号住居跡

三―一　皿（褐色、成製上）

三―二　皿（糸切底、ろくろ痕、暗灰色、須恵器）

第五号住居跡

五―一　長甕型土器（竈にかかって出土、赤褐色、細砂を含む胎土、薄手）

五―二・三　長甕型土器（焚口に鳥居状にわたっていたもの、廃棄されたものの利用であろうか、二は口縁部、三は下半部を欠いて結合している。厚手）

②　国府跡調査に伴い発見の住居跡

上野国府跡の調査は、昭和三十六年からはじまっている。これは土師器使用の住居跡の調査の実施がきっかけで、思いがけなく国府跡調査に発展したのである。

昭和三十六年に、元総社小学校々庭に、土師器が発見されて、校長等の援助によって、土師器使用住居跡の発掘がはじめられたところ、たまたま古建築遺構にあたり、これが八世紀ごろのものと推定されるに及んで、上野

甕型土器と坏の未完形品が竈前から見出された。他の多くは小破片である。八世紀初めごろの住居跡と考えられる。

第五号住居跡

竈と北壁の一部を調査したのみである。北壁の一部を掘り込み、竈が設置されているが、煙道部は屋外へ、主体は内部の床面へ延びているのであり、素材は粘土であって、煙道部と主体部との境ははっきりしない。底部及び壁はまっ赤に焼けている。前幅四〇㌢、焚口から奥へ七〇㌢のところで最大幅となって四八㌢あり、奥幅二九㌢、全長一㍍五五になっている。さらに煙道部長はほぼ七〇㌢である。

焚口は細長い安山岩の河原石を両側に立て、その上に二個の長甕型土器を組み合わせて、鳥居状に渡している。焚口から五〇㌢奥の中央に、炊飯用にされていたと思われるやや小形の長甕型土器が東方へ倒れかかって出土していたが、支石は認められなかった。この小形長甕型土器のあるところから二〇㌢奥で、壁が最大に広がり、

国府に関係ある遺構ではなかろうかということになり、土師器使用住居跡よりもむしろこの古建築遺構の方が重要視されるようになってしまった。しかし、土師器使用住居跡と古建築遺構との重複の工合から、古建築遺構の年代も推定されたのであって、その後国府跡推定地の発掘調査が昭和四十二年までつづけられ、いずれの調査現地でも、この重複が認められているのである。

国府跡の推定地としては、元総社町の総社神社の参道の線を西端とし、大友町の大友神社から南へ真直ぐに延びている道路及び田圃の境界線を東限とし、北は大友神社から西へ引いた境界線、南は前橋安中線の道と一応考えられていた。このほぼ八町の中に、国庁跡を求めて七回、一〇個所の発掘が行なわれた。いずれのところでも、皆、土師器の出土を見、あるいは土師器使用の住居跡が発見されている。多いところでは一〇数個の住居跡が散在し、または重複していたところがある。土師器の型式にしても、石田川式から第一型式乃至第五型式にわたり、かつ緑釉灰釉のかかった須恵質の埦の破片も各所に見出された。

昭和三十六・七年発掘元総社小学校々庭遺跡

昭和三十六年に元総社小学校々庭において、その表面に埋設していた土師器が発見され、群馬大学学芸学部史学研究室に通報された。土師器使用の住居跡の存在を予想して、同年十一月に発掘調査が実施されたのである。その結果は八世紀と推定される建築遺構の柱列痕が発見されたために、土師器使用住居跡の精査には手が及ばず、翌三十七年の調査に引き継がれた。

昭和三十七年八月、右の建築遺構の確認と土師器使用住居跡の精査が実施された。土師器使用住居跡は七・八戸分の痕跡を認め得られたが、重複あるいは攪乱があって、完全な住居跡は一戸も残存しておらず、出土遺物も比較的少量であった。ただ、建築遺構としての掘立柱の痕跡が、住居跡の床面を切り込んでいたので、土師器使用住居跡よりも、建物遺構の方が新しいものであることが確認され、土師器はほぼ第四乃至五型式と推定されるので、建物遺構も八・九世紀ごろのものと考えられた。

昭和四十年発掘大友町村山遺跡

この調査では、建築遺構としては国府庁の倉庫の掘立柱と考えられる痕跡群が発見されたが、その柱痕は七世紀初頭の榛名山の二ツ岳の爆裂による浮石（軽石）を混じた黒褐色土の堆積層の上面から切り込んであり、その上には一三世紀（一二八一）の浅間山噴出の浮石を混じた層が堆積しており、その土に表土がのっていた。二ツ岳の浮石混入の層の上面には、柱痕以外の竹垣、縁束等の痕跡と見られるものがあり、当時の生活面を示し、遺物としては灰釉をかけ白色の胎土で硬質に焼成された埦（いわゆる弘仁瓷器）の破片が出土している。この生活面から倉庫の周濠と見られる掘込みがあり、この掘込みによって、この生活面の下層のローム層に造られていた土師器使用の住居跡が切断されていた。粘土で造られた竈が発見され、伴出の土器は第三型式と見られる。

昭和四十一年発掘の村山の雲雀街道遺跡

この国府跡調査においても、榛名山二ツ岳噴出の浮石混りの層の上面が生活面と考えられ、そこに柱痕その他が発見された。その層の下部から古式の土師器が一個体分発見され、その周囲は竪穴式住居跡と見られるが、すでに上層堆積以前に攪乱された形跡があり、住居跡は明らかにできなかった。土器は石田川式系統のものである。

昭和四十一年発掘の元総社小学校々庭遺跡

元総社小学校々舎改築のため、急遽発掘されたものである。校庭遺跡の北に接しているので、昭和三十六・七年調査の建築遺構の連続をねらったものであるが、ここからは柱痕群は多数発見されたものの、一建造物として関係が明らかにしがたく、むしろ、土師器使用の竪穴式住居跡の大型なもの及びこれに重複するもの、その他の発見がなされた。特に注目されたのは高坏の大形のものが出土したことである。第三型式と認められる。

昭和四十二年第一次発掘の昌楽寺北遺跡

総社町総社字閑泉樋南にあたる土地である。昌楽寺の北方で、畑地であるが、近来、宅地化される傾向があり、村山地区の調査結果が国府跡と認定されるものがないので、この地を村山地区第二次の調査に併行して実施された。その結果は、八世紀と推定される建築遺構一棟が発見されたが、同時に土師器使用の住居跡一〇数戸の調査も行なわれた。この一〇数戸はほとんど重複しており、その中にさらに建築遺構である柱穴が掘り込まれていた。

昭和四十三年第二・三次発掘の昌楽寺北遺跡

昌楽寺北遺跡第一次発掘の地域の南に接した地域の調査が第二次であり、第一次の北及び西に拡張したのが第三次である。この調査においてはともに土師器使用の住居跡が発見された。その土師器はいずれも第三乃至第五型式のもので、七・八世紀のものと推定される。

以上七回の発掘調査において、この地帯は大体七・八世紀の土師器使用住居の集落地と見られた。ことに、元総社小学校から北へ昌楽寺、さらにその延長の低台地は集落が相当長く継続したものであり、現在でもその地域から西に、元総社の住家が存在している。その地に、八乃至九世紀ごろの建築遺構が発見されているのであり、また、その建築遺構は官衙的な性格をもったものと推定されるのである。

なお、このほか昭和四十四年から上野国分尼寺跡の発掘調査が行なわれ、四十五年四月には付近で住居跡が発見された。

③　その他

右にあげたのは遺跡地としてある程度の調査が実施されたものである。このほか出土品としては次のようなものがある。

ア　昭和三十七年十一月に、総社町高井の畑から耕作中に出土した土師器の脚台付甕型土器で、すでに脚は失われていたが、現在高一四㌢余、口径一一㌢、最大胴径一二㌢、脚のつけ根径四㌢五で、最大径は上部にあって、尻すぼみの形のもの、頸部に指でおさえて一周させた太い沈線が入っている。胎土も焼成も良好で、色はこげ茶色である。内部は櫛目で整形してある。この甕型土器には外面にすすが一面に付着していた。小さなこの土器でも脚台がついており、煮沸用に使われていたことを示している。この土器は土師器の第二型式と見られ、六世紀ごろのものである。

イ　昭和三十八年四月二十日、総社町高井と総社町総社の境にある日新電機構内の中央西寄りの地点で、水道の配管工事中出土した。表土面から四〇乃至五〇㌢の下部で坏と甕との二個体である。第三型式にあたる。

ウ　昭和三十八年九月に、石倉町の利根橋から最初の三差路の角から北へ一〇㍍の道路上で、水道の配水管工事中、地下五〇乃至六〇㌢の地点から出土した。小形脚台付甕型土器と脚台付甕型土器の脚台部である。地層はローム層よりやや上部の黒色土層である。土師器の第二型式である。

エ　昭和四十三年ごろに、総社町総社の山王地区の南方、元総社町に通じる道路の傍らから、水道管設置作業の際出土したもので、前橋市水道局工務課から届けられた。土師器の埦で第三型式にあたる。

オ　昭和四十五年二月に、総社町の問屋団地で出土したもので、土師器の壺である。これは第一型式にあたる。

これらは最近の数例をあげたにすぎないが、総社町、元総社町、大友町、石倉町の地帯は、ほとんど全面的に土師器使用の住居跡が分布しているものと見られ、土師器使用時代における集落の存在を推定させるところであ

る。この地帯におけるこれらの土器の使用者たちは、多くが農業に従事していたのであることは、その住居の立地等からして耕田地帯であったことがあわせ考えられる。一方においては国府内及びその周辺の住民として、他方においては、総社町に残存する七・八世紀の大古墳や山王廃寺等の大建築を造りあげた豪族の被支配者として、この地を選びここに住んで生活を営んでいたものであろう。

第二章　豪族の支配と古墳の築造

序　節

本市内には、最近まで古墳がおびただしく存在していた。古墳は言うまでもなく墳墓であるから、そこに埋められている人、埋めた人が多数住んでいたことになる。県下の他の地域と比較しても、数といい、質といい、他をはるかにしのいだものが多い。古墳築造のころの文化の中心地であったと言えよう。

本県は古くは上毛野国（かみつけぬのくに）と言われていたようである。藤原宮跡（奈良県高市郡持統文武両天皇の都）出土の木簡によると、たしかにそのころは上毛野国と言っていた。しかし、『日本書紀』ではほとんど上野国と記してあって、上毛野国とあるのは安閑天皇と斉明天皇の両紀に各一個所ずつだけなのである。それゆえ、いつから上毛野国と言われたのかはっきりしない。

また、この地方を支配していたのは上毛野君という氏族であって、その祖先は崇神（すじん）天皇の皇子豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）であると言われている。『日本書紀』には、豊城入彦命が天皇の命令で、東国を治めしめられたと記してあり、上毛野君の祖となっている。けれども、上毛野君とはつきり記してあるのは安閑天皇紀の上毛野君小熊がはじめてであり、それ以前には必ず祖となっている。いつから上毛野君と言ったかは不明である。

本県の大古墳は、大豪族がつくったものであり、この地方の支配者が築いたものであることは推定できようが、それを直ちに上毛野君の墳墓であるとすることはできない。古墳には年代がはっきりしているものがほとんど無いから、いつごろのものであるか研究した結果から見ることが必要である。『日本書紀』の内容も、伝説や神話的な部分が多いから、検討してみなければならない。

「上毛野君」というのははじめは上毛野地方の支配者ということであったが、上毛野国造が任命されると、その時上毛野君であった豪族が国造になったので、その豪族を引き続き上毛野君とよんだようである。それ以後は上毛野君といえば、その豪族の子孫を指すようになった。これを姓（かばね）と言うのである。それゆえ、国造になった時の上毛野君であった豪族が、それ以前に一系の血統で上毛野君であったかどうかはわからない。本県下に古い大前方後円墳が、前橋市、高崎市、藤岡市、伊勢崎市、太田市等にあって、前橋市のが最も古く、太田市、高崎市伊勢崎市、藤岡市のと順次、新しいものが出てきているとしても、上毛野君という姓（かばね）の豪族の祖先が、その地を一巡して住んでいたときめることはできない。

前橋市に最も古い古墳があり、藤岡市に他に比して新しいものがあっても、他の三市には大体同じころのものがあり、太田市には数も多い。その地ごとに順次大古墳を造ったものである。すると、それぞれの地域ごとに大豪族がいたことになるのであって、それらは一系であったものもあろうが、他の豪族が代ってその地位を得たも

のもあろう。上毛野地方の支配者という意味の上毛野君は一豪族一系であったときめてしまえない。したがって、『日本書紀』に上毛野君という姓の豪族が記載されているが、その豪族が最初から上毛野地方を支配していたものとして、古墳の新古の順序に従って、前橋市、太田市、高崎市等の地域に順次移り住んだものとすることはできないのである。

ところが国造が置かれるようになると、上毛野君が国造に任命された。従来の支配のままに国造となったのである。国造を置くということは、大君の統治に編入され、組織化されたことであり、それは東国を入れた統一国家の確立後のことである。この時期ははっきりしないが、少なくとも「くに」という言葉の成立後であり、「くに」と「みやつこ」という両語を結び合わせるのに、「の」が用いられているころのことである。六世紀ごろのことではなかろうかと思われる。上毛野国造はそれ以後は上毛野君の一豪族によって世襲されたようであり、七世紀の中ごろの大化改新以後、中央に移って行ったようである。

すでに天智天皇治世の始めには、上毛野君稚子は新羅征伐におもむき、天武天皇九年（六八一）には、上毛野君三千は歴史編修事業に関係せしめられている。また、天武天皇十三年（六八五）には新制定の姓のうち、第二位の朝臣を上毛野君に与えられて、それ以後は上毛野朝臣と称するようになった。そして上毛野君という姓が上毛野と君とに分離されて、君の代りに朝臣という新制の姓が使用されるようになり、上毛野という氏が起こるのである。

しかし、この朝臣を与えられたのは、上毛野君を称する一族全部ではない。特定の個人及びその子孫を対象としたものである。それゆえ、八世紀中ごろになっても上野国に上毛野君を称するものがおり、その使用は特に賜姓されなくとも続いていたのである。天平十三年（七四一）には多胡郡八田郷に上毛野朝臣甥というのがおり（正倉院御物用袋の調布の銘）、天平勝宝元年には勢多郡少領郡司に上毛野朝臣足人という名が見えている（続日本紀）。これらは天武天皇代の賜姓後の分家であるか、あるいはそれを遡ることあまり遠くないころの分派であろう。

大古墳はたいてい小、中古墳とともに古墳群を形成している。古墳の中には竪穴式古墳と横穴式古墳とがあり、前者は六世紀終わりごろまで、後者は六世紀中ごろから八世紀中ごろまで続いている。ただし、七世紀中ごろ以後は築造の数も少なく、墳丘の規模は小型になるが、内部の構造は豪華となる。特定の豪族にのみ、構築することができたものと考えられる。横穴式古墳の築造の最盛期は七世紀前半であり、大前方後円墳から小円墳まで累々と造られていた。この横穴式古墳は小円墳でも相当の財力と技術とを必要とするものであるが、その数と、古墳群の分布と、人口及び郷数、地形等から推定すると、特定の豪族層によってのみ築造されたものではなく、かなり一般的であって、律令制のころのいわゆる郷戸層よりもさらに下層にまで及んでいたものと見られる。

大古墳の分布は、竪穴式古墳は平坦地の水辺地帯であり、横穴式古墳になって山麓地帯にも移り、さらに七世紀後半から八世紀になると、主として平坦地及びその付近に認められる。土師器の分布も古墳の分布に応じ、さらに古墳の分布を見ない地域にも発展しており、須恵器は六世紀後半から横穴式古墳に伴って多く発見される。須恵器を混じえた土師器使用の住居跡もそのころ以後に多い。この大古墳の分布は、それらが属する古墳群の中、小古墳にも見られ、山麓地帯の古墳は横穴式のものが絶対に多い。平坦地にあっては、竪穴式、横穴式が混在している。

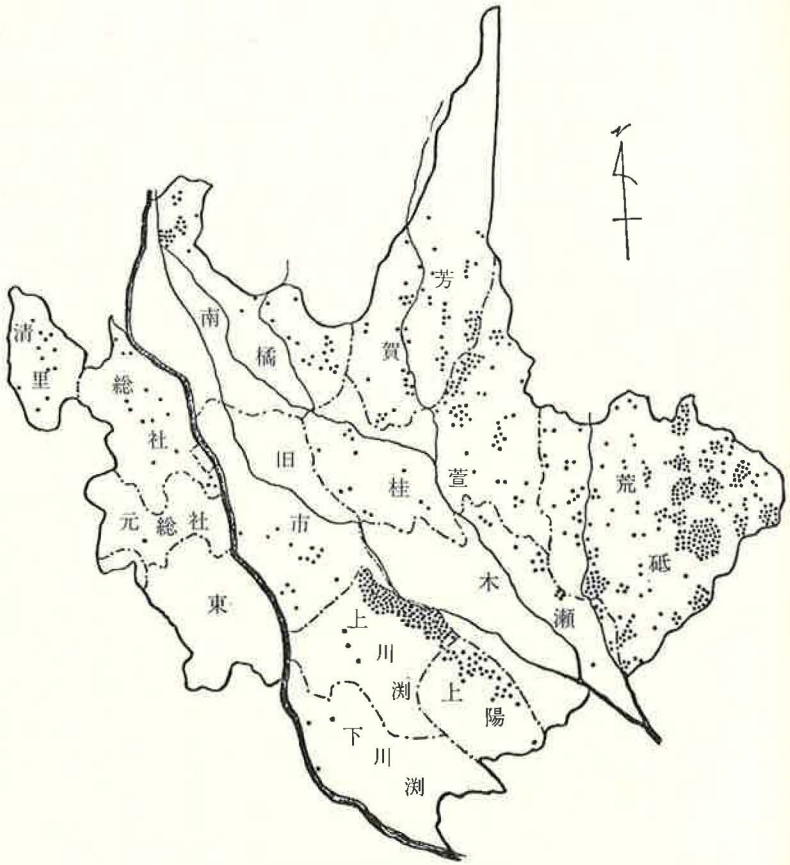
これらのことから古墳の始めのころは水辺地帯で、ことに湧水池周辺の自然灌漑による水田耕作が行なわれ、次いで山の傾斜地を流下する水の利用による水田開墾がはじまり、やがて平坦地に用水濠による引水の利用が起こったものと見られる。これらの灌漑用水の方法は順次受容されたものであり、流下水の利用は六世紀中ごろ、用水濠の利用は七世紀後半ごろと推定される。この利用によって新しい水田の開発が行なわれたのであるが、この時は、旧方法によっていた全農民が新地域に移動したものではなく、他より移動による人口の増加に伴って新地域が開拓されたのではなかろうか。新地域はやがて、その生産が他を凌いだものと見られ、大古墳の築造が新地域に見られるのである。

このことは県下全般についても言い得るのであるが、ことに前橋市内では、前述のとおり後閑町に最古の天神山古墳があり、隣接してそれに次ぐ朝倉町の八幡山古墳がある。六世紀後半からのものは、西及び東大室町にわたる前二子、中二子、後二子の三古墳があり、七世紀後半から八世紀にかけてのものとして、総社町に宝塔山、蛇穴山の両古墳がある。また、文京町三丁目には前橋二子山、総社町には総社二子山の各大前方後円墳があり、七世紀前半のものと見られ、朝倉付近では引き続き、総社町ではそのころから豪族の居住を示すものと考えられる。その豪族としては、上毛野君（かみつけぬのきみ）、朝倉君（あさくらのきみ）、有馬君（ありまのきみ）（阿利真公）などがあげられる。

特に旧荒砥地区の、東西大室町地帯は六世紀後半における大豪族の居住を意味するもので、この大豪族は、そのころ、祖先を豊城入彦命、崇拝神を赤城とした上毛野君と推定されるのであり、その一族が勢多郡の郡司であることも、この地帯での居住を証明するものであると考えられる。このようなわけで、古墳築造のころになって、はじめて豪族の支配がはっきりしてくる。

第一節　古墳の分布

本市における古墳の分布は旧利根川の左右沿岸地帯と、荒砥川左岸及び旧荒砥村北部に特に密である。赤城山南麓地帯は右の旧利根川左岸の分布範囲から派生して散在しているようであるが、勢多郡富士見村にあっては、白川沿岸に密集した地帯があり、市内に入ってはこれに接続していると見られる。旧利根川の



第42図　前橋市内古墳分布図

沖積地には西片貝町の大塚古墳（仮称桂萱大塚）の一基のみが現存している。旧利根川右岸地帯の古墳群は、総社町から東南に向かい、前橋市街地をぬけて、朝倉町、後閑町の東端を過ぎ、山王町の東端にまで、延々二〇キロトルに及んでいる。この旧利根川に沿った洪積台地の低崖の上面には幅一〇〇㍍ぐらいの帯状の古墳群が存在している。

昭和十年の古墳調査台帳は県教育委員会社会教育課に保存されていて、すでに昭和十三年に「上毛古墳綜覧」として公表されている。そのうち、本市分の内容を同書から転載すれば次のようである。

第三三表　古墳綜覧

前橋

備考欄（　）内は出土品

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 二子山	前方後円	芝地 雑木	無	天川町東下一五七	畝 七三・二三	尺 三五〇	尺 前三三 後三五	国有地	昭和二年史蹟指定 古来豊城入彦命陵ト伝フ
2 不二山	〃	雑木林	有	高田町林三五七、三五八 三六三	一六・〇〇	一九〇	前二〇 後一〇	水野其一 外一名	国造射狭君近親ノ墓ト伝フ、元八幡祠アリ石槨存ス（直刀土器）
3 唐櫃山（からふとやま）	帆立貝式	畑	〃	〃 高台七三二	九・〇六	一二〇	一〇	斎藤米夫 外一名	箱型石棺出土ス 中川小学校蔵
4	不詳	〃	〃	〃 林 不詳		不詳		不詳	（埴輪破片、土器）
5	円型	〃	〃	〃 高台四一四	二・二七	〃		奥貫ケイ	
6	〃	〃	〃	〃 〃 六七六	一・二九	〃		橋本園太	（刀、金環）
7	〃	宅地	〃	〃 〃 九二六 九二五	三・二八	六〇	一〇	梅津幸次郎 外一名	
8 多津塚	〃	墓地	〃	天川原八〇八	一七・二三	不詳		永寿寺	
9	不詳	八幡神社	〃	連雀町二八	二七・一二	〃		国有地	
10 ボンボン山	〃	養鯉池	不詳	南曲輪町一〇		〃		〃	
11	〃	利根河床	〃	曲輪町八〇		〃		〃	厩橋天主閣其上ニアリト伝フ
12 大塚山	円型	畑	有	六供一、一二九	一・一四	三〇	八	寿延寺	（刀、鍋、古銭）
13	〃	〃	〃	〃 九四 九六	九・一〇	三六	八	高橋秀造 外二名	石槨アリシトイフ（刀）
14	〃		不詳	〃 一八九	二一・〇三	三六	一〇	斎藤武平	小祠アリ（土器）
15 オトウカ塚	〃	宅地	無	〃 一七一	一・一一	三六	九	荒木武平	稲荷社アリ

上川淵

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	円型	春日神社境内	不詳	上佐鳥一、一二一	畝 一四〇・〇三	尺 東西八七 南北八七	尺 八	春日神社	
2 荒神様	〃	桃畑	〃	〃 一、三五七	二二・〇七	径一四四		〃	中央ニ石槨蓋石ラシキモノアリ、往時石工之ヲ割リシニ火ノ雨降リ死セリトイフ。
3 正平稲荷	〃	荷稲社	〃	〃 九五七	一・一八	東西四二 南北四二	一〇	川井鶴作	
4 滝	前方後円	畑地	有	上朝倉上海道一、七六七	二一・一五	東西一三八 南北八四	前八 後八	田村金作	
5 天神山	円型	松林	〃	朝倉天神山一、七二四	五・一五	径一三二		内山岩吉	

6	天神山	円型	雑木林	不詳	朝倉	天神山	一、七〇七	径 二・〇五	三	九	江原　俊夫
7	天神山	〃	〃	〃	〃	〃	一、七〇八	長 一〇・〇九	五四	一三	駒井伝太郎
8	天神山	〃	〃	〃	〃	〃	一、七〇四	〃 一四・〇二	八〇	一三	矢端　初造
9	天神山	〃	〃	〃	〃	〃	一、七〇三	〃 九・一八	一八	六	小川八重三
10	天神山	〃	松林	〃	〃	〃	一、七〇一	〃 一・〇六	四八	九	木村　勝造
11	天神山	〃	〃	〃	〃	〃	一、六二五	〃 二五・二一	三六	六	笠原　源重
12	新屋敷	〃	雑木林	〃	〃	新屋敷	一、六二一	〃 一五	三〇	九	三橋　浅造
13		〃	開墾地	有	〃	〃	一、六一六	〃 一七・一八	六六	一三	江原　俊夫　(直刀三振)
14		〃	墓地	〃	〃	〃	一、六〇二 一、六〇四ノ間	〃 一〇・二五	四八	六	目崎　武平　永福寺
15		〃	開墾地	不詳	〃	〃	一、六〇四 一、五九八ノ間	〃 一三・〇七	四八	九	岩村　福造
16		〃	墓地	〃	〃	〃	一、六一〇	〃 二・一八	五四	九	牛島　彦平
17		〃	開墾地	〃	〃	〃	一、六三一	〃 一八・〇四	九六	九	倉林　武
18		前方後円	雑木林	〃	〃	〃	一、六三二	全長 五・〇五	一六八 後前	九 一三	松井浪太郎
19		円型	〃	有	〃	〃	一、六二六	長 三・一八	三〇	九	笠原栄次郎
20		〃	桑畑	不詳	〃	〃	一、六三八	〃 一・〇三	四二	九	木村　勝造
21		〃	雑木林	有	〃	小且那	一、六八三	〃 一・〇三	六六	一三	阿佐美伝作
22		〃	〃	不詳	〃	〃	一、六八〇	〃 六・二三	三	六	宝船伊太郎
23		〃	〃	〃	〃	〃	一、六七七	〃 二一・〇四	二四	六	岩佐　八造
24		〃	松樹	有	〃	〃	一、六九三	〃 九・一七	九〇	一三	井田　蕃造
25		〃	雑木林	不詳	〃	〃	一、六九二	〃 三・〇九	三六	四	江原　俊夫
26		前方後円	松林(東) 桑畑(西)	〃	〃	〃	一、七一九	全長 二七・〇三	一二四 後前	九 九	〃
27		円型	雑木林	有	〃	〃	一、七一五	長 六・二三	三〇	六	〃
28		〃	松樹林	不詳	〃	〃	一、七一六	〃 七・二〇	三	五	目崎　武平
29		〃	雑木林	有	〃	〃	一、六八九	〃 一〇・一〇	八〇	九	〃
30		〃	開墾地	半発掘	〃	〃	一、六八六	〃 一六・二三	七二	一三	横室卯喜治
31		〃	雑木林	不詳	〃	〃	一、六七二	〃 六・一六	六六	一八	斎木久三郎
32		〃	松林	〃	〃	〃	一、六五四	〃 一六・二三	八〇	一五	岩佐　八造
33		〃	〃	〃	〃	〃	一、六五九	〃 三・〇二	七八	六	田村　金作
34		〃	雑木林	〃	〃	〃	一、六六〇	〃 七・二三	一八	六	篠田　作治
35		〃	〃	〃	〃	〃	一、六四六	〃 七・二三	四八	一三	笠原房三郎
36	長山	前方後円	松林	〃	〃	且那坂前	一、五〇六	〃 九・一四	一三八	一八	江原　俊夫
37		円型	畑	〃	〃	〃	一、四八〇	〃 二・一九	七八	一八	永福寺
38		〃	松林	有	〃	〃	一、四七九	〃 二七・一八	七八		目崎　武平
39		〃	〃	〃	〃	〃	一、四七九	〃 二七・一八	五四	九	〃
40		〃	〃	不詳	〃	〃	一、四九二	〃 二三・一〇	八〇	九	江原　俊夫
41		〃	杉林	〃	〃	〃	一、四八五	〃 三・〇七	九六	一五	〃

42	円型	雑木林	無	〃	朝倉且那坂前	一、四八二	一七長	三六	目崎　武平
43	〃	〃	〃	〃	少林山達磨寺教会所アリ	〃	〃	三〇	〃
44	鶴巻塚前方後円	松畑林半	掘	〃	〃	一、四一三	六・〇三	全長三六	笠原　五佐平
45	円型	山林不	詳	〃	〃	一、四〇四ノ一	三五・〇五	長	笠原　東馬
46	〃	畑	有	〃	〃	一、四〇四ノ一	三五・〇五	六六	〃
47	〃	松林不	詳	〃	若宮ノ上	一、三九八	一五・二〇	五四	倉林　武
48	〃	〃	〃	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	一〇八	〃
49	〃	畑	〃	〃	〃	一、四一九	一四	一〇八	木村　善造
50	〃	山林	〃	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	三	倉林　武
51	〃	〃	〃	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	八	〃
52	〃	〃	〃	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	八	〃
53	〃	〃	〃	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	八	〃
54	前方後円	松林半	掘	〃	〃	一、三九八	一五・二〇	一五	〃
55	円型	山林不	詳	〃	〃	一、四二三	一四・〇三	三六	〃
56	〃	開墾地	無	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	三六	〃
57	〃	〃	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	七二	殆平坦
58	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	六	〃

（馬ノ爪）

59	〃	荒蕪地	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	一四	〃
60	〃	荒地	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	三六	〃
61	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	径	一四	〃
62	〃	〃	〃	〃	〃	一、四二六	一四・〇四	大	三	〃
63	〃	〃	〃	〃	〃	一、四二九ノ一	一三・二	一四	六	阿佐美能吉
64	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三八五	一二・一五	八	六	倉林　武
65	〃	松林	〃	〃	〃	一、三八五	一二・一五	六〇	一五	〃
66	円型	荒地	〃	〃	〃	一、三八一	一〇・一三	七二	六	永福寺
67	八幡山前方後方	松林雑木林	有	〃	若宮	一、三四六、三四九	六・一五	幅	四四	前方部半面ト、後方部頂上発掘サル
68	円型	松林不	詳	〃	〃	一、三四八	一六・一六	径	五四	阿佐美林内
69	〃	杉林半	掘	〃	〃	一、三五七	五四・〇六	〃	一〇八	八幡神社
70	〃	雑木林	有	後閑	坊山	一、二三二	一・一六	〃	九〇	倉林　武
71	天神山前方後円	山林不	開墾	〃	〃	一、二二四	一五・三	長	四四	掘サル
72	円型	山林	有	〃	神明	九〇九	一四・〇四	径	一四	江原　俊夫
73	〃	〃	不詳	〃	神明山	九〇九	一四・〇四	幅	三四	後
74	〃	〃	〃	〃	〃	九〇九	一四・〇四	〃	一〇八	設楽文七郎
75	〃	〃	有	〃	〃	九〇九	一四・〇四	〃	三〇	大橋善四郎
76	〃	雑草地	無	〃	〃	九〇九	一四・〇四	〃	三六	矢端　次郎

77	円型	雑草地	無	後閑神明山九〇九	〃	〃	一四・〇四	径	六四	大橋善四郎	
78	〃	〃	不詳	〃乙ノ九一二	〃	〃	七・〇五	〃	六〇	円満寺	
80	〃	桑園	〃	〃 九〇四	〃	〃	三・二九	〃	五三	大橋善四郎	
81	〃	山林	〃	〃 坊山 一、二〇六	〃	〃	九・一五	〃	四三	湯沢佐馬吉	
82	〃	桑園	〃	〃 一、二〇五ノ一	〃	〃	四・〇七	〃	四六	〃	
83	〃	山林	有	〃 一、二一〇	〃	〃	八・一三	〃	七二	矢端森之助	
84	〃	〃	半掘	〃 神明九一一	〃	〃	六・一三	〃	二四	樋沢 保司	
85	〃	〃	不詳	〃 諏訪東九〇〇	〃	〃	五・一七	〃	四六	中沢菊次郎	
86	前方後円	松林	有	〃 神明九三四ノ一	南北	二八	一三・〇三	東西	一八六	平	坦矢端 次郎
87	円型	雑木林	〃	〃 九三八	〃	〃	一五・一三	径	四三	塚田藤十郎	
88	〃	雑木林	有	〃 九三八	〃	〃	一五・一三	〃	二四	〃	
89	〃	〃	不詳	〃 九三八	〃	〃	一五・一三	〃	八	〃	
90	〃	畑	有	〃 九一一	〃	〃	六・一三	〃	七二	樋沢 保司	
91	〃	〃	〃	〃 九二〇	〃	〃	二一・一〇	〃	二六	川端 クノ	
92	〃	松林	不詳	〃 九二三	〃	〃	一〇・一三	〃	二六	神明神社	
93	〃	雑木林	有	〃 九四五	東西	一八	二四	南北	三〇	北堀 慶弥	
94	〃	〃	〃	〃 九四六	〃	〃	二五・一四	径	六〇	〃	
95	〃	〃	〃	〃 飯玉九五六	〃	〃	一一・二四	〃	三六	中沢菊次郎	

96	〃	〃	〃	〃 九五五	〃	〃	九・一三	〃	九六	三〇	〃
97	〃	境内	不詳	〃 九九三	〃	〃	三一・一三	〃	一三〇	二四	官 有
98	〃	雑木林	有	〃 一、〇〇四	〃	〃	一・二一	〃	六	二四	中沢峯五郎
99	〃	畑	〃	〃 一、〇〇三	〃	〃	三・一九	〃	六〇	平	坦 〃
100	〃	〃	〃	諏訪東八九二	〃	〃	二四・〇六	〃	六〇	三	小泉輪三郎
101	桑園	不詳	〃	飯玉 九五一	〃	〃	一〇・〇六	〃	二四	三	橋本 良治
102	梨園	有	〃	諏訪東八七八	〃	〃	元・一七	〃	三六	六	梅沢 市平
103	桑園	〃	〃	〃 八七五	〃	〃	七・〇一	〃	六〇	三	円 満寺
104	前方後円	山林	〃	大屋敷一、〇二一	〃	〃	七・一六	〃	二六	後	前
105	円型	松林	不詳	〃 一、〇二三	〃	〃	二四・一九	〃	七二	三〇	川和 良作
106	〃	桑園	有	諏訪東八五〇	〃	〃	二・〇四	〃	六〇	六	中沢峯五郎
107	〃	〃	〃	広瀬添七四八	〃	〃	九・一三	〃	一六	五	後閑 栄吉
108	鶴巻山	アカシヤノ林	〃	鶴巻六〇九ノ一	〃	〃	七・〇二	〃	一三	八	橋本忠太郎
109	〃	雑草地	〃	〃 六九六	〃	〃	元	〃	四六	九	亀井 明治
110	〃	〃	〃	〃 六八七	〃	〃	三・〇六	〃	九〇	六	大崎 喜八
111	前方後円	桑園	〃	〃 六八四 六八五	〃	〃	五・〇八	〃	一五〇	平	坦 橋本トキ
112	円型	〃	〃	〃 六七一	〃	〃	一一・一二	〃	四六	九	梅沢 市平
113	〃	荒地	三分ノ二発掘	大屋敷一、〇〇四 一、〇四六 一、〇四八	〃	〃	一七・一三	〃	七二	三	野中安五郎 橋本参治郎 橋本トキ

村ノ石橋用材ハ大部分コノ古墳ノ石槨ヲ用ヒタリ

多数ノ葺石アリ、

（剣一振、曲玉数個）

下川淵

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 浅間神社	前方後円	竹藪	有	横手 五六一 五六二	二一・〇八 畝	全長 一四〇 尺	前六 後二〇 尺	石井慶造 石井藤太	石槨露出湟阯ヲ存ス
2	円型	篠藪	〃	亀里竜門一、三六七	一・二七	東西 三九 南北 五二	九	井田忠作	石槨ノ一部現存
3	前方後円	神社境内	〃	三公田五四五	九・一八	全長不明	前不明 後九	国	明治初年発掘、石槨ヲ崩壊シ石垣トナス、後円部湟阯存ス

上陽（但し前橋市に合併した地域分）

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 二子山	前方後円	山林 墓地	無	上両家木之宮 一六九ノ一 外一六筆	三三・二〇 畝	二六四 尺	前後共 二三 尺	関根豊蔵 外数名	湟阯アリ（埴輪破片）
2 乞食塚	円型	〃	不詳	〃 〃 二三一	二・二三	五三	八	関根数衛 外五名	葺石アリ
3 ボンゼン山	〃	〃	有	〃 甲二二八 乙二二八	三・一四	六九	一〇	亀井明治 外一名	葺石アリ
4 ミミダレ薬師	〃	畑	〃	〃 〃 一三二	一・二三	三六	不詳	関根徳弥	（土器片）
5 オトウカ塚	〃	山林	〃	〃 〃 一四五 外二筆	一〇・〇八	九六	一三	亀井半治	
6 文珠山 オーボ山	前方後円	〃	無	山王前田 五二七 五二八	二一・二八	一六五	二〇	禅養寺 村有	火ノ見アリ
7 阿弥陀山	円型	〃	不詳	〃 〃 五三一 五三二	五・〇三	八三	一三	禅養寺 外数名	
8	〃	〃	有	〃 〃 五一三	一・二三	五六	不詳	野沢織員	葺石アリ
9 狐塚	〃	〃	〃	〃 〃 五四三	二・二一	八三	一〇	関根福太郎	葺石アリ（土器、刀）
10	〃	芝地	不詳	〃 〃 五八三	二二	三三	七	関根福司	葺石アリ
11	〃		有	〃 〃 五六五	二・〇七	五三	七	宮下要助	槨石アリ
12	前方後円	竹林	〃	〃 田尻 四六四	二六・二〇	二二一	八	関根富次松	鎌倉時代ノ多宝塔アリ、葺石アリ
13	〃	山林	不詳	〃 〃 四八〇 四八一	二五・二五	二〇一	二〇	宮下磯太郎 外一名	湟阯アリ、葺石アリ
14 二子山	〃	〃	有 明治四〇	〃 三代 九三	一九・二六	二〇五	一五	禅養寺	帝室博物館蔵（王冠、須恵器、桂甲、土師器）槨石、葺石アリ
15	円型	〃	有	〃 大塚 一六八	一三・一三	一二五	二〇	〃	
16	〃	〃	有 昭和一〇	〃 〃 二一八	五・一一	九七	一三	武政喜平	（直刀）
17	前方後円	畑 一部ハ宅地ト道路	有	〃 〃 二二二 外二筆	三一・二八	二六一	一三	山口照雄 外一名	（土器片）
18	円型	草地	不詳	〃 〃 二一〇	三・二七	五〇	七	鈴木沢吉 外二名	
19	〃	山林	有	〃 〃 二〇〇	六・〇〇	六六	八	関根福太郎	葺石アリ
20 かめづか山	前方後円		〃	〃 法尺寺三〇四	一一・一七	一三一	二〇	亀井求米司	湟阯アリ、葺石アリ、
21 薬師山	円型	芝地	不詳	〃 神田 五三	六・〇五	八三	一三	関根豊吉	葺石アリ（土器片）
22	〃	〃	〃	〃 法尺寺二七七	二五	三三	七	鈴木権吉	〃（〃）
23	〃	墓地	〃	〃 〃 二七四	二六	四〇	五	武藤主馬松	葺石アリ

24	円型	山林	不詳	山王法尺寺	二六二	四・〇六	六六	三	禅養寺	葺石、湟阯アリ（土器片）
25	〃	〃	〃	〃	二九六	一六・二三	一七	五	関根辰八	葺石アリ
26	〃	山林	有	〃	二六〇	三・〇二	八六	一〇	山口喜太十郎	〃（土器片）
27	〃	荒地	〃	〃	二七二	三・二一	五九	一三	禅養寺	〃
28	〃	山林	〃	〃	二四八	四・〇一	五三	一〇	山口喜太十郎	
29	〃	芝地	不詳	〃	二四一	一・〇六	二六	七	亀井半治	
30	〃	〃	有	〃	二三八	二・二五	五九	一三	武藤亀吉	
31	〃	山林	〃	〃	一八二	一・〇〇	五〇	五	武藤条蔵	
32	大塚	前方後円	〃	東善屋千原	一〇三 一〇四	七・二九	一六	前一三 後一三	小島栄左衛門	石槨アリ（土器片）
33	円型	畑	不詳	〃	九四	六・一七	九六	一五	新井儀平	湟阯アリ（埴輪破片）
34	〃	墓地	有 昭和一〇	〃	七七五	七・〇〇	九二	一三	細野仙次郎	湟阯アリ

総社

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘 有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 王山	前方後円	桑畑	有	総社石倉分 三五	畝 三五・〇三	尺 全長 二三五	尺 前一三 後一五	福田又平	石槨有、御諸別王ノ墳墓ト伝フ（玉類）
2 王山陪塚其一	円型	芝地	無	〃 〃 甲五三	二・〇〇	三〇	六	高津トミ	四天王ノ一人ノ墓ト伝フ、石碑有
3 同其二	〃	〃	〃	〃 〃 四〇	二・〇〇	三五	八	城田駒太郎	
4 王河原山	前方後円	桑畑 墓地	〃	〃 小河原大山 一一九	一五・〇〇	全長 二〇〇	前一二 後一三	平野こう	
5 稲荷山	円型		不詳	〃 稲荷塚東三、三五七	一・二〇	五一	八	曾我又六外六三名	稲荷社有
6 遠見山	前方後円	桑畑	〃	〃 給人城川一、四一〇	二三・〇六	全長 二二〇	前一八 後二〇	中島梅吉	
7 大小路山	円型	〃	〃	〃 〃 一、四四五	二・〇三	五三	七	吉田保太郎	稲荷社有
8 蛇穴山	〃	小学校御真影奉安殿敷地	有	〃 町屋敷南一、五八七	一〇・二四	一二	一八	国有地	石槨、湟阯有 御諸別王ノ霊地トイフ
9 宝塔山	方型	墓地	〃	〃 〃 一、六〇六	三一・〇〇	縦横各 一七七		秋元春朝	石槨、石棺有 彦狭島王ノ墳墓トイフ
10 愛宕山	円型	雑木山	〃	〃 大屋敷愛宕山 一、七六三	二三・一六	一八〇	二六	光厳寺	石槨、石棺有 八綱田王ノ墳墓トイフ
11 二子山	前方後円	芝地 松桜有	有 慶長年間	植野二子山 三六八	五一・〇三	長 三〇〇	前三三 後二九	国有地	石槨前後二一宛有、昭和二年史蹟指定、伝豊城入彦命墓（金銀装太刀、玉類、土器）
12 稲荷山	円型		不詳	総社町屋敷北乙 一、七四六	三・〇一	一一〇	一六	穂積ヒロ	稲荷社有
13 一本木塚	〃		〃	植野稲荷 一、〇一三	五・一九	七七	七	国有地	湟阯有、稲荷社有
14 大神宮様	〃		〃	〃 西新井一、〇六六	三・〇一	一一〇	一六	植野共有地	大神宮有
15 薬師塚	〃	墓地	〃	〃 〃 一、二四八	四・二四	七一	八	平井三郎外五名	石槨有

元総社

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 弥勒山	円型	桑園	有 大正一三	元総社弥勒九四二	畝 四・一三	尺 六六	尺 八	瀬下新作 外三三五名	（金環大一）、（刀一振）（〃中二）（〃小二）

清里

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1 諏訪山	円型	桑園 神社境内	有	青梨子 甲六八一 乙六八一	畝 三六・一六	尺 二〇八	尺 一七	諏訪神社	石槨アリシトイフ（埴輪破片）
2 五輪様	〃	小石ノ丘陵	有 明治二〇	〃 八三八	〇三	縦七 横一四	二	桜井正一	出土品所在不明（直刀、曲玉）
3	〃	森	無	池端 甲一五七	二一・二六	一八	一九	神明宮	神明宮有
4	〃	畑	有	〃 甲一九五 乙一九五	六・二七	七二	三	角田雄二	
5 八チ塚	〃	〃	〃	〃 二〇二ノ一 二〇二ノ二	三四・二一	東西一二三 南北二九五	一六	角田邦一 清水米五郎	四個ノ石槨アリシトイフ（埴輪破片）
6	〃	〃	〃	〃 二一五	一二・二四	一〇〇	七	松島伊三郎	
7 二子塚	〃	桑畑	〃	上青梨子 甲四一七 乙四一七	六・二九	東西一六五 南北一三二	一〇	笹沢栄二	
8	〃	雑木林	〃	〃 一二	一三・〇三	大	一八	清水米五郎	石槨有
9	〃	竹藪	有 明治二〇	〃 一四	七・〇〇	五二	七	湯浅勝太郎	出土品所在不明（直刀、管玉）
10	不詳	荒地	有	野良犬 四二四	五・〇〇	不詳	笠井七右衛門	石槨阯有	
11	円型	〃	有 明治初	〃 甲七六九ノ一	六・一四		矢島孫六	〃（埴輪破片）	
12 浅間山（富士塚）	〃	畑	無	青梨子 一、二〇六	一五・〇七	一三	九	桜井治一郎	浅間祠有
13	〃	平坦 桑畑	有 昭和八	池端 七二六ノ一	一三・〇〇	不詳		蜂巣彦三郎	出土品帝室博物館蔵（直刀、土器）

南橘

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	円型	桑畑	有	上細井西堀二一〇ノ一	畝 二三・二〇	尺 径五〇	尺 一三	長谷川長七	明治三六、七年頃発掘（金環、刀剣十五振人骨、歯）
2	〃	〃	〃	〃 〃 二一〇ノ一	二三・二〇	〃 六六	一三	〃	明治三六、七年頃発掘（金環、刀剣、人骨、歯）
3	〃	畑	〃	下細井鎌倉八五六ノ一	一一・二七	〃 六六	一〇	長岡杢平	明治三〇年頃発掘（金環、刀剣、人骨）
4	〃	山林	〃	上細井西堀二四五	三・〇〇	〃 六六		金井乙丸	
5	〃	畑	〃	〃 東丑子	三・〇〇	〃 六六		内田伝重	（埴輪）
6 丑子塚	前方後円	山林	〃	〃 〃 三七五	三・〇〇	〃 一四八	前一三 後一〇	長谷川与平治外二名	明治二〇年頃発掘、石槨ヲ存ス入口破損ノタメ出入ヲ得ズ（金環、刀剣、埴輪）
7	円型	畑	〃	〃 〃 乙三七九	六・〇四	〃 六六	開墾ニヨリ不明	内田七三作	（埴輪破片）

8	円型	桑畑	有	上細井東丑子四〇一ノ一	一六・三径	五〇	長谷川長七	（埴輪破片）
9	〃	宅地	〃	南灰俵三二三ノ一	九・二九	六六	長谷川与平治	
10	〃	小祠有	〃	〃	三一六	六〇	長谷川長七	（刀剣、人骨）
11	〃	宅地	〃	端気 六〇八	二四・〇六	六六	〃	出土品一部ハ宮内省ニ献上（曲玉）
12	〃	畑	〃	東丑子四〇一ノ二	三三・二	六六	〃	（埴輪）
13	〃	〃	〃	〃 三九九	二〇・〇五	五〇	金子・安司	（〃）
14	狐塚	山林	〃	薬師一、一一〇	三・〇〇	六六	岡庭 浪平	
15	〃	畑	〃	南新田一一四六ノ一	八・三	公二	信沢 米吉	宮内省ニ献上（刀剣、曲玉、埴輪）
16	〃	竹林	無	田口冠木三〇五	二二五・二九	三〇	塩原猪三郎	
17	〃	〃	〃	〃	二二五・二九	二五	〃	
18	〃	〃	〃	〃	二二五・二九	二五	〃	
19	〃	〃	〃	〃	二二五・二九	二五	〃	
20	〃	〃	〃	〃	二二五・二九	二五	〃	
21	〃	稲荷神社	有	〃	二二五・二九	二五	〃	
22	〃	〃	〃	〃	二二五・二九	二五	〃	横穴石槨存ス
23	不詳	庭園	〃	〃 二九九	二六・二	不詳	〃	天明年間発掘（直刀二振）
24	観音山円型	竹林石仏三体	有	上細井東丑子四〇一ノ一	一六・三径	五〇	天野 喜作	明治九年発掘、横穴式石槨、田口朝臣益人ノ墓ト伝フ（刀二、鏃、銀環土器、埴輪馬、人骨）

25	〃	石造五輪塔有	無	〃	三〇九ノ二	一四・〇	〃	〃
26	〃	八幡祠有	〃	〃	三〇九ノ二	一四・〇	〃	〃
27	不詳	畑	有	〃	諏訪甲ノ九四九	三・〇五	不詳	金子 倉次（女子埴輪）
28	富士塚円型	〃	〃	〃	富士塚甲一、〇〇七〇乙一、〇〇七〇	四八・二径	一〇〇	塩原民之助（横穴式石槨アリシトイフ（金環、直刀七本）
29	不詳	石置場不詳	〃	〃	諏訪 訪九一六	四・一五	不詳	金子保五郎
30	〃	畑	有	〃	橘 一、一〇九	五・六	〃	橘神社（埴輪）
31	円型	草地	無	〃	砂押甲七五四	二五・〇二径	四〇	塩原 佐平
32	〃	畑不詳	〃	〃	富士塚乙一、〇六九	二六・〇五	一四	高橋 愛作
33	〃	稲荷社	有	〃	岡市六二四ノ二	四・二	四〇	横穴式、石室現存 高サ六尺、奥行一二尺
34	〃	竹林	無	〃	一、一五九ノ二、一五八 乙ノ一、一五九ノ二、一五八	一〇・三	四〇	吉野 安蔵
35	〃	山林 秋葉社有	〃	〃	八幡甲四六一 乙四六一	二三・九	五〇	橘神社
36	〃	竹林	〃	〃	岡市乙一、一五九ノ二、一五八	一〇・三	三〇	吉野 安蔵
37	〃	〃	〃	〃	〃 一、一五九ノ二 乙一、一五八	一〇・三	三〇	萩原 儀作（直刀二振）
38	〃	〃	有	〃	〃 一、一五七	五・五	〃	〃
39	〃	畑	〃	〃	諏訪 九六四	四・九	不詳	青木三代吉（直刀二振）
40	引切塚	山林	〃	青柳引切塚八七五ノ一	九・二径	四〇	岡田 藤造	

芳賀

古墳番号同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
41	円型	畑	有	青柳神明九四二ノ一	二・五	径	一〇	内山　運吉	（土器、直刀一振）
42 大塚、又ハボンボン塚	〃	山林	〃	日輪寺宮本乙四〇ノ一	一〇	〃	一〇	田子芳太郎	（直刀一振）
43	〃	竹林	〃	上細井新田上一、三一三ノ二	八・〇六	〃	三	青木　由平	
44	〃	畑	〃	東徳沢前一、四八一	一五・〇六	〃	一〇	松本庄三郎	
45	〃	〃	〃	柴山一五六九	三・三	〃	三	斎藤、長平	細井小学校蔵（直刀二振）
1 吉祥寺塚	円型	畑	半掘	鳥取北原乙三五六	二・二四	〃	一三不詳	横山　宗治	墳丘有、一名高塚
2	〃	山林	有	前原　二〇三	七・一	〃	一〇	平林初五郎	（直刀五、土器）
3	〃	松林	無	〃　二〇三	七・二	〃	五	〃	
4	不詳	畑	有	〃　二六六	三・六不詳	〃	高井　忠象		石棺ノ蓋石現存
5	〃	〃	〃	〃　二七三	九・一九	〃	四不詳	〃	（直刀）
6	〃	半掘	〃	小神明薬師七五七ノ二		〃	六	後藤亀太郎	（〃）
7	〃	桑園	有	端気下山輪二六五ノ三	二・一三	〃	七	二〇年前石材採取ノ際石安五十嵐卯太郎	山岩加工（金環、直刀）

古墳番号同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
8 前方後円墳	竹林	半掘	〃	二六五ノ三	一五・〇八	〃	二〇後	〃	墳丘現存、東西二七三尺、南北三六〇尺、御諸別王墳墓ト伝フ
9	〃	〃	〃	二六七	二九・〇八	〃	五〇後	前不詳　青木　由平	濠ヲメグラス所アリ
10 ホーロ塚	円型	畑	無	中曲輪二八八	四・三三	〃	三	五十嵐文作	
11 大日塚	雑木林	林明治三八九	有	五代　大日塚二四九	四・〇二	〃	一〇不詳	田村　銀平	彦狭島王ノ墳墓ト伝フ（鏡、鏡板、轡、刀身鐔等）
12	〃	竹林	有	高橋一六三	四・〇〇	〃	一〇	片貝　吾作	墳有
13	〃	宅地	〃	〃　四ノ一	九・〇八	〃	一〇	船戸　菅沼	石槨現存
14 社口塚前方後円墳	芝地	〃	〃	社口四九〇		〃	三〇前後	五官有地	白蛇棲ムト伝フ、蚕神ヲ祀ル（直刀一）
15	円型	畑	無	天神六三八	五・〇三	〃	一五不詳	片貝佐太夫	（土器破片）
16	〃	芝地	〃	中原七四〇	四・一六	〃	七	松本　米吉	
17	〃	畑	有	七四一	一四・〇二	〃	六六	〃	
18	〃	〃	〃	七四二	一三・三三不詳	〃	片貝　実三		（直刀一）
19	〃	〃	〃	七一〇ノ一	二〇・一三	〃	六六不詳	近藤哲三郎	（直刀）
20	〃	〃	〃	六九七	一六・一〇	〃	一四	片貝　兵吉	
21	雑木林	〃	〃	小坂子鍛冶皆戸九八九		〃	三	岩田喜平治	
22	松林	無	〃	九七三	一一・一五	〃	三	小林　茂七	
23	山林	有	〃	九七三	一一・一五	〃	六六不詳	〃	
24	松林半	掘	〃	下原一、〇一〇	四六・三	〃	三六	小林儀三郎	

25	円型	松林	半堀	小坂子下原一、〇三〇	三・二七	一三二	不詳	山田喜代造	（直刀）
26 六道塚ノ一	〃	畑	無	〃 西原下竹田一、五一七	二・〇三	二三	三	横山宗治	
27 六道塚ノ一	〃	〃	有	〃 西原一、五二七	六・〇八	一三	不詳	〃	
28	〃	松林	有 大正五	〃 檜峯一、六〇三	五・〇五	八二	一〇	小林健助	石器時代遺跡地
29	〃	〃	有	〃 〃 一、六〇八ノ一	一〇七・〇六	二六	不詳	田村庄作	古墳群ヲナス
30	不詳	畑 原形全無	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三	五・一四	不詳		〃	
31	円型	畑	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		〃		〃	
32	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		〃		〃	
33	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		六六	不詳	〃	
34	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		不詳		〃	
35	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		〃		〃	
36	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇六ノ三		〃		〃	
37	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		〃		〃	
38	〃	〃	〃	〃 〃 一、六〇八ノ三		〃		〃	
39	〃	松林	有 五〇年前	〃 油田一、二五七	二四・二五	六三	一〇	小林嘉市	（直刀一）
40	〃	〃	有	〃 〃 一、二五五	九・二六	七〇	九	小林利平治	
41	〃	〃	〃	〃 〃 一、二五五	九・二六	六六	一〇	〃	
42	〃	〃	〃	〃 〃 一、二五三	二	三三	七	登丸敬二	

43	〃	〃	〃	〃 押込一、九一九	六五・二五	四六	不詳	小林孝一	
44	〃	〃	無	〃 下四ッ塚一、九六〇	三一・二四	一六	二	小林四郎	
45	〃	楢林	〃	〃 月山三九〇ノ一	三六・二九	四〇	一〇	小林儀三郎	国宝善勝寺阿弥陀仏ハ以前此処ニアリシモノナリ
46	〃	宅地	有	勝沢東曲輪六九八	一〇・一四	一〇〇	一〇	鈴木兵吉	石槨現存（直刀）
47	〃	竹藪	有 二〇年前	〃 前原七九〇	四・二七	三三		鈴木森太郎	
48 オブ塚	前方後円	竹林	無	〃 西曲輪四二〇	一七・〇七	前径六六 後径一五五	前七 後一六	横山又吉郎	皇子墳墓及火雨伝説アリ
49	円型	宅地	有	〃 〃 四四一	一四・一五	七六	一一	横山芳平	石槨現存
50	〃	山林	〃	〃 北曲輪五一	二九・二六	五〇	七	横山宗治	
51	〃	〃	〃	〃 〃 五一	二三・二六	三三	五	〃	
52	〃	〃	無	〃 〃 五一	二三・二六	二六	五	〃	
53	〃	〃	有	〃 〃 五一	二三・二六	三三	七	〃	
54	〃	〃	〃	〃 〃 五一	二三・二六	六六	四	〃	
55	〃	畑	有 六〇年前	嶺勝替戸一、四七八	一五・〇六	一六	三	小暮善平	
56 ゼニミ塚	〃	山林	有 一〇〇年前	〃 寺間甲三五	一三・二〇	一三二	三	青木賢孝	石槨現存、高四尺、横七尺深八尺
57	〃	〃	有	〃 入皆戸一、九三九	五・〇三	四〇	四	小暮芳太郎	
58	〃	〃	〃	〃 大林二、〇二八	二三・〇八	六六	五	田所長衛	
59	〃	〃	〃	〃 東公田一、八九四	六七・一五	四三	五	田所織之助	
60 イナリ塚	〃	畑	半掘	〃 桂正田一、七四六	一九・二四	一六五	一六	小暮兼五郎	

61	円型	田中	有	嶺島田五一九		六六	八	青木由平		
62	〃	畑	無	五代高橋（石置場）	二五・〇〇	四〇	七	高井領作		
63	〃	松林	有	小坂子蕪皆戸六四七	二三・〇〇	五〇	七	五十嵐善作		
64	〃	畑	〃	〃　〃　六四三	二四・二四	一六	不詳	角田正源		

桂萱

古墳番号同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	不詳	桑園	有	三俣中丸五九三	六・一七畝	七尺	三尺	大塚仁平	（直刀一）
2	円型	荒蕪地	有 昭和九	上沖斎藤七三五、七三六 七四八、七五二	三四・一六	三〇	八	岩田喜三郎 外三名	
3	前方後円	〃	〃 〃	〃　〃　七四九 七五〇	一三・一五	一二	前二 後三	田中大七郎 篠田竹重	
4	〃	桑園	有 昭和元	〃　〃　七三八 七四五	一九・一四	二六	後四	山本栄次郎 岩田憲一	
5 越後塚	不詳	水田	有 昭和九	下沖清水尻三一六	八・〇八	四三	三	小林健助	
6 おまんけ塚	円型	芝地	有 昭和二	西片貝西面道上五四二	一・二三	四六	五	江原カネ	満開上人ノ墳墓ト伝フ
7	前方後円	畑	有 大正一五	〃　田中前七四一	七・二三	一四六	前四 後四	斎藤重三郎	
8 高山	円型	桑園	無	〃　伊勢林一、二一三	一・二五	七〇	四	半沢三蔵	

9 大塚	前方後円	片貝神社境内	有 文政三 明治二四 大正七	〃　星宮西前一、四六〇 甲一四六一	二〇・二九	一九〇	前八 後三	官有地 玉蔵院	石槨現存（甲冑、鈴、直刀、金鏃、金環、土器、人骨）
10 石塚	円型	荒蕪地	有	東片貝源田島二一七	一四・二一	二〇	三	竹内林三郎	
11 石塚	不詳	雑木林	〃	上泉観音堂四七五	二三	三〇	二	設楽吉太郎	
12 大塚	円型	松木立	〃	〃　川久保一、七一四	一・〇六	五〇	七	菅野右平太	
13	〃	松林	無	〃　杉山一、八一四	二八六・〇七	五〇	六	田村庄作	
14	前方後円	雑木地	有 明治三九	〃　神山一、九五〇	一七・〇八	五〇	一〇	黒崎日露義	（直刀一）
15	円型	雑草地	有	〃　脊負山二、〇二四	一〇・一四	五〇	七	戸丸栄吉	
16	〃	開墾地	〃	〃　〃　二、〇一六	一・二九	三三	五	閑野啓次郎	
17	〃	雑草地	〃	〃　〃　二、〇二二	一三・一三	二八	五	大淵清作	
18	〃	〃	〃	〃　〃　二、〇五〇	二六・〇九	二六	五	菅野保造	
19	〃	〃	〃	〃　上赤坂二、〇五三	一四・二七	二八	五	菅野栄寿	
20	〃	桑園	〃	〃　武田二、一〇一	四・〇一	一七	三	〃	
21	〃	松林	無	〃　〃　二、一六一	三三・二三	四八	一一	〃	
22	不詳	畑	有 大正元	〃　〃　二、一三七	一六・一二	四六	三	〃	出土品行方不明（金環二、直刀一、土器数個）
23	円型	〃	有 大正四	〃　〃　二、一三七	一六・一二	五		〃	出土品、上泉黒崎貞吉氏蔵（直刀一、土器二）
24 武田明神塚	〃	梅林	有 大正元	〃　〃　二、一四〇	二・〇五	五一	五	関セツ	（直刀一）
25	不詳	畑	有	〃　檜峯二、二二二	三・〇一	七	三	高橋源次郎	

26	円型	雑木林	無	上泉	檜峯二、二二二	一三・〇一	三〇	五	高橋源次郎
27	〃	〃	有 大正元	〃	〃 二、二二二	一三・〇二	八	二	〃
28	〃	〃	〃 〃	〃	〃 二、二二二	一三・〇一	一五	五	〃
29	〃	葡萄畑	無	〃	〃 二、二二三 二、二二四	一五・二一	五〇	五	武内光造 黒崎貞吉
30	〃	雑木林	有 大正二	〃	〃 二、二二三	六・一六	一四	二	武内光造
31	不詳	開墾地	〃 〃	〃	〃 二、二二一	一一・二〇	七	三	矢島常次郎
32	〃	雑木林	〃 〃	〃	〃 二、二二一	一一・二〇	六	二	〃
33	円型	芝地	有 大正一〇	〃	〃 二、二二四	九・〇五	一三	三	黒崎貞吉
34	〃	〃	〃 〃	〃	〃 二、二二五	一五・〇九	一八	三	〃
35	〃	雑草地	〃 〃	〃	〃 二、二二四	九・〇五	一六	三	〃
36	〃	〃	有 大正九	〃	〃 二、二五八	一〇・二七	五〇	七	秋葉伝六
37	〃	〃	有 大正一〇	〃	〃 二、二二三	六・一六	一五	三	武内光造
38	〃	芝地	〃 〃	〃	〃 二、二五八	一〇・二七	一三	三	秋葉伝六
39	〃	桑園	〃 〃	〃	〃 二、二五八	一〇・二七	四六	四	〃
40	饅頭塚 〃	雑木林	無	〃	風袋二、四八九	四九・二四	七三	八	高橋藤太郎

41	〃	〃	有	〃	〃 二、四八九	四九・二四	三六	三	〃
42	〃	雑木山	無	〃	〃 二、四九〇	三一・〇八	四〇	四	矢島伝重
43	〃	〃	〃	〃	〃 二、四七八	八・二九	四〇	五	船津源太郎
44	〃	楢林	有	〃	〃 二、四八九	四九・二四	三〇	三	高橋藤太郎
45	〃	雑木林	有 明治四〇	〃	〃 二、四八九	四九・二四	三六	四	〃
46	〃	〃	無	〃	〃 二、四八九	四九・二四	三六	四	〃
47	〃	〃	有 明治四〇	〃	〃 二、四八九	四九・二四	三〇	四	〃
48	〃	〃	有 明治四五	〃	〃 二、四七八	八・二九	二六	三	船津源太郎
49	〃	雑木山	無	〃	〃 二、四七八	八・二九	三三	四	〃
50	〃	〃	〃	〃	〃 二、四五五	一七・二一	三三	四	高橋邦三郎
51	新田塚 〃	雑木林	〃	〃	新田塚二、六九四	六・〇九	一五五	一五	船津ヨウ
52	薬師様 〃	〃	〃	〃	亀泉西原二〇九	四・〇五	五六	一〇	柴崎ヨシ
53	ほうさう神 〃	〃	有	〃	中山四ノ一	一・一六	一六	三	赤城神社
54	〃	〃	有 二〇年前	〃	林下一六〇ノ一	二三・一九	一二〇	一八	堀越長作（人骨、金環、直刀）
55	〃	〃	無	〃	東山二五	四・二一	三〇	七	岡田保一郎
56	猫見塚 〃	雑木山	有	上泉猫見塚三、四七五		一三・一五	八三	一〇	村田清左衛門
57	〃	雑草地	有 大正六	荻窪宮本甲一八七ノ二		一四・一六	三〇	三	荻窪神社

58 ほつこし塚	円型	雑木林	有	荻窪入田九六一	一一・一四	径 七二 東西 五三	八	木村　両助	（長刀＝二尺三寸）
59	〃	雑草地	無	〃 清水一、〇一五ノ一	四・〇〇	二三	三	吉沢林次郎外三名	
60	〃	〃	〃	〃 〃 一、〇二二	二七・一六	一八	二	小林儀三郎	
61	〃	雑木林	〃	〃 〃 一、〇二〇	一三・一八	一八	三	井上紋十郎	
62	〃	〃	〃	〃 〃 一、〇二二	二七・一六	二〇	四	小林儀三郎	
63	〃	楢林	〃	〃 岡替戸一、〇七九	五七・〇三	三三	四	田村　庄作	
64	〃	雑木林	有	〃 神明前甲一、三二一	一五・〇七	三〇	三	小林儀三郎	
65 大日塚	〃	〃	〃	〃 大日甲一、二一四	三一・〇〇	二六	五	湯沢善十郎	
66 二子塚 一名正円寺塚	前方後円	草山	有 明治一一	堀之下二子塚 三八〇ノ一 三八一	四五・〇五	全長 二四一	前 二三 後 二六	正円寺 大胡神社	横穴式石槨現存、周湟幅四九尺（直刀、鉄鏃、人骨）
67	円型	竹林	有 昭和五	堤屋敷内 二二一 二二四	一四・二三	一〇〇	三	中島与三郎 大沢丑三	
68	〃	〃	無	〃 西畑 一五〇	一〇・二三	三三	八	高橋　栄蔵	
69 経塚	〃	〃	〃	江木中六所 一、四〇〇ノ二	三・〇〇	四六	七	早田　藤次	
70	〃	雑木林	有	〃 六所 八四四 八三七	二三・二三	四六	四	大島弥一郎 寺田清太郎	
71	〃	松林	無	〃 〃 八三六	一・二〇	四二	六	北爪 三七重郎	
72	〃	畑	有	〃 〃 八三五ノ一	六五・二一	四〇	三	黒崎　ウシ	
73 金塚	前方後円	桑園	有 明治三〇 昭和八	西片貝西前通七五五	三・〇五	五		江原　ヨネ	

74	円型	雑草地	有 昭和一〇	亀泉関東乙五五〇ノ三	五・一三	一三	三	柴崎冬至郎	
75	〃	雑木林	有 大正四	〃 〃 乙五五〇	四・二五	四六	七	〃	
76	〃	草原	有 大正八	〃 江戸原甲五四二	九・二六	三〇		中島惣五郎	
77	〃	竹藪	無	〃 関東甲五五四ノ二	二・〇三	三三	六	木村　寅吉	
78	〃	雑木林	有 明治四〇	〃 江戸原甲五二五	四六・二六	三三	七	柴崎兵次郎	出土品大胡神社奉納（直刀）
79	〃	栗樹生ズ	無	〃 〃 五三七	一一・一七	一六	七	柴崎伝三郎	

木瀬

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘 有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	前方後円	竹藪	有 明治一〇	東上野村中甲五四	畝 一三・一二	全長 二〇〇 尺	前 八 後 八 尺	松村　森平	若宮八幡祠有（鏃、直刀）
2	円型	上野神社境内	有	〃 〃 甲七六	六・一五	直径 六〇	一〇	国有地	（埴輪土偶）
3 松山塚	〃	桑畑	有 明治四〇	〃 〃 乙二六六	一三・〇八	六〇	一〇	女屋　峯吉	（直刀、鏃、平瓶、土器人骨二人分）
4	〃	雑木林 畑	無 有	女屋寺廻乙二六四	二・〇一	三〇	五	万福寺	附近ニ円墳七基アリシモ開墾サル（人骨、直刀、勾玉、埴輪）仮称女屋古墳群
5	〃	雑木林	無	小島田八日市四八六	一九・〇七	二八	一一	下田弥三郎	
6	〃	竹藪	〃	〃 〃 五〇二	二三・一四	五〇	九	小島田共有	

7	円	型	宅	地	有	小島田八日市五〇四	九・一〇	三〇	下田　泰	（鏡）
8	〃	〃	〃	〃	無	〃　五一二	一・六	七	新井卯太郎	（鐸、馬具、刀、鏃、土器）
9	〃	〃	畑	地	有 明治三九	〃　五五二ノ一	四・三不詳	七	新井卯太郎外三名	
10	前方後円				有	筑井八日市四四ノ一四四ノ二	四・五前後不詳	七	丸橋弥寿伊	稲荷祠有（埴輪、土偶、鳥）
11	不	詳	原形ヲトドメズ	畑	〃	〃　五二	五・三不詳	〃		（槍身）
12	〃	〃	〃	〃	有 昭和二	〃　四〇ノ一	九・六	〃	斎藤登喜司	（金環、人歯）
13	〃	〃	〃	〃	〃	〃　四七ノ一	八・〇〇	〃	〃	（金環、勾玉、切子玉）
14	円	型	墓	地	無	上増田宮原乙一、六九四	二・〇五	六〇	二奈良　又一	
15	〃	〃	雑木林		〃	〃　一、七〇九	二・〇〇	四六	奈良林太郎	
16	不	詳	原形ヲトドメズ	畑	有	〃　一、八六五ノ一、八六五ノ四	三・三不詳	〃	中島　安次	石槨現存
17	古薬師	円	型	原形ヲトドメズ	桑畑	〃　缺薬師一、五四七ノ一	一・六	〃	須藤　浅八	（槍身）
18	諏訪山	〃	雑木林		〃	〃　一、五五三ノ一	四・〇六	七	八近戸神社	（直刀、人骨、軍配）
19	お諏訪	〃	原形ヲトドメズ	畑	〃	諏訪三〇	四・二四	六〇	九大山　郭江	（直刀、石鏃）

古墳番号 同名称	形状	現状	発掘有無	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	円	型	山	林	有	荒子新宿一、一九一	三・二	径	尺	尺	飯島　英司	石槨現存
2 代官塚	婆さん	方	型	雑木林	不詳	〃　一、一三二	九・元	長サ	三	三	高坂　卓司	
3	円	型	〃	〃	〃	新屋乙九〇二	元・三	〃	二六	三	田中　宗平	
4	方	型	〃	〃	無	乙九〇二	九・三	〃	三	三	〃	
5	円	型	〃	〃	〃	乙九〇二	元・三	〃	三	三	飯島外一〇名　桂	
6 かね塚	不	詳	畑		有	元屋敷六三六		不詳				
7	円	型	雑木林		〃	東原四〇九	三・三	〃	六六	三	石関延次郎	
8	〃		畑		不詳	舞台二五ノ一ノ二	三・三	〃	三六	七	高坂　平吉	附近ヨリ土器ヲ発見セリト伝フ
9 デングリ山	〃		竹	林	有	〃　二四一	九・三	〃	一五	三〇	高坂定次郎	
10	不	詳	宅	地	〃	舞台西二七五	九・〇七	〃	三三	八	大沢房十郎	
11	円	型	山	林	不詳	〃　二七六	五・三	〃	三三	三	石関富茂寿	基部、土壇有リ
12	〃		〃		〃	〃　二七二ノ一	六・三	〃	三三	五	大沢　浩治	
13	〃		雑木林		無	下境一九三	二・三	〃	三三	五	石関富茂寿	
14	〃		〃		〃	〃　一八〇	五・三	〃	五〇	五	〃	
15	〃		〃		〃	〃　一八〇	五・三	〃	六六	七	〃	

16	円型	雑木林	無	荒子下境	一七八	三〇・〇	吾	石関団次郎								
17	〃	〃	有	〃	一七九	三一・〇	三	石関唯次郎	凝灰岩有り							
18	〃	〃	〃	乙一五六	六・六	三	赤坂　薬師									
19	〃	〃	〃	一五七	三・三	三	高坂佐平治									
20	〃	〃	無	一五七	三・三	六	〃									
21	〃	〃	有	一五八	六・〇	三	高坂・文雄									
22	方型	〃	〃	一五八	六・〇	六	〃	凝灰岩有り								
23	円型	〃	無	一五九、一六〇	四・〇	三	〃									
24	〃	〃	〃	一七四、一七七、一七九、一七六	三・〇	三	高坂　修治外三名									
25	〃	〃	〃	一七四	一五・四	三	高坂　修治									
26	〃	〃	有	一七四	一五・四	吾	〃									
27	〃	松林	無	一六二	三〇・七	吾	石関団次郎									
28	〃	松杉林	〃	一六二、一六三	四・三	三	〃									
29	〃	〃	〃	一六二、一六三	四・三	六	〃									
30	〃	畑	有	一六九	一七・七	三	石関　虎雄（金環二）									
31	雑木林	〃	〃	一六八	三・三	六	石関延次郎									
32	〃	畑	〃	葭沼甲四六八	六・八	三	高坂小重郎									
33	〃	〃	〃	甲四六八	六・八	吾	〃	（直刀、金環）								

34	十二ノ山	不詳	〃	〃	下大屋下西原三一三ノ一	一三・二	不詳	八木原　孝								
35	十二ノ山	〃	〃	乙三一三	一七・〇	〃	〃	八木原庫治	石槨アリシトイフ							
36	〃	〃	〃	乙三一三	一七・〇	〃	〃	〃	〃（直刀）							
37	〃	〃	〃	村主甲二七一	四・一〇	〃	〃	山口　恒寿外三名								
38	〃	〃	〃	二六八	二・〇	〃	〃	萩原　光三								
39	牛塚	〃	〃	二六七ノ三	三〇・〇	〃	〃	斎藤　一郎								
40	〃	〃	〃	二六七ノ三	三〇・〇	〃	〃	〃	〃							
41	円型	畦畔	無	前田四一八	二一・〇	一六	〃	〃	〃							
42	明神山不詳	畑	不詳	明神山五五八ノ一	三七・三	不詳	〃	産泰神社								
43	明神山	〃	〃	甲五六四	六・〇	〃	〃	斎藤　一郎								
44	大黒塚前方後円	竹林	有	五五五ノ二	一〇・三	前後一〇〇	八木原幸次郎	大宅朝臣墓トイフ、出土品産泰神社蔵（鈴鏡一、曲玉一、提瓶一、瑞一、埴輪土偶等）								
45	円型	雑木林	不詳	阿久山五三一、五三〇、五二八	六・三	三〇	木村七五郎外二名									
46	前方後円	〃	有	五三〇	三〇・〇	一六	藤井登喜太	一尺後前								
47	円型	松林	無	五三六	二一・〇	三	渋沢千代二									
48	〃	〃	有	甲五四六	三〇・〇	三	石関富茂寿									
49	雑木林	無	昭和一〇	五三七	七・三	三	鯉登千代二									
50	〃	〃	〃	五三五、五三六、五三七	三・二	三	高坂佐太郎外二名									

51	前二子	前方後円	雑木林	有 明治一一	西大室二子山甲 二、六五九	四七・二三	全長 三九六	前 三〇 後 三六	萩原 猪重 外九名	史蹟指定、豊城入彦命御陵ト伝フ、石槨現存（鏡、馬具、祝部、土器等）
52	前二子 陪塚	円型	宅 畑 地	有	〃 〃 不詳		不詳			
53	不詳	校庭		昭和二 有	〃 八反田二、一二四	二五・一一	不詳		村 有	（人骨朱粉）
54	円型	畑		有	〃 上諏訪二、七四三ノ一	三四・二五	三三	三	萩原弁二郎	
55	後二子	前方後円	山林	有 明治一〇	〃 内堀 二、六一六 二、六一七	三九・〇二	三三〇	前 二六 後 二八	萩原 庸作 萩原熊五郎	史蹟指定、荒田別命御陵ト伝フ、石槨湟有（刀、金環、高坏、甕其他）
56	小二子	〃	雑木林	不詳	〃 下諏訪二、一四二	二一・二六	一〇〇	前 七 後 一〇	山越 弥平	史蹟指定（不詳）
57	円型	〃		有 昭和八	〃 上縄引 二、二六九 二、二七三	六一・二〇	一一五	一六	中沢 一郎 福島国重郎	
58	〃	畑		有	〃 下縄引二、二三八	二六・二三	六六	三	山越 金造	湟阯アリ
59	〃	〃		有 昭和八	〃 上縄引二、二一六	一七・〇二	不詳		内藤 隆二	（埴輪、直刀）
60	〃	山林		有	〃 北山一、九三八	一〇・〇二	三三	二	萩原 庸作	
61	〃	雑木林		無	〃 上縄引二、二一五	七・一〇	五〇	一〇	久保 保治	
62	〃	畑 松林		有	〃 北山 一、九四八 乙一、九四九	二五・〇七	一三二	一三	栗原 倉吉 萩原 美八	
63	〃	雑木林		無	〃 上縄引二、二一四	五〇・〇三	五〇	七	栗原農夫次	
64	〃	〃		有	〃 北山一、九五〇	三一・〇五	一三二	一八	田中惣太郎	
65	〃	〃		無	〃 下諏訪二、一五七	一一・二八	二三	五	岡田 はる	
66	不詳	畑		有 昭和一〇	〃 乾谷 一、九〇五	六一・一二	不詳		中沢 勝栄	

67	円型	雑木林		有	〃 下諏訪二、一七二	一九・〇五	三三	五	萩原 庸作	横穴式石槨現存、湟阯段阯有
68	〃	〃		〃	〃 大稲荷乙三四〇	五八・一九	一六五	三三	内藤久五郎	
69	〃	〃		無	〃 下諏訪二、一七二	一九・〇五	五〇	一〇	萩原 庸作	
70	〃	〃		有	〃 七ッ石甲三二四	五三・一八	一三二	三三	萩原弁次郎	
71	〃	〃		無	〃 下諏訪二、一七二	一九・〇五	五〇	一〇	萩原 庸作	
72	〃	〃		有	〃 七ッ石三二五	一一・〇七	五〇	一〇	岡野 国松	
73	〃	〃		無	〃 下諏訪二、一七五	二〇・〇六	三三	三	加藤 文弥	
74	〃	〃		有 昭和九	〃 七ッ石甲三二四	一・二九	一一五	一三	萩原弁次郎	湟阯有、石祠有
75	〃	〃		無	〃 下諏訪二、一七五	二〇・〇六	六六	七	加藤 文弥	
76	〃	〃		有	〃 七ッ石甲三二四	五三・一八	五〇	八	萩原弁次郎	
77	〃	〃		〃	〃 下諏訪二、一七五	三〇・〇六	六六	七	加藤 文弥	
78	〃	〃		〃	〃 七ッ石三二三	四五・〇五	八二	一〇	根岸 泰治	湟阯有
79	〃	〃		〃	〃 上諏訪二、一七八	二三・一二	六六	七	山越和十郎	
80	〃	〃		〃	〃 七ッ石三二三	四五・〇五	六六	一〇	根岸 泰治	
81	〃	山林		〃	〃 下諏訪二、一七八	二三・一二	五〇	七	山越和十郎	
82	〃	畑		無	〃 大久保三一一	一五八・〇四	六六	七	萩原 猪重	
83	〃	山林		有	〃 下諏訪二、一七八	二三・一二	五〇	七	山越和十郎	
84	〃	畑		有 昭和九	〃 小稲荷二八〇	四九・二一	一三二	一〇	岡野 芳蔵	（金環二、刀一）

85	円型	雑木林	有	西大室下諏訪二、一八六	六・六	一〇三	三山越格次郎		
86	〃	〃	〃	小稲荷二七三	一七・一四	五〇	岡野　芳蔵	墳丘有	
87	〃	松林	無	下諏訪二、二〇〇	二〇・一七	一〇八	高橋　広吉		
88	〃	雑木林	昭和有九	小稲荷甲二六九	二八・〇四	六六	山越格次郎	稲荷祠有	
89	〃	畑	〃	二七七	五・三	六六	田中卯太郎	〃　（金環四）	
90	〃	〃	有	丙二六九	一六・六	五〇	岡野・芳蔵	八幡碑有	
91	〃	雑木林	〃	大稲荷甲三五四	四一・一〇	三一	湯　清	寺祠有（土器埴輪）	
92	〃	〃	有明治以前	三六八	五・一	三三〇	大室神社	石槨段、墳丘有、雷電碑有	
93	〃	畑	不詳	水口山乙二四八	二五・六	三三	石原久五郎		
94	〃	〃	昭和有八	中横倹一一三	二六・二九	二〇〇	萩原長次郎		
95	〃	雑木林	無	上横倹九二	一六・〇六	六六	岡野滝次郎		
96	〃	〃	〃	五七	五・一三	三三	千吉良　卯之吉		
97	〃	〃	有	二七	三・一八	三〇	富岡　章		
98	〃	山林畑	昭和有八	一七五七	三・〇〇	三三	岡野滝次郎　富岡　章		
99	〃	雑木林	無	一六	〇・二	三三	山田　作司		
100	〃	畑	有	六二	一五・一〇	不詳	雪沢千代二		
101	〃	畑原形ヲトドメズ	昭和八	六二	二・二	〃			

102	不詳	〃	〃	〃	一五・一〇	〃	〃		
103	円型	畑	昭和有八	六四	九・〇四	五〇	中沢　一郎		
104	〃	雑木林	無	九二	一六・〇六	六六	岡野滝次郎		
105	〃	〃	〃	甲七〇	九・一六	六五	井上善之助		
106	〃	〃	不詳	甲七〇	九・一六	一六	〃		
107	〃	〃	無	九一	六・三三	三三	萩原長次郎		
108	〃	〃	不詳	九二	一六・〇六	一六	岡野滝次郎		
109	〃	〃	無	九二	一六・〇六	一六	〃		
110	〃	〃	〃	五五	一四・一九	一三	〃		
111	〃	畑	有	伊勢山六〇四	三三・二六	不詳	木村　弥忠		
112	〃	〃	大正有八	六〇四	三三・二六	〃	〃		
113	〃	〃	〃	六〇四	三三・二六	一六	〃		
114	〃	藪	有	六〇五	三三・二六	不詳	〃		
115	〃	〃	大正有八	六〇六	四一・〇五	〃	〃		
116	〃	荒地	不詳	〃	三五・〇九	〃	斎藤　幹一		
117	〃	畑	大正有八	六二八	九・二〇	〃	萩原新太郎		
118	〃	桑畑	有	六二六	八五・二四	〃	竹沢覚次郎		

119	不詳	原形ヲトドメズ 畑	有	西大室伊勢山六二六	八五・二四	不詳		竹沢覚次郎			
120	前方後円	畑	大正三有	〃 〃 六二五	二六・二七	一八八	前一〇 後七	〃			
121	不詳	〃	有	〃 〃 六〇七	二七・一三	不詳		萩原　美八	稲荷祠有		
122	伊勢山前方後円	山林	明治一一有	〃 〃 六二三	二八・一三	全長二六四	前一六 後一六	大室神社	八綱田ノ御墓ト伝フ、石槨現存陪冢多シ、稲荷祠有（金環三、銀環七、歯）		
123	円型	〃	無	〃 中島 五三九	七・〇五	五〇	三	木村忠次郎			
124	〃	雑木林	〃	〃 〃 五四〇	七・一二	六六	八	萩原　美八			
125	〃	山林	有	〃 〃 五二四	一二・二五	一三二	一三	木村　国蔵	湟阯アリ		
126	〃	山林 畑	〃	〃 〃 五二二 五二四	一九・〇九	一六	二	石原孫太郎 木村　国蔵			
127	〃	畑	明治末有	〃 〃 五一二	二三・二四	不詳		大室神社			
128	〃	雑木林	不詳	〃 〃 五三二	二四	二三	三	飯塚　柳助			
129	〃	〃	無	〃 〃 四七一	二・〇一	一六	三	木村　国蔵			
130	〃	〃	〃	〃 〃 四七一	二・〇一	二三	五	〃			
131	〃	山林	〃	〃 〃 四六八	一三・〇二	一〇	二	飯塚　柳助			
132	〃	〃	不詳	〃 〃 四六八	一三・〇二	一〇	二	〃			
133	〃	〃	無	〃 〃 四六八	一三・〇二	一〇	二	〃			
134	〃	〃	〃	〃 〃 四六八	一・二一	一〇	二	〃			
135	〃	〃	〃	〃 〃 四六八	一・二一	一〇	二	〃			

136	〃	〃	〃	〃 〃 四六八	一・二一	一〇	二	〃			
137	〃	〃	不詳	〃 〃 四六八	一三・〇二	一〇	三	〃			
138	〃	雑木林	無	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	二	萩原　猪重外九名			
139	〃	山林	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	二	〃			
140	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	三	〃			
141	〃	雑木林	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	三	〃			
142	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	三	〃			
143	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一三	三	〃			
144	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一〇	二	〃			
145	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一〇	二	〃			
146	〃	〃	〃	〃 〃 五三三	一一・二六	一〇	二	〃			
147	〃	〃	〃	〃 上諏訪二、七四七ノ一	三一・一六	一〇〇	二六	品川芳太郎	石祠有		
148	〃	畑	有	〃 吉原一、八六四	三六・一三	不詳		萩原熊五郎	供養塔有（人骨）		
149	〃	〃	不詳	〃 〃 一、九二七	八一・二四	三三	三	観昌寺	〃		
150	〃	雑木林	大正一三有	〃 富士山八九九	五八・二五	六六		山田　幸恵	石槨現存（直刀二）		
151	〃	平坦畑	〃 〃	〃 〃 八九九	五八・二五	不詳		〃			
152	〃	〃	不詳	〃 地田栗一、五九六	一四・二〇	四〇	七	師田平次郎			
153	〃	雑木林	無	〃 丸山　一、一二八	一・〇二	五〇	七	岡田倍太郎	稲荷祠有		

154	円型	畑	有 昭和九	西大室	丸山	一、一二七	一六・〇四	五〇	七	岡田仲三郎	(刀身二)
155	〃	雑木林 墳丘殆ドナシ	不詳	〃	〃	一、一二一	五・三三	不詳		高坂信太郎	
156	〃	馬捨場 墳丘ナシ	〃	〃	〃	一、一二〇	一五・〇一	〃		萩原猪重外九名	
157	〃	山林 墳丘ナシ	〃	〃	〃	乙一、一一七	一五・二七	〃		曽根匡造	
158	〃	〃 〃	〃	〃	〃	一、一二〇	一五・〇一	〃		萩原・猪重外九名	
159	〃	〃 〃	〃	〃	〃	一、一一八	三・〇〇	〃		岡田勝太郎	
160	〃	山林	有	〃	下蛭沼	一、二〇一ノ二	三・二四	三		高坂熊三郎	湟阯有、出土品ハ関口綱雄保管(直刀、曲玉金環、土器)
161	〃	畑 墳丘ナシ	〃	〃	〃	一、一八五	五・〇九	不詳		高坂定次郎	
162	〃	畑	〃	〃	〃	一、一八二	二九・二三	〃		伏島平八郎	
163	〃	〃	〃	〃	〃	一、二〇三ノ一	一四・一五	〃		高坂茂五郎	
164	不詳	〃	不詳	〃	〃	一、一八二	二九・二三	〃		伏島平八郎	
165	円型	〃	有	〃	上蛭沼	一、一七九	一四・二三	〃		高坂六三郎	
166	不詳	〃 墳丘ナシ	〃	〃	〃	一、一八三	一〇・一七	〃		高坂定次郎	
167	円型	平坦桑園	無	〃	〃	一、一六九ノ一、二	三・〇〇	一〇〇	七	井上紋太郎 菊地丈三郎	
168	〃	松林	有	〃	天神	一、三四七	一四・〇二	一〇〇	一〇	久保田喜八	湟、段阯有
169	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三四四	二九・〇〇	五〇	七	高坂小重郎	

170	〃	〃	〃	〃	〃	一、三四六	二五・一八	六六	五	〃	
171	〃	〃	無	〃	〃	一、三四三	二四・一四	五〇	三	〃	
172	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三四四	二九・〇〇	五〇	三六	〃	
173	〃	〃	無	〃	〃	一、三四四	二九・〇〇	一六	二	〃	
174	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三四四	二九・〇〇	五〇	七	〃	
175	〃	〃	無	〃	〃	一、三四三	二四・一四	三三	三	〃	
176	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三四五	二六・三		二	小林政吉	
177	〃	〃	有	〃	〃	一、三三七	一四・二七	一〇〇	一〇	大室神社	湟有
178	〃	〃	〃	〃	〃	一、三四一	二一・三	一二五	一〇	高坂茂五郎	
179	〃	〃	〃	〃	〃	一、三三七	一四・二七	一六	三	大室神社	
180	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三三六	九・三	六六	一〇	〃	
181	〃	〃	有	〃	〃	一、三三二	一八・二九	一三三	一六	内田源久	
182	〃	雑木林	無	〃	〃	一、三三四	一六・〇五	一〇〇	七	福島寅治郎	
183	〃	〃	有	〃	〃	一、三三二	一八・二九	五〇	五	内田源久	
184	〃	〃	無	〃	〃	一、三三八	二六・〇七	六六	五	高坂定次郎	
185	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二八	二七・〇八	一〇〇	一〇	神沢菅三	
186	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二八	二七・〇八	五〇	三	〃	
187	〃	〃	〃	〃	〃	一、三三一	二九・〇二	六六	五	石川梅吉	

188	円型	雑木林	無	西大室	天神	一、三二八	二七・〇八	五〇	三	神沢 菅三	
189	〃	松林	〃	〃	〃	一、三三一	二九・〇一	六六	一	石川 梅吉	
190	〃	雑木林	有	〃	〃	一、三二七	五〇・〇〇	一〇〇	三	石川 富栄	
191	〃	松林	無	〃	〃	一、三三〇	二四・〇〇	五〇	五	高坂小重郎	
192	〃	〃	〃	〃	〃	一、三三八	二六・〇七	一〇〇	七	高坂定次郎	湟阯有
193	〃	〃	有	〃	〃	一、三三九	一六・〇七	六六	七	吉田条次郎	
194	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、三二七	五・〇〇	一三三	一〇	石川 富栄	湟阯、段阯有
195	〃	松林	〃	〃	〃	一、三二七	五〇・〇〇	一三三	三	〃	湟阯有
196	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	一三三	一三	〃	段及湟阯有
197	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二二	四二・一五	一三三	七	〃	
198	〃	松林	無	〃	〃	一、三二五	八・〇二	一三三	一〇	石川 梅吉	段及湟阯有
199	〃	〃	有	〃	〃	一、三二二	四二・一五	一三三	三	石川 富栄	
200	〃	雑木林 畑	無	〃	〃	一、三二〇	一一・二〇	一〇〇	七	田中 作米	
201	〃	山林	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	一〇〇	五	石川 富栄	
202	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、三二二	四二・一五	一〇〇	七	〃	
203	〃	松林	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	一〇〇	七	〃	
204	〃	雑木林 畑	不詳	〃	〃	一、三二〇	一一・二〇	一〇〇	七	田中 作米	
205	〃	松林	〃	〃	〃	一、三二二	四二・一五	一〇〇	三	石川 富栄	

206	〃	〃	無	〃	〃	一、三二三	三六・一八	五〇	三	〃	
207	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二二	四二・一五	六六	三	〃	
208	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	六六	七	〃	
209	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	一〇〇	七	〃	
210	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三二二	四二・一五	六六	一〇	〃	
211	〃	松林	〃	〃	〃	一、三二三	三六・一八	一〇〇	一〇	〃	
212	〃	〃	有 昭和九	〃	〃	一、三三四	一〇七・一三	一〇〇	一〇	石川 梅吉	湟阯有
213	〃	〃	有	〃	〃	一、三三四	一六・三五	不詳		福島寅治郎	
214	〃	雑木林	〃	〃	〃	一、二七九	三・〇八	六六	五	高坂定次郎	
215	〃	松林	〃	〃	東天神	一、三八一	三・二	六六	七	高坂 修治	
216	〃	雑木林	有 昭和九	〃	〃	一、三八四	一六・三三	一〇〇	一〇	福島寅次郎	
217	〃	〃	不詳	〃	〃	一、三八六	一四・一三	一〇〇	七	横堀徳太郎	
218	〃	畑	有	〃	〃	一、三八六	一四・一三	不詳		〃	
219	〃	〃	〃	〃	〃	一、三八八	一一・二九	一〇〇	七	奥野 重平	出土品所蔵不詳（曲玉管玉）
220	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二〇	一一・二〇	一二〇	一〇	田中 作米	
221	〃	畑 墳丘ナシ	〃	〃	天神	一、三二一	一三・一六	不詳		高坂小重郎	
222	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二四	一八・一三	〃		石川 梅吉	
223	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二四	一八・一三	〃		〃	

224	円型	畑	墳丘ナシ	有	西大室天神	一、三二四	二八・三	不詳	石川　梅吉
225	〃	〃	〃	〃	〃	一、三二四	二八・三	〃	〃
226	〃	桑園	〃	〃	〃	一、三二四	二八・三	一三〇	〃
227	〃	畑	墳丘ナシ	〃	〃	一、三二四	二八・三	不詳	〃
228	〃	〃	〃	〃	下天神	一、三〇二	八六・一〇	〃	石川ひろ子
229	中二子前方後円	雑木林	無	東大室	一、五〇一 一、五〇二	五六・〇六	前方後円	三田中	勉
230	太田稲荷塚	円型	桑園	有	明治四〇	〃	下青竜五七〇	五・一一	交	大室神社	御諸別王ノ御陵ト伝フ、昭和二年四月史蹟ニ指定、二重濠
231	〃	畑	原形ナシ	不詳	〃	〃	五四六ノ一	七二〇	不詳	中沢兼太郎	
232	大塚	〃	雑木林	無	〃	〃	五八四	四・六	吾	神沢　新七 外二名	石祠有
233	〃	〃	墳丘ナシ	不詳	〃	〃	五八五	一・〇四	不詳	中沢　てる	
234	〃	〃	〃	〃	〃	〃	六〇〇ノ一	二〇・〇五	〃	中沢兼太郎	
235	〃	〃	〃	有	〃	〃	六〇〇ノ一	二〇・〇五	〃	〃	（金環三、直刀一）
236	行人塚方	型	雑木林	無	〃	〃	甲六〇三	九・二四	交	福島　福七 外一五名	
237	不詳	道	畑	有	〃	〃	六〇〇ノ二	九・六	不詳	中沢兼太郎	
238	〃	宅地	〃	〃	〃	〃	五九六ノ一	四・六	〃	〃	
239	〃	畑	墳丘ナシ	〃	〃	〃	五八七	一・二	〃	山田　章臣	

240	〃	畑	〃	有	昭和一〇	〃	下猿楽甲一、三一三	二五・〇五	〃	〃	山田喜代寿
241	円型	畑	墳丘ナシ	〃	〃	〃	甲一、三一三	二五・六	〃	〃	〃
242	〃	畑	〃	〃	〃	〃	甲一、三一三	二五・六	〃	〃	〃
243	方型	雑木林	無	〃	〃	〃	一、三一三ノ乙	一六	一六	三	〃
244	円型	〃	不詳	〃	〃	〃	一、三〇九	七・六	三〇	松村代五郎	
245	山林	〃	〃	〃	〃	〃	乙一、三〇七	三・六	二六	松村　正寿	
246	前方後円崩缺	前方一部	有	〃	〃	〃	一、三〇一	一七・一四	前八〇後	松村吉太郎	
247	円型	山林	〃	〃	〃	〃	一、三〇〇	八・一七	三五	松村吉次郎	
248	〃	畑	〃	〃	〃	〃	一、二九五	三・〇七	不詳	松村　正寿	
249	〃	山林	不詳	〃	〃	〃	一、二九六	二・三	五〇	松村熊太郎	
250	〃	墓地	〃	〃	〃	〃	一、二九七	二・〇六	不詳	松村庄五郎 外五名	石槨ラシキモノ見ユ
251	不詳	畑	有	〃	〃	〃	一、二七一ノ一	一一・一六	〃	松村国太郎	
252	円型	〃	〃	〃	〃	〃	一、二七九ノ一	五五・〇二	〃	中沢　テル	
253	〃	〃	〃	〃	〃	〃	一、二七九ノ一	五五・〇二	〃	〃	
254	庚中塚	〃	雑木林	〃	〃	〃	飯土井石山三八二	五・三	一〇	二原島　桂蔵	
255	前方後円	〃	無	〃	〃	〃	二ノ堰一、一九六	三・二九	交	一〇	関根利三郎
256	円型	〃	〃	〃	〃	〃	二本松一、二一八	四・〇七	三	三	石綿和次郎

257		円型	雑木林	無	飯土井	二ノ堰	一、一九七	七・八	六六	五	石綿　寅吉	
258		〃	〃	〃	〃	〃	一、一九六	三三・二九	六六	七	関根利三郎	
259		〃	〃	〃	〃	〃	一、一九一	四・〇五	六六	七	原島仲太郎	
260		〃	〃	〃	〃	〃	一、一八九	二八・〇八	五〇	五	山田　広蔵	
261		〃	〃	〃	〃	〃	一、一八九 一、一九九	三四・〇五	一〇〇	一〇	山田　広蔵 石綿邦太郎	
262		〃	松林	有	〃	〃	一、一七九	三一・一三	六六	五	石綿明次郎外一五名	
263		〃	〃	無	〃	〃	一、一七九	三一・一三	三〇	二	〃	
264		〃	〃	有	〃	〃	一、一七九	二五・一四	六六	五	〃	
265		〃	雑木林	無	〃	〃	一、一八八	二五・一四	五〇	五	石原　吉弥	
266		〃	松林	有	〃	〃	一、一七八	二五・一四	一三〇	二	石綿明治郎外一五名	石槨有、小祠有
267		〃	原形ナシ畑	〃	〃	〃	一、一九四	三一・一八	不詳		関根　正男	
268		〃	〃	〃	〃	〃	一、一九四	三一・一八	〃		〃	（土器）
269		〃	〃	〃	〃	〃	一、一九六	三一・二九	〃		関根利三郎	
270		〃	畑	無	〃	宿畑乙	一、一四三	四・二七	一六五	一〇	関根　勇八	
271		〃	原形ナシ畑	有	〃	〃	一、一〇八	一九・一二	不詳		関根吉五郎	（土器片）
272		〃	〃	〃	〃	〃	一、一〇八	一九・一二	〃		〃	
273	西見塚（サイミヅカ）	〃	墓地	無	〃	〃	一、一四〇	二一・二八	五〇	五	原島類蔵外一二名	西方皇大神宮ヲ拝ス故ニ此名アリ

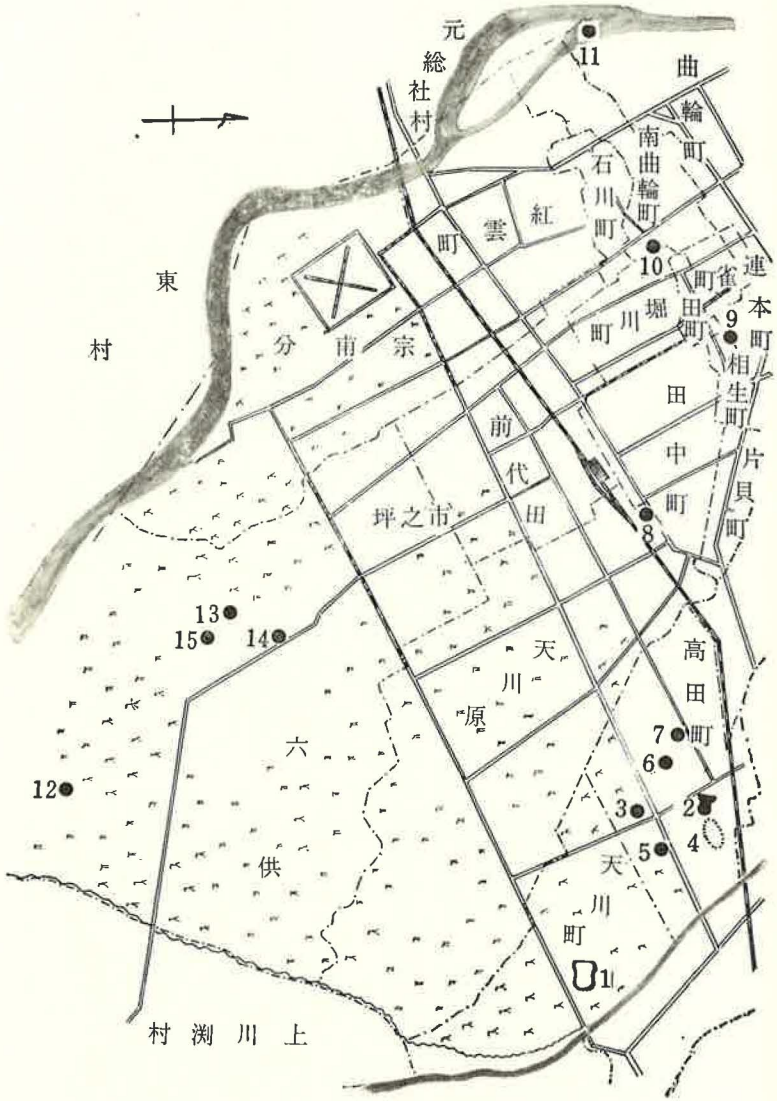
274	塚田	〃	畑墳丘ナシ	有	〃	北平一九八		三三・〇九	不詳		関根　富衛	
275		〃	雑木林	無	〃	南平八六五		四・二六	一三	三	原島　甚市 関根　粂蔵	
276	文珠山	〃	〃	〃	二ノ宮	新土塚	二、三二八	二・三五	一三	三〇	並木福太郎	湟阯有
277		〃	〃	〃	〃	〃	二、三四〇	一四・一三	六六	五	〃	〃
278		〃	〃	〃	〃	〃	二、三四一	一三・〇九	五〇	二	〃	
279		〃	畑墳丘ナシ	有	〃	前原	二、二一五	二六・一八	不詳		内田　源久	大規模ノ由
280	八幡山	〃	桑園墳丘ナシ	〃	〃	〃	乙二、二一六	三	〃		村有地	
281		〃	雑木林	〃	〃	八王子	甲二、四九三	三・〇〇	一六五	三	並木福太郎	小祠有
282	金塚	〃	〃	〃	〃	〃	甲二、四九三	三・〇〇	五〇	七	〃	
283		〃	〃	〃	〃	〃	甲二、四九三	三・〇〇	三三	三	〃	石塔有
284		〃	藪	有	〃	〃	二、四九六	一三・一一	一三	三	内田　みよ	小祠有
285		〃	畑	〃	〃	〃	二、四九五	一三	一三	三	武井彦治郎	
286		前方後円	宅地	〃	〃	〃	二、四九六 二、四九八ノ一	一八・一三	二〇〇	一六	内田　みよ 武井安次郎	出土品、赤城神社保管（鏡、土偶、土器）
287		円型	桑園	〃	〃	〃	二、四八七ノ二	一〇	不詳		内田　源久	
288		〃	〃	〃	〃	〃	二、四八七ノ一	二五・一六	〃		〃	
289	手長塚	〃	〃	〃	〃	〃	二、四八二 二、四八四 二、四八三ノ二	一六・〇七	〃		榛沢　文平外二名	降火伝説
290	地獄塚	〃	〃	有大正一四	〃	〃	二、五一五	二・〇七	一〇〇	一〇	内田政五郎 松井　栄吉	（人骨）

291	円	型	雑木林	無	〃	〃	二ノ宮八王子乙二、甲二、五四五	一三二	榛沢高次郎	石槨現存、小祠有
292	〃	〃	雑木地	有	〃	〃	〃乙二、五五七	一〇〇	榛沢とよの外一名	神沢弥藤治 薬師堂有
293	〃	〃	芝地	無	〃	〃	東中島一、八一二ノ二	六六	一〇	慈照院
294	筑波山前方後円		畑	半掘	〃	〃	宮東七七五	一六五	三	無量寿寺 浅間御嶽碑有、遺趾有
295	金比羅山	円	型	山林	無	〃	嶺下甲二五八	一四八	三	石川甚造 （土器）
296	〃	〃	墓地	有	〃	〃	嶺上乙一〇四	三不詳	三	小暮茂三郎
297	〃	〃	雑木林	無	〃	〃	大日塚一、三一八	四・〇一	三六	岡菊蔵
298	〃	〃	〃	有	〃	〃	一、三二一	一五・〇一	三三	岡市五郎
299	〃	〃	〃	無	〃	〃	一、三二一	一五・〇一	六六	八 〃
300	〃	〃	〃	有	〃	〃	一、三二五	三・一三	一六	三田中甚蔵
301	今井神社前方後円		社地		〃	今井白山東乙八一八		三	三〇〇	石槨遺現存、高貴ノ方ノ墳墓ト伝フ（直刀一）
302	不詳		畑	墳丘ナシ	〃	〃	八一三	三七・一四	不詳	〃
303	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八一三	三七・一四	〃	〃
304	〃	〃	畑	墳丘ナシ	〃	〃	八二五	八・一九	〃	南沢和三郎
305	円	型	雑木地	有 五〇年前	〃	〃	八三三	七・一三	六六	八 青木一助
306	〃	〃	〃	無	〃	〃	八三四	三・三八	一〇〇	一〇 奈良核次郎
307	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八三九	一六・一三	一〇〇	一〇 青木彦次郎 遺趾有

308	〃	雑木林	有	〃	〃	〃	八四〇	一八・三	三	蹴 改助
309	〃	雑木地	無	〃	〃	〃	八四一	一七・一三	一〇	奈良善之丞
310	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八四四	一九・二五	四	奈良角太郎
311	〃	〃	有	〃	〃	〃	八四二 八四四	一九・二六	六	奈良林太郎 奈良角太郎
312	〃	〃	無	〃	〃	〃	八三五	三・二九	一三	奈良角太郎 段及遺有
313	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八二九	二六・〇一	一〇〇	一二 奈良 コト
314	〃	畑	有	墳丘ナシ	〃	〃	八二七	二〇・兄不詳		今井神社
315	〃	宅地	有 二〇年前	〃	〃	〃	八二七	二〇・兄	〃	〃
316	〃	畑	有	〃	〃	〃	道下 八五七	四一・一〇	一六五	三〇 北爪栄太郎 葺石有（剣一）
317	不詳	畑	〃	〃	〃	〃	八五九	二〇・二〇 不詳		安養院
318	円	型	畑	〃	〃	〃	八五九	二〇・二〇	〃	〃 〃
319	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八八六	一三・一五	〃	青木紋平
320	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八五九	二〇・二六	〃	安養院
321	〃	〃	畑	墳丘ナシ	〃	〃	八五八	四一・一〇	〃	北爪栄太郎 石室アリシ由
322	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八六二	三〇・二〇	〃	青木勝四郎
323	不詳		〃	〃	〃	〃	中曲輪四九七	五・一七	〃	青木吉次郎
324	円	型	桑畑	〃	〃	〃	五〇五ノ三	二・兄	二	七 今井共有 出土鏡ハ産泰神社蔵、小祠有（鏡、土器）
325	〃	〃	竹藪	無	〃	〃	五〇二ノ二	二五	六六	七 青木茂

326	円墳	山林	無	今井中曲輪	五〇四ノ三	二五・〇四	一三	青木	紋平	稲荷祠有	
327	〃	畑	有	〃	五〇九	六・九不	詳	青木善之丞		（刀、土器）	
328	古墳	畑	有	安政四昭和五	荒口	北原 八〇一	一〇・二五	一〇〇	藤生登喜重		（金環一、直刀一、鏡、土器）
329	小塚	〃	有	大正一五	〃	諏訪西九〇九	二〇・一三	六〇	阿部	訓治	
330	小塚	不詳	側ニ石碑有	平坦桑園	〃	九〇五	一二・二五不	詳	阿部富太郎		
331	小塚	〃	ナシ	芝	地	〃	九〇五地先	二〇	〃		
332	円墳	山林	無	〃	〃	中原七一三	一五・八	一〇〇	阿部富太郎	稲荷祠有	
333	〃	〃	〃	〃	〃	甲六六九六七一	一一・二五	五〇	斉藤喜久次	〃	
334	権現山	前方後円	雑木林	〃	〃	前田 一六五一六六	三一・一七	二三〇前後	村山	吉弥八幡稲荷祠有	
335	円墳	畑	有	昭和一〇	富田	宮田 六六四	三一・〇五不	詳	橋本	房吉外四名 石祠有	
336	少将塚	前方後円	雑木林	無	〃	高見皆戸乙四五二	六・〇〇	一〇〇	〃		信沢右近少将ノ墓ト伝フ
337	不詳	芝地	不詳	〃	〃	〃 乙四五二	六・〇〇	三	〃		
338	前方後円	山林	無	〃	〃	細田 二七六	三一・〇九	二三〇後	前	正法院	観世音堂有
339	円墳	〃	〃	〃	〃	〃 二七六	三一・〇九	三三	〃		
340	〃	畑	有	〃	〃	〃 二七六	三一・〇九	三八	〃		三三八号ノ陪冢カ

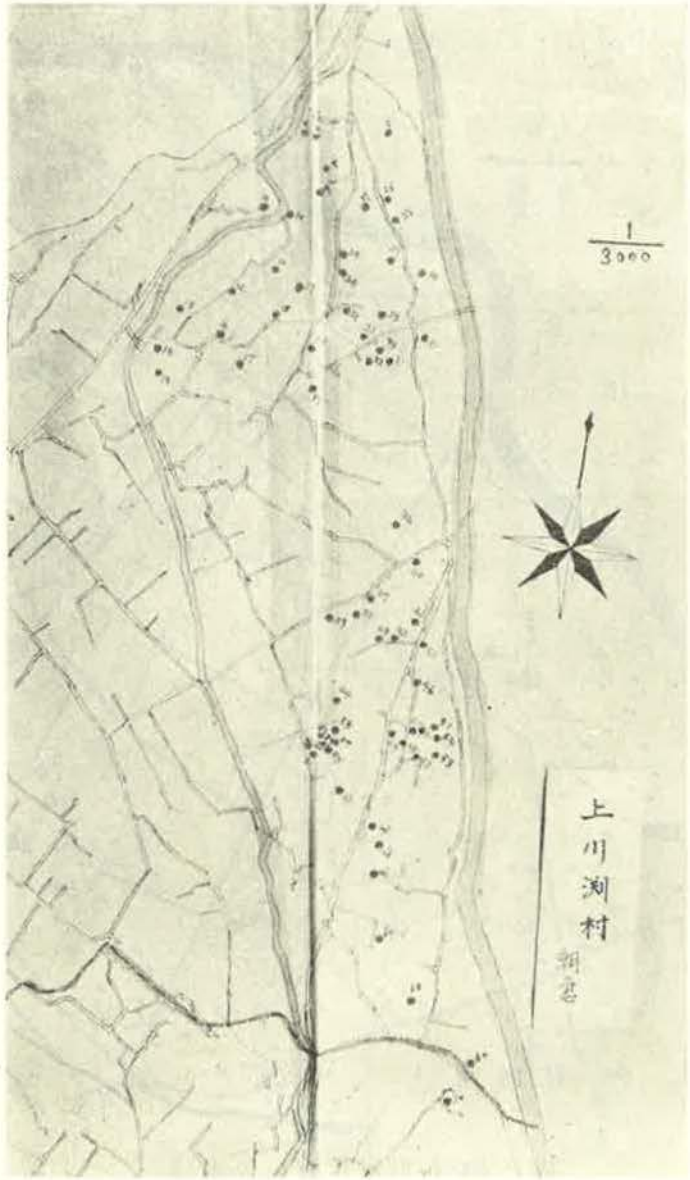
341	塔ケ峯	不詳	〃	〃	東原 八〇九	三五・一七不	詳	大島千代松		七尺四方大ノ粘土ヲ用ヒシ石槨アリ（刀、鳥埴輪）	
342	〃	〃	〃	〃	〃 八〇八ノ一	三三・〇二	〃	小林初太郎			
343	円墳	〃	〃	不詳	〃	中前乙二四二	四・一四	一五〇	吉田	遷翌	
344	おとう山	山林	〃	〃	〃	東曲輪八五八	四・三	一六五	吉田芳太郎		
345	〃	草地	〃	〃	〃	中前 二三五	六・一五	六六	阿部	一雄	
346	〃	畑	有	〃	〃	〃 二〇四	三・三不	詳	小林初太郎		
347	〃	芝地	〃	〃	〃	東曲輪乙八六四	二・〇九	八二	〃		
348	〃	草地	昭和九有	〃	〃	〃 甲八六四ノ一	三〇・一九	六六	〃		
349	大塚前方後円	山林	畑	昭和八有	〃	高石 一、一六八	四四・一〇	二六四後	前	松本ヨ万喜	不詳
350	秋葉山	方型	宅地	大正二有	〃	一、一五五ノ二	二・二一	六六	橋本	房吉外四名	（土器）
351	円墳	型	山林	無	〃	下大日一、八〇六	九・〇一	五〇	下田	林平	
352	〃	〃	〃	〃	〃	〃 一、八〇六	九・〇一	三〇	〃	〃	
353	大塚	〃	〃	有	〃	今城下一、七一四	二六・二九	一三	大沢	春久	遺趾有
354	御殿山	〃	ツツジ園	昭和九有	〃	漆田林一、六七八ノ一〇	三三・〇八	一三	森村清次郎		出土品博物館ヘ提出、小祠有（鏡一、刀二、櫃一、金環一）
355	前方後円	山林	無	〃	〃	稲荷前三三	八・一三	二五前後	本木	菊次郎	石槨アリト云フ、古塔有
356	夫婦塚ノ一	円型	竹林	〃	泉沢東前田乙七五三		二・〇九	五〇	小沼	清高	板碑有
357	夫婦塚ノ二	〃	雑木林	〃	〃 七五二		二・一六	三	小沼	新作	



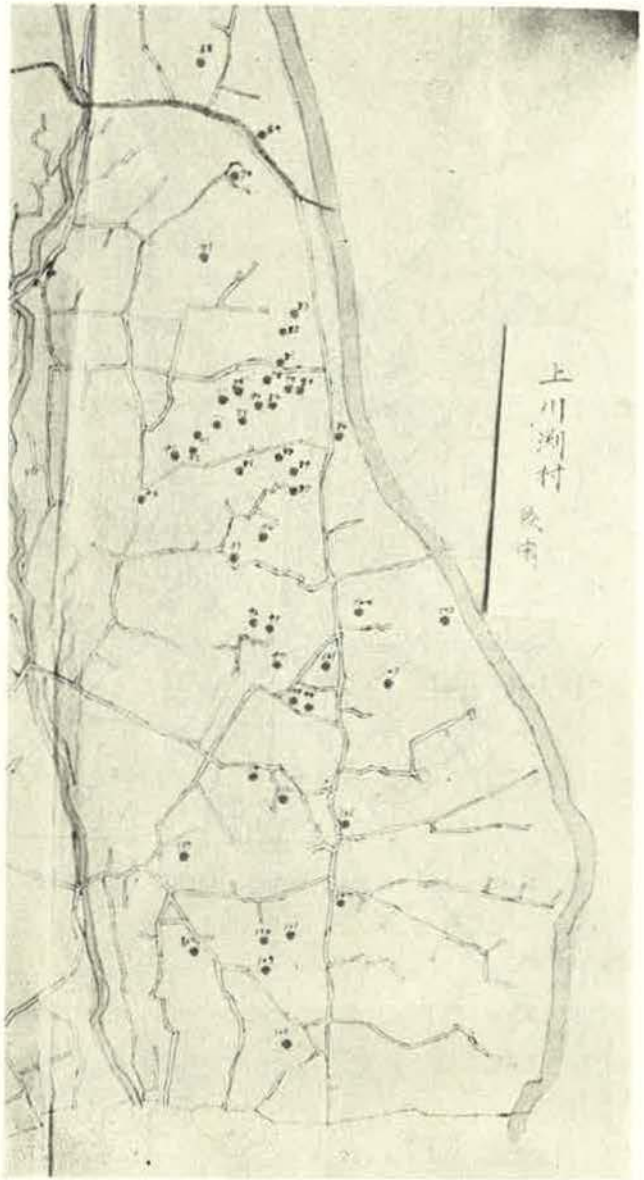
第43図　旧市域古墳分布図

358	円型	畑	有	泉沢	谷津一三一	二五・〇四	吾	七	山田武十郎	稲荷祠有
359	〃	山林	〃	〃	一四二	二五・〇六	六六	一〇	茂木藤太郎	遺趾有
360	〃	畑	昭和元有	〃	新井甲二一三	三・三	六六	七	泉沢神社	石梯現存、南西向（馬、鳥ノ埴輪、刀）
361	方型墓地	有	〃	丸山三八七		三・二七	吾	七	吉田　季二	
362	円型桑園	大正二有	〃	新山一、二八〇		二四・三三	二五	七	小沼栄次郎	（刀、玉類）
363	〃	雑木地	有	〃	一、二七七	一九・一七	吾	三	小沼弥藤次	
364	造酒塚	不詳原形ナシ	不詳	今井彷塚不詳		不詳	不詳	七	不詳	
365	〃	松林	無	荒子下境一六二		三〇・〇七	三	三	石関団次郎	

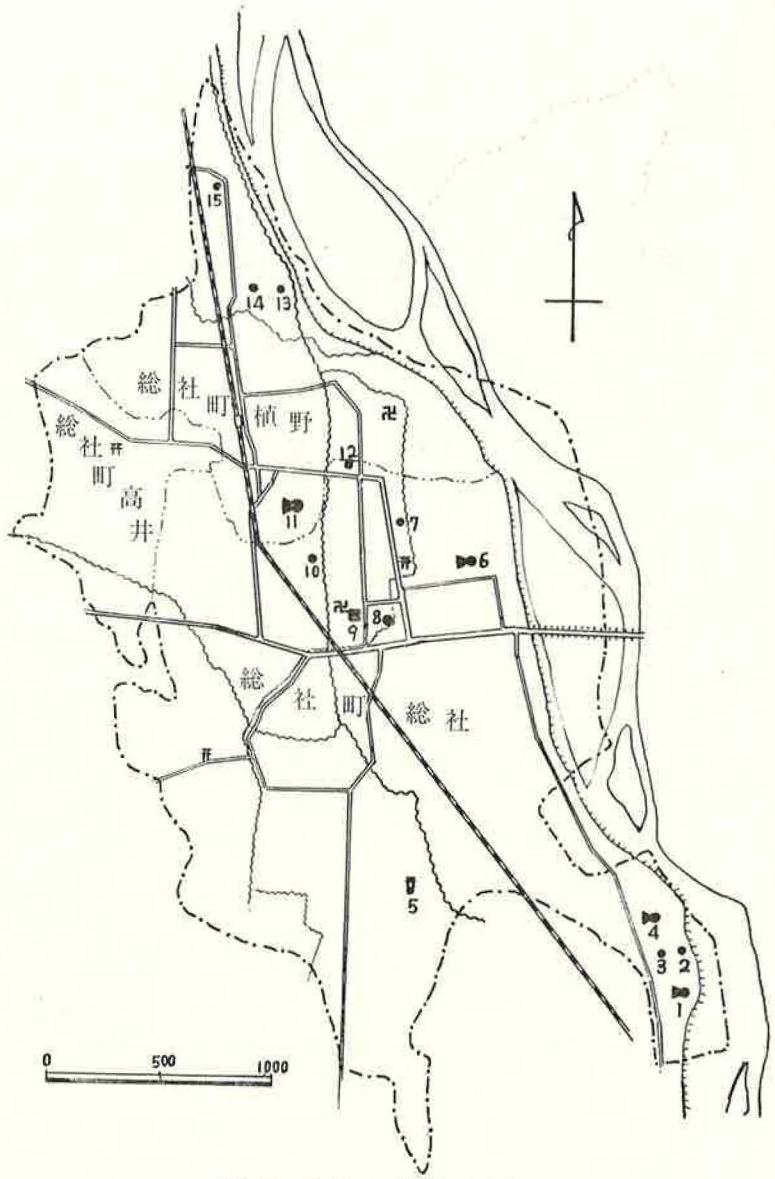
以下第二四一頁～二五一頁までの図版は、群馬県古墳調査台帳の付図によった。従って町村名等は合併以前のものであり、その所在は右の上毛古墳綜覧に合致しているが、一部相違又は欠番のあるところがある。



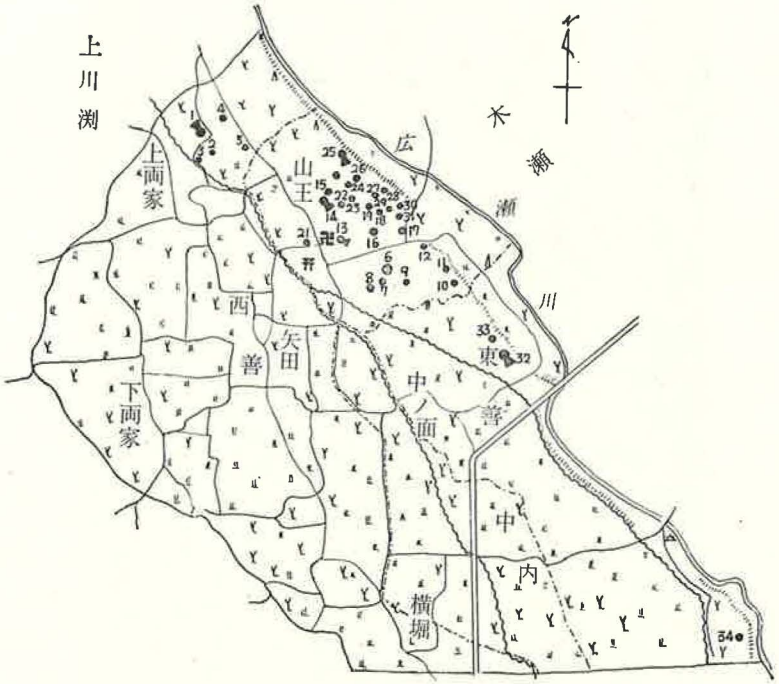
第44図　上川淵（朝倉町）古墳分布図



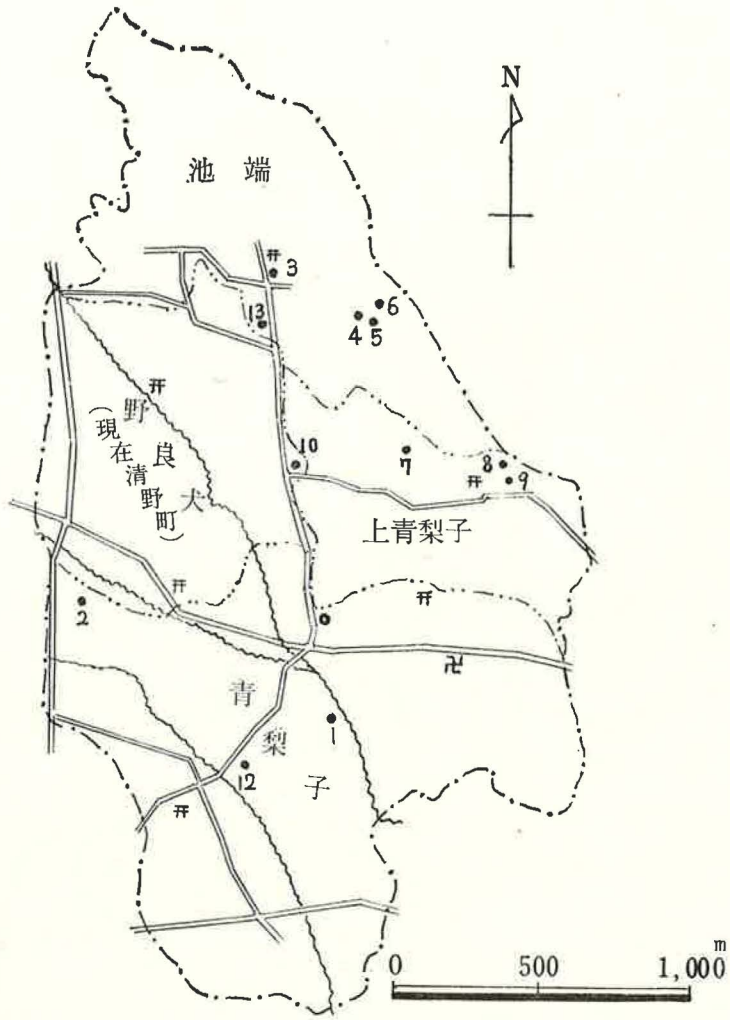
第45図　上川淵（後閑町）古墳分布図



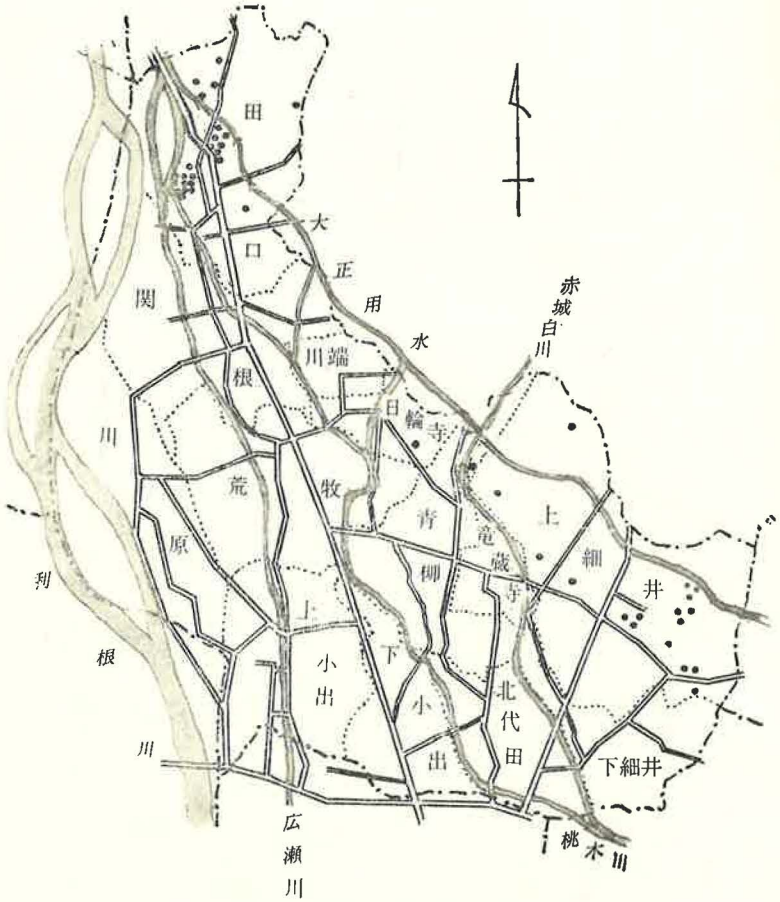
第47図　総社古墳分布図



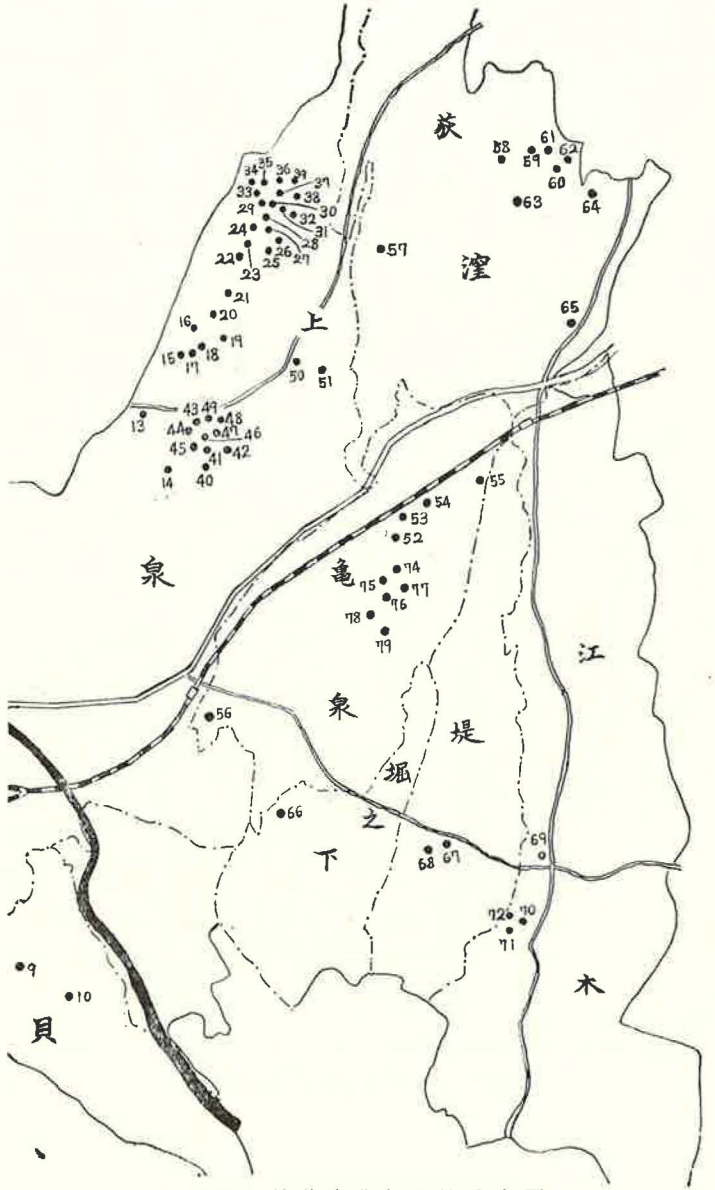
第46図　上陽（西善町、東善町、山王町）古墳分布図



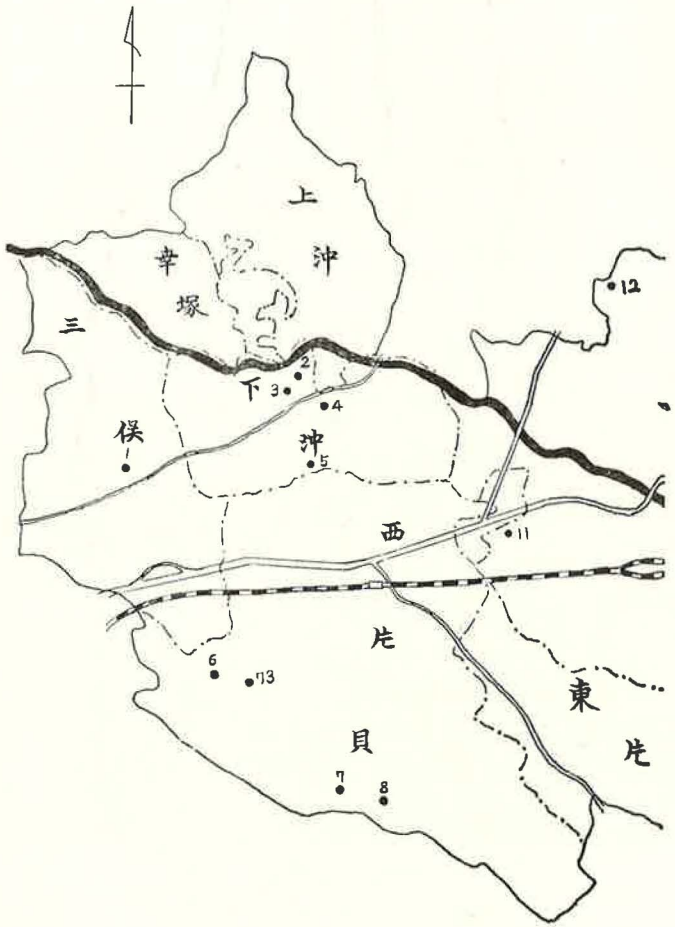
第48図　清里古墳分布図



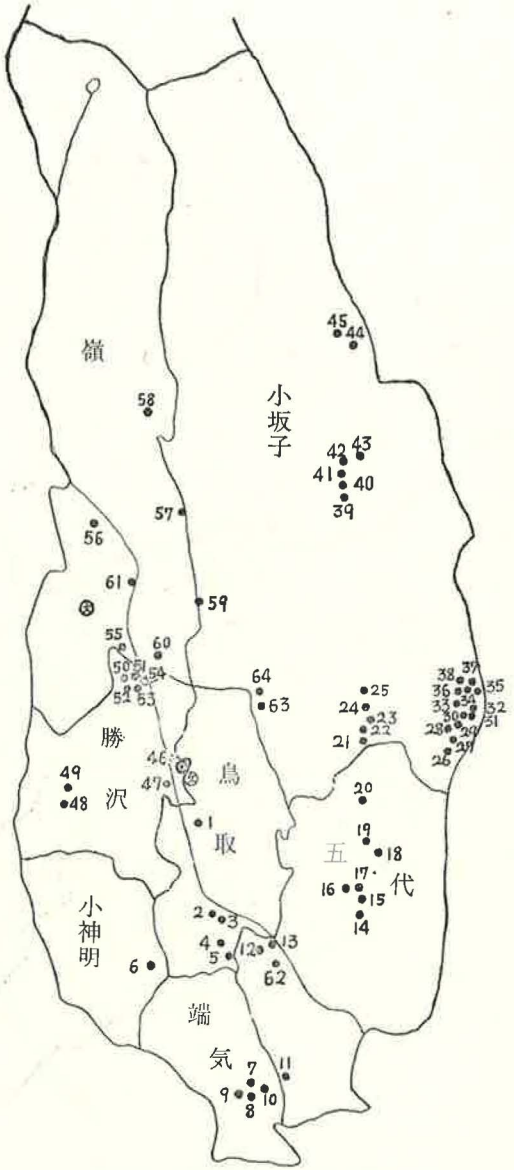
第49図　南橘古墳分布図



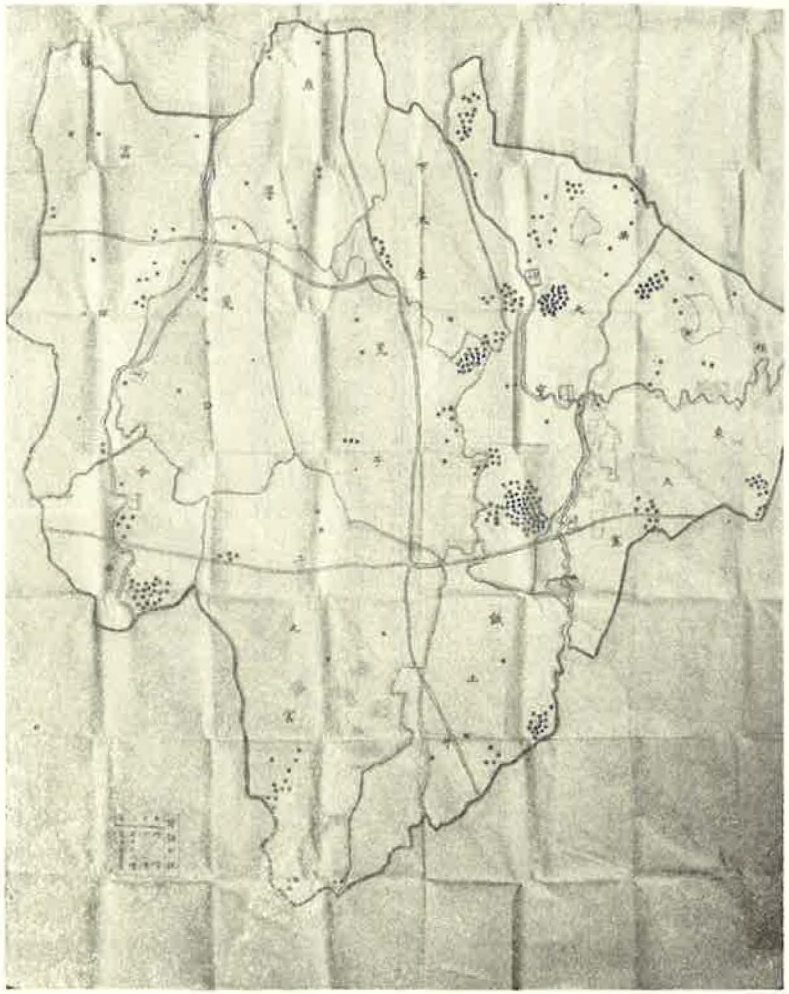
第50図　桂萱東北部古墳分布図



第51図　桂萱西部古墳分布図



第52図　芳賀古墳分布図



第53図　荒砥古墳分布図

第二節　古墳の調査

古墳文化を知るための唯一の資料は古墳である。古墳も発掘調査を経なければ正確な資料を得ることはできない。一古墳群の一基だけを調査し得たとしても、それでその古墳群全体を推定することは誤りである。厳密に言えばその古墳群に含まれたすべての古墳を発掘調査し、比較検討し、総体的に帰納することが必要である。

昭和十年の県下古墳の一斉調査の結果では、現在の前橋市には前述のように七六五基が記録されている。県下全体では八四二三基であった。この調査は、時の群馬県知事君島清吉氏の発意によって行なわれたもので、その指導は黒板勝美博士であり、この記録を集約して、昭和十三年に群馬県によって刊行されたのが『上毛古墳綜覧』である。

この古墳の一斉調査は古墳の所在を確かめ、分布を明らかにしたものであって、発掘調査あるいは実測調査をしたのではない。この種の調査は、それ以前には宮崎県で行なわれたのみであるので、群馬県のこの調査によって、本県の古墳数は全国一位と言われた。

従来は県下で数基の古墳が発掘あるいは実測調査されたのみであった。前橋市にあっては、国の保存行政の必要上、西大室及び東大室にまたがる前二子、中二子、後二子の三古墳、天川町（現在の文京町三丁目）の二子山古墳、総社町の二子山古墳等五古墳についての実測調査が行なわれたにすぎない。これらは国から保護の指定を受けていたので、現在でも保存の処置がなされているが、他は明治初年の太政官布告によって破壊が禁ぜられてはいたものの、全く放置の状態であり、盗掘されているものが多かったのである。

このおびただしい古墳が現在ではほとんど壊滅に瀕している。第一の破壊は戦時中の強制開墾による。食糧補給のための米麦の作付けで、畑とすることのできる土地の開墾を強制されたためである。第二は工場誘致、団地造成、土地改良、道路新設等により、次々に壊滅しつつあることである。本市の古墳は全部で七六五基のうち調査を実施されたものが僅かに三〇数基である。これは総数の一割にも満たないものであるが、その中には県内最古のものと、最下限のものとが含まれている。最古のものは後閑町の天神山古墳で、四世紀中ごろと推定され、最下限のものは総社町の蛇穴山古墳で、八世紀前半のものと考えられる。この四百年間に、この地方の古墳は築造されたものである。これらの古墳に推定の時を与えて、はじめてこれらの古墳を歴史解釈に使用することができるのである。

よって次にまず調査された古墳について年次を追って述べることにする。

1　上沖上ノ山古墳　上毛古墳綜覧調査漏

この古墳は上沖町俗称上ノ山にあったが、上毛古墳綜覧作成時には屋敷内の竹藪にあったため、調査漏れのものであった。昭和二十一年十二月上旬から切崩しが始められ、二十日前後から石類が多く表われたので、石工によって徐々に処理しはじめられた。十二月三十日にいたり直刀四本が発見されたのと、右の石は石室用材であるところから、この地は古墳であったことがわかり、同月三十一日に調査されたものである。

墳丘は円型で径約一七尺五〇（半径約八尺八〇）、石室は横穴式で、自然石（河原石）を平積みにしてあった。石材は安山岩

である。奥壁下で幅一㍍六〇、長さは三㍍三〇あり、壁石は高さ約八〇㌢を測り得たにすぎない。羨道部は全く失なわれ、規模は不明である。この壁石の裏に栗石五ないし一〇㌢のものを、五〇㌢ぐらいの厚さに置き、その外側に土を寄せて、さらに二〇ないし三〇㌢の栗石で葺きあげられていた。石室の中軸の方向は南四五度西である。

出土品は直刀四本が奥に向かって右側の壁下にかためられ、奥壁から二㍍四〇の辺で発見された。奥壁から七〇㌢離れたあたりは、一帯に骨及び骨粉が散乱し、そのうちから歯及び耳環一個が見出された。歯は大人の大臼歯二六個、その破片数個、小臼歯と思われるもの四個、小人の歯と思われるもの六個である。恐らく大人二、小人一の歯と推定される。骨及び歯は土地所有者の菩提寺善勝寺（端気町）に納め、直刀及び耳環は群馬師範学校で保管した。この古墳は出土品のみを遺し、墳丘、石室はその後破壊、平夷されてしまったのである。（この古墳は『上毛古墳綜覧』桂萱村第一号ないし第三号とは別個のものである。）

2　今井B号古墳

上毛古墳綜覧
荒砥第三一三号

この古墳は、今井町字白山東八二九番地所在の竪穴式の円墳である。今井町には、荒砥川近くに前方後円墳の今井神社古墳があり、その東方に円墳が群在している。昭和二十四年二月、強制開墾により発掘されたので、同月六日調査され、三月三十日に隣接の今井A号古墳発掘調査に際して、このB号古墳も再調査が行なわれた。

その結果、石槨は浅い小さなもので、長軸の高は北四五度東であり、長さ二㍍〇六、東北幅七五㌢、西南幅五〇㌢で、河原石の長径三〇ないし四〇㌢、短径一五㌢のものを小口積みにし、両端には長さ約一㍍、幅約二〇㌢の石を置いている。深さは長壁はほとんど取り除かれ、根石のみとなっていたが、東北端で約四〇㌢ある。底部には扁平な河原石が敷かれ西南端の短壁の外側にまで及んでいて、その部分には砂利が散乱していた。

この石槨外方の状態は、佐波郡赤堀村大字今井の諏山B号古墳に酷似している。ともに一方の短壁外にまで石を敷き、砂利を置いていたのであり、石槨長壁もその末端まで続いているのである。横穴式袖無型石室の墳塞部に似ている。（あるいはこれらの発展が朝倉町小旦那古墳の羨道部の構造としてあらわれるのではないかと考えられている。）

出土品は、直刀一、土師器一で、他は不明である。なおこの古墳の裾部から、鎌倉期の凝灰岩製の五輪塔の部分が混乱して発見された。そのうちには、やや大型の骨櫃を兼ねた地輪もあり、鎌倉時代の葬法を知るものとして群大史学研究室に保存されてある。

3　今井A号古墳

上毛古墳綜覧
荒砥第三一二号

この古墳は、今井町字白山東八三五番地にあった。小型の円墳であるが、東及び南側は削りとられて変形していた。昭和二十四年に、今井B号古墳に次いで、三月二十八日から三十日までの三日間、発掘調査された。調査時の規模は南北二一㍍、東西一八㍍、高さ三㍍である。横穴式石室を有し、壁は自然石乱石積みであり、天井石は西端が石室内に落下していた。奥壁前の小部分を調査し得たのみである。その際、奥壁ぎわから耳環一個を発見している。

4　檜峰古墳

上毛古墳綜覧
桂萱第二九号

この古墳は上泉町字檜峰二二二四番地にあり、周囲の土地とともに開墾破壊され、天井石が露出していて、僅かに円墳であることが知られる程度のものであった。この土地は赤城山南麓の裾野に、谷の間にはさまれてできた台地上であって、その東端に近いところにかつて一〇数基の小円墳が散在していた。昭和十年の調査には一五基記録されているが、現存は僅かに二基で

他は痕跡のみである。その中の一基がこの古墳で、他の一基はその南一〇㍍のところに隣接している。前橋旧市街の東北約六㌔の距離で、標高一五〇㍍前後である。昭和二十六年二月二日から四日間、発掘調査が行なわれた。

外形は現存径一七㍍五〇、高さ二㍍五〇位の墳丘らしいものがある程度で、破壊しつくされ、内部も壁が崩れ、天井が落ちていて、はじめは人力による破壊かと想像されたのであるが、発掘の結果は左壁のみの崩壊によるためのものであり、自然力によるものと推定された。石室は横穴式で、自然石乱石積み両袖型のものであり、その主軸線は南中線より西へ五度ほど片寄っていた。その寸法は第三四表のとおりである。

この表によると、玄室の長さは幅の二倍である。

石材は自然石といっても、おもに自然崩壊による角礫であって、河原石の如き丸いものではない。天井石は奥の二石だけのこっていた。この石室で注意されるのは羨道部の填塞である。この填塞はほとんど羨道部いっぱいに施されていたもので、墳塞研究の好例である。約一㍍九〇の羨道長の両端に、やや大きめの石をおのおの積みあげて、その中間に大小の石塊を詰め込んだもので、いわゆる間詰めになっていた。その石積みの模様は、奥の方のは羨道幅いっぱいに四〇㌢の長さで積みあげられ、入口の方のは羨道の端から四〇㌢入ったところから入口にいっぱいに積まれ、かつ羨道の外方にまで及んでいた。その全長七〇㌢である。殊に、その入口部の石積みは二段に積まれ、下段の高さ二七㌢、上面は平らになっていた。

第34表　檜峯古墳石室規模

全長	壁左 壁右	5.15m 5.55
玄室長	壁央左 壁央中 壁央右	3.15 3.45 3.66
玄室幅	壁央方奥 壁央方中前	1.85 1.80 1.35
玄室高	奥前	1.50 1.20?
羨道長	壁左 壁右	1.93 1.93
羨道幅	奥前	0.76 0.78
羨道高	奥前	1.20? 1.00?

石室の構築については、その平面図形に表れたところは自然石積みのため、かなり不整である。しかし、自然石といっても割れ石であるから、平らな面を出して積んであるために、壁下の線は各壁とも比較的一直線を示している。殊に玄室の右壁下の線は真直であり、袖の出が約二七㌢あるが、それから入口に向かって羨道右壁は次第に外開きになっているので、入口の右の端は玄室の右壁下の線の延長上にある。これに反して左壁はかなり粗雑である。すなわち右壁は裁石積みにみられるような整然さがあるが、左壁は一般の自然石積みにみられるような素朴さがあり、袖の出などはすでに隣石から斜めに出しはじめている。この違いの上に両袖の出はその位置が前後食い違っており、入口の端も左右一致していない。左右壁が全く別々に造られたようにみえる。

第35表　檜峯古墳の主な出土品

		直刀A	直刀B	直刀C	小刀
全長		72cm	55cm	73cm	26cm
刀身	長	58	45	66	18
	幅	4	3	3.5	2
	厚	1	0.7	0.7	0.7
茎長		14	10	欠損7	8

出土品は直刀三及び小刀一、刀子四、鉄鏃片五〇、尖根式腸抉のあるもの五、耳環四、玉類、山玉一（長一㌢、幅八㍉、翡翠製）、管玉二（長二㌢、径五㍉、同大）、切子玉三、丸玉三、小玉一〇、その他、埴輪破片、土師器及び須恵器の破片、墳丘中の土中より出土。

以上によりこの古墳の特徴をあげてみると、

1　自然石乱石積み両袖型横穴式石室。
2　石室平面図で玄室の長さは幅の二倍。
3　左壁が崩壊しており、その壁面に垂線をたてると、榛名山の二ツ岳にいたる。
4　玉類の副葬。
5　腸抉のある鉄鏃。

等である。

5　小旦那古墳　上毛古墳綜覧　上川淵第二七号

この古墳は旧勢多郡上川淵村大字朝倉小旦那一七一五番地ノ一（現在市内朝倉町）にあって、発掘調査の結果、小旦那古墳と仮称されている。円墳ではあるが、すでに盗掘された上に墳丘の北半分は削りとられ、石室の壁の背部を固めた石垣状の構築が露出し、南半分も削りとられた部分が多く、石室部のみが辛うじて残存しているに過ぎない。

発掘の動機は、この古墳付近は年ごとに開墾が進み、優秀な古墳群地帯であったのが、見る影もない有様に変化してゆくので、是非一基でも正式な調査をし、記録を残し度いと考えられていたところ、いよいよこの古墳も開墾平夷されるというのを聞き込み、昭和二十六年三月十七日から三日間、調査が行なわれたものである。

外部は前述の如く破壊されていて、原形の推定さえも不可能である。ただ円墳であることは周囲の畑地の土の盛り上がりぐあいで辛うじて想像出来る。現存部分の長径八㍍五〇、短径八㍍であるが、ほとんど石ばかりと云ってよい程度であった。

内部は自然石乱石積みの横穴式袖無型石室である。自然石は径三〇㌢位の転石で、恐らく利根川の河原から運んだものであろう。奥壁の石もさほど大きいものではない。石質も種々混じっている。石材の大きくないことは、石室自体が小さいことにも関係しているのであろう。

石室の全長は四㍍四〇、幅奥壁下で七〇㌢、中央で約八〇㌢、高さ一㍍三〇である。奥壁から二㍍九〇の所に「しきみ石」があって、それで玄室部と羨道部とが区別される。この「しきみ石」の中央まで計るとちょうど三㍍となる。それより羨道入口の方へ一㍍の所にさらに「しきみ石」があり、その外側

第54図　小旦那古墳

は四〇㌢程で殆ど破壊されているが、大体その辺で終わっているものと推定される。そこで玄室の長さは幅のほぼ四倍になり、石室の全長は幅の六倍位になる。その長軸は南中線より東へ三〇度寄っている。

この奥壁に向かって左の壁は盗掘の際外部から破壊されて、中央部一㍍五〇くらいの間がすっかり荒らされていた。その場所の右壁は内方からの破壊で、後ごめのみ残っている。丁度、裂裂掛けに破壊せられたのであって、その部分から奥壁までは一㍍あり、つまりこの両者を合わせた二㍍五〇くらいの間が盗掘にあった部分であって、遺物は小刀一、刀子一、有柄鏃一の外、僅かな鉄片、骨粉を残すのみで、ほとんど取り去られ、その上須恵器、土師器の破片などが数片混入していた。それに引きかえ、残りの五〇㌢位の間には玉類、耳環等が散在し、殊に右壁寄りの隅には切子玉、丸玉等が多く、左壁寄りには管玉のみで、それぞれ一かたまりになっており、しかも、耳環が各一対ずつ出土し、右壁寄りには骨粉が著しく目立った。なお、左壁寄りの管玉及び耳環の各一個は壁石のめり出した上に発見された。

羨道の二つの「しきみ石」の中間からも出土品があった。このような所から出土する例は極めて稀であるばかりでなく、その出土品は須恵器の破片が多く、これを接合したところ提瓶となり、大きな耳がついていた。その付近には耳環一対、鉄片三のみで、他に副葬品らしいものは見出せなかった。

石室の床面には一面に石が敷いてあり、特に羨道部の「しきみ石」の間には二重に敷いてあった。その上から遺物が出土したのである。石は円形扁平な転石で径二〇㌢ほどのものが揃えてあり、羨道入口まで続いていたようである。奥壁は高さ五〇㌢及び六〇㌢の二石が残存しているが、両壁の高さ一㍍三〇に合わせると、二〇㌢ぐらいの石がその上にあったはずである。天井石はすでにほとんど除去されていた。

両壁は大小の転石が小口積みにしてある。大は小口の径約六〇㌢、多くが径三〇㌢ぐらいであり、これらよりやや小ぶりの転石で、裏ごめがつまれて、その厚さ約二㍍に及んでいる。裏ごめの外側は約四分の一ほど露出しており、大きめの石を根石にして、石室をかこむように、卵形に石積みがしてある。しかし、本県多野郡地方にみられるような整然たるものではな

い。

以上によってみると、この古墳は少なくとも四屍体が埋葬されていたことになる。すなわち、耳環の数の三対は、管玉を中心とした所に一屍体、切子玉を中心とした所に一屍体、さらに羨道部に一屍体であるが、このほか盗掘部にも一屍体は確実である。また、管玉及び切子玉中心の各屍体とも、頭部を入口に置いて安置された形であり、羨道部のもこのようにみえる。

この古墳は天井は低く、左右の間隙は狭い。もし屍体を棺に入れて埋葬したとするならば、幅七〇㌢の所に棺を二つ並べるのは困難である。管玉と切子玉とを中心とする二屍体に時代差を認めないとすれば、棺に入れて埋葬したのではないと云う結論になる。もし時代差があるとすれば管玉中心の屍体の方が先であり、その棺の朽ちたころ、切子玉中心の屍体をいれたということも言えるであろう。

また、この古墳の天井はきわめて低いので、棺に入れた屍体を玄室の奥に運び込むのはこれも困難である。従って、入口近くの二屍体は脚部を先にして、入口から入れたのではないかとも考えられる。この推定が可能ならば、奥の長さ二㍍五〇の盗掘部分には、正式な埋葬法による屍体があったはずで、残念ながら小刀、刀子及び鉄鏃各一を残すのみで、推定の鍵を失ってしまっているが、奥壁から一㍍四〇左壁から二〇㌢ばかり、すなわち小刀と並行の部分に骨粉が相当あらわれているので、これを基準にして考えると、玄室長さのほぼ中央に当たっており、正式埋葬法による屍体の位置と考えて良いようである。

元来、竪穴式石室では屍体は一つであるのが原則である。横穴式石室の形式が伝わっても、最初は一屍体を葬ったものと考えられる。二屍体を葬る際には先の屍体の上に石を敷き、その上に葬った例は佐波郡赤堀村洞山古墳にみえている。しかし、大陸においても竪穴式墓坑においてすらも、夫婦共葬を普通としていたし、横穴式墓坑は家族墳として発達したもののようである。ところがわが国の習慣で、一人一穴が原則であって、日本書紀神功紀には、祝を二人同穴に埋葬したので、神のたたりがあった趣きを記してある。

この古墳においては、最初は一人を埋葬するために作られたものであろう。骨粉が左壁に寄りすぎているきらいはあるが、七〇～八〇㌢の幅では棺を二個並べることは不可能である。たとえ棺に入れないにしても、仰臥させるためには肩幅においてきわめて窮屈か、あるいは安置することが出来ない。そこで奥には一人を埋葬したものと推定する。そして次々に郡合三人が埋葬されたものと考える。羨道部では前述のとおり推定きわめて困難であり、いずれにしても最後に納めたものに間違いはあるまい。然も副葬品は耳環と須恵器だけであり、埋葬法もすこぶる簡単である。他の玉類等の副葬品があったとも見えない。この石室の規模を他の古墳と比較すると第三六表のようである。

第三六表　石室の幅・長比較表

名称	幅	長	長さと幅との比
	m	m	
小且那	〇・七〇	四・四〇	六強
洞山西北	〇・九〇	四・五〇	五
洞山	一・二〇	四・六〇	四弱
地蔵山南	一・二〇	五・〇〇	四強
御守山	一・三〇	五・二〇	四
成塚B	一・四〇	四・一〇	三弱
街道橋	一・二〇	三・三〇	三弱
オブ塚	一・六〇	五・〇〇	三強

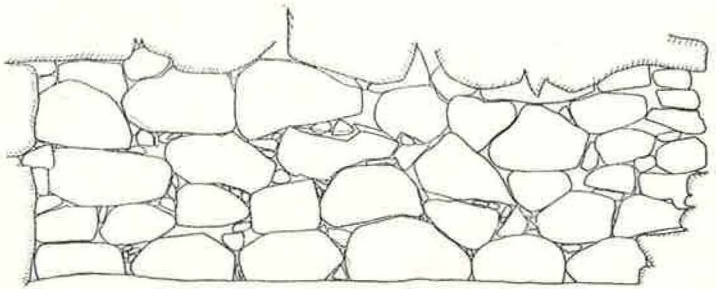
以上のように長さと幅との比が六、五、四、三というふうに並び、幅が大となってゆく。この表により出土品その他をあわせ考えると、比の小さなものが大のものに先行するとは限られない。やはりこれらのものより、小且那古墳は古いものであると考えて差支えなかろう。それゆえ、竪穴式石室から横穴式石室に移った当初につくられたものと考えることが穏当と思う。その後家族墳の流行に伴い、やはり家族墳として用いられたのであって、従って無理な使用法をしているのであろう。よってこの古墳は六世紀終わりごろ構築されたものと推定されている。

6　阿久山古墳

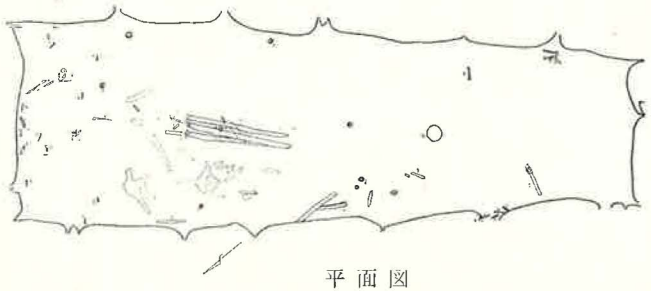
上毛古墳綜覧
荒砥第四六号

この古墳は、下大屋町字阿久山五三〇番地所在の小型の前方後円墳である。阿久山という小丘陵の南斜面に山寄せで造られていた。すでに石室の石材は抜きとられ、窪地となって横穴式石室を有していたことが推定される。かつ墳丘も著しく変形せ

しめられて、明確な実測図を得ることも不可能であった。前方部は西北方に向かい、石室はほぼ西方に向かっていたようである。昭和二十六年七月二十三日に調査されたが、墳丘の規模は全長二八㍍、前方部幅一一㍍、後円部径一六㍍で、高さは西南からみて、後円部は三㍍五〇、前方部は三㍍である。石室をぬかれた跡には埴輪破片が多く埋められていた。中に鰹（さしば）の破片が混在していたので型象埴輪の存在も推定される。



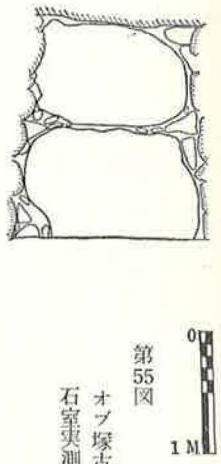
東壁断面図



平面図

7　オブ塚古墳　上毛古墳綜覧　芳賀第四八号

この古墳は勝沢町字西曲輪四二〇番地にあって、大塚ともよばれている。赤城山西南麓の裾野の傾斜地にあり、西方はほとんど段状につくられた水田である。西曲輪は勝沢町の西境で、勢多郡富士見村大字時沢との間に嶺町に登る県道が通っている。この古墳はこの県道に前方部の前端を削りとられている。すなわち前方後円墳である。墳丘の前方部は西西北に向いて延ばされており、この主軸線は西より三四度北に向いている。ちょうど裾野の傾斜方向に直交しているのである。このような位置に作られている墳丘の例として、下手から望めば高く、上手からは低い。しかし、この墳丘は埴輪円筒列の基部の位置から比定すると、南部では現墳頂より三㍍二二、東南部では三㍍〇六、東部では二㍍二二、北部では一㍍九三となって、場所によって一㍍以上の土地の高低差を知ることができる。この埴輪円筒列の径は一九㍍あり、小型墳丘の径は一般に円筒列の径より両端において各一㍍小さいので、この古墳の墳頂の径は一七㍍と推定することができる。



第55図　オブ塚古墳石室実測図

また、墳頂から石室の床面までは三㍍四九、同じく墳塞の施設の上面までは二㍍五九である。したがって石室の床は少なくとも現墳頂より三㍍五〇くらい下に設けられたものであって、傾斜面を少し切り込んだものであろう。ところで現墳丘の頂から三㍍の等高線は埴輪円筒列の基部から二㍍も外方に出ているのであり、墳丘の現状はその原形より裾部が三㍍は張り出していることが知られる。このはりでたための土は後から積もったものもあろうが、しかし頂部の形象埴輪の埋没の状態からみれば、築造当時は今よりそれ程高かったとは思えない。むしろ墳丘の裾部が季節風で運ばれてくる砂や土で埋まったと見た方が妥当である。

墳丘は現状で全長約三五㍍、その前端は道路敷に削りとられている。前方部幅約一三㍍、後円部径約二〇㍍、高さは南から前方部二㍍五〇、後円部三㍍五〇、北から前方部五〇㍍、後円部二㍍、前方部の高さは後円部のほぼ二分の一で外形から見れ

ば古い形に似ている。

周溝（まわりの堀）はないが、墳丘の南から東にかけて、土地が著しく低い。墳丘構築に採土したものであろうか。葺石は見当たらないが、墳丘の形は割合に良く保たれている。埴輪は円筒列が後円部の東南から北に廻って、はっきりと発掘調査された。その円の半径は九尺五〇で、みごとな円弧をなしていた。ただし、石室の入口付近から西の方、前方部の周囲には発見されず、その存在は明らかではない。すでに破壊されてしまったもののようである。形象埴輪は後円部の頂と、前方部の上面に発見された。後円部の頂の玉纏の太刀等の器具類で、前方部からは人、馬などの埴輪が出土している。なお、後円部の頂からは巨大な須恵器の甕の破片が見出されている。

石室は横穴式で、自然石乱石積み袖無型である。石材は安山岩で、自然石の平らなものを選んで壁面を構成している。奥壁は大石二個を積みあげ、側壁にも長径一尺以上の石をところどころに使っている。天井は五個の大石を使用し、入口には特に柱石の如きものはなく、横積みの石の上に、天井石が楣石のように乗っているだけである。壁面はほとんど直で、転びはないといって良い。奥幅より前幅がやや狭く造られている。その寸法は第三七表のとおりである。

この表のうち埋葬部長は約五尺であるが、自然石のため、いずれも凹所を計っているのであり、全体としてみると四尺九〇前後が最も穏当なところである。幅は奥壁から三〇糎ぐらい離れたところから一尺四〇ぐらいの長さの間は一尺六〇でありそれより入口に向かって左右から徐々にせばまっている。自然石積みとしてはみごとなもので、左右ほとんど均整といって良い。全長は左壁においてのみ推定をしたのであるが、墳塞を崩さずに置いたために床上九〇糎以上の部分での実測値であり、したがって床面においては、あるいは五尺五〇より長いであろうとも考えられる。

そこで埋葬部の長さと幅の決定を第三八表のように試みてみた。

第37表　オブ塚古墳石室規模

全長	左壁	5.50m
埋葬部長	壁央左中 壁央右	5.02 5.00 5.00
埋葬部幅	壁央奥中 壁央方前	1.56 1.50 1.15
同上高	奥前	1.78 1.70
墳塞石室（部内）	長幅	0.58 1.15
墳塞石室（石室外内）	長幅外	1.70 2.00

第三八表　オブ塚古墳埋葬部の長・幅・尺度比較

	米尺	唐尺	東魏尺
長	四m九〇	一六尺四九八三〇	一三尺九八九五〇
幅	一、五六	五、二五二五二	四、四五三八〇
比	一、一五	三、八七二〇五	三、二八三二五

このように高麗尺使用の長さ一四尺、幅四尺五寸であり、あるいは幅は五尺を予定していたかも知れず、しかし、そのできあがりは上記の寸法である。比は三・一となり、ほぼ三とみなし得る。また、全長は唐尺で約一六尺となり、幅との比では三・五となる。これらはほぼ妥当な数値ではなかろうか。

この石室の墳塞状態は一つの形をなしている。長さ五〇糎、径三〇糎ぐらいの自然石を、石室の入口から約五八糎入ったところに、内部に向けて小口に積みならべ、その高さ四〇糎で、その上は四〇糎ほど外の方にずらせて、さらに高さ四五糎につみ、その上は平らにして、そのまゝ石室外に一尺ほど延ばして台状に造ってある。この台状のものはその外側の端の方に、割合に扁平な径六〇～七〇糎の石を寄せかけて、ゆるい傾斜ができるようにしてある。これらの台状の石室外の部分は赤色粘土で一面に固めてあった。すなわち外から石室に入るには、この粘土で固めた傾斜面を二、三歩登って台状のものの上に立ち、入口をくぐって、二段の階段をおりるようになっているのである。

その入口の穴は幅一尺、高さ八〇糎で、これには一枚の扁平な石が寄せかけてあった。これがはずれて石室内に斜めにずり込み、その隙間から多量の土砂が流れ込み、埴輪破片、土器破片を同時にもち込んだようにみられる。このような墳塞状態の発見例はきわめて少ない。確実な資料としては唯一である。しかしこのような台状の墳塞は他でも注意され得るものであり、羨道の途中に框石を設け、あるいは一段の痕跡を残しているものもある。

床面には径一〇糎以内の粒のそろった浮石が一面に敷きつめられていた。その厚さは約一五糎ぐらいで、黄白色の美しいものであった。この例もまたきわめて少なく、珍しいものである。この浮石は丸く、転石とみられる。二ツ岳噴出によるものである。

出土品を石室内と封土中との二種に分けてみると、石室内からは骨片、鉄製品、銅製品、土器があげられ、石室外からは土

第39表　オブ塚古墳出土品

人骨	4体
直刀	4振
小刀	3〃
刀子	1〃
鉄鏃	50本
鎧金具	1個
耳環	8〃
土玉	1〃
須恵器	1〃

（註）人骨は4体分であるが完全なものは1つもない。その外に遺物の上層から馬骨の如きものが出土している。

器、埴輪が出ている。石室内の土器は須恵器の合子の身部のみで、室外から砂と一緒に流れ込んだもののようである。

石室内からの出土品は第三九～第四一表の如くである。

(1) 直刀

第40表　オブ塚古墳出土直刀一覧

		A	B	C	D
全長		1.00m	1.00m	0.83m	0.68m
茎長		0.19	0.18	欠	欠（0.03）
刀身	厚	0.009	0.007	0.008	0.006
	幅	0.04	0.04	0.036	0.027
目釘		1個	1〃		
鍔	形	倒卵	〃	〃	
	長径	0.11	0.083	0.096	
	厚	0.01	上0.009 下0.006	上下0.008 中0.006	
	穴	8	8	6？	
摘要					鯉口の金具あり、二片に破損、一ヶ所七〇離れて出土。

(2) 小刀

第41表　オブ塚古墳出土小刀一覧

		A	B	C
全長		0.42m	0.32m	0.235m
茎長		0.08	0.07	0.072
刀身	厚	0.006	0.006	0.006
	幅	0.02	0.03	0.023
目釘		1個	欠	欠
鍔	形	倒卵		
	長径	0.057		
	厚	0.006		
	穴	無		
摘要		二片に破損。一ヶ所六〇離れて出土。	尖及茎の端が欠けている。茎と身の接するところより下は切込み上	尖が欠けている。茎と身の接するところはBと同じ。

(3) 刀子

長さ一四㌢、茎の長さ四㌢二、茎はみねの方から切りせばめられている。目釘穴はない。みねの厚さ三㍉、刀身の幅一㌢四。

右の遺物の配置状態は、中央でやや奥へ寄ったところに、大直刀三振が柄部を奥にして石室の長軸に並行に置いてあり、その他の副葬品は概して左壁及び奥壁の根方に多い。これに比べて、中央及び右壁の側には、耳環三個、鉄鏃一本、鎧釣金具一個がでただけである。骨片及び骨粉も三振の大直刀の付近から左壁の側にかけて散在していて、右壁側にはない。然もその直刀の上には人骨とは考えられない巨大な骨がまとまってあった。何の骨であるのか明らかではなく、またこの骨がどうして直刀の上にあるのかは疑問である。少くとも直刀が副葬品として埋葬された後に、置かれたものと考えないわけにはいかない。すると一度埋葬された後で、その埋葬を知ってか知らずしてか、ともかく副葬品をとり出す目的でなしに、この石室に入ったものがあると考えてよい。

右壁の側に副葬品がほとんどないということは、一度埋葬したものを後にとり出したとみることもできようが、全体の配置からみるとむしろ副葬品を入れなかったともみることができよう。右壁の根もとから出ている二個の耳環のうち、一個は奥壁の前からのと一対になり、他の一個は中央のと対になるようである。出土の耳環の他の四個は、左壁中央の根方の二個、その奥の方の一個と直刀の上の一個、これが両方とも一組になっているので、それぞれその位置に死屍があったことは推定し得る。かつ、その付近からは小刀、刀子、鍔、鏃等が多く出土している。奥壁下も同様である。ただし、そこから出土の鍔は中央の大直刀の中の一の付属品であろう。そのうち、石室の中央出土の耳環の一組はその間が九〇㌢も離れている。どうも後で散らばされたように思える。前述の人骨とは思えない骨を入れた際、踏み散らされたものではなかろうか。

このようにみて、右壁下の中央の耳環の近くに屍体が置かれてあったものとすると、縦に左右壁下おのおの二体ずつ並べて

あったような格好になる。けれども、あるいは中央大直刀の傍に一体、それより手前左に一体、この二体は副葬品をつけて葬り、その後右壁下に二体縦に並べて入れたとみる方がよいかもしれない。奥壁下の副葬品は中央の屍体とともにいれたものであろう。このことは、袖無型の石室をもった洞山（佐波郡赤堀村）、洞山西北（同上）、小且那（前橋市朝倉町）の三古墳がどれも中央に葬ったものであるということ、また小且那古墳は左右両壁沿いに後から一体ずつおしこんで葬ってあったということ、街道橋古墳（新田郡鏡塚本町）では石室の左半分からは何も出土しなかったということ、片袖型ではあるが鏡手塚古墳（勢多郡粕川村）では、奥壁下に骨片、骨粉、副葬品等があり、中央にはほとんどみえなかったということなどから推定したものである。

封土中からの出土品は須恵器と埴輪である。須恵器は大甕であって、墳丘の頂上中央から出土し、二つ山（新田郡新田町）、壇塚（勢多郡粕川村）、長塚（太田市成塚）、皇塚（藤岡市白石）等の諸古墳にみられるもので、祭祀用のものである。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪とがあり、円筒埴輪は列をなして後円部の裾をめぐり、それから前方部の上縁に沿って二本の枝が出されている。前方部前端は削りとられているのでその配列は不明であり、前方部裾には配列されていなかった。円筒はいずれも上方が破壊されていて、完形を知ることはできないが、下端の径は一五㌢内外であり、二㍍乃至一㍍五〇の間隔で並べてあった。形象埴輪は墳丘の頂上に、後円部では円形に、前方部では円筒列の内側に配置されていたが、これもほとんど破壊され、混乱していて、配置状態はわからない。後円部からは玉纏の太刀の柄部が二個、前方部からは埴輪馬、人型埴輪の破片が雑然と発見された。小破片のみ多くて復原することはほとんど不可能である。

8　荒口大道古墳　　上毛古墳綜覧調査漏

この古墳は、荒口町字大道にあった横穴式の小古墳である。道路敷と畑にかかって存在していたが、すでに道路を造られる時に石室の上部から上は除去され、残部は道路下に埋まってしまっていた。昭和二十六年十月二十五日及び同二十七年四月五日の二回にわたって発掘調査された。

石室は小型な横穴式両袖型で、その軸線はほぼ南中している。壁は自然石の乱石積みである。その規模は、幅が奥壁下一㍍一〇、奥から三五㌢で一㍍三〇であり、前方で一㍍三〇であり、長さはややいびつな矩形であるので、中央で二㍍一〇、右壁一㍍九〇、左壁一㍍八五である。羨道幅八〇乃至九〇㌢、玄門の傾向があり、その間口六五㌢、奥行ほぼ三五㌢、玄門から墳塞内側まで一㍍〇五である。羨道入口部は畑地にかかって、調査不能であった。遺物は発見されていない。玄室幅は一㍍四〇、長さは二㍍一〇で、高麗尺四尺、六尺と推定され、長さと幅との比は一・五であり、玄門の設備とあわせて横穴式古墳の末期のものと考えられている。

9　竜海院裏古墳　　上毛古墳綜覧調査漏

この古墳は、紅雲町二丁目字村北の竜海院の北裏にあった。墳丘は早くから破損されて、古墳としての形を残さず、土堤のような状態であった。したがって、円墳であったのか、前方後円墳であったのかは不明である。群馬大橋の構築にあたり、その橋頭の使用土に採土されて発見された。昭和二十七年三月二十六日に、群馬大橋工事監督の山崎義男氏からの通知によって群馬大学史学研究室において調査に着手、同三月三十日に完了した。ところが、さらに五月十七日に、再び別の内部構造が出現したので、これをも急遽調査となったのであるが、この分は石槨としての形を残しておらず、破壊されていたものであった。

墳丘は採土により半壊の状態であり、長径南北で一六㍍、東半分が残存しており、その幅六㍍五〇、高さ三㍍三〇で、採土以前の形は卵状であったものであろう。その墳丘の南半分に、中軸線を約南六〇度西にとって、竪穴式石室が営まれていた。その床面は現地表から八〇㌢㌢高である。石室の長さ四㍍、幅は最大一㍍二〇、最小八五㌢㌢、高さ五五㌢㌢である。その南

西の一㍍五〇の部分は破壊され、明らかにしがたいが、長壁の根石と短壁の根石の一部とが残っていたので、その長さを調査し得たのである。東北の二㍍五〇の部分は旧態が保たれていた。

石室の壁は自然石（河原石）の乱石積みである。長径三〇ないし五〇㌢、短二〇ないし三〇㌢ぐらいの石を使用している。天井石は五石残っていたが、その下幅は三〇ないし五〇㌢である。床は特殊な構造をしており、左右の壁石の根から斜めに扁平な石を中軸へ向けて出し、両石の中間に白色粘土をはっている。石室の中央に黒色土を薄鉢型につみ、その左右両端に右の両石をはりつけて、その上部に白色粘土を置いたものである。ところが、その両石と壁石との間の三角濠状の部分にも小砂利と白色粘土をつめてあった。恐らく、小砂利を満たしたのは排水設備であろうと考えられるが、それに白色粘土を混じたのは理解しがたい。白色粘土が崩れ込むか、流れ込んだものであろうか。

出土品は南西部に鉄片が散乱していたほかは残されていなかった。すでに盗掘の難にあっていたものであろう。

この古墳の石室はいわゆる竪穴式の石槨とは違ったものとして考えられる。竪穴式石室といわれるものに似ているのであり石の扱い方はむしろ横穴式石室に似ている。幅狭く、高さが低い点では、竪穴式の構造に近いと言えよう。発見時においては横穴式石室と見られたのであるが、検討の結果、結局普門寺東古墳（高崎市綿貫）に似た竪穴式石室と認められたものである。

10　愛宕山古墳　上毛古墳綜覧総社第一〇号

この古墳は、総社町総社字大屋敷、愛宕山一七六三番地にある。総社二子山古墳の東南にあり、天狗岩用水に臨んでいる。大型の円墳で、内に巨石使用の両袖型横穴式石室がある。南に開口しており、早く発掘されたようで、石室内にはその長軸線に直角に、奥壁に沿って、家型石棺が安置されているが、正面側に盗掘のための大穴があけられている。

石室は開口はしているが、羨道は半分埋没し、僅かに出入し得る程度で、この土砂を排除しなければ全貌を知ることができないが、羨道前方部は墓地になっており、したがって、そのままの状態で、昭和二十七年七月三、四両日に、群大史学研究室によって石室のみの実測調査が行なわれた。玄室の寸法は左壁長七㍍、中央長七㍍一四、右壁長七㍍一二であり、奥幅三㍍、

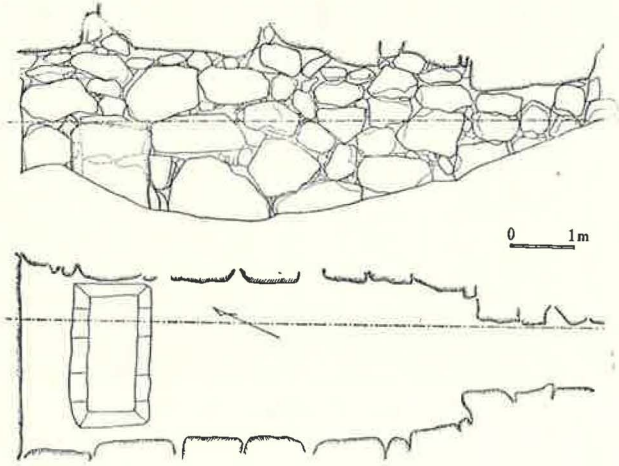
第56図　愛宕山古墳（南方より望む）

第57図　愛宕山古墳の石室内部及び石棺

中央幅二㍍九六、前幅ははっきりしない。これらの寸法も埋没土砂や礫類を除いてみなければ正確なことはわからないが、長さの方は床面で計測しなくとも、大体、変化はないので、奥壁と前壁との床面よりやや高い位置で測り出された。

玄室の長さが七㍍乃至七㍍一四であることは、奥壁の用石の凹凸もあるし、故意に玄室と羨道との連結部の左右壁（前壁）の玄室側を揃えないで構築している例もあるので、その見方からすれば当然起こり得る差である。また、長さは伸びる傾向があることも認めなければならない。すると、この長さは七㍍を当初予定したものと考えられる。また、尺度を用いている点から見る時は、高麗尺（一尺三五㌢）を使用したものとして、その完全尺は三五㌢の倍数であり、七㍍すなわち高麗尺二〇尺とみるのが妥当であろう。この立場からすれば、幅は狭まる傾向があるので、三㍍より大であるべきで、恐らく三五㌢の九倍三㍍一五すなわち高麗尺九尺として設計されたものとみるべきであろう。

壁石は巨石を使用している。輝石安山岩の山石である。榛名山の基部の構成岩石の由であるから、その付近から運搬したものであろう。ただし、その巨石に混じて、積み込まれている石に角閃石安山岩が認められる。この岩石は浮石質紡錘状であり、かつ、その壁面に出る部分が削られている。正しくは浮石質紡錘状角閃石安山岩と称するもので、その一面削りを使用しているのである。この石は榛名山二ッ岳の噴出によってできたもので、その噴火は噴出堆積物と古墳、住居跡との調査の結果、七世紀初頭または西暦六〇〇年ごろと推定されている。



第58図　愛宕山古墳石室実測図

したがってこの古墳は七世紀初頭として考えられ、巨石使用の巨室を構築した傾向のころであり、高麗尺（一尺三五㌢）を使用しているものと思われる。

石棺は凝灰岩製の家型石棺である。その形は、宝塔山古墳の石棺に似ているが、凝灰岩のため前側は磨損し、かつ大穴があけられている。背面にはなお当初の面影がしのばれる部分がある。宝塔山古墳の石棺は堅い安山岩製であり、凝灰岩は安山岩より軟かく、はるかに加工し易い。石室用石の加工についても、まず凝灰岩にあらわれ、次いで凝灰性砂岩（牛臥砂岩）に、やがて安山岩が用いられてくる。この傾向からみても、凝灰岩使用の方が安山岩使用よりも古くあらわれている。なお、この地方の竪穴式古墳の石棺がほとんど凝灰岩製であるので、その伝統を横穴式である愛宕山古墳の石棺が受けたとも言えよう。

11　蛇穴山古墳　上毛古墳綜覧　総社第八号

この古墳は、総社町総社字町屋敷南一五八七番地の総社小学校々庭南端にある。以前は周濠をめぐらした大型の円墳であったが、周濠は次第に埋められて、北は小学校々庭になり、墳丘地続きであるので、その頂上には御真影の奉安殿があった。西は幼稚園の敷地とされ、東には近年プールが造られた。そのため墳丘周囲も削りとられ、古い形は全く失われている。石室は早く開口され、弁財天が祀られていた。その奥壁面には、寛文年間に刻まれた蛇の図と銘とがある。優秀な工法を示す玄室、玄門と、小型な前庭の設備はあるが、羨道を欠いたものである。

石室は横穴式に属し、截石の切組積みで、両袖型に造られている。奥壁、左右壁及び天井ともに一石ずつの巨石で構成され、箱状のものである。切組積みといっても壁面が一石であるから、宝塔山古墳の石室の壁の積み方とは異なって、二壁面の合わせ目は、双方の石の端を断面凸状に作っており、天井石はおとしかけの状態である。それらの石の面は、削り放しではな

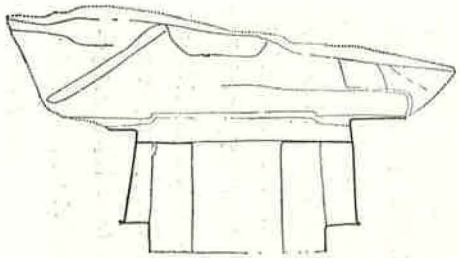
く精巧な拵えがうかがえる。その面拵えは、面に多少のふくらみをもたせ、その表上を削り痕を消すため、磨きをかけたようである。恐らく俗称「びしや」という工具のようなもので叩き、その上を水磨きにしたものであろう。玄室内にあっても、天井も四壁もやわらかい感じを与え、天幕のうちにあるようで、冷たいどぎつい思いはしない。

玄門は玄室の南壁の中央に開口している。南壁はいわば玄門の左右の石とその楣石とからできているような状態で、外側からみると、玄門の門柱が左右の石から造り出され、その上に楣石すなわち冠材がのせられている形である。冠材にあたるところは龕に似た工作が施されている。これらの用石の面は、玄室壁面と同様に水磨きされたものと認められる。この冠材の上方に八の字型の彫り込みのあるのは、後世弁財天窟に利用された時の礼堂の破風受けと見られる。

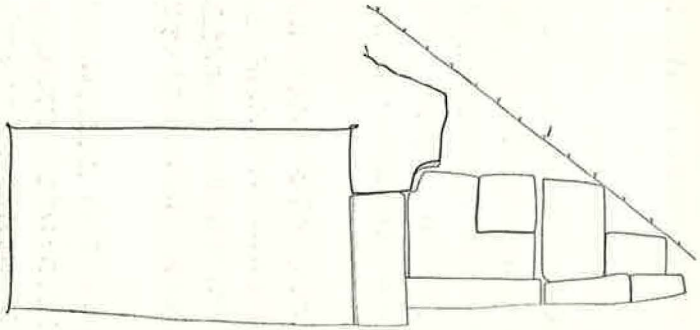
玄門前には特殊構造がついている。いわゆる前庭と見られるもので、左右に袖垣状に石積みが続いて、入口を造っている。この用石は面に削り痕を残した截石で、切組積みであり、宝塔山古墳の石室壁の石の使用法と同じである。この特殊構造の平面図形は方形と台形をつなぎ合わせたもので、外方に開いている。渋川市の虚空蔵塚古墳にはこの台形のものが認められ、ともに羨道を欠いているのであって、羨道の有無から発展的に並べてみると、ともに最末期の形である。前庭の寸法は、奥幅は八尺七〇、羨門から側壁までの右側が三尺三〇、左側が三尺五五であり、いわゆる奥行は三尺六七であるが、奥行のみは後補の跡がある。

石室の寸法は、玄室の幅が奥壁で二尺五四、玄門側で二尺五九、長さは左壁で三尺、右で二尺九一、高さは現在一尺六一、玄室長と玄門奥行との

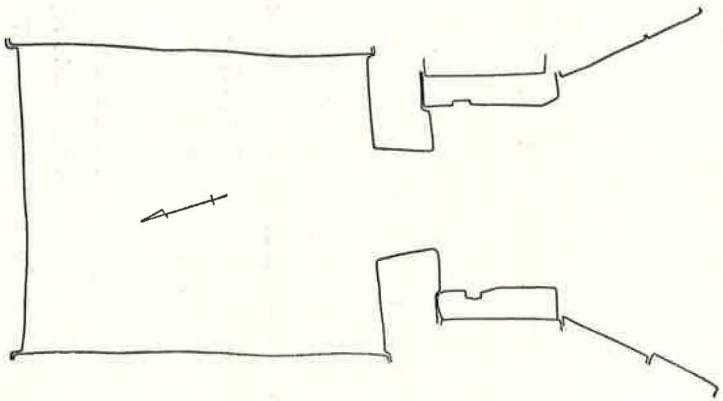
第59図　蛇穴山古墳石室入口



第60図　蛇穴山古墳石室正面図



第61図　蛇穴山古墳石室側面（右側）実測図



第62図　蛇穴山古墳石室平面図
（向かって左玄室、右は入口）

和は中央では三尺四一である。袖壁（玄門側壁）幅は左側七八㌢、同右側七七㌢であり、また、玄門幅は奥で九〇㌢、前で八三㌢、奥行四八㌢、その高さ一尺一〇になっている。なお、袖垣部は方形の部分の幅二尺〇五、長さ（奥行）左壁一尺〇二、右壁で一尺一五、この両壁の前には根固めのように一石ずつ置かれていて、その両者の間隔一尺五二である。台形の方は、左袖垣長さ一尺四四、右袖垣長さ一尺二八、台形の高さにあたる奥行は約一尺三〇、方形、台形合わせての奥行は二尺三八となる。

玄室は厳密にいって正方形ではない。その長さと幅との比はほぼ一・一となる。最初は近くの宝塔山古墳の玄室の正方形にならって造られたものと解され、現在でも正方形の傾向をもったものとして考えられているが、その平面図形企画にあたっての長さと幅との割り出しは、単に正方形として扱って置くことはやや無理のようである。玄室の長さが三尺または二尺九一というのは、宝塔山古墳の玄室の長さにあわせて考えられる。しかし、幅の二尺五四及び二尺五九は長さよりは四〇乃至五〇㌢近くも短いのである。

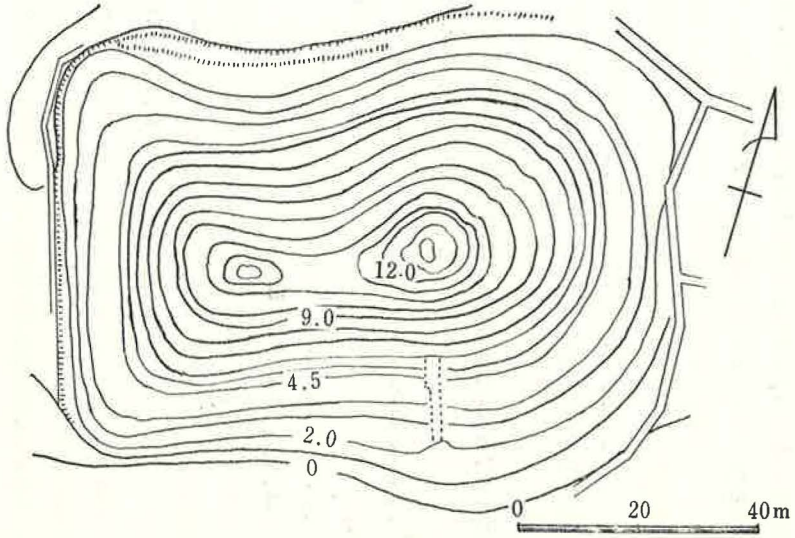
横穴式古墳の編年の基準を、長さと幅との比の値によって、4・3・2のものは古く、1に近いものは新しいところに位置づけされているが、蛇穴山古墳は宝塔山古墳に比して、この比の値以外の要素では当然新しいところに置かるべきであるが、此の値のみはやや大なのである。その上全体から言って、比の値2から1までの間には小数点以下一位での連続数が得られるので、この原因は、単純な幾何学的の作図以外に、長さと幅との寸法を「ものさし」によって予定して造られたものがあることを考えて、高麗尺と唐尺とを測定して、その尺度の完全数によって、長さと幅とが定められ、構築されたことが明らかになってきた。つまり、宝塔山古墳の石室は唐尺（その一尺は三〇㌢）を使用し、玄室長さ、幅ともに唐尺一〇尺であることが知られる。

蛇穴山古墳の玄室の長さはそれに準じて唐尺一〇尺に当てられるが、幅は八尺とかなりな誤差が出る。ところで宝塔山古墳石室の石の扱い方に酷似した南下A号古墳（北群馬郡吉岡村）の玄室は、長さは幅の一・四倍であり、その実測図の考察からも確実に√2を利用したものである。日本三古碑の一である多胡碑の碑身石の高さは、笠石の幅の√2となる。このように√2使用の傾向があったものと見えるが、蛇穴山古墳玄室の寸法も、企画当初、唐尺で長さ一〇尺、幅六尺と一応定めたものであろうが、正方形に近くするために、幅六尺すなわち一尺八〇の√2をとったものであろう。一尺八〇の一・四倍は二尺五二となり、その実測値一尺五四に近似である。

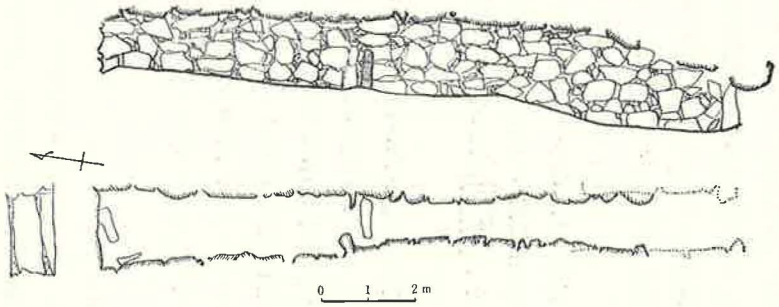
この例としては、考え方の順序がやや異なっているが、やはり√2を使用したと思われるものに喜蔵塚古墳（藤岡市白石）がある。この玄室は長方形に企画される意図があったようであるが、そのころの傾向としては方形であったと見られる。長さ幅とも唐尺六尺で計画したが、その長さのみを√2倍して造りあげている。喜蔵塚にしても、蛇穴山にしてもこのような複雑な企画法をとる必要がないはずであるが、一方蛇穴山では旧習に従って長方形に企画し、流行による方形に近づけたようであり、他の喜蔵塚では流行によって方形をとり、旧習によって表現したようである。しかもいずれも当時の流行と思われる√2をとっているのである。これは如何にも複雑怪奇のように見えるであろうが、実はすでに「ものさし」の裏目、すなわち裏尺唐尺が入ってきていたことを示すものと解される。

√2使用を以て直ちに裏尺使用ときめてしまうわけにはいかないが、横穴式石室の古い型と見られる伊熊（北群馬郡子持村）、有瀬（同上）等の古墳をはじめ、洞山西北（佐波郡赤堀村）、姥山A号（同上）の両古墳等数基の古墳にもこの傾向が認められる。√2使用は高句麗の楽浪の古墳のうちにもこの傾向が認められているので、すでに横穴式石室に伴ってきたものではなかろうか。「ものさし」のうち、高麗尺は横穴式石室に伴ってきたものと考えられるので、その時に裏尺として扱われたものであろう。

蛇穴山古墳は宝塔山古墳とともに、史跡山王廃寺跡（前橋市総社町）出土の根巻石、石製鴟尾、塔跡心礎などと、その用石の工法、使用尺度等の上から比較して、これらと併行して造られたものと考えられる。蛇穴山古墳の石室も、右の塔心礎も唐尺使用で、用石の工法が似ていることから同時期の構築とみられ、塔心礎は天平二年（七三〇）竣工の奈良市西ノ京の薬師寺の西塔跡の心礎に似ているので、同じころの成立と認められる。すなわち蛇穴山古墳は西暦七三〇年ごろのものと推定され、本県古墳



第63図　前二子古墳墳丘実測図　（数字は下部より計測・単位メートル）



第64図　前二子古墳石室実測図

最下限のものと考えられている。

12　前二子古墳

上毛古墳綜覧
荒砥第五一号

この古墳は、西大室町にある。付近の中二子、後二子両古墳とともに三基の大古墳が並列しているので、古くから注目されていた。明治十一年三月に村民の手によって発掘された。その時の資料が県庁に残っていたので、昭和二年四月の史跡指定の記事と合わせられて、「前二子古墳」として昭和四年十二月に群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告第一輯に、その詳細な調査報告が載せられている。ここではその後の調査について述べることにする。

その後の調査というのは、昭和十年の県下古墳一斉調査と、昭和二十七年七月七日から九日までの石室の実測調査、及び昭和三十二年八月二十五日から二十七日までの墳丘実測調査の三回である。最初は上毛古墳綜覧にまとめられてあり、次のは『勢多郡誌』に発表されてある。第三回のは前述の「前二子古墳」にある規模の寸法の修正である。すなわち右の二回の実測調査は群馬大学学芸学部史学研究室によって実施されたものである。

墳丘は前方後円型で、前方部は後円部に匹敵する高さをもち、いわゆる二子山型式である。高さ約二〇尺の基壇の上に、横穴式石室を設置し、封土をかむせて、形を整えたものである。全長九三尺、前方部前幅六二尺、後円部径

第65図　前二子古墳石室

土師器高坏

須恵器高坏

須恵器大型高坏

須恵器提瓶

須恵器瑞

第66図　前二子古墳出土品

七二%であるが、前方部の前が多少削られている。高さは前方部が一二%、後円部は一三%である。石室入口に向かって左側に石室に併行した穴があるが、これはその後破損されたもので、その他は比較的保存良好である。

従来前方後円型は、①細長い感じのするものと、②前方部幅が後円部径より小さなものが古い型とされているが、これによって全長を基準として、後円径、前方幅との比をとり、パーセントにして他の古墳と比較してみると次のようになる。

第四二表　横穴式古墳、竪穴式古墳比較表

横穴式古墳

古墳名	前方幅	後円径	両者差
洞山	四三%	六六%	−二三
オブ塚	三八	五九	−二一
西山	三九	五八	−一九
阿久山	三九	五七	−一八
鏡手塚	四六	五七	−一七
轟山A	四二	五八	−一六
前二子	六七	七七	−一〇
街道橋	六五	六五	○
正円寺	六七	六七	+四
前橋二子山	七三	六九	+九
後二子	七二	六三	+九
築瀬二子塚	七四	六五	+九
天王山	六五	五五	+一〇
中二子	七二	六一	+一一
総社二子山	六四	五〇	+一四

竪穴式古墳

古墳名	前方幅	後円径	両者差
天神二子	四四%	六七%	−二三
浅間山	四三	六二	−一八
大鶴巻	四三	五八	−一五
稲荷山	四四	五七	−一三
八幡山	四五	五六	−一一
朝子塚	四〇	五〇	−一〇
宝泉茶臼山	四八	五五	−七
鶴山	五〇	五四	−四
太田天神山	六〇	六〇	○
御富士山	六四	六四	○
今井神社	七一	六二	+九

不二山	七六	六〇	＋一六
九十九山	七三	五四	＋一九
二ッ山	八〇	五九	＋二一
観音塚	九一	七〇	＋二一

右の上段（横穴式古墳）によれば、前方部幅と後円部径とが全長に対しての割合上、その両者の大小を比較することができるのであって、前方部幅が後円部径より小、同、大との三通りに分けられる。洞山、オブ塚、西山、阿久山、鏡手塚、禰山A号の各古墳は、その小の部に属し西山古墳を除いて皆山寄せの小型なもので、同じ傾向につくられていることが知られる。前二子古墳もこの比較からすれば、同じ傾向とみられよう。街道橋、正円寺の両古墳は、前方部幅、後円部径が等しくなり、その他は前方部幅が大となる。この同値を示すものと大となるものとは、後二子及び九十九山の両古墳を除くと、大体平坦な場所にある。前二子古墳もまたこの傾向に属する。横穴式古墳は小型な山寄せのものを除いて、他は前方部幅は後円部径より大であるのに反し、前二子古墳はそれらのうちにあって後円部径が大であり、異例のものに属する。

下段（竪穴式古墳）についても、同様に小、同、大に分けられるが、大の部は今井神社古墳のみであって、大体小の部に入るものが多い。これと比較すれば、前二子古墳は竪穴式古墳のものに似ている。これらはいずれも平坦な場所に占地しているもののみである。山寄せの横穴式古墳は別に考えるべきものであろう。つまり、前二子古墳の墳丘は竪穴式古墳の型すなわち従来の古い型によったものとみられよう。

次にこの全長に対する前方部幅と後円部径との和は、全長よりどれほど大であるかを比較することができるのであって、それによって、全長に対して、前方部幅及び後円部径の和が大であるのは、墳丘の形が寸ずまりに、幅広いものであることを示している。大であれば大であるほど細長い感じがしないことになり、竪穴式古墳は大体前方部幅と後円部径との和が全長に近似しており、やや細長さを示すものである。この点からすると、前二子古墳はその和が全長よりはるかに大で、寸詰りの横幅の広いものに見える。

また、基壇については、前二子、総社二子山、観音塚の各古墳のように、基壇上に石室が構築されているものと、簗瀬二子塚、二ッ山、四谷A号各古墳のように、地表に直接石室を置き、封土をかぶせて墳丘を造り、その裾部に土寄せして基壇を造っているものがある。後者の場合は、基壇面から石室へは降って入るのであり、この不便をさけるために出来たのがいわゆる前庭である。前二子古墳の石室入口前には多少のスペースがあるが、これは基壇面なのであって、前庭というわけにはいかない。前二子古墳の構築は基壇の存在以後であり、前庭成立以前のことである。

内部の構造は横穴式石室で、後円部に造られている。自然石乱石積み袖無型で、その自然石は安山岩である。天井部から遊離した楣石（まぐさいし）を左右両壁にかけわたし、その下に玄門の設備がある。さらにその入口側に衝立（ついたて）のような扁平な凝灰岩の切石が立てられている。また、長い羨道の入口には羨門の設備があったように、柱状石が片側のみ残存している。石室各部の実測の数値は第四三表のとおりである。

石室は明治十一年に発掘され、遺物は全部とり出され、その配置図まであるので、その当時は一応床面まで全部出されたものであろうが、現在ではだいぶ埋まっており、玄門奥ではその高さのなかばに及んでいる。

まず石室の自然石乱石積みについては、自然石といっても転石いわゆる河原石ではない。材質は安山岩であって、赤城山麓には所々に、赤城山噴火による泥流に運ばれた安山岩の岩塊があり、それが亀裂に従って崩壊すると壊石となり、角の鋭い自然石が得られる。

また、袖無型といっても、こ

第43表　前二子古墳内部構造の規模

全長	左壁		14.05m
	右壁		13.75
埋葬部長	左壁	央	5.25
	中右壁	央	5.20
		央	5.10
埋葬部幅	奥壁	央	1.85
	中前	方	1.57
			1.58
埋葬部高	奥		1.00
	中		1.32
	前		1.48
玄門奥行（壁の部分）	左壁	側	0.40
	右壁	側	0.30
羨道長	左壁		7.05
	右壁		8.30
羨道幅	奥		1.30
	前		1.20
羨道高	奥		1.52
	前		1.30
羨門	幅		0.75

の石室には玄門や障壁の構造が付加されている。一般的な袖無型とは趣きを異にし、玄門があることは特に注目すべき点である。その玄門の装置は左右の壁面から門柱様の石を出して設置されたものであり、障壁は右の玄門前に独立して置かれ、玄門と一体となって、玄室部（埋葬部）の出入口を形成している。この例は他に全く類例をみないもので、この石室の特徴である。はたして最初よりこのような装置を有していたか否かには疑問があろう。玄門の上部の楣石（まぐさいし）は左右の壁にわたされて、両端は壁の中に入っており、天井からは離れている。これは玄門ともちろん一体として考えることが常識であろうと思われるが、皇塚古墳（藤岡市白石）のように玄門には冠石がなく、楣石は羨道部に独立してあって、その両者の中間には前室があり、その両者間はかなり隔たりがあって、一体として考えるわけにはいかず、観音塚古墳（高崎市八幡町）のように玄門がなくて、羨道部に楣石だけ設置されているものすらある。

また、この石室は袖無型としたのであるが、両袖型に入るべきものかとの疑念も持たれている。はっきりと袖を造ってあるものではかような疑問も起こらないが、玄門の内外で多少の石室の幅の差を見出すだけでは、袖無型で入口の方にせばまってゆくものはどの部分をとって玄門を設置しても、両袖型ではないかという疑問も起こり得るのであって、全体をみた時に袖無型、両袖型の区別も明瞭となる。しかし、玄門を有していないもので、ごく僅かな壁面の出をみいだすこともある。多田山古墳（佐波郡赤堀村）の如きであるが、この石室には高い梱石（しきみ）が設置され、擬似楣石が天井石の間から下がっている。ただその二者の関係が著しく食いちがっていて、二者一体で出入口を構成しているとみるわけにはいかない。そこへ僅かに両壁からの出が認められるのである。これも一応袖無型に入れるべきである。

前二子古墳は、石室の玄門の内部、奥壁寄りのところにかって奥壁に併行に境石が置かれてあった。この石も障壁と同様に白色の凝灰岩であるが、埋もれて表面からはわからない。昭和四年の報告書の図面には表現されていないが、明治十一年の記録及び見取図により、皇塚古墳及び多田山古墳にみられるような奥壁前の境石を想定したとおりに、その存在は容易に推定できる。しかし、すでに攪乱されていて、その存在を記録し得るだけである。

第44表　前二子古墳出土品

須恵器	10
土師器	5
鏡	1
鎗	2
鏡板	1
馬具破片	若干
鐙	1
耳環	1
瑠璃玉	237

右によって知られるように、石室は著しく長大である。石室が埋まっているので、ことに玄室部はその高さの半分も実測できない。もし羨門付近の床の位置を、石室全体の床面としたならば、玄室部の床は現在よりも一㍍二〇ぐらい下げなければならない。他に類例のない長大なものであるゆえ、一般の例にしたがって、一概に玄室部の床面の位置をきめてしまうわけにはいかないが、右の仮定にしたがえば、奥壁で高さ二㍍三〇ぐらいになりそうである。また、左右壁には多少の転びがみられるので、その傾斜によると、右の床面における奥壁の幅が二㍍ぐらいになりそうである。それにしても高さは相当ちがうが、幅は大差ないのであって、大体、現在の実測値を以て、石室平面図形の長さと幅の比較操作をしても概算はできそうである。

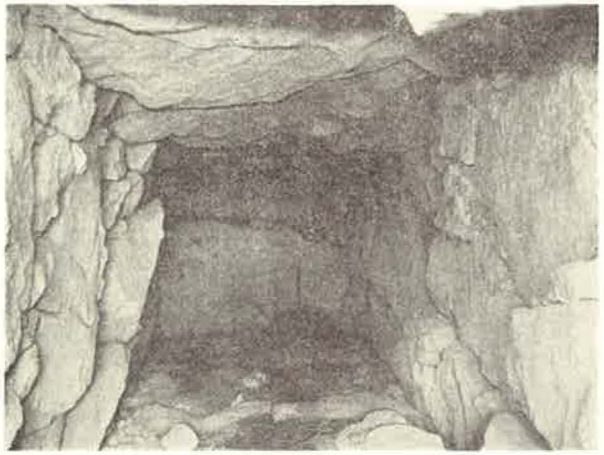
出土品は前記報告書によると第四四表のとおりである。この須恵器のうち四神付飾土器は四神すなわち青竜（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）が飾りつけられていることで著名なものである。

13　後二子古墳

上毛古墳綜覧
荒砥第五五号

この古墳は西大室町にある。前二子、中二子の二大古墳とならび、巨大な前方後円墳である。墳丘は赤城山裾野地帯に水蝕によって形成されたごく低い台地を利用して、ほぼ西向きに築造されている。石室は横穴式で自然石乱石積み両袖型のものである。すでに前記二大古墳とともに『群馬県史跡名勝天然紀念物調査報告第一輯』に載せられてあるが、ここではその後群大史学研究室で、昭和二十七年七月九日石室、同三十二年八月二十八日から三十一日まで墳丘の実測調査をしたものと合わせて、記すことにする。

昭和二十七年の調査時には、石室は羨道部が大半埋没し、その入口部は破壊されていたので、完全な実測図が得られたわけではないが、その寸法は第四五表のとおりである。



第67図　後二子古墳石室

第68図　後二子古墳墳丘実測図
（数字は上部から計測・単位センチ）

第45表　後二子古墳
内部構造規模

		m
全長	左壁	現長6.45
	右壁	現長8.40
玄室長	左壁	5.00
	中央	4.75
	右壁	4.50
玄室幅	奥壁	2.60
	中央	2.40
	前方	2.30
玄室高	奥壁	2.30
	前方	2.20
羨道長	左壁	現長1.45
	右壁	現長3.70
羨道幅	奥	1.60
羨道高	奥	2.20

第46表　後二子古墳
出土品

直刀	2 振
鍔	1 個
太刀金具	1 個
太刀破片	若干
小刀	2 振
平根鏃	1 個
尖根鏃	若干
鏃破片	若干
耳環	11個
高杯	1 個
提瓶	1 個
歯	3 個

この寸法のうち各部の最大は、石室の全長八尺四〇、玄室長五尺、幅二尺六〇、羨道長三尺七〇、幅一尺六〇とみられ、玄室の長さは幅の約二倍である。高さは埋没しているので基準にはならない。この数値を換尺すれば、高麗尺で全長二四尺、玄室長一四尺、幅七尺、羨道長一〇尺、幅四尺と推定される。

壁は自然石乱石積みであり、巨大な石が用いられている。石室はもちろん横穴式で、両袖型であるが、かなり不規則な点が見出される。天井は玄室、羨道ともに一平面である。このような点は両袖型の初期のもののように考えられる。前二子古墳が袖無型に玄門の如きものを付した形とみられているが、この石室では、玄門を補わず、構築当初より両袖型として企画されたものであろう。

墳丘は丘陵を利用して築いてあるので、ほぼ東西に横たわっている北側は、高さ後円部で九尺、前方部はこれより五〇㌢ほど低いが、南側では後円部高五尺であり、墳丘周囲の土地は南及び西側で高く、北及び東側が低くなっている。いわゆる二子山形式で、前方部と後円部とに高さの差が比較的少なく、前方部前方の線が左右に張り出して雄大である。実測図の示す高低線により墳丘の寸法をみれば、全長七六尺、前方部前幅五五尺、後円部径四八尺である。北側の最下線と中軸線との距離から復原すれば前幅六〇尺、後円径五〇尺ぐらいになるであろう。

出土品は今はほとんど失われているが、前記の報告書によると、第四六表のとおりである。

これらの諸点を総合して、この古墳は七世紀前半のものと考えられる。

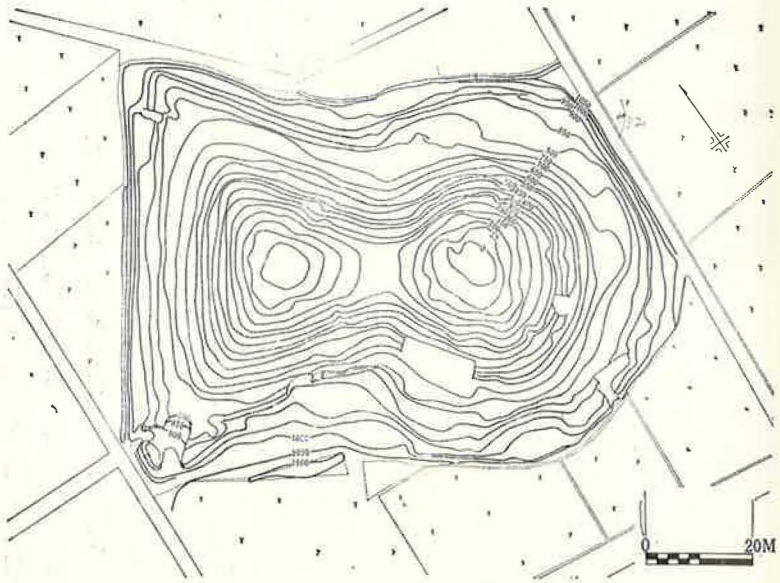
14　前橋二子山古墳　上毛古墳綜覧　前橋第一号

この古墳は、文京町三丁目一五七番地にある。旧天川町字東下一五七番地にあたり、通称前橋の二子山古墳あるいは天川の二子山古墳と呼ばれている。昭和二年の史跡指定の際には単に「二子山古墳」とされていたものである。総社町が前橋市に合併して以来、両地区の二子山を区別しがたいので、総社町の二子山古墳を総社二子山古墳と言い、それに対し、この古墳を前橋二子山古墳と表示して、便宜上取扱っている。

この古墳は学術的な発掘調査を経ていない。昭和二十九年三月二十二日から二十四日までの三日間、群馬大学史学研究室でその外形実測を実施した。内部構造については、種々伝えられているが、まだ発掘されていないともみられ、恐らく横穴式石室を有するものと推定される。史跡指定の際の調査報告は『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第一輯にのせられ、また『上毛古墳綜覧』にも略述されている。

墳丘の全面には厚い葺石が見えており、形は大体旧態に近く保存されているようであるが、南斜面の一部裾部が削りとられ、また、前方部の西南端も破壊されていた。戦時中は軍隊によって陣地化された部分もあり、戦後、墳丘に接近して、民家が建てられたりして、破損された個所も多かったが、近年、本市教育委員会によって復原につとめ、ようやくその体裁が整えられてきた。周濠については、早く周囲の地に耕地整理が実施されたために、痕跡は地表では明らかにすることができない。将来発掘調査が実施され、これをもあわせて保存すべきものと考えられる。埴輪は破片が発見されるので、存在していたことは明らかであるが、発掘調査の結果、明確にすべきものである。

この古墳の墳丘の規模は全長一〇四尺、後円部径七二尺、くびれ部幅六二尺、前方部幅七六尺、高さは後円部高一一尺、前方



第69図　前橋二子山古墳墳丘実測図
（数字は上部から計測・単位センチ）

第70図　前橋二子山古墳

部高九㍍五〇である。中軸線の方向は北五五度西で、前方部は西やや北向である。前方部幅は後円部径よりも大で、前方左右に張り出した形である。しかし他の同じ傾向の墳丘に比して、この差は大きい方ではない。これを全長に対する後円部径、前方部幅の割合いを出してみると、前者は六九㌫、後者は七三㌫で、その差は四㌫となって、横穴式古墳の同傾向のものでは最も小である。この両者の和は一四二㌫となって、その数値は同傾向のものとあわせると、最大の部類に入り、長さに比して幅の広いものである。

この前方部幅から後円部径を引いたその差が小の値を示すものは、その値〇のものから前方部が大となってゆく傾向を示すもので、その値〇を基準に考えた場合は、その傾向の比較的初期の形を示すものとみられるが、その両者の和が全長よりも大で、幅が大となるものは比較的末期のものとみられる。この二つの傾向をこの二子山古墳が備えているということは、両形の接触または混在を意味するもので、両形の併存のころに造られたものであろう。ただし、この実測値から企画の数値を復原してみると、前方部幅八二㌫、後円部径六八㌫となり、その差一四、その和一五〇㌫となる。総社二子山古墳と類形となる。県下の古墳については、自然堆積土による墳丘の埋没が著しいので、厳密な数的比較にあっては、葺石の面を出して、その根石において実測する必要がある。

15　不二山古墳　上毛古墳綜覧　前橋第二号

この古墳は、文京町三丁目にあり、旧高田町字林三五七、三五八、三六三番地にあたる。現在市街地の中にあって、かろうじて形をとどめ、山林になっている。やや小型の前方後円墳であり、後円部に角閃石安山岩の削石互目積みの石室をもっている。昭和二十九年三月二十五日から一週間群大史学研究室によって発掘調査された。すでに盗掘に会っていたのであるが、それでも右の調査により各種の出土品があり、石室は奥壁の大部分が崩壊し、墳丘頂面に置かれた家型埴輪が崩壊の跡の天井部

古墳外形

石室入口

石室壁石の一部

第71図　不二山古墳

にその基部をのぞかせていた。

墳丘は前方後円墳で、前橋二子山古墳を小型にしたようなものである。周囲から大部削りとられて、形は損なわれており、墳丘表面には盗掘のための浅い穴が各所に掘られていた。墳丘の全長は五〇㍍、後円部径は三〇㍍、その高さは七㍍、くびれ部の幅は二六㍍五〇、その高さは四㍍六〇、前方部幅は三八㍍、その高さは六㍍である。

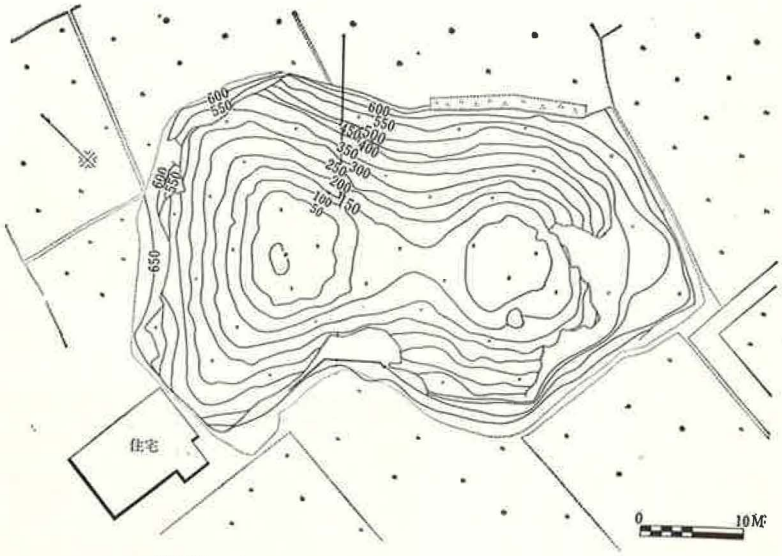
これを現在の状態からみると、全長と前方部幅との比は七六㌫、全長と後円部径との比は六〇㌫となる。前橋二子山古墳の七三㌫、六九㌫とに比較すると、著しい差がある。しかし、両墳丘の平面図を重ね合わすと、相似形であることに気付く。よって、両者を図上復原を行なってみると、ともに各八二㌫、六八㌫となって、その差一四㌫、その和一五〇㌫となる。これによって、他の諸古墳との比較ができるが、他の古墳の多くは、自然埋積土をかぶったままで、同傾向の比の値をとるものでな

いと比較の操作が困難であり、墳丘実測図をあわせて見なければならないという不便がある。この前橋二子山、不二山両古墳のように、相似形になるもの、あるいは一致するものはその例が少ない。

内部の構造は横穴式石室である。死屍を納入する玄室が長さ四㍍七七、奥幅三㍍〇六、前幅二㍍六四、高さ二㍍六〇でつくられ、その前幅の中央に、幅一㍍五三の出入口すなわち羨道部をあけて、その長さを四㍍一〇とって墳丘外に続けてある。羨道の入口にも、玄室の入口にも羨門、玄門の設備はなく、これを素型と言い、羨道から玄室に入ると羨道の幅よりも左右に広くなっている。すなわち両袖型素型の横穴式石室である。全長は八㍍八〇になっている。

この石室の寸法は、どういうふうにして割り出されたかは推定にかなりむずかしい。この玄室の寸法を詳細にあげてみると第四七表のようである。

表の数値のうち、石を積んで構成される性質上、長さは伸び、幅は狭まる傾向がある。よって長さは最小の四㍍六五、幅は最大の三㍍〇六をとって、長さと幅との比を出すと、その値は約一・五となる。次にこれらの数に共通す



第72図　不二山古墳墳丘実測図　（数字は上部から計測・単位センチ）

第47表　不二山古墳　玄室規模

		m
玄室長	壁央	4.77
	左中	4.65
	右壁	4.82
玄室幅	奥壁央部	3.03
	中前	2.85
		2.64

る数値を求めてみると、三六㌢㍍となる。横穴式石室は高麗尺を伴ってきたもので、唐尺の使用時にまでかけて構築されたので、三五㌢㍍、または三〇㌢㍍を一尺として取扱うことが妥当であるが、この両者に合致しないものがある。不二山古墳の石室は三六㌢㍍が妥当とみられる。この三六㌢㍍は高麗尺の譏長と考えられるものであり、三〇㌢㍍を一尺とした唐尺の一尺二寸にあたる。大宝律令においては唐尺を採用し、その一尺二寸を大尺と定めたが、それは旧尺である高麗尺の譏長の最大のものに近かったものと考えられる。すなわち不二山古墳はこの三六㌢㍍の数値を含んでいることになる。

なお、石室全長については、羨道の入口部が補修されて、長さが延長された痕跡が認められる。この延長という点では、しどめ塚古墳（群馬郡榛名町）の石室に顕著であって、その石室の大部分は三五㌢㍍を一尺とした高麗尺で、羨道前方部及び前庭等は唐尺で造られており、石積みの状態からも明らかに区別ができる。不二山古墳石室の羨道も同様である。

このような特殊な事情は、石室の使用期間が長く、その間に新しい構造をとりいれ、あるいは構築が徐々に実施されたために、はじめの企画に変化が起こったものと考えられる。なお初めは石室のみを造り、恐らく石室壁の裏込めの外側の石組みを行なったままで使用しており、徐々に封土をかけて、墳丘を築造したものとも思われる。しかし、不二山古墳においては、墳丘の形式は前橋二子山古墳に似たものであり、家型埴輪も配置してあるので、ほぼ完成した形であったものに補修を加えたかとも受けとられる。ただし、石室が三六㌢㍍を一尺とした高麗尺を使用したのであれば、その構築上時代的錯誤があり、相矛盾するところがある。形式変化の過渡期的現象を示すものであり、墳丘は旧習により、石室は新式によったものであろう。

この古墳は、田口町字千手堂五八〇の一、塩原和雄氏宅地続きの竹林中にある。旧利根川の左岸の台地の端に位置し、西に急に低く南は緩い傾斜地をなしている。昭和十年の県下古墳一斉調査に漏れたものであり、名称もない一小円墳であるが、角閃石安山岩削石積みの完全な横穴式石室を有しているので、土地所有者の名をとって、塩原塚と名付けられたものである。

墳丘は高さ約三㍍、北側で二㍍六〇である。径は一四㍍、ただし葺石の根石のえがく円周によった。葺石は傾斜面のみにあって頂上は平坦である。墳輪は見当たらない。土師器の破片は封土内に混じていたが、付近に散乱していたものが入ったと考えられる。これに反し須恵器の破片は羨道入口部から高坏、北側の葺石の上から大甕の破片が出土した。葬祭に用いたものと推定される。

石室は横穴式両袖型である。羨道、玄室のみで玄門はない。壁は榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩の削石及び截石で積まれている。削石は互目積みに、截石は切組積みにされているものが多い。石室各部の寸法は第四八表のとおりである。

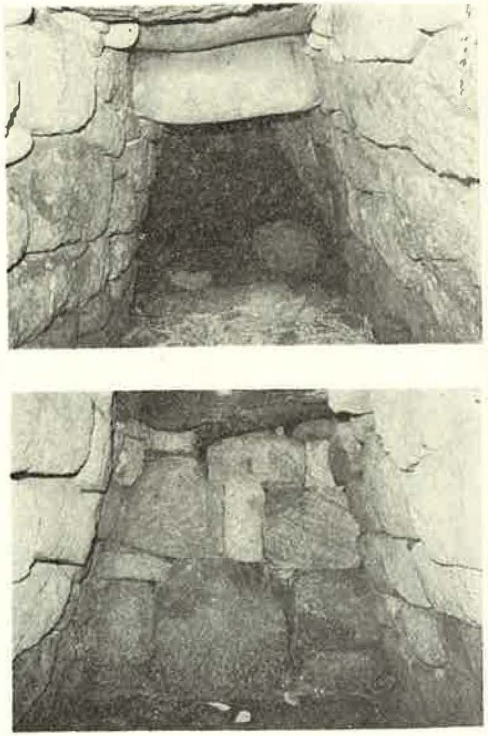
羨道の入口の床面に埋め込んで、梱石があり、床面には厚さ三〇㌢に礫が敷いてあった。羨道と玄室との床面は、羨道の礫の厚さだけ玄室の方が低く、その間に框石が置かれている。また、羨道床面には少なくとも三回、塡塞をやりなおした跡が認められた。玄室には扁平な河原石が敷きつめられ、その上に砂利が薄く敷かれ、その砂利の上面またはその中に混じって遺物が見出された。玄室の平面形の幅と長さは比が一・五であり、換尺すると、高麗尺で幅六尺、長さ九尺になる。壁にはいわゆる「ころび」が見えている。出土品は第四九表のとおりである。

第48表　塩原塚古墳
内部構造規模

		m
全長	左壁	5.90
	右壁	5.98
玄室長	左壁央	3.27
	中壁	3.15
	右壁	3.10
玄室幅	奥壁央	2.10
	中前方	2.07
	壁	1.95
玄室高	奥壁方	2.01
	前壁	1.54
羨道長	左壁	2.84
	右壁	2.83
羨道幅	奥	1.25
	前	1.26
羨道高	奥	1.41
	前	1.30

第49表　塩原塚古墳
出土品

直刀		2
小刀		1
刀子		3
鎌		2
鏃		9
鏃		6
環		16
具	錫	2
具	柄	2
具	柄	2
金	轡	2
金	吊	2
金	鐙	2
飾	辻	2



第73図　塩原塚古墳玄室入口(上)と奥壁(下)

骨はほとんど完全なものはなく、むしろ粉末状になっていたが、歯は臼歯六〇、その他五、破片三六を得ている。これが七グループになって出ていた。

以上をまとめてみると、

1　河岸台地の傾斜地に、奥壁下で五〇㌢掘下げて床面とし、三〇㌢あがって羨道の床を設けた。何回かの埋葬の間に羨道の床面が三〇㌢も高くなり、それにつれて外部も高くなったものか、その位置に葺石の根石が置かれている。このことは葺石が最後の埋葬の後に築造されたであろうことを物語るものである。

2　石室は角閃石安山岩の削石互目積みで、奥壁のみに截石切組積みが混じえてある。構造は素形で、羨道も玄門もなく、擬似楣石(まぐさいし)が羨道の奥端、天井から下がっている。床は土をたたいて中央を高く蒲鉾成りにし、その上に河原石を敷き、砂利が置かれている。湿気抜の装置とみられる。

3　石室構築の尺度は高麗尺を用い、幅六尺、長さ九尺で、その比は一・五である。

4　出土品は直刀が各一振ずつ左右壁下から出ており、馬具は玄室入口に近く、その他は骨及び歯と混在していた。玉類は

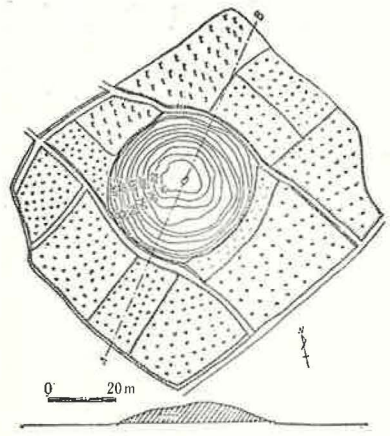
一個も見出されず、歯及び耳環から埋葬屍体数は七～八体と推定でき、副葬品は恐らく最初の埋葬時に納められ、他の埋葬者にはほとんど伴わなかったのではなかろうかと思われている

5　右より考察して塩原塚古墳は七世紀中ごろに築造され、およそ三十年間ぐらい使用されたものとみられる。

17　山王大塚古墳

上毛古墳綜覧　上陽第一五号

この古墳は、山王町字大塚一六八番地にあった大円墳である。西に近く山王二子山古墳（上陽第一四号）があり、東は広瀬川の崖にもあまり隔たってはいない。この地域の円墳としては最大のものであり、昭和二十九年にこの墳丘の土によって中学校の校庭拡張にあてられようとしたので、急遽、八月二十二日から二十八日までに群大史学研究室で発掘調査され、破壊の難をまぬがれしめたのであるが、昭和四十三年、広瀬団地造成にあたり、すでに調査を経たものとして処理され、平夷されてしまった。平夷された以上はもとの姿にもどすことはできない。以下は昭和二十九年の記録に基づくものである。



第74図　山王大塚古墳墳丘実測図
（数字は上部より計測・単位センチ）

墳丘は稀に見る美しい姿の円墳であった。図面によっても知られるとおりで、その直径四四㍍、高さ七㍍である。しかしその墳丘を東西、南北両線で割った西南の四分の一の部分は不整形で、すでに荒らされていることが明らかであった。墳丘表面には葺石の痕跡があり、南側では高さ三㍍以下は、九㍍の傾斜になっており、地表より八〇㌢あがった処から二㍍二〇までの一㍍四〇の間と、同地表より上で六㍍から七㍍六〇までの間、すなわち一㍍六〇の間には径七乃至一〇㌢の小石が不規則に置いてあり、かつ前者では約一㍍、後者では約六〇㌢頂側の方が平らになっている。この平らの部分は、ともに中段のようにも見え、その部分の葺石は径一五乃至三〇㌢ぐらいで整然と積み上げられていた。上段の平らな部分から上に横穴式石室が造られていたことになる。埴輪の破片は多少認め得たが、その配列は四方に向かい、いずれにおいても確かめることができなかった。

石室は横穴式である。すでに天井石全部と壁石大部分が取り去られていた。羨道前半部が僅かに残存していたに過ぎない。石室の跡に裏込めの砂礫類が落ち込み、その上を旧封土で埋めもどしてあった。しかし、詳細に調査することによって、壁石の根石の痕跡が確認され、石室入口部の残存部分とあわせて、その規模を知ることができた。石室は両袖型の素型であり、浮石質紡錘状角閃石安山岩の削石を互目積みとした壁を有していたものである。その寸法は第五〇表のようである。

この寸法は高麗尺を使用し、全長一六尺、玄室長七尺、同幅四尺、羨道長九尺、同幅三尺と推定される。その長さと幅との比の値はほぼ一・八であり、羨道長は玄室長よりも長い。

裏込めの砂礫類は小口積みの壁石の背後に雑然と詰められていた。壁石背後と封土との間が三角底の濠状となって、そこに落とし込まれたようであり、裏込めの外側の石組みらしいものもその上部に多少造られていたかにも見える。床は粘土を平に叩いて固められていたが、その上には壁石の削り屑が約二㌢の厚さで一面に散っており、さらに小砂利を敷き重ねていた。羨道には壁石の削り屑の上に、径一〇㌢乃至二〇㌢の扁平な河原石が敷かれてあり、入口には壁石と同種の角閃石安山岩

第50表　山王大塚古墳内部構造規模

全長		5.74m
玄室長	左壁	2.54
	中央壁	2.54
	右壁	2.50
幅	奥部	1.39
	中央部	1.38
	前部	1.38
羨道長		3.20
〃　幅		0.88

第75図　山王大塚古墳

が三石並べられて、梱石とされていた。石室前は玄室床の粘土面と同高で、その表面には壁石の削り屑が一面に置かれている。その長さは二㍍七〇ほどで葺石にいたっている。石室長五㍍八三であるから、石室奥壁から葺石まで水平面で長さ約八㍍五〇になる。この面からは土師器、須恵器、埴輪片等が雑然と出土した。

石室の用石は天井石は不明であるが、壁石は浮石質紡錘状角閃石安山岩の五面削りである。紡錘状の一方の尖部を削り落として砲弾状にし、さらにその切断面を方形に整えたものである。そのためには切断面の四方が削り落とされている。この角閃石安山岩は榛名山二ツ岳の爆裂によって噴出したもので、紡錘状も、浮石質もその際の状況によってできたものである。それが利根川に運ばれて漂着し、石室用石として採り上げられた。その面削りの加工は、石室構築の場で行なわれたものらしく、おびただしい削り屑の上につくられている。

また、別に墳頂付近には竪穴式の粘土槨があったようである。すでに荒らされていて、火山灰質の土の中に鉄分が凝集してところどころから出ており、その上の一五㌢㍍ぐらいからはローム と粘土のかたまりと、黒色土とが混じりあっていた。

以上の諸点からこの古墳はもと竪穴式の粘土槨をもった大円墳が造られていたのを利用して、その墳丘の四分の一の部分に横穴式石室を造り込んだものとみられる。その理由は①墳丘の規模に対して横穴式石室が小さい。②横穴式石室の壁の裏込めが下方が幅狭く溝状の部分に落とし込まれたようである。③この裏込めの状態は墳丘を切り開いて石室の壁石を置き、墳丘側の切りとりの法との間に裏込めを入れたものである。④石室の床面が高すぎる。⑤葺石の状態は墳丘下半にのみ残存している。以上のようなわけであるが、発掘調査時においては、まだこのようなことは考えられていなかった。その後、佐波郡芝根村第二号古墳、第七号古墳等の調査によってはっきりしてきたものである。

18　上陽第一〇号古墳

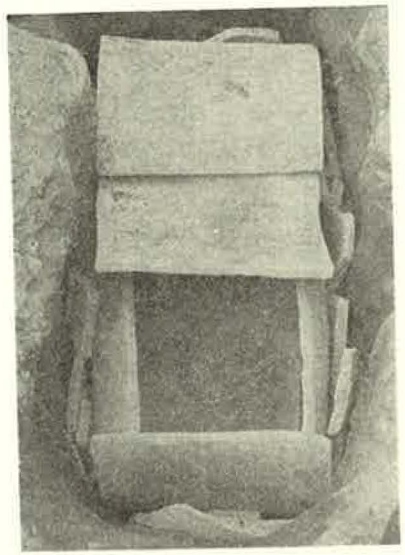
この古墳は、山王町字前田五八三番地にある。昭和二十九年八月に、前記の山王大塚古墳とともに発掘調査が行なわれた。山王古墳群の最南端にあたり、山王町の集落の東南、水田中に突出た畑の端にある。

墳丘はほとんど破壊せられていた。残存部分は径約一〇㍍、高さは一㍍五〇余りである。このうちに長さ七㍍、幅は奥壁下で一㍍八〇、入口で八〇㌢㍍の袖無型（徳利型）の平面をもった横穴式石室が設けられていた。石室の天井石も壁石もほとんどとり去られ、床の敷石も大半除かれていた。石室の床面は畑地と同高位で、入口の方が低く、奥の方がやや高い。上は黒色土であり、これをたたいて固めたものと見られる。その厚さ三五㌢㍍、それ以下は同質の土であるが軟かい。その上にじかに壁の根石を置いている。入口の端及びそれから二㍍六〇のところに、縦に石が並べられており、墳塞の内外両側で、その間に墳塞の礫が置かれていた。

壁の石材は浮石質紡錘状角閃石安山岩の削り石である。紡錘状の一端を切りとって、壁面と上下左右の四面とを削ったいわゆる五面削りである。中には一面削りのものもあるが、これを削り面を下にして立てると、砲弾型になる。長さ三〇乃至五〇㌢㍍、太さ径二〇乃至三〇㌢㍍である。この浮石質紡錘状角閃石安山岩は七世紀の初めごろの榛名山の二ツ岳爆裂の際のものである。

19　瓦使用棺

この瓦棺は、総社町総社字北原分で発見されたものである。通称山王の西で、北原分の中の作兵衛塚という地名の平らな畑から出土したものである。阿久津福松氏が牛蒡のカマボリを行なっていた時、深さ約三〇㌢㍍のところであたったのである。この地は作兵衛塚と称してはいるが、すでに塚らしいものはな



第76図　瓦使用棺（総社町出土）

く、一面の畑地である。かっては古墳があったかも知れないが、この瓦使用棺とは関係はなさそうである。

瓦使用棺は、むしろ槨といった方が妥当であろう。平瓦一一枚を組み合わせたものである。瓦は布目瓦であり、長さ約四〇㌢㍍、幅三一乃至三八㌢㍍ぐらいである。これを底部に二枚、縦長に敷き、横は各二枚ずつ、幅に一枚ずつ、蓋に三枚を組み合わせて、箱状に造ったものである。その周囲、上部には平瓦の破片を置いてあった。山王廃寺かまたはそれに近い寺院建築に使用された瓦が、造墓の用材に転用されたものであろう。

20　荒口小塚古墳　上毛古墳綜覧　荒砥第三三〇号

この古墳は、荒口町諏訪西九〇五番地に所在するものと思われる。この地には同番地内に荒砥第三三〇号、第三三一号の両古墳が存在していたが、諏訪西九〇九番地の第三二九号墳とともに、上毛古墳綜覧に小塚と表示してあり、すでに第三三〇、第三三一号墳とともに平夷されて、後者の如きは「墳丘ナシ」とあり、芝地で、石碑が建てられていた。第三三〇号墳も「平坦、桑園側に石碑有」となっていた。この桑園であった地に、石類が出ているので、小塚という名称にも合わせて調査されたものである。

昭和三十一年六月十七日及び十八日にこの古墳の調査が実施された。この結果は、径二〇㌢㍍乃至三〇㌢㍍の大小さまざまの石が砂利とともにガラガラと詰めてある状態の部分があらわれただけで、裏込めの一部と見られるほかはとりたてて言うべきものは見当たらなかった。しかしそこに立てられてあった石碑は、その碑文が古墳の存在していたことを伝える貴重なものであるので、これを採録すると、

碑文

上州勢多郡荒口邨野濶林疎小邱相接草茂而露湛雀噪而煙宿田兮飤馬村童捕魚野趣如畫余友阿部耕読堂其家農好読書毎耕自比古之帯姪真畎畝中之雅人也今玆安政四季丁巳四月某日荷鋤逍遙乎村西田畝鍬響而風凄雲屯而草薫忽思墾闢田中之高処以為桑畝遂自揮犂鑿之其土黄壤沙礫碌碏更掘五六尺石横而如林傍有古鏡及器械数枚土蒸色変不識其為幾千年外物耕読子諦視之鏡半朽而如半月形剣多折而無室馬鐙之具空纔帯金光知是古昔王侯貴人英魂老魄之所宿焉耕読子憐而瘞埋之建碑而記之嗚呼世降郷僻況荒叢野田之中遺玆神物一顕一晦蓋亦冥冥之中有使之者也耶

江戸　松崦岡永君賛撰

阿部省　書

以上のとおり、安政四年に古墳が発掘されて、鏡、剣、馬具類が出土したことをこの碑は物語っている。この碑の高さ約九四㌢㍍、幅約六五㌢㍍、厚さ約二七㌢㍍で石質は安山岩である。

なお、この古墳下の黒色土層から、石田川式系の複口縁の土師器の破片が数片出土した。

21　正円寺古墳　上毛古墳綜覧　桂萱第六六号

この古墳は、堀之下町字二子塚三八〇ノ一、三八一番地にある。赤城山の裾野の利根川の旧流路に面した緩傾斜地を截断して営まれたほぼ西に向かっている前方後円墳である。墳丘は基壇と周濠の跡とをめぐらしているが、その基壇面下約一㍍のところに山側の地表面の延長とみられる層があり、周濠はその地表面を深くえぐりとられたものである。川側すなわち墳丘南側は削りとられて、そこに正円寺の本堂及び庫裡が建てられてあり、東側は濠跡を隔てて、自然傾斜が続き、西側は濠がなお湿地として残存し、自然傾斜は平夷されている。その後円部には横穴式石室が、また、くびれ部の頂上には竪穴式の石槨がつくり込まれている。

昭和三十二年十二月十九日から二十五日まで、発掘調査が実施された。すでに明治初年に横穴式石室は発掘され、遺物は甕に入れられて石室内に納められていたが、墳丘及び埴輪円筒列等の調査によって、くびれ部頂上に新たに竪穴式の石槨が発見

された。

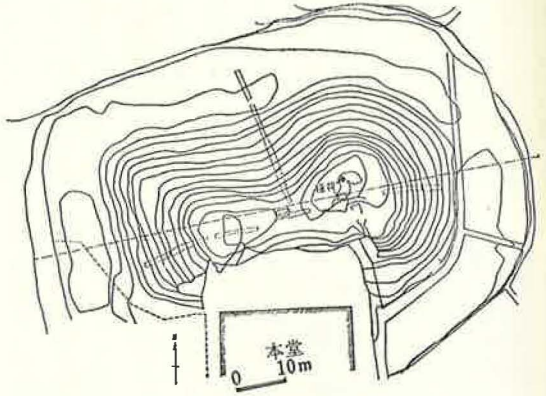
墳丘は南が削滅されており、厚い自然堆積土によって全体がおおわれているので、葺石の根石を基準に実測し、復原してみると、全長六四㍍五〇、前方部幅四〇㍍、後円部径四〇㍍となる　高さは現在後円部は六㍍五〇、前方部も同高であるが、前方部前の周濠跡の部分が、北の周濠跡から次第に低くなっているので、前方部前からその頂面までは八㍍ある。この葺石根石を基準とした寸法が構築時の企画に近いものと考えられるので、これから使用尺度を推定すると、高麗尺一尺三五㌢として一尋分すなわち五尺一七五㌢をあててみると、全長は三七尋に二五㌢短かく、前方部幅及び後円部径はともに二三尋に二五㌢不足する　この二五㌢の誤差は復原のためもあろうし、土木工事による誤差ともみられよう。

また、全長に対する前方部幅及び後円部径の比の値を求めて、これを分で表わすと六三・五分となる。したがって、この両者の差は〇であり、和は一二七となる。この数値は復原の形で求めたものであり、前述の二八一・二八二頁の第四二表の各古墳の数値とは同列には扱えない。その表では正円寺古墳も自然堆積のままの寸法で扱ったものである。しかし、大体において、御富士山古墳（伊勢崎市安堀町）の数値に似ており、御富士山古墳は晋尺（晋尺は一尺が二四㌢）使用と認められるので、その古い型にならってつくられたものであろうか。これには横穴式石室及び墳頂の竪穴式石槨が問題となろう。ただし、この正円寺古墳の墳丘を晋尺使用としてみる時には、その寸法の換尺の上での誤差が大であり、高麗尺使用と考えるのを妥当とする。

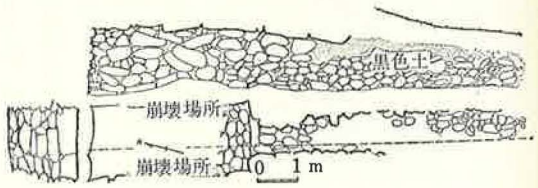
第77図　正円寺古墳

第78図　正円寺古墳竪穴式石槨

墳丘には基壇面と墳頂とに埴輪円筒列がめぐらされていた。基壇面のは、その上面がくびれ部及び前方部では幅六㍍三〇、後円部東側で幅四㍍あり、その基壇上面の外端から一㍍五五内方に円筒の外側を置いて配列されていた。くびれ部頂面においては、竪穴式石槨の南側に一列だけ発見され、二㍍八〇の間に約一〇本が密接して置かれていた。この列は墳丘主軸線にほぼ併行しており、この主軸線を越えた北側の対象の位置にも配置されていたものと考えられる。円筒は墳丘盛土のローム質のものの上に立てられ、これを黒褐色の表土が厚さ三〇㌢に堆積して、埋めていた。



第79図　正円寺古墳実測図



第80図　正円寺古墳石室実測図

横穴式石室は両袖型の素型である。壁は直（垂直面）で、自然石乱石積みであり、その自然石というのは加工されないもので、主として河原石（礫）のうち、比較的四角なものを選び、これをそろえて重箱積みとし、このほかに手ごろな丸石を用いている。玄室の左右壁の大部分は崩壊し、山石の巨石を用いた天井石は一部分積土によって支えられている状態である。羨道の左壁は天井石とともにとり去られ、右壁の前方部も破壊されている。その寸法は左右壁下においてともに三㍍八八、幅は奥壁下で一㍍八八、前方で一㍍六五、羨道長六㍍六五、その幅八〇㌢内外である。高さは奥で約一㍍六三、天井は玄室四石、羨

道のは二石残存し、その面はほぼ一面で、楣石は見当たらない。床には敷石が施されていたようであり、楣石が玄室、羨道の境の羨道側にあり、その内側から袖石が玄室に向かって傾斜して積み上げられている。

その玄室の長さと幅との比の値は二・一二乃至二・三一である。その幅は図面から見た場合は一㍍六五が妥当のようであり、この数値を一㍍七五の狭まったものと考えると、高麗尺五尺となり、長さ三㍍八七は同じく一一尺とみられる。羨道の幅は八〇㌢㍍でほぼ二尺、その長さは一九尺となる。高麗尺使用とみることが妥当である。

竪穴式の石槨は、その置かれた墳丘の土層からすると、明らかに横穴式石室構築後に造られたものである。横穴式石室を古い墳丘の中につくり込んだものは芝根村第一号古墳（浄土山古墳）（佐波郡玉村町）、同第七号古墳（稲荷山古墳）（同上）、上陽第一五号古墳（山王大塚古墳）（前橋市山王町）滝川村第一号古墳（御伊勢山古墳）（高崎市下滝）などがあり、同じ例に入るもののようにも考えられるが、横穴式石室をおおった封土の層は、竪穴式石槨の下に続いており、層序からしてみても、明らかに横穴式石室の成立後に設置されたものである。このことはこの両形式の併存併用を証明することであり、ある時期には一方に横穴式石室が採用されているのに、他方竪穴式石槨の構築及び使用が続いていたことを示すものである。もっとも、大化改新のころには、素掘りにして、墳丘を造らず、埋葬後は平夷にすることを命ぜられているので、当時このような葬法もあったことが想像され、横穴式石室、竪穴式石槨併用も肯定できよう。

竪穴式石槨は礫を積み上げてつくられてあるので、礫槨とも言えよう。壁石は長さ三〇㌢㍍、幅二〇㌢㍍、厚さ一〇㌢㍍ぐらいの転石を小口積みにし、裏込め石には四〇㌢㍍の大石をも用いている。蓋石は九石で、厚さ一五㌢㍍ぐらいである。その上に五〇㌢㍍ほど土がかぶさって、地表となる。その石槨の長さは一㍍六五、幅は東部が広く四五㌢㍍、西は狭く二五㌢㍍、深さは約四八㌢㍍で、底には小砂利が五㌢㍍の厚さで敷かれ、その下には一面に敷石が置かれていた。人体を基準としたものとしては、適当な内法の寸法である。すなわち「ものさし」の高麗尺の寸法ではない。人体に即して構築され、棺は用いられなかったと推定されるものである。

出土品は、甕に入れて再納入してあった既出土のもののみで、歯、骨、大刀の破片、鉄鏃片、うるし薄片などである。

22　オブ塚西古墳　上毛古墳綜覧調査漏

この古墳は、勝沢町字西久保の畑地から、開田作業中に発見された墳丘をもたない小型の竪穴式石槨である。7のオブ塚古墳から西南七〇㍍ぐらいのところに位置し、勝沢町四四八の横山虎造氏の所有地で、同地の横山佐金次氏が昭和三十四年十一月二十五日畑を水田に替える作業中に発見、同年十二月六日調査されたものである。

第81図　オブ塚西古墳石槨

石槨は自然石を縦にさし込んでおり、長壁に七石、前後の短壁に各一石を用いている。石の間には白色粘土を詰め、その上部にもはりつけていた。その中軸線は北四五度東の方向をとり、上幅九〇㌢㍍、長さ二㍍三〇、深さ五〇㌢㍍ぐらいの掘り方を造り、その中に内法長さ一㍍六五、幅北側で三二㌢㍍、南側で二〇㌢㍍、最大幅四〇㌢㍍ほどの石槨を造り込んでいる。用石には裏込めは用いず、基盤の土層との間に黒色土を詰めていた。床面は攪乱されて、打ち抜かれてあり、明らかではないが、白色粘土の置かれていた面と推定され、壁石の上端から測って二〇㌢㍍下とみられる。

23　朝倉1号古墳　上毛古墳綜覧上川淵第四〇号

この古墳は、朝倉町字旦那坂前一四九二番地にあった円墳である。朝倉団地造成により平夷される由で、昭和三十四年十二月二十一日から二十四日までの四日間、急遽発掘調査されたものである。

墳丘はすでに破壊され大部荒れており、団地造成がすすんで、東西から新道構築がぶつかってきて、東側は一部削りとられていた。石室の部分も深くくぼんでおり、東側の削られた部分には、石室裏込めの礫類が露出していた。石室も破壊されていたのである。

調査の結果は墳丘の現存長径一六㍍五〇、短径一一㍍五〇、高さ約四㍍五〇の円墳であり、浮石質紡錘状角閃石安山岩で積まれた壁をもつ袖無型の横穴式石室を備えていたものである。石室の壁石も大部分除去されて、その根石が点在し、辛うじて石室の平面図形を知ることができた程である。その長さ六㍍三〇、奥幅一㍍七五、入口幅一㍍〇五で、六㍍三〇の間で幅を七〇㌢㍍せばめたものである。三五㌢㍍を一尺とした高麗尺使用の適例と言わぎるを得ない。

第82図　朝倉1号古墳石室発掘調査

壁の用材の浮石質紡錘状角閃石安山岩の削石の下には、河原石が六㌢㍍の厚さに置かれ、その下方は順次褐色土層厚一二㌢㍍、黒色土層厚六㌢㍍、浮石層（火山灰層）厚一六㌢㍍、黒色土層厚七㌢㍍、以下は褐色土層である。また、石室内の扁平な鋪石と考えられるものを除くと、角閃石安山岩の削り屑が七㌢㍍の厚さに積もっており、その下は褐色土でかなりかたい。これらの地層からみれば、黒色土の堆積中に浮石が降下したことが知られ、その浮石は七世紀初頭の榛名山二ツ岳噴出のものであり、壁の根石直下の褐色土は置き土されたものではなかろうか。また、それに混じって、石室内には角閃石安山岩の削り屑があり、壁を積みながら石を削りととのえていったものと考えられる。

24　朝倉Ⅱ号古墳

上毛古墳綜覧
上川淵第三二号

この古墳は、朝倉町一六五四番地にあった径二三㍍（葺石の根石で計測）の円墳である。高さは三㍍で、松、雑木、篠等でおおわれていて、墳丘の北から西にかけては大きく削りとられていたが、南から東にかけては比較的原形がたもたれていた。昭和三十五年三月二十三日から二十九日まで、学術的な発掘調査が実施された。従来この付近に一〇数基の古墳があったが、現在いずれも平夷された。

調査時の墳丘は二段築造であり、下段上面は幅一㍍で墳丘裾部をめぐっていた。葺石の下部がよく残っていたので、これによって構築当初の墳丘の直径が知り得られ、円墳であることも知り得られた。同時に周濠も調査でき得たのである。この墳丘傾斜面の葺石の面には石田川式土器の破片が散乱しており、墳頂の周縁にその土器が配列されていたものであることが推定された。墳丘の基盤からは浅間山噴出の浮石の層が検出され、その層上に積土して墳丘がつくり上げられたものであり、この古墳の年代を定める上の一基準とすることができたのである。この浮石（軽石）層は後閑天神山古墳の墳丘下に直接に存在し

第84図　朝倉Ⅱ号古墳粘土槨

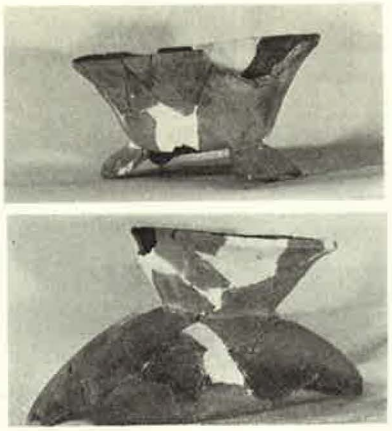
第83図　朝倉Ⅱ号古墳

ていたのと同じであり、石田川式土器とともに後章で一括して説明する。

ただし、墳丘と周濠との関係は、積土の下端が周濠の上縁になっていたのではなく、約三五㌢の差があり、浮石層と黒色土層が墳丘傾斜面のままに削りとられ、その下層のローム層の面が幅一㍍の下段葺石上面となっているのである。下段の葺石はその上面の端からさらにローム層を掘り込んで、その傾斜面に葺石を置いているのであって、その高さは約三五㌢、根石はローム層を削った平らな面の端に置かれており、すなわちこの面が周濠の底部となっており、周濠の幅は約七㍍である。したがって下段葺石と見られるのは周濠の汀部にあたり、周濠の上縁に幅一㍍の下段上部が墳丘をめぐっていることになる。

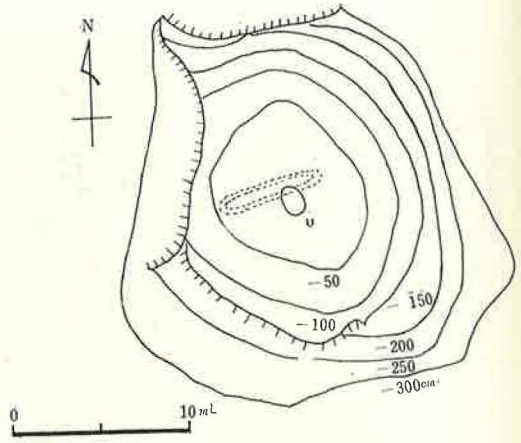
第85図　朝倉Ⅱ号古墳葺石

これらの墳丘及び周濠は千数百年の間に自然に堆積する土砂によって埋められたもので、まず周濠はローム層の上に黒色土や褐色土の混合やそれにロームがまじっていて、その黒色土は墳丘下のものとは違った砂質で、下部は薄くはがれる傾向があり、土器の破片が出土している。これらは水中に周囲の表土等が沈澱したものとみられる。その上は黒褐色土で、周濠ではその上縁の高さにまで埋めていて、墳丘では周濠から続いて中腹までは上がるようにおおっている。幅一㍍にめぐる段の面もまだ注意できるように積もっているが、下部程厚くなっている。この中からは崩れた葺石がまざっている。この黒褐色土も周囲の表土が風に吹き寄せられたものとみられる。その上が褐色土で、これは現在の表土であり、周濠も墳丘も全面的におおわれていて、墳丘を除く部分は畑として耕作されている。褐色土層の厚さは、墳丘の頂上面では二〇㌢ぐらいであるが、少し下がると三五㌢となり、周濠部になると五〇ないし六〇㌢である。この土の層は周濠部が黒褐色土で全部埋まった後に積もったもので、この古墳のある地帯は褐色土が五〇㌢以上埋積しているのである。大体、本県の平坦地は古墳築造のころから五〇㌢以上に自然堆積があったとみられる。その原因は季節風により山や河原から吹き送られる土砂と火山噴出物などの堆積によるものであろう。



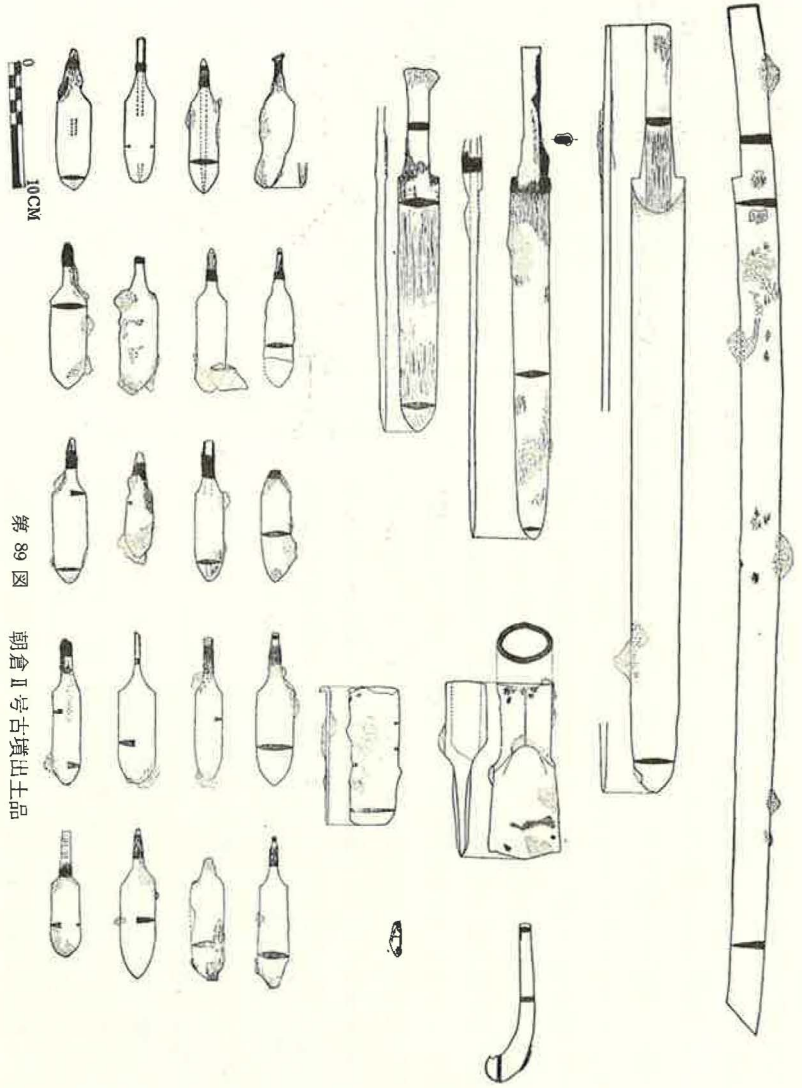
第86図　朝倉Ⅱ号古墳墳頂面配列の石田川式土器

墳丘内の埋葬部は粘土槨であった。墳丘頂上の中央にあって、その中心は墳丘の中心と一致する。粘土で造られた全長五㍍七三、最大幅九二㌢の長楕円形の中に、内法の長さ四㍍八八、幅五三㌢、現在の深さ二〇㌢の溝状のものがあり、これがいわゆる粘土槨である。その主軸は北七一度東にされている。この構築については、墳丘の積土上面から深さ約二五㌢、幅約五五㌢、半円筒状に凹部を作り、その底に長さ五㍍三〇、幅約三〇㌢、厚さ三ないし一〇㌢の砂利を敷き、北半分が特に厚い。この上に黒色粘土を置いて、舟形につくった。ここへ屍体を安置し、副葬品を配置し、これらを灰色粘土でおおったものである。ただし死屍はすでに滅失していたが、北半分の砂利の特に厚い部分には、副葬品がほとんど認められなかったので、この部分に死屍を横たえたものと考えられる。

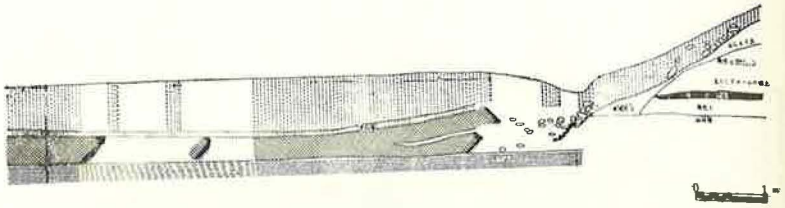


第87図　朝倉Ⅱ号古墳実測図
（数字は上部より計測・単位センチ）

副葬品は鉄刀一振、鉄剣二振、鉄鏃二〇本、鉄鎌、鉄斧各一個、不明鉄器二個であり、槨外副葬品は鉄剣一振である。この



第89図　朝倉Ⅱ号古墳出土品

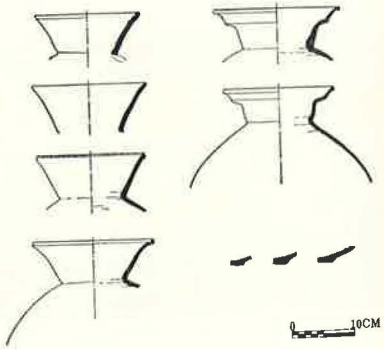


第88図　朝倉Ⅱ号古墳第五トレンチピット実測図

うち鉄鏃はいずれも銅鏃に似た形で、有茎柳葉式であり、関のところでくびれていて、蓖（へら）がきのないのが特徴である。茎にはくつ巻のよく残っているものがある。矢柄の残存状態はそれぞれ違うが、その作りは茎の上に篠竹の如きものがあり、その上を木皮状のものでおおい。さらに木皮でくつ巻している。鉄刀は内反りの大刀で、全長八一ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙ三、茎長一三ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙ三、身長六八ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙ、身の幅三ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙ、同厚さ六ﾐﾘﾒｰﾄﾙである。切刃づくりで、鋒は刃に対し四五度となっている。鉄剣は全長四八ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙ五と三八ﾍﾟﾝﾁﾒｰﾄﾙとの二振

第51表　朝倉Ⅱ号古墳出土石田川式系土器の寸法

分部	土器	単口縁				複口縁	
		①	②	③	④	㋑	㋺
口縁部	外径	一六・四cm	一八・〇cm	一七・二cm	一九・二cm	二〇・〇cm	一七・〇cm
	高さ	六・〇	七・五	六・八	七・〇	六・三	五・三
	肉厚	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五	〇・四	
頸部	外径	九・一	一〇・〇	一〇・四	一〇・〇	一一・〇	
	内径	七・八	六・八	八・七	八・六	九・一	
口縁部外反		三五度	三〇度	二八度	二三度		
塗彩（赤）		内面		外側一部	外側		



第90図　朝倉Ⅱ号古墳出土の土師器

である。鉄鏃は長さ一一センチ、幅四センチで、厚さ二ミリメートルで、尖端に丸味があり、柄をつける方は曲っている。鉄斧は長さ一三センチ九、巾（袋）は五センチであり、巾の内側の長径三センチ六、短径二センチ四、刃先幅五センチ七である。

墳丘葺石面出土の土師器の壺型土器は石田川式系のものであり、第五一表のとおり単口縁と複口縁との二種類である。

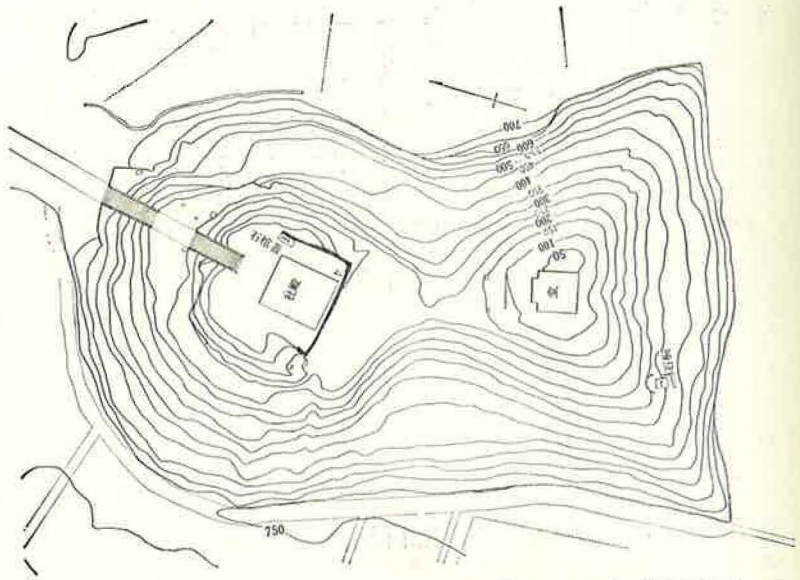
第91図　今井神社古墳（西南から望む）

25　今井神社古墳　上毛古墳綜覧　荒砥第三〇一号

この古墳は、今井町字白山東乙八一八番地にある。荒砥川が利根川の旧流路に合流し

第92図　今井神社古墳（東南から望む）

第93図　今井神社古墳後円部出土石棺の蓋



第94図　今井神社古墳実測図（数字は上部より計測・単位センチ）

たと思われるところに近い左岸の低地にあって、同じ古墳群の他の古墳は東方の低台地上に分布している。現在後円部上には今井神社の社殿があり、前方部上にも境内社がある。昭和三十六年十月三日から九日までの一週間、墳丘の実測調査が実施された。

墳丘は前方後円型であり、周濠をめぐらしていた跡がある。後円部頂の社殿の傍には石棺の蓋が残存しており、石棺をもった竪穴式古墳である。墳丘のみの実測値は全長七一㍍、前方部前幅五〇㍍、後円部径四四㍍で、前方部前幅が後円部径よりも大で、前方左右に張り出した形である。この形は簗瀬二子塚（安中市簗瀬）、後二子（市西大室町）両古墳と同じ傾向のものである。この実測値を全長対前方部幅及び後円部径の比の値によって、他のものと比較してみると第五二表のようになる。

この表において、a、bの差は前方部幅と後円部径との大小の比較であり、a、bの和はこの両者の和と全長との大小の比較である。すなわちa・bの差のうち±符号は後円部径が前方部幅より大であり、0は両者が相等しく、−符号は前方部幅が後円部径より大で、左右に張

り出していることを示し、a・bの和においては、一〇〇が全長と前方部幅・後円部径の和と相等しいものであって、一〇〇未満は全長が両者の和より大で、細長い形を表わし、一〇〇を越えたものは両者の和が全長より大であることを意味している。

これらによって、前方後円（後方）墳の形の傾向を知ることができる。表のうち、大鶴巻（高崎市倉賀野町）、白石稲荷山（藤岡市白石）、八幡山（本市朝倉町）の各古墳及び今井神社、築瀬二子塚（安中市築瀬）、後二子（本市西大室町）の各古墳はそれぞれの組みで、同一傾向のものとみられる。これらを基準とする時に、それらの前後において多少の変化を知ることができる。a・bの差は同一でも、その和において大差があり、これを①後円部径が大で、次第に前方部幅と等しくなり、やがて逆に前方部幅が大となるが、後円部径の大のものは大体竪穴式古墳であり、横穴式古墳では多く山寄せのもので、その古い型である。②a・bの和が一〇〇未満及び一〇

第五二表　古墳実測値比較表

古墳名	墳丘全長 A m	前方部幅 B m	後円部径 C m	B/A %	C/A %	a・bの差	同和
天神二子	四五	二〇	三〇	四四	六七	一	一一
浅間山	一一四	五四	七七	四四	六二	一	一〇五
大鶴巻	一二三	五三	七一	四三	五八	一	一〇一
白石稲荷山	九三	四一	五三	四四	五七	一	一〇一
八幡山	一三〇	五九	七二（後方部巾）	四五	五六	一	一〇一
朝子塚	一二〇	四八	六〇	四〇	五〇	一	九〇
宝泉茶臼山	一六八	八〇	九二	四八	五五	一	一〇三
鶴山	一〇四	五二	五六	五〇	五四	一	一〇四
八幡塚	六六	三六	三九	五五	五九	一	一〇四
平塚	九八	五六	五六	五七	五七	〇	一一四
太田天神山	二一〇	一二六	一二六	六〇	六〇	〇	一二〇
御富士山	一二五	八〇	八〇	六四	六四	〇	一二八
今井神社	七一	五〇	四四	七一	六二	九	一三三

横穴式↔竪穴式

鏡手塚	二八	一三	一七・五	四六	六三	一七	一〇九
前二子	九二	六二	七二	六七	七七	一〇	一四四
前橋二子山	一〇四	七六	七二	七三	六九＋	四	一四二
築瀬二子塚	七八	五八	五一	七四	六五＋	九	一三九
後二子	七六	五五	四八	七二	六三＋	九	一三五
中二子	七一・六	五一・六	四三・九	七二	六一＋	一一	一三三

○を越えてもそれに近いものは細長く感じるもので、それが竪穴式古墳に見えているということから、おおよそその推定が立てられる。ところが、それらのうち、今井神社古墳は横穴式古墳の形であって、石棺をもった竪穴式古墳であり、前二子古墳は竪穴式古墳に似た形であって、横穴式古墳である。つまり、前者は内部は旧習に従い、墳丘は新しい形で造られており、後者は旧習で墳丘を造り、内部は新形式によっている。形の新旧過渡的な好例とみられよう。

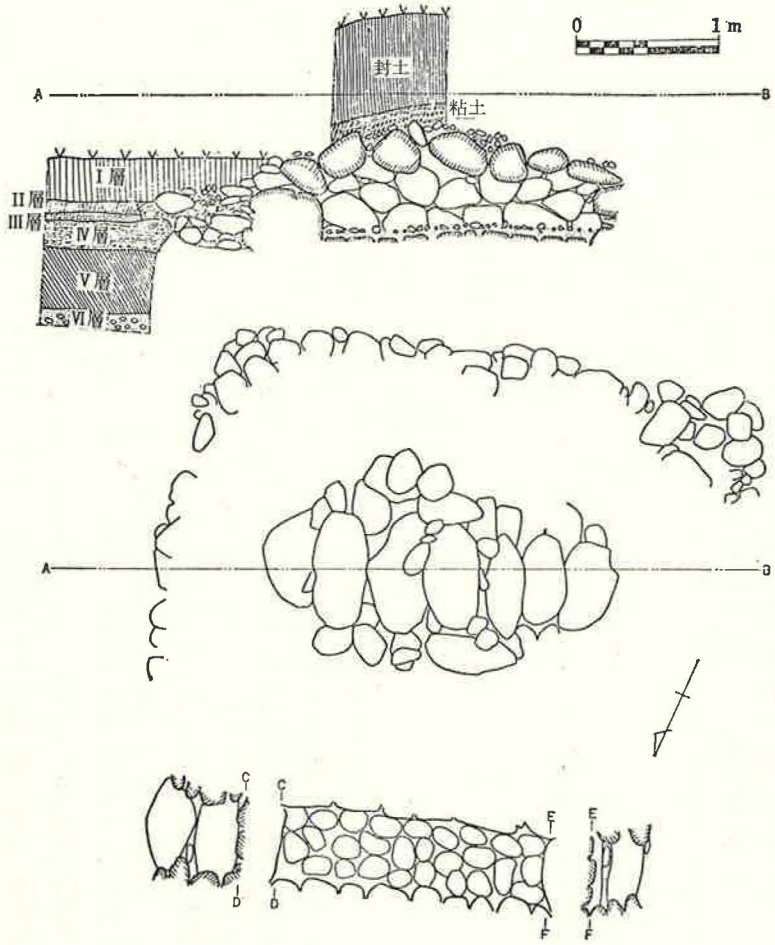
なお、これらの形の比較に、さらに使用尺度を推定し、両者を区別する時には、竪穴式古墳は多く晋尺（しんじゃく）を用い、横穴式古墳は、高麗尺（こまじゃく）を使用している。これらはいずれもそれらの尺度による「尋」の単位を用いているのであり、晋尺は八尺（晋尺一尺二四㌢）高麗尺は五尺（高麗尺一尺三五㌢）である。これにより新旧の区別をかなり明確にすることができる。そのほか竪穴式古墳では、内部の構造、出土品等により、横穴式古墳では、内部の構造すなわち石室の部分的差異、石室の型、石材の扱い方（積み方及び加工法）、出土品等により、それぞれ新旧発展の区別をすることができるのである。

これらの諸点から見る時には、今井神社古墳は六世紀中ごろのものと見られよう。

26　朝倉Ⅲ号古墳　上毛古墳綜覧記載漏

この古墳は、前橋市朝倉町一三九九番地にあった竪穴式古墳であるが、昭和三十八年十二月の発掘調査以前に、すでに墳丘は破壊され、石槨直上に当たる部分即ち高さ一㍍、東西一㍍、南北六五㌢が残存していたにすぎず、昭和十年の調査には入れられず、したがって、上毛古墳綜覧には記載漏れであった。

この石槨周囲の地層は、表土は褐色土で三二乃至四〇㌢の厚さであり、次は浮石混入の黄褐色土で厚さ七ないし一〇㌢その下は厚さ二一乃至二四㌢の浮石混入の黒色土、以下は茶褐色土である。この黒色土層に掘り込んで、根石を据え、一辺四㍍の隅丸方形の平面をもった石組みの墳丘裾部が存在していた。石槨の底部の敷き石はこの黒色土層の上に約二㌢の厚さに



第95図　朝倉Ⅲ号古墳墳丘の断面平面実測図

褐色土が敷かれ、その上にならべられていた。石槨の長さ一八五㌢、最大幅五一㌢、最小幅四七㌢、深さ四二ないし五二㌢の竪穴式箱式棺状のものである。用石は転石（河原石）であるが、壁やしき石には浮石質紡錘状角閃石安山岩が使用されており、壁石は横積みである。敷き石の上には薄く砂が敷かれ、その上には二、三㌢大の小礫、さらに四、五㌢大の礫が重ねられていた。石槨内の敷き石と外周の石組みのレベルとは同じである。この石槨は蓋石の上を砂土と小礫でおおい、その上に約一五㌢の厚さに粘土をかぶせ、土をおおっている。石槨内の敷き石や敷き石上の小礫など九石が朱で染められており特に頭骨の下にはそれが顕著であった。

石槨内出土遺物は人骨のみである。その人骨は頭骨、大腿骨、上肢骨とであり、頭骨の下からは歯が出土している。石槨外からは土師器の坩（小型丸底土器）一個が石槨南方の黄褐色土層（第二層）に肩から上の部分を出し、黒色土層（第三層）に下部を埋められてあった。なお、石田川式土器（土師器）の破片が数片と土師器破片が出土している。

石槨に朱が認められていることと、用石に浮石質紡錘状角閃石安山岩があてられていることとは、大きな特色であった。

27　弥勒山古墳　上毛古墳綜覧　元総社第一号

この古墳は、元総社町字弥勒九四二番地にあった大型な円墳である。元総社地区唯一の古墳であり、上毛古墳綜覧ではこの元総社第一号古墳のみが記載されている。その記載によれば、当時は桑園であったが、地目は雑種地であり、高さ八尺、径六六尺の円墳で、大正十三年（一九二四）に発掘され、金環大一（ただし割れ二つになれるもの）、同中二、同小二、刀一（ただし腐蝕せるもの）の出土を伝えている。

この古墳が、昭和三十九年に土地改良工事のため石室の石があらわれるにいたって、俄かに発掘調査をすることになり、同年六月十九日（金）から二十二日（月）の四日間に実施された。しかし、その時は墳丘はほとんど削りとられ、南北のトレン

チにあらわれた黒色土の上面によって、封土の終わりを推定せざるを得なかった。全長約二六㍍で、残存は僅か一㍍五〇にすぎない。石室はすでに早く破壊されていたものであり、その壁石は、根石が右で七石、奥で四石、左で二石残っていただけである。壁石の周囲には裏込めがあり、その外側には石組みが施されていた。玄室の幅は一㍍九〇、長さは不明である。石材は浮石質紡錘状角閃石安山岩の削石で、壁の根石は壁面を削らず自然面のままであり、上下を削って壁面に出る部分は上面の端を削り残している。

なお、この古墳の基盤の地層は、沼地が自然堆積土によって埋まったような極めて不安定な様相を示していた。

28　植野薬師塚古墳

上毛古墳綜覧
総社第一五号

この古墳は、総社町植野字西新井一、二四八番地にあった円墳である。昭和四十年十二月十四、十五の両日、団地造成のために破壊、平夷されようとしたのを知って、急遽調査が実施された。もと、この古墳からは直刀、鏃などが出土したと伝えられている。上毛古墳綜覧には地目、現状とも墓地となっており、調査時には墳頂に青面金剛の石像が立っていた。「延享二年乙丑十二月吉日」の銘があるので、西暦一七四五年にあたる。また、上毛古墳綜覧には「石槨有」となっているので、開口していたことになる。

墳丘は東半分と南の一部がすでにブルドーザーで削りとられていた。残存部分は南北で一七㍍、東西で一〇㍍であり、その東側の断面に横穴式石室の崩壊したものが表われていた。しかし、調査の結果は浮石質紡錘状角閃石安山岩使用の石室であったことが明らかになっただけである。

29　八幡山古墳

上毛古墳綜覧
上川淵第六七号

この古墳は、朝倉町字若宮一三四四、一三四六及び一三四九の各番地にわたっている前方後方墳である。朝倉町には、この古墳の付近のみで六六基の大小の古墳が存在していたのであるが、朝倉団地の造成のため、この古墳一基を除く全部が壊滅した。すなわち、この古墳は朝倉古墳群中残存の唯一基となったのであり、貴重な存在となったのである。もっとも、前方後方墳という墳丘の形は全国的にも数少ないものであるが、この古墳はその大きさにおいては全国一と認められているものであり、すでに昭和二十四年には国の指定史跡となっており、昭和四十二年の周濠調査の結果、その部分も指定範囲に加えられた。現状は松林となっている。

その墳丘は後方部は截頭方錐形で、その方形平面の各対角線がほぼ東西、南北の方向にあたり、前方部は台形平面の短辺を後方部に接して、東南方に向かっており、前辺に近い方を高めにした台状につくられている。その中軸長一三〇㍍、後方部幅七二㍍、前方部幅五九㍍、後方部高一二㍍、前方部高八㍍である。

後方部頂上面には濫掘の跡があり、約一㍍五〇の下方に、長さ数㍍ほどの玉石敷きの部分があり、また、一部分に粘土の詰めてある個所も認められた。出土品もあったとのみ伝えているが、いずれもはっきりしない。未調査のままである。

周濠発掘調査の結果は、墳丘裾部で、葺石が三八度の角度で、現地表から下方に続いており、河原石で精巧に葺かれて、八〇㌢の深さのところにその根石が置かれている。根石は比較的硬質な黄色砂層にしっかりと据えられていて、この黄色砂層がこの墳丘の基盤とみられ、それより五〇㌢下方に周濠の底部が見出されている。したがって、周濠は深さ五〇㌢、幅は墳丘北方で約二六㍍七〇であり、同西方では三五㍍と推定され、ほぼ葺石の根石から三〇㍍前後であり、その全体の平面的規

第96図　八幡山古墳

模は墳丘を中心として、東西約一二五㍍、南北約一八〇㍍の方形と推定される。

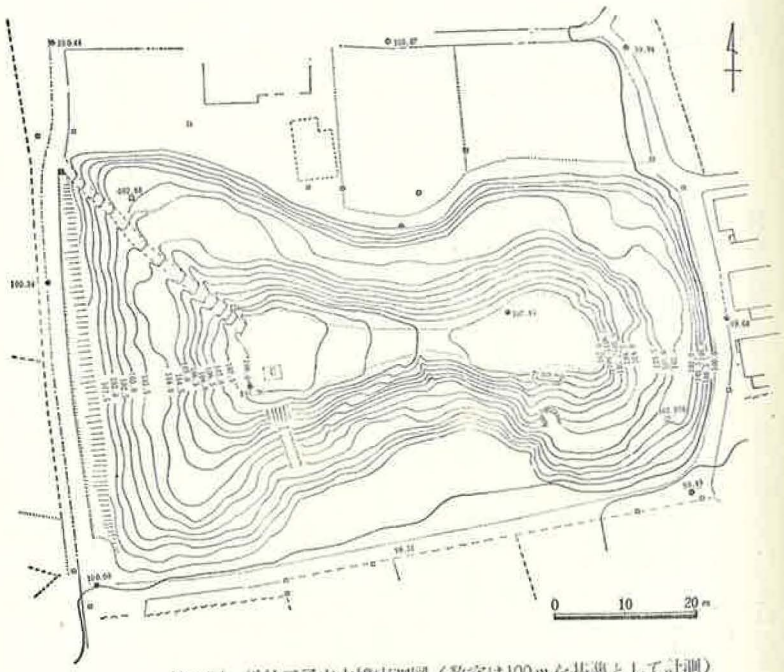
30　総社二子山古墳　上毛古墳綜覧　総社第一一号

この古墳は、総社町植野字二子山三六八番地にある。前方後円墳の大型のもので、横穴式石室を前方部、後円部各別に有している特殊な型である。すでに慶長、寛永の間に発掘されたとも伝えられているが、文政二年（一八一九）十一月には前方部の石室が発掘された。もともとこの古墳の地は植野の元景寺檀家の墓地と元景寺所有の畑地とであった。その十一月四日に墓穴掘り最中に発見されたとのことである。この発掘の処置には元景寺の住職が立会っており、その差出書に詳細記されているので（総社町誌）、それ以外の出土品の類は文政二年以前の発掘のものと考えられる。これは後円部石室に関係あるものであろう。

この古墳は付近の愛宕山、宝塔山、蛇穴山の諸古墳とともに、早くから注目されていたものであり、文化七年（一八一〇）には渋川の学者吉田芝渓によって、その著『上毛上野古墓記』の中で、愛宕山古墳を豊城入彦命、宝塔山古墳を彦狭島王、蛇穴山古墳を御諸別命の御墓にあてており、総社二子山古墳は豊域入彦命埋葬の副葬品を納めたものとしてい

第97図　八幡山古墳実測図（数字は海抜）

第98図　総社二子山古墳



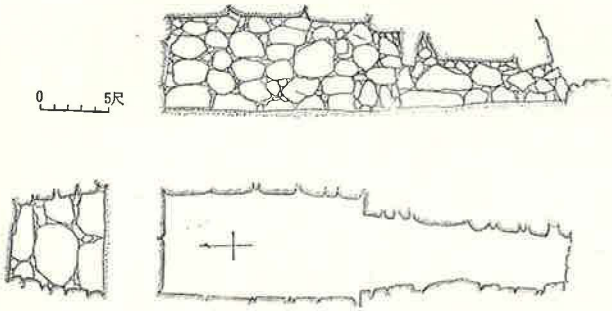
第99図　総社二子山古墳実測図（数字は100ｍを基準として計測）

る。このような伝承がすでにそのころ起こっていたものであろう。それにはこれらの古墳がそれ以前に開口していたこと、二子山後円部からは豊城入彦命に相応する副葬品の出土があったこと、愛宕山古墳の石室は二子山後円部石室よりも優秀と見られたことなどに起因しているものと考えられる。

山崎衡著『三王墳墓略記』は明治年間になってからの記述であり、しかも、その記事は文政二年発掘時の資料により、それ以前のものには触れていないようであるが、副葬品については元景寺住職の差出書（前橋市立図書館蔵）の内容とかなりの差がある。明治三十一年（一八九八）の八木奘三郎述『日本古剣考』（東京人類学雑誌第百五十二号）に記載の豊城入彦命御太刀と記入した太刀の図面及びその解説によれば、旧前橋藩よりの書上げ図を明治四年（一八七一）に写したものの由で、この太刀とともに発見された出土品が添え書きしてあり、その品名も『三王墳墓略記』とは異なっている。

これらの出土品は明治六年（一八七三）に博物館（明治五年に聖堂を博物館とした）に出品せられ、同四十二年（一九〇九）に帝室博物館に寄贈されたことになっている。昭和四年（一九二九）に群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告第一輯の編修にあたっての調査

第100図　総社二子山古墳墳丘実測図

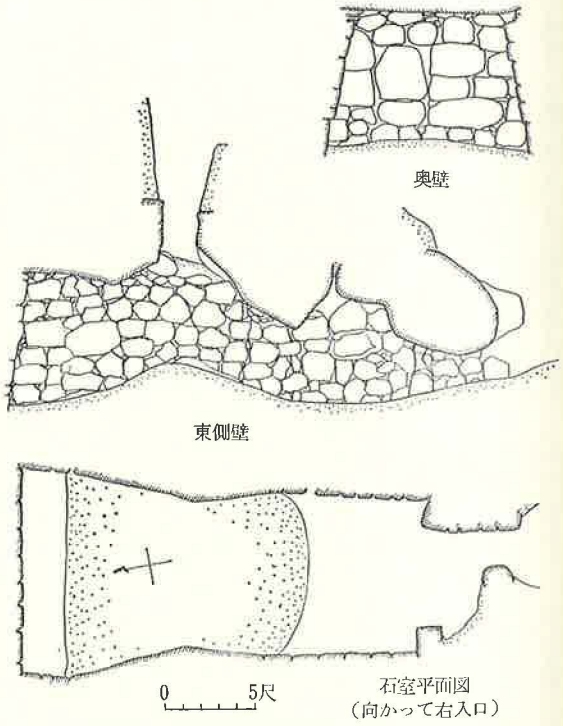


第101図　総社二子山古墳前方部石室実測図

によれば、目録にある後記のものが現存している由である。この現存の品を基準にして、前記の書に記すところと比較すると第五三表のようである。

いわゆる豊城入彦命の御太刀については『三王墳墓略記』と『日本古剣考』との記事に第五四表のように差がある。まず、剣身長であるが両者の記述が一寸八分も違っている。鍔及び切羽の厚さを入れても一寸以上の差になる。「鞘は朽ちて存せず、ただし金銀環各一を存す」とあるのは責金具のようであるが、金環、銀環各一とあるのは、同じ剣に用いられたとすると不審である。この環二については帝室博物館目録にあっては銅環二とあり、この銅環の記載は他にない。また、『三王墳墓略記』には銀柄とあるが、『日本古剣考』では鍍金製と記されてある。また、『三王墳墓略記』には「鞘環装飾金銀を鍍鍍す」とあって、前掲「金銀環各一を存す」という記事とは矛盾するようにもみえる。かつ『日本古剣考』に「六鈴　壱個」とあるが『三王墳墓記』には落ちている。

要するに『日本古剣考』に記載の剣は「六鈴壱個、忌瓶四個、内花生壱個、外に太刀折と覚しきもの数拾片」とともに出土したものとして、一括されて書上げられたものと考えられる。その「花生壱個」とあるものは帝室博物館目録に「脚付長頸坩



第102図　総社二子山古墳後円部石室実測図

第五三表　総社二子山古墳出土品

帝室博物館目録	元景寺差出書	三王墳墓略記	御太刀図付記
六鈴釧　一	金環　一	六鈴　一	
銅環　二	銀環　一		
勾玉　四	勾玉　四		
鉄鏃　二	鉄鏃　一		
石鏃　一	石鏃　一		
脚付長頸坩　寛政中発掘	斎瓮　九	忌瓶四内花生壱個	
	瀬戸品々		
太刀　一	銀柄太刀一	御太刀一渡金製	
小太刀　一	剱片　一九		
金銀鉄金物			

寛政中発掘」とあるのに相応し、文政二年以前の出土のものであろう。

このように総社二子山古墳は江戸時代から注目されており、調査がくり返されていた。墳丘の詳細な実測は日本古文化研究所の事業として、田沢金吾、後藤守一両氏によって実施され、かつ出土品の調査も行なわれて、前記報告書が昭和十二年に刊行された。しかし、まだ、石室の調査は埋没したままの図面であったが、これを昭和四十二年三月に国指定史跡の保存工事に付帯して、前方部の石室のみについて埋没の土砂を払って実測調査が行なわれた。

墳丘は前方後円墳であり、前方部はほぼ西についており、墳丘主軸は正しくは西よりも二二度北へ振っている。前方部の石室の主軸は南より二五度西にふれ、墳丘主軸との角度八七度であり、後円部の石室は南から西へ三二度振れて、墳丘主軸との

第五四表　総社二子山古墳出土の太刀比較表

三王墳墓略記	日本古剱考（豊城入彦命御太刀の図）
銀柄銀条蛭巻金銀装頭槌	鍍金製
鞘環装飾金銀鍍鍍	
剱身長三・六尺	鍔下　三・四二尺
剱幅際鎬〇・一八・	幅鍔際　〇・一九
柄長　〇・九三	柄長　〇・九〇
存在せず	太刀厚知ること能わず
金銀環各一存す	
	鐔厚　〇・〇五五
	切羽厚〇・〇一五
	総長　四・三九
	剱頭長〇・四二
	〃横幅〇・三五

開き八〇度である。ともに墳丘に対して九〇度に近い。墳丘の主軸線の方向が西のものが一般的でかつ多く、これを安定した形と見れば、西向から他の方向に著しくはずれるものは不安定なものとして考えられよう。また墳丘主軸線と石室主軸線との開きが九〇度に近いものが多いのでこれを基準とした場合には、九〇度より著しく大であるものは不安定なものとして見られる。この組み合わせは、不安定が重なったものは古い型として見ることができる。

墳丘の規模は自然堆積土をかぶったままで、全長九八㍍、前方部幅六三㍍、後円部径四九㍍である。基壇をもった二段築造とみられるが、墳丘の南側は墓地に使用されていたので、削りとられた痕跡があり、前掲の規模の数値も発掘による調査、実測を経なければ、正確なものは得られない。葺石が斜面には見られるので、その根石の残存が考えられ、それによって測り出されることが必要である。

石室については前方部、後円部に各一ずつあることは前述のとおりであり、他の古墳においてこのような例はまだ調査されていない。埼玉県行田市付近に真観寺古墳、富士山古墳というのがあって、ともに二個の石室をもっている。真観寺古墳は前方後円墳で、その後円部に一は複室の横穴式石室が後円部後方に開口し、他は前者の上方に北向に単室の横穴式石室が開口している。富士山古墳は封土が取り去られて、墳形は不明であるが、前後に石室が二個、一㍍ぐらいの距離を置いて相接している。しかし、この二古墳はその様相が総社二子山古墳とは異なっている。

総社二子山の後円部石室は両袖型で、壁は左右、奥ともに浮石質紡錘状角閃石安山岩の削石で互目、通目積みになっており、天井には巨大な山石を用いている。すでに東西両壁の一部が崩壊し天井石も落ちかかっており、羨道の前方入口部は取り去られている。その寸法はようやく全長現存八㍍五九、玄室長六㍍八八、玄室幅奥で三㍍四〇と測り得る。用石は一面削り、五面削りの二様が用いられ、面の最大のもの幅八二㌢㍍、高九四㌢㍍で、奥壁のうちに使用され、最小は幅一〇㌢㍍、厚さ二〇㌢㍍、多くは幅四五㌢㍍、厚二六㌢㍍である。

玄室の寸法は、長さは幅のほぼ二倍である。長さと幅との寸法から共通の長さの単位を求めてみると高麗尺の三五㌢㍍が妥

当である。すなわち使用尺度を高麗尺とみる時には、長さはその二〇尺、幅は一〇尺となる。用石の大きさについては、この種の石材を使用する古墳中でも最大である。石は利根川の下流にいたるほど次第に小さくなる。この石材使用古墳は利根川旧流路の両岸一粁以内に帯状に分布しているのであって、その浮石質であることから、利根川岸に漂着したものを利用したと考えられる。しかもそれらの、この石材利用の石室の玄室の長さと幅との比は、ほとんどその値2以下であり、その値2のものがそれらのうち最も古い型と考えられる。

前方部石室も両袖型であり、壁は自然石（山石）の乱石積みとなっている。この石室は完存しているのであり、昭和四十二年に羨道前方入口部の土をはらって実測された。全長八㍍七〇、玄室長四㍍二〇、同幅二㍍一〇、高さ奥で二㍍一〇、羨道長四㍍四八、同幅入口で一㍍〇八、奥で一㍍六五である。この数値からみれば、玄室長は同幅の二倍であり、これも高麗尺を使用して築造されたものらしく、石室は高麗尺で、全長二五尺、玄室長一二尺、同幅六尺、羨道長一三尺、同幅入口で三尺、奥で四尺とみることができる。

右の両石室はともにその玄室の長さと幅との比が2であるので、横穴式両袖型石室としては古い型である。しかしその石室に使用された石材は、両者の間において全く異なっているのであって、前方部のは安山岩の加工されない大石を用い、後円部のは特殊な石である浮石質紡錘状の角閃石安山岩を加工して使っている。この後者の石材は榛名山の二ツ岳の爆裂により噴き上げられてできた石であり、その爆裂は七世紀の始めごろと推定されている。もしこの石材が存在していて、すでにその石を石室構築に使用する習慣があったならば、前方部石室構築に際しても、どこかにこの石を使用したであろう。総社二子山古墳の東南に近い愛宕山古墳の石室は、巨石使用の巨室であるが、その巨石の間に右の石材を詰め合わせて、積み上げてある。石材の使用からすれば、二子山前方部石室、愛宕山石室、二子山後円部石室となって、利根川旧流路沿岸にはほとんどこの石材使用の石室が連なっており、新しい型にまで続いている。つまり、二子山前方部石室構築のころはまだこの石材が存在していなかったのではなかろうか。

以上によっても考えられるように、総社二子山古墳の前方部石室の構築は、六世紀終わりごろとみられ、後円部石室は七世紀であり、両石室は同時につくられたものではない。墳丘と石室との関係から、この古墳の構築について考えてみると、解決されない点がいくつか出てくる。横穴式石室の古い型と考えられている安中市簗瀬二子塚、及び堀之下町の正円寺古墳の石室は、前者は基壇があるが、その上面からはるかに下位の地表面に石室壁の根石が置かれ、付け基壇になっているのであって、下谷A号古墳（佐波郡東村）、二ツ山古墳（新田郡新田町）もこの傾向で造られている。正円寺古墳にも基壇はあるが、基壇面は地表から約一㍍積土してあるのみで、石室根石は地表に置かれたようである。高塚古墳（北群馬郡榛東村）は付け基壇であるが、石室は当時地表を六〇㌢㍍も掘り下げて石室床面をとっている。石室が古い型と見られるものは、おおむね地表直接の設置である。

ところが上毛古墳綜覧芝根村第一号及び第七号古墳（佐波郡玉村町）、山王大塚古墳（前橋市山王町）等は、基壇が著しく高く、その基壇面と同高に床面を置いて横穴式石室が設置されていて、調査の結果はいずれも竪穴式古墳の古い墳丘を利用して、それを切り開いて横穴式石室を造り込んだものである。総社二子山古墳も両石室とも墳丘の二分の一の高さに位置していて、その位置は墳丘に対して極めて高い。総社の愛宕山古墳も地表から積み上げられたものと推定されるが、たとえ、円墳と前方後円墳との差はあっても、愛宕山古墳は大円墳で、巨石使用の巨室であるので、この古墳に対して、二子山の前後の両石室が高い基壇をわざわざ置いて造られたということに疑問が出てくる。二子山古墳も古い墳丘を利用して、さらに墳形を整えたものではなかろうか。あるいは前方部石室のみが古い墳丘を利用し、後円部石室はそれにならって造られ、その上で前方後円墳に造りあげられたものではなかろうか。この推定については、墳丘を発掘調査する必要がある。その上でなければ決定することは困難である。

総社二子山古墳は従来、豊城入彦命の御墓に擬せられていた。そして昭和十一年四月に行なわれた東国御経営奉讃大祭の古墳祭も、伝承に依ってこの墳前で執行されたのである。しかし、この伝承も文化七年にはまだ起こっておらなかったらしく、吉田芝渓は愛宕山古墳を豊城入彦命の墓とし、二子山古墳はその副葬品を埋納したものとしている。文政二年になって前方部

石室が発掘されて、急にこの二子山古墳が豊城入彦命の墓と考えられるようになった。前方部石室から剣が出て、その剣によって決定的なものとなったと山崎衡以降の記事には取扱われているが、すでに吉田芝渓は豊城入彦命の副葬品を納めたところとしているのであるから、後円部石室からも相当な貴重品が出土していたものと推定される。すなわち、剣、六鈴、斎瓶（いわゆる花生）であり、その剣が問題になっていたのではあるまいか。文政年中に総社町植野の某が上京して、神祇伯に神号を請い、剣大明神を授けられたのは（三王墳墓略記）、この剣であって、前方部石室出土のものではあるまい。その際、富小路貞直から「豊城入彦命」と揮毫して貰ってきたが、前方部墳丘上の石碑がそれである。

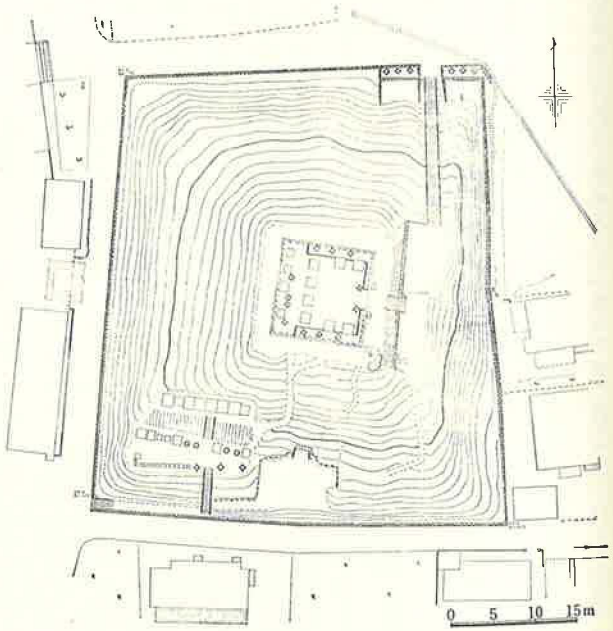
しかしこの古墳は豊城入彦命の墓ではないと思われる。すなわち石室自体は六世紀終わりないし七世紀始めのつくりであり豊城入彦命についての『日本書紀』の記載は崇神天皇四十八年で西暦紀元前五〇年にあたるので、六五〇年乃至七〇〇年の差があるからである。しかし、いずれにしても豪族の墳墓であることには誤りない。

31　宝塔山古墳　上毛古墳綜覧　総社第九号

この古墳は、総社町総社字町屋敷南一、六〇六番地にある。截頭角錐形で、ピラミッドの頭を水平に切りとった形に似ているが、この型を方墳と称している。角錐形とは言え、墳丘の裾部はぐるりと高さ約二尺の垂直の石垣になっている。周濠の跡が石垣の根からやや離れて認められるので、構築時には裾をさらに外方まで引いていたものであろうが、墳頂面を旧総社城主秋元家の墓地とする際に、周濠も埋められ、墳裾も削りとられたものではあるまいか。古墳の西北に接して、秋元家建立の光厳寺が存在し、この古墳及び東方の蛇穴山古墳等は光厳寺域内であり、子院の敷地等にもなっていた。

この古墳もすでに早く開口され、石棺内その他の埋葬関係品は不明になっている。江戸時代の寛政年間に記された山吹日記（奈佐勝皐著）にも見えており、大正九年には地元の福島武雄氏によって石室が実測され、その実測図が存在している（総社町誌）。昭和

第103図　宝塔山古墳（西南面）



第104図　宝塔山古墳現形図

に入っても墳丘の実測が行なわれ、次に昭和三十年一月五日から七日までの三日間、内部構造の実測が行なわれた。

しかし、いずれも羨道入口部が埋没のままであったので、完全な実測図は得られなかったが、昭和四十三年になってようやく、羨道入口部の発掘調査が実施された。その結果は玄門が崩れて埋没しており、その下から前庭の設備も発見された。見事な冠材が発見されたので、昭和四十四年度事業として復原された。

この古墳のように、方墳で横穴式古墳というのは本県では極めて稀な形である。その基部の一辺の長さ五五㍍、各辺で多少の差がある。高さ一〇㍍で、墳上に秋元家歴代の墓があるので、墳型もかなり変改されているのではなかろうか。基壇もあったようであるが、はっきりしていない。これを利用して、墓地までへの道がつけられ、また、石階がつけられている。墳丘の方形平面の対角線は、石室開口部の面が北四二度西に向いているので、東西、南北の線と三度の差で、ほぼ一致している。

石室は横穴式で、両袖型ではあるが、他の多くのものと違って、玄室、前室、羨道を備えた複室である。その上、玄門、前門、羨門が設置されている。壁はいずれも截石の切組積みで、壁石面には削り痕があり、用石の各角は凹凸いずれも直角に截って整えてあるが、形は正方形、長方形はもちろん凸字形、L字形のものなどがあり、いわゆる切組みになっている。石材は堅い角閃石安山岩であり、天井石及び各門柱石は水磨きされたように、面が整えられ、ふくらみをもたして、軟らかい感じに加工してある。また削り目のある壁石の面には、しつくいが塗られ、その痕跡が各所に残存している。しつくいの塗り方は荒い削り目のある石の面にまず塗り、その上を藁でおさえて固まらせ、藁痕の上に塗ってさらに藁でおさえ、同じように藁痕の上に塗って布でおさえたようである。藁痕は諸所に発見され、布痕はかつて見出されていたが、現在ははげ落ちたもののようである。しつくいの痕跡は他には北群馬郡吉岡村の南下B号古墳にのみ認められている。

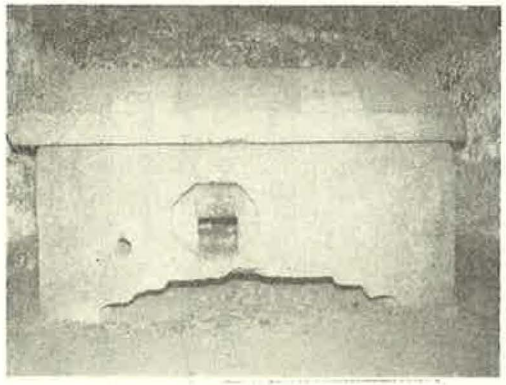
第105図　宝塔山古墳石室玄門

石室の寸法は玄室の奥壁で幅三㍍〇二、中央で幅三㍍〇三、前幅三㍍〇五であり、長さは左壁下で三㍍三三、中央で三㍍一〇、左壁で三㍍一七である。玄室平面は厳密に言って正方形ではない。しかし、実測図からすると、正方形を意図して設計されたものと推定される。恐らく三㍍が基準であったのであろう。これら寸法に共通に含まれている一定の長さの数値は三〇㌢㍍である。つまり唐尺一尺を三〇㌢㍍とする時には、いずれもその一〇倍にあたる数であり、唐尺一〇尺と見ることが妥当である。全長及び各部分の寸法は第五五表のようであり、三〇㌢㍍の倍数にあたるものが多い。右により唐尺使用とみてよかろう。

第55表　宝塔山古墳石室規模

		m
全長	現状	10.67
	復原	12.41
玄門	奥口間行	50
	奥左	54
	〃右	61
前室	長	3.98
	幅	1.99
前門	口間行	1.56
	奥	69
羨道	長 現状	3.23
	長 復原	4.15
	奥幅	1.79
	前〃	1.81

前室の実測値から推定すれば、長さは幅の約二倍であり、正方形二個を縦に連ねた形である。この形は両袖型石室の最初のものに多くあらわれていて、総社町二子山の前方部も、この形である。幅を定めるのには尺度を用いたと思われるが、矩形の平面図を設計するには正方形を整数倍連ねた方法をとったもののようであり（小旦那古墳）、やがて、長さと幅とを別個に完全尺で定め（塩原塚古墳）、遂には正方形の一辺を幅とし、その対角線を開いた形すなわち幅の寸法の$\sqrt{2}$－裏尺を使用して長さを定めたもの（北群馬郡吉岡村南下A号古墳）、長さと幅との寸法を定め、その一方にその裏尺を用いたもの（蛇穴山古墳）などがあらわれてく



第106図　宝塔山古墳石棺

第107図　宝塔山古墳石棺格狭間の一部